

学位申請論文

**戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究  
～千人針習俗を中心に～**

**(所属) 総合研究大学院大学文化科学研究科  
日本歴史研究専攻**

**(学籍番号) 20080404**

**(氏名) 渡邊一弘**

**(主任指導教官) 常光徹教授**

## 戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究～千人針習俗を中心に～ 目次

序章	1
第1節 研究の目的と方法	1
第1項 研究の動機	1
第2項 研究の目的と意義	3
第3項 研究の方法と本論の構成	5
第2節 研究史	8
第1項 戦争の民俗についての研究史	8
第2項 千人針習俗の研究史	12
第1章 千人針習俗のはじまりと展開	19
第1節 明治期の弾丸除け信仰	19
第2節 日露戦争期に記録された千人針習俗	24
第3節 日露戦争後に記された千人結	32
第1項 千人結の全国的な普及	32
第2項 千人結から千人針への移行	34
第4節 満州事変の頃	38
第5節 日露戦争・満州事変の千人針習俗の特徴	45
第6節 婦人会の活動と千人針習俗	51
第7節 千人結のはじまり	53
小括	59
第2章 千人針の全国的展開とその終焉	61
第1節 日中戦争と全国的広がり	61
第1項 日中戦争開戦時の千人針	61
第2項 統制下の千人針	73
第2節 千人針と多様なメディア	78
第3節 琉球地方及び植民地での千人針	88
第4節 銃後の護りと千人針	94
第5節 宗教による千人針の受容と展開	100
第1項 戦時下の宗教活動について	100
第2項 神社祭祀に見られる千人針祓	100
第3項 宮崎神宮の神社日誌にみる「千人針祓」	103
第4項 浄土真宗における千人針論争	110
第6節 太平洋戦争での千人針	114
小括	118

第3章 サムハラ信仰の研究	120
第1節 研究史	120
第2節 江戸時代のサムハラ信仰	123
第3節 明治期のサムハラ信仰	129
第4節 田中富三郎の活動	132
第5節 日中戦争以降のサムハラ	138
第6節 太平洋戦争後のサムハラ信仰	143
小括	146
第4章 戦争の民具としての千人針	147
第1節 実物資料からみる千人針の特徴	147
第1項 千人針調査項目について	147
第2項 千人針所蔵施設	148
第2節 千人針の民具的特徴	161
第3節 戦争の民具	188
第4節 手記及び聞き書き調査にみられる千人針	194
小括	201
終章	203
第1節 千人針の現在	203
第2節 結論	205
引用・参考文献	212

## 凡例

- 一、本文中の年号には和暦を使い、必要に応じて西暦を入れた。
- 一、引用文については、基本的に原文通りとした。  
ただし、旧漢字は新漢字に改め、仮名は旧かなとした。
- 一、ルビは適宜補った。
- 一、注を付す場合には（ ）で示した。



## 序 章

### 第1節 研究の目的と方法

#### 第1項 研究の動機

筆者が現在勤務している昭和館<sup>(1)</sup>で働き始めたのは、平成13年(2001)4月であった。当時、昭和館の7・6階にある常設陳列室(現在は常設展示室)の最初のコーナーは壁一面が36点の千人針で埋め尽くされていた。個人的に千人針の存在は知っていたが、このようなバリエーションがあることは知らなかった。そこに付されていたのは次のような解説であった。

**千人針** 出征する兵士に、家族や親戚知人が弾除けを祈願して送ったもので、千人の女性が一针ずつ縫って千個の糸玉を結びました。「虎は千里を走り、千里を帰る」という言い伝えから、「虎」の図柄が多く用いられ、そこから寅年生まれの方に限り、歳の数だけ糸玉を結ぶことができました。「死線を越える」という意味で五銭硬貨が、「苦戦を越える」という意味で十銭硬貨が縫いつけられているものも多く見られます。

この説明では、「虎は千里を走り、千里を帰る」という言い伝えがまずあり、そこから転じて虎の絵が描かれ、寅年の女性が歳の数だけ縫えるという説明になっているが、果たしてそのような説明をしてよいのか。おそらく日中戦争時の人々の間では、この解釈で理解されていたかもしれないが、千人針の発生と展開を考えると、展示解説として問題があるのではないかと感じた。さらに、なぜ、このような多くの俗信<sup>(2)</sup>で説明されるような千人針に、当時の出征兵士の母や妻たちは、戦地の無事を託さなければならなかったのか。祈願をするのなら、神社仏閣へ個人的に行く方が神仏の力を借りる実感が得られるのではないか。なぜ、見ず知らずの不特定多数の女性に夫や息子の無事を任せるのか。などいくつかの疑問が生じ、その理由、その成立過程を知りたくなったのが、千人針習俗、及び弾丸除け信仰について調べるきっかけであった。

多くの戦争体験者が語る千人針の説明は、昭和館の千人針の解説と同様の説明がなされ

---

(1) 昭和館は、平成11年3月に開館した厚生労働省の管轄で、運営を財団法人日本遺族会に委託している博物館等の文化複合施設である。

(2) 俗信について常光徹はその重要性について次のように指摘している。「現在、俗信のいけば、兆・占・禁・呪に関する伝承、とくに一行知識といわれるような短い表現形式のものを指すことが多いが、俗信がこのような伝承を意味する用語として使用され定着していったのは昭和六年(1931)から八年(1933)頃ではないかと思われる。(中略)呪術的な伝承(呪い)と心性の問題を考えるうえで俗信が有益な情報を提供してくれるのは、俗信が心意現象をさぐる手段・方法として概念化され、それにかかわる伝承の諸相を掬い取り蓄積してきた経緯を考慮する必要があるだろう。(pp.9-10)」(常光徹『しぐさの民俗学 呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房、平成18年(2006))

ることが多かった。上記の疑問を解明するには、聞き取りという手法のみでは限界があり、文献資料を通して、通史的に理解する必要を痛感した。と同時に、現実に残された千人針のデータをできるだけ数多く集め、千人針のバリエーションを把握し、千人針自体から語らせることも重要と考えた。

千人針を見直すにあたって、まず、参照したのが唯一千人針と題された『千人針』<sup>(1)</sup>という本であった。著者の森南海子は、服飾デザイナーで、古着などの収集とともに、戦争の悲惨さを伝える象徴的なモノとして、100点以上の千人針を集めるようになり、所蔵者本人（あるいは家族）からの聞き取りをまとめたのがこの著書である。

千人針を戦地に向かう息子や夫や恋人や父や兄になんとか間に合わせ<sup>ねが</sup>てつくりあげ、持たせようとした女たちのいらだちとかなしみ。そして、女たちの「希い」にもまして、それを受け取った男たちにその針目が訴えたもの。それは単純な針目が語る、容易ならぬひと言ひと言のような気がしてなりません。<sup>(2)</sup>

著者は、聞き取りをしながら千人針を収集しており、当時の人々の気持ちに寄り添い、千人針を反戦の象徴として紹介している。日中戦争以降の千人針が中心で、それぞれのエピソードは聞き書き資料として貴重ではあるが、千人針の成立などの実態については言及されておらず、客観的な資料をもとに日中戦争以前からの千人針の成立過程を明確にする必要性を感じた。

次に、参照したのが、岩田重則の研究であった。『民具マンスリー』25巻7号（平成4年）に掲載された「千人針」という論文をはじめ、『ムラの若者・くにの若者』（平成8年）や『戦死者靈魂のゆくえー戦争と民俗ー』（平成15年）などにおいて千人針について言及し、民俗事典で執筆するなど、民俗学における千人針についてある程度まとまった先行研究としては他になく、先駆的な仕事であった<sup>(3)</sup>。しかし、その研究の目的は、「戦争の民俗」全般、多岐にわたっており、千人針それ自体を研究したものではなかった。例えば、満州事変のときに千人針はみられなかったという記述があるなど、岩田の研究については扱っている事例の少なさなど、検証すべきであることを痛感するとともに、できるだけ多くの事例を収集することからこの分野の研究は始まると理解した。

そもそも千人針については、少し考えてみるだけで疑問が多いモノである。『広辞苑』には次のように説明がある。

一片の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久・安泰を祈願して贈ったもの。日清・日露戦争の頃始まり、初めは『虎は千里行

---

(1) 森南海子『千人針』情報センター出版局、昭和60年（1985）。

(2) 森南海子『千人針』情報センター出版局、昭和60年（1985）、p.13。

(3) 岩田重則「千人針」『民具マンスリー』（25巻7号）神奈川大学日本常民文化研究所、平成4年（1992）10月10日。岩田重則『ムラの若者・くにの若者』未来社、平成8年（1996）。岩田重則「千人針」『日本民俗大辞典』吉川弘文館、平成11年（1999）。岩田重則『戦死者靈魂のゆくえー戦争と民俗ー』吉川弘文館、平成15年（2003）。

って千里かえる』の言い伝えから寅年生れの女性千人の手になったものという。<sup>(1)</sup>

「一片の布」「赤糸」とあるが、昭和館に展示されている千人針には違う色の千人針もある。実際の千人針にはどのようなバリエーションがあるのだろうか。「出征将兵の武運長久・安泰」という一般的な祈願理由とは別に、妻や母の気持ちを察する必要があるろうし、千人針に対しての意味合いは、贈る人、受ける人、協力する人、傍観する人など、それぞれの立場によってその意味合いが違ってくるのではないかなどの疑問が湧いてくる。

千人針について理解するためには、「戦争の民俗」「戦争の民具」「弾丸除け信仰」「俗信」などの複数の枠組みの中で、捉え直す必要がある。そこで本論では、通史的研究、民具的研究、弾丸除け信仰の中の千人針習俗など、千人針習俗に対して多面的に分析を加えていくこととする。

千人針関連資料については、日露戦争の頃に流行した「千人結」など、日中戦争以降に定着した「千人針」など、複数の呼称が存在する。本論では便宜上、千人結、千人針などを含めて「千人針習俗」と呼ぶこととする。

## 第2項 研究の目的と意義

戦争の歴史については、軍事史や政治史などを中心に研究が進められてきたが、近年、なぜ国民は戦争を受け入れたのかという視点での研究<sup>(2)</sup>や、銃後史という言葉に表されるように、その当時の人々の暮らしに焦点を当てた研究が多く見受けられるようになった<sup>(3)</sup>。当時の銃後の人々は戦争をしょうがないものとして受け入れざるを得なかった。意識的にせよ無意識にせよ、様々なかたちで自分を納得させようとしていた。こうした点を踏まえ、人々の立場に立った戦争研究が重要となってきた。

また民俗学の分野では「戦争の民俗」という言葉が定着し、戦争を民俗学の視点から分析する研究が増えてきたが、その中心は英霊や慰霊などについての研究で、銃後の人々の暮らしを民俗学の視点から論じる研究は積極的に進められてきたとはいえない状況である。しかも、戦時下の事例を収集することが次第に困難になり、詳しく経験談を聞ける年齢層も少なくなってきた。

本論文では、「戦争の民俗」なかでも「銃後の民俗」として、弾丸除け信仰、及び千人針習俗を取りあげる。戦争という状況を当時の人々が、抜き差しならない眼前の現実として実感したのは、本人あるいは家族への召集令状が届いた時だった。特に見送る女性にと

---

(1) 『広辞苑』第6版、岩波書店、平成20年(2008)。

(2) 加藤陽子『戦争の論理―日露戦争から太平洋戦争まで―』(勁草書房、平成17年(2005))、加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社、平成21年(2009))などがある。

(3) 藤井忠俊『国防婦人会―日の丸とカッポウ着』(岩波書店、昭和60年(1985))、藤井忠俊『兵たちの戦争―手紙・日記・体験記を読み解く』(朝日選書、平成12年(2000))、藤井忠俊『在郷軍人会 良兵良民から赤紙・玉砕へ』(岩波書店、平成21年(2009))や、加納実紀代『女たちの「銃後」』(筑摩書房、昭和62年(1987))などがある。

っては、出征を目前にして、初めて国家、あるいは天皇への忠誠を誓いつつも、心の中では無事に帰ってきてほしいという気持ちの葛藤を抱かざるを得なかったであろう。この出征にまつわる慰問袋・奉公袋・日の丸の寄せ書き・出征幟などの中で、千人針は、戦時下の銃後の人々の心のあり方を反映し、真意を表出するものであった。千人針について、歴史学者の瀬野精一郎は次のように述べる。

千人針そのものは、出征兵士の無事生還を願う庶民のささやかな祈りの発露であったと思う。しかしそれを腹に締めて戦場に臨んだ兵士達は、千人針を見るたびに、千人の女性の一針一針の期待を身に受けているように思い、千人針の本来の意図に反して、多くの兵士は戦の場で戦死することになったのではなかろうか。しかし千人針に進んで協力した女の人はもちろん、軍国の母や皇国少年達にも戦争への道へ何らかの寄与をしたとの意識は少ないであろう。しかしこれらの人々をすべて平和勢力の人民の中に入れてとらえることは、歴史実態の把握を誤っており、戦争によって何らの利益を受けることもない人民の中にも、意識していたか否かの問題はあるにしても、その行為によって結果的には戦争への道に寄与していた者もいたのである。今後も同じようなことが起きる可能性は大いにあり得ると思われる。既に意識することなしに、そのような行為をしているかも知れない。<sup>(1)</sup>

千人針が単なる弾丸除け信仰の役割のみならず、「千人の女性の一針一針の期待」を抱かせることで、出征兵士を効果的に送り出す役割もあったのではないかとの指摘であろう。これまで千人針習俗は、弾丸除けの役割のみが説明されてきたが、千人針習俗が全国的に受け入れられた背景には、別の役割あるいは機能があったと考えられないだろうか。

千人針習俗は日中戦争から始まったものではなく、少なくとも日露戦争まで遡ることが確認されているが、その成立過程は判然としない。また、これまでの千人針習俗についての論考は、日中戦争の千人針の事例に基づいて分析され、さまざまな民俗事象と千人針習俗の類似性をもとに論じられることが多いが、果たして日露戦争期の千人針習俗と日中戦争以降の習俗が同様のものなのか確認した研究はこれまでない。

本論文の目的は、千人針習俗の成立過程を通史的に検証することで、千人針習俗の形態のみならずその内容の変遷をとらえ、千人針習俗の持つ意味や役割の変化を明確にすることである。また千人針習俗にまつわる俗信がどの時代から始まっているのかを通史的に理解することで、従来の民俗学的な解釈を問い直すことができると考える。そして、民具学の視点から現存する実物の千人針について分析することで、民具としての千人針を分析していきたい。千人針習俗を文献と民具の両面から捉えることで、当時の人々に千人針習俗がもたらした意味を再検討していく。

戦争の記憶の一つとして鮮明に人々の心に焼き付いている千人針の実態を明らかにすることは、千人針習俗のみならず「銃後の民俗」についての研究の重要性を再認識させ、民俗学のみならず、歴史学や社会学などさまざまな分野に研究の再考をうながすきっかけと

---

(1) 瀬野精一郎「寅歳と千人針」日本歴史学会編『日本歴史』第453号、吉川弘文館、昭和61年(1986)2月号

なると考える。

### 第3項 研究の方法と本論の構成

千人針習俗そのものについての本格的な研究はさほど多くはないにもかかわらず、戦争の民俗に触れるなかで、千人針について言及した記述は多く見受けられる。それらは、具体的な事例に基づいた分析というよりは、戦時中に一般的に流布していた千人針のステレオタイプのイメージを伝えている傾向がある。それは一般の人々だけでなく、研究者においても同様である。千人針を中心に上げた著書は服飾研究家の森南海子による『千人針』（昭和60年、情報センター出版局）くらいで、「戦争の民俗」への関心の高さとともに千人針習俗が取り上げられる機会は多くなってはいるが、報告事例が主で千人針習俗についての研究は限られている。

研究の方法としては、大きく三つの視点から取り組むこととする。

一つには、文献資料の発掘である。事例の収集には、多くを当時の新聞・雑誌などの記録に求めた。こうした資料はこれまであまり調査されておらず、千人針習俗が無い、あるいは少ないとされていた時期の資料が埋もれている可能性がある。新聞資料の信憑性については十分な吟味も必要であろうが、記事の中から形状の特徴や使われ方、当時の状況、付随する俗信などを抽出する方法で積極的に資料として活用することができよう。できるだけ多くの記事を通史的に俯瞰することで、記事の内容に疑問の出る場合にはその都度指摘をする。

二つ目は、「戦争の民具」の視点である。これまでの「戦争の民俗」という枠組みからも、歴史学の研究からも、研究対象として取り上げられる機会の少なかった千人針そのものに焦点を当てる。「戦争の民具」については、歴史学からも民俗学からも注目はされるが、戦争の一断面として捉えられている傾向が強く、どちらの分野からも詳細な調査研究は行われることなく、現在に至っている。本論文において「戦争の民具」とは、戦争にまつわる民俗的な習俗を反映している民具の総称とする。「戦争」という広いテーマの中でも、出征にまつわる道具や習俗が上げられよう。弾丸除けの御守り、千人針、日の丸の寄せ書き、奉公袋、提灯行列、出征の幟、慰問袋、陰膳など、出征に際しては、軍に係わるものとは別に、さまざまな物・習俗が必要とされた。藤井忠俊は、これらの出征にまつわる行事を「赤紙の祭り」と表現した<sup>(1)</sup>。

徴兵制以後、賦役にも似た若者の壮行を祝す宴と武運長久を祈る祭が近隣・共同体でおこなわれてきた。一度徴兵を終って村へ帰っていった人の応召の場合にはもっと深い同情が寄せられた。私はこれを「赤紙の祭」と呼んでみた。

「赤紙の祭」には、あらゆる装置が準備され、出征兵士を送り出す工夫が為された。これらの装置を「戦争の民具」として捉えられないか。なかでも千人針は、日中戦争を経験した人のほとんどが千人針風景を目撃しており、多くの女性はその製作にかかわり、あるいは出征する兵士のために準備し、多くの兵士が御守りとして千人針を戦地に持参した。千

---

(1) 藤井忠俊『国防婦人会』（岩波新書黄版298）、岩波書店、昭和60年（1985）、p.146。

人針の記憶は、その立場と時期でさまざまであり、千人針習俗の持つ意味も違ってはいたはずで、その違いを丁寧に検討し、分析をする必要がある。また、こうした出征に関わる一連の行事の成立には、在郷軍人会や婦人会などが大きく関わっていると考えられ、歴史学・民俗学・社会学など多面的な研究が必要である。

いったん所蔵者の手元を離れたたり、所蔵者が亡くなったりすれば、その「モノ」の記憶は失われることになる。昭和館が所蔵している資料の中にもその背景について不明な物が少なからずあり、こうした資料は、編年的整理は難しいが、どのような千人針が存在したのか、その実態を理解することは、戦争というものを概念ではなく、現実として捉える一歩であると考えられる。

こうした「戦争の民具」を開拓するに当たって、例えば千人針を例にして、事例を収集し、全国的なデータベースを作成し、分析できないだろうか。「戦争の民具」を分析する一つの試みとして千人針習俗の分析を提示してみたい。

三つ目には、聞き書き資料の活用である。現在ならまだ聞き取り調査によって千人針の実態を把握することは可能であり、昭和館などでの調査資料、あるいは手記などの証言資料も活用していきたい。

以下、本論文の各章節の内容について紹介する。

本章第2節では、研究史をまとめる。最初に「戦争の民俗」「戦争の民具」についての研究がどのように進んできたか、その中で弾丸除け信仰、そこからつながる千人針習俗についてさまざまな分野からの研究を整理しまとめる。

第1章と第2章では、千人針習俗についての通史的分析を行う。

第1章「千人針習俗のはじまりと展開」では、日露戦争における「千人結」、及び満州事変に見られた千人針習俗の事例を整理する。更に日露戦争時の「千人結」が記録され広く伝えられることで、その後の満州事変での流行に引き継がれる。この時期は、在郷軍人会が活躍し、「銃後」という言葉が普及し始め、かつ国防婦人会が登場してくる時期である。そうした背景を考慮した上で何故千人針が必要とされたかを分析する。第1章のまとめとして、千人針の始まりについても時代背景を含め考察を加える。

第2章「千人針の全国的展開とその終焉」では、日中戦争開戦の熱狂の中、千人針風景がいっせいに全国的に、沖縄や植民地にまで広がり、新聞の他、様々なメディアに千人針が取りあげられ、婦人会や女学生の活躍により、出征に必要なものとして受け入れられていった実態を明らかにする。さらに太平洋戦争以降、下火になったとされる千人針の実態はどうであったのか、千人針流行の終焉について宮崎神宮日誌などを元に実証的に検証する。また、日中戦争以降、宗教界が千人針をどのように受け入れていったか、神社、浄土真宗を例に見ていくこととする。

第3章「サムハラ信仰の研究」では、弾丸除け信仰の一例として、研究の進んでいないテーマである「サムハラ信仰」について、江戸時代から現在までの事例を包括的に整理し、民俗学的な意味を考察する。サムハラ文字は千人針や日の丸の寄せ書きにも記されており、日中戦争でもよく知られた符字であり、千人針習俗との関連についても言及する。

第4章「戦争の民具としての千人針」では、民具の視点から博物館等の施設に収蔵されている実物の千人針について分類・整理し、千人針習俗の形態的な特色を明らかにする。その際には、それぞれの千人針の民具的特徴を明らかにし、「戦争の民具」のなかでの千

人針の役割を示したい。また、千人針に関する手記をもとに、それぞれの立場によって異なる千人針の意味合いについても検討する。

終章では、千人針習俗が戦時中に担った役割が、戦後どのように引き継がれているのかに言及する。戦時下の人々にとって千人針習俗がもたらした役割についてその成果をまとめる。次に第1章から第4章までの総合的なまとめを行い、今後の課題について述べる。

## 第2節 研究史

### 第1項 戦争の民俗についての研究史

弾丸除け信仰についての研究史を整理する前に、「戦争の民俗」についての研究の流れを整理しておく<sup>(1)</sup>。まず、戦時下の民俗学界において、戦争の民俗の研究はどのような状況であったのだろうか。日中戦争のさなか、民間伝承の会発行の雑誌『民間伝承』に、山田良隆「千人結び」(『民間伝承』第2巻第12号、昭和12年(1937)8月)<sup>(2)</sup>、榎戸貞治郎「戦争と弾丸」(『民間伝承』第3巻第1号、昭和12年9月)など、武運長久や戦勝祈願などに関する戦争の民俗関連の記事が掲載されるようになる。なかでも山田良隆は、

最近北支事変発生と共に盛んになった千人結び、或は千人針についての各地の俗信をご報告を望む。それに縫い込むお守りの種類と霊験、千人結びに参加出来ぬ者等についても調べたい。

と今後の戦争の俗信について研究がすすむことを望んでいた。しかしこうした研究に対し倉田一郎は、昭和14年(1939)3月に「時局下の民俗」(『民間伝承』第4巻第6号)を発表し、次のような発言をしている<sup>(3)</sup>。

われわれは斯学の目的と現代における使命とを新たに反省認識すると共に実践の歩を学芸総力戦の前線に進めねばならぬ。かかる時代には千人針や守護札の心意を論考することを以て、この学芸当面の課題・貢献と考へるが如き愚かなる倫安と末梢的なる流行とは努めて之を排除せねばならぬ

この論考の影響か、以後、武運長久や戦勝祈願についての記事は民俗学関係の学会誌には見られなくなり、民俗学における戦争の民俗の研究は立ち消えとなった<sup>(4)</sup>。戦争の民俗について積極的に論じられるようになったのは、戦後の歴史学からであった。岩田重則は、この後の研究の流れについて次のように述べている。

---

(1) 戦争の民俗についての研究史について触れたものとしては、新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」国立歴史民俗博物館監修『人類にとって戦いとは 5 イデオロギーの文化装置』(東洋書林、平成14年(2002))。川村邦光「戦争と民俗学—柳田国男と中山太郎の実践をめぐる—」『比較日本文化研究』第7号(比較日本文化研究会、平成15年(2003))。岩田重則「戦争のフォークロア」『岩波講座 アジア・太平洋戦争6 日常生活の中の総力戦』(岩波書店、平成18年(2006))などがある。

(2) 山田良隆「千人結び」『民間伝承』第2巻第12号、民間伝承の会、昭和12年8月20日発行、p.2。

(3) 新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」『人類にとって戦いとは 5 イデオロギーの文化装置』国立歴史民俗博物館監修、東洋書林、平成14年(2002)、p.87。

(4) 新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」(前掲)、川村邦光「戦争と民俗学—柳田国男と中山太郎の実践をめぐる—」(前掲)において共に倉田一郎の論考について指摘している。



戦争のフォークロアへの注目は、長年の空白を経て 1970 年代から 80 年代前半、民俗学よりも近代史から提起されるようになっていく。その先駆的仕事として、黒羽清隆「十五年戦争史のフォークロア」(『史海』第 21・22 合併号、1975 年 6 月)をあげることができよう。内容的には、アジア・太平洋戦争の裏面史とでもいうべく、戦時下に記された日記から、俗信や流言飛語のたぐいを紹介したものである。<sup>(1)</sup>

その後、徴兵制度を研究した大江志乃夫が昭和 56 年(1981)に記した「“徴兵よけ”の神から千人針まで」<sup>(2)</sup>では、徴兵忌避から千人針習俗についてまで民俗学の分野に切り込んだ論文であった。また積極的に「戦争の民俗」について論じてきた川村邦光は、この分野の研究の重要性について次のように指摘している。<sup>(3)</sup>

民俗学を「現在学」として鍛え上げることはついぞかなわなかったのである。今ここから民俗学の展望を切り開いていくうえで、柳田の問題意識も含めて、戦前・戦中、そして敗戦後の民俗学のエスノグラフィを歴史的コンテキストに位置付けて批判的に再読することが求められていよう。

中途でついでた“戦争の民俗”研究から再出発することは、敗戦後の民俗学、あるいは敗戦した民俗学を「現在学」としてあらためて構築するための、ひとつの不可欠のテーマとなる。“神々の出征”した戦場、出征・戦死した“日本軍”兵士、祀られた“英霊”などをめぐる“日本民俗”については、一切問われてこなかった。ポストコロニアル批判を踏まえるなら、戦前・戦中の理論と実践を忘却し、敗戦を受けとめそこなうて、戦後も延命していった“一国民俗学”において、“日本民俗”とは何だったのかを問うなかから、そこに持続されていった単一の語りを解体していく展望をえられると考えるのである。

個別の具体的な戦争の民俗の研究から再出発することの重要性を指摘しているといえよう。民俗学の中でも喜多村理子が徴兵除けから弾丸除け信仰への変容について研究している<sup>(4)</sup>。

また、民俗学における研究として田中丸勝彦<sup>(5)</sup>の論文があげられる。田中丸は、日露戦争を機に「英霊」という言葉が発見されていく過程を追った。この「英霊の発見」の視点は、「銃後の発見」にも通じるものであり、戦争の民俗を考える上で重要となる。岩田重則による戦中の弾丸除け信仰や若者組について、また戦後の戦没者慰霊等についての一

---

(1) 「戦争のフォークロア」倉沢愛子他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、平成 18 年(2006)、p.279。

(2) 大江志乃夫「“徴兵よけ”の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第 39 号、新日本出版社、昭和 56 年(1981)。

(3) 川村邦光「戦争と民俗学—柳田国男と中山太郎の実践をめぐって—」『比較日本文化研究』第 7 号、比較日本文化研究会、平成 15 年(2003)、p.31。

(4) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、平成 11 年(1999)。

(5) 田中丸勝彦『さまよえる英霊たち—国のみたま、家のほとけ』柏書房、平成 14 年(2002)。

連の研究<sup>(1)</sup>、矢野敬一による慰霊についての研究<sup>(2)</sup>などが発表されている。

国立歴史民俗博物館により次のような戦争と民俗に関わる研究が特集されている。

○『国立歴史民俗博物館研究報告 [共同研究] 近現代の兵士の実像 I 村と戦場』第 101 集 (平成 15 年 (2003) 3 月)

- ・吉良芳恵「昭和期の徴兵・兵事史料から見た兵士の見送りと帰還」
- ・小田嶋恭二「北上市地域の戦没者と戦争記念碑について」など

○『国立歴史民俗博物館研究報告 [共同研究] 戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究』第 147 集 (平成 20 年 (2008) 12 月)

- ・関沢まゆみ「「戦争と死」の記憶と語り」
- ・西村明「アジア・太平洋戦争と日本の宗教研究」
- ・西村明「遺骨への想い、戦地への想い」
- ・佐藤雅也「戦争の民俗」
- ・伊藤純郎「戦時下の氏神」
- ・坂井久能「宮内神社等の創建」
- ・今井昭彦「忠霊塔建設に関する考察」
- ・栗津賢太「集合的記憶のエージェンシー」
- ・新谷尚紀「戦時体験の記録と語り」

「戦争の民俗」から転じて、「戦争の民具」について注目した研究もある。石川県立博物館『銃後の人々 祈りと暮らし』には、戦争の民俗について整理しているが、この中で「戦争の民具」という項目が立てられている。

戦争に関係する生活資料を本展では比喩的な意味もこめて「民具」と表現している。それは、従来の戦時生活の究明が文献資料や映像記録など文字やメディア資料の調査。分析を第一義としてきたなかで、「モノ」自身が語る情報により注意を払い、厳密にくみ取る必要を認識するからである。戦争を語る用具・道具の形状、来歴に、民衆と戦争のかかわりの多様な側面が具現化しているのではないか、そういう意味で、例えば、民俗研究者が民具に接するような方法(形状比較や採集記録の集積等)により、これらのモノたちを生かせないものだろうか。その際、方法は二とおり考えられる。第一に、かつて磯貝勇氏<sup>(3)</sup>が「戦争と民具」で指摘したような、戦争

---

(1) 岩田重則「千人針」『民具マンスリー』25 巻 7 号 (神奈川県立日本常民文化研究所、平成 4 年 (1992)) をはじめ、岩田重則「弾丸除け信仰の基層—ケガレと認識された戦争—」『静岡県史研究』第 11 号 (静岡県、平成 7 年 (1995)、pp.127-136)、『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』(未来社、平成 8 年 (1996)) などの研究がある。

(2) 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代 (日本歴史民俗叢書)』吉川弘文館、平成 18 年 (2006)。

(3) 磯貝勇「戦争と民具」『アチックマンスリー』35 号 (アチックミュージアム、昭和 13 年 (1938)5 月 6 月合併、pp.1-2) には、カンジキやワラグツの戦争利用について触れ、「民具を造出する技術的なメンタリテーの考究は、単に文化史的な意味を持つだけでなく、所謂非常時局に於てさへ実用的価値を見出し得るわけである。」と述べている。

による民具の変質(用途変更、加工など)の問題。例えば、「かんじき」や「雪ぞり」が雪中行軍用に用途をかえて使用された例だとか、武器を携帯するために衣服に改良が加えられたとかいう事例とその資料である。第二に、戦時下の生活用具や代用品などの実態調査と比較研究。これは第一の「戦争と民具」に対して「戦争の民具」ともいえよう。これらのうち戦時下に特殊な用具としては、灯火カバー、防空ズキン、防毒面、防火砂弾などの「防空用具」、のぼり旗、国旗ケース、慰問袋などの「送迎・慰問用具」、木銃、竹ヤリなどの「防衛用具」などが考えられよう。<sup>(1)</sup>

以上の提言について、日本民具学会や道具学会において、代用品などについての研究は散見されるが、「戦争の民具」全体としての研究は進んでいない。本稿で取り上げる千人針は「送迎・慰問用具」に含まれるが、のぼり旗、日の丸寄せ書き、奉公袋、慰問袋などは、それぞれの関係性も含めて研究される必要がある。

---

(1) 夏季特別展図録『銃後の人々 祈りと暮らし』石川県立博物館、平成7年(1995)、p.84。平成7年(1995)7月29日から8月27日まで開催された夏季特別展『銃後の人々 祈りと暮らし』の解説図録で、巻末解説は本康宏史が執筆、大門哲が加筆とある。

## 第2項 千人針習俗の研究史

鉄砲による死傷を避けるための弾丸除け信仰は、古くは矢除けを祈願したことの転用や、本論文第3章「サムハラ信仰の研究」で論じるような地震除け、怪我除けの転用が行われた。それと並行して歴史学から提示されたのが、徴兵のくじ逃れ祈願から弾丸除けへの変化である。

徴兵除けについての研究としては、菊池邦作『徴兵忌避の研究』が挙げられよう。徴兵忌避の事例を丹念に紹介した労作で、この研究を受けて、弾丸除け祈願への転換を指摘したのが、大江志乃夫であった。大江は、「”徴兵よけ”の神から千人針まで」という論文で、「戦時の「弾丸よけ」信仰は、平時の「徴兵よけ」信仰に通ずるのが通例である」<sup>(1)</sup>と述べ、さらに徳島県で行われていた「千人針」という千人針習俗を引き合いに出し、日露戦争時に種々雑多な形式の祈祷・祈願のなかに千人針習俗が存在したことなどを紹介している。岩田重則は、「戦勝祈願は、表向きは戦勝祈願を謳っていても、それは同時に、徴兵のがれ（除け）祈願・弾丸除け祈願をも内包するものであった。」<sup>(2)</sup>と、若者組の研究に関連づけた。これらの研究を総括したのが喜多村理子であった。その著書『徴兵・戦争と民衆』において、日清・日露戦争における徴兵除け祈願の流行と弾圧、そして弾丸除け祈願に変化していく過程を丹念に追った研究である<sup>(3)</sup>。こうした徴兵除け祈願や弾丸除け祈願との関わりを想定しながら、千人針習俗研究をする必要性がある。

千人針習俗についての研究論文としての初出は、現在確認できるところ、風俗学、あるいは有職故実研究の江馬務が、昭和7年4月に「千人針のおこり」と題して発表した、満州事変時の千人針習俗の実態とその起源を紹介している論考である。江馬は、千人針の始まりについて次のように述べている。

千人針の淵源ともいふべき、二枚三枚重ねた裂れを針で縫い腹に巻くことは、古くからあったもので戦国時代から桃山、江戸時代にかけて、戦争に行く時は必ず下に分厚い肌衣を着たり、鎧の間隙や膝小僧には殊に分厚い糸でさしこにしたものをつけたりしたものです。天文期には鉄砲が入り、貫通を防ぐために今まで皮であった鎧が鉄製の鎧となったが、不完全なので饅頭輪とか周輪とか、肩当、脇引などで捕ったり、そのほか膝頭には十王頭、草摺の部分には下散を用いたものですが、これらはみな裂れを厚く重ねたり綿を入れたりなどして、糸で亀甲形、或いは十の字形に縫ったのです。裂れの鎧にしても着込にしてもみな亀甲形か十字形かにさしこにしたもので、裂れが石や矢、弾丸の防止に非常な効力のあることは夙に先人が発見していたことです。平安朝や源平時代には背に垂れた母衣を頭にかぶって敵前に進んだもので、これを利用したのが布団で、布団のような分厚い裂れを小手などにも用いました、また綿入れの効果は奈良朝にはすでに発見され、綿甲が用いられま

---

(1) 大江志乃夫「”徴兵よけ”の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第39号、新日本出版社、昭和56年(1981)、p524。

(2) 岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社、平成8年(1996)、p.78。

(3) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、平成11年(1999)。

した、これがいわゆる千人針として現われたのは日露戦争の時からで日清戦争の際はまだ現われていませんでした。<sup>(1)</sup>

民俗学の研究者がこの習俗について言及するのは、千人針の大流行が全国的展開をし始めた、昭和 12 年（1937）以降のことである。大間知篤三は、昭和 12 年（1937）8 月 27 日付『東京日日新聞』に「千人針」と題した記事を寄せている<sup>(2)</sup>。論文と呼べるものではないが、それまでの民俗学の蓄積を踏まえて、千人針に考察を加えている。ただし、12 年 8 月 27 日ということもあり、千人針大流行のまっただ中であつたためか、千人針に対しては、「何か私の心に響いてくるものがあつた」とか、「およそ街頭寄進行為としてこれほど厭な気持ちなしに受けとれるものは少ない」などと思入れのある言葉が目立つ。大間知は、千人針習俗の始まりについて、「すでに日清戦争にこれを肌にして出征し、今もそれを保存している人のあることは聞いたし、日露戦争にもやや流行したことがたしか『風俗画報』に出ていた。」と日清戦争まで遡れるとし、さらに「日清戦争以前にこれがなかったとは決していえないことであり、むしろどこかの田舎でつつましく行われていたと想像する方があつていよう。」と推測している。また、「四国や九州等では七所貫いといって、正月七日に七草雑炊や餅を、近隣七軒から貫い集めて食べさせると子供が丈夫に育つ」という事例や「百所集め」や「百反着物」などの事例を挙げ、古来日本に多かつた「合力呪願とも称すべき習俗」とのつながりで説明する。「今日では古く村を構成した家々の結合力が弱まり、国民的団結がこれに代つて現れた。（中略）村から国への発展というものが、七や三三の数を千という数にまで発展せずにはおかなかつたとも考えられよう。」という考察である。さらに「千人針には、ほとんどすべて赤糸が用いられている。」と断定し、「赤は赤心真心に通ずるという解釈は容易につくが、私としては何かそれ以外の理由をもあわせて考えたいのである。」とし、厄年の赤い服装や十三歳の男女に送る褌や腰巻の例を挙げ、「私には赤色の持つこの種の呪力が、無意識的に伝承された結果のように思われるのである。」とする。しかし、赤糸が多かつたとはいえ、実際には他の色が使われる事例も少なくはなかつたわけで、むしろなぜ日中戦争以降の千人針の糸が赤色に集約されていったのかを考える必要がある。また、大間知は、千人針習俗の研究の方向性を次のように指摘している。

今日作られている千人針というのが、その起源を、たとえ日清戦争以前に遡つて求めることができないとしても、このようにさまざまの古い伝承がおりこまれているということからでも、やはり古くからの日本のものであつたといひうる。そして流行はいずれの場合にも多くの分化を生むのであつて、（中略）いろいろの変化が発明されているが、今後もまだまだ新しい追加が現れるに相違ない。

大間知は、流行の段階を把握し、そこに「おりこまれている古い伝承」を考察する必要を説いている。

---

(1) 江馬務「千人針のおこり」『風俗研究』143号、風俗研究所発行、昭和7年（1932）4月1日、p.11。

(2) 大間知篤三『神津の花正月』六人社、昭和18年（1943）にも収載されている。

大間知の記事を受け、高崎正秀が「千人針古意（上）」『皇国時報』（第 646 号、昭和 12 年（1937）9 月 1 日）、「千人針古意（下）」『皇国時報』（第 647 号、同年 9 月 11 日）、更に「千人針考」『俳句研究』（7 卷 3 号、昭和 15 年（1940）3 月）を寄せている<sup>(1)</sup>。当時、國學院大学講師であった高崎が、上海事変当時、出征中の第三師団管下に奉職時の調査報告である。尾張から美濃にかけて「千結び」、伊勢の松坂で「千人結び」、新潟で「千人針」、東北地方では「千縫い」「千人縫い」という報告があったことなど各地の事例を多く紹介している。

上記の文章で高崎が提示している視点をいくつか紹介する。

○古くは、旅路の安全を祈って、その家なる妹が紐を結んで旅行者につけて出立させたことが分かる。すなわち「玉の緒信仰」で、女性の霊なる魂の一部分を紐に結び込めて、これを男の旅衣に結び止めたのであったらしい。呪力を有する女性にして始めて解き結び出来る神秘的な紐結びがあった。<sup>(2)</sup>

○千人針という名称を使うようになったが、以前は地方により名称が異なっていた。人によりいろいろ呼ばれていたとして多くの事例を提示している。糸をハサミで切らないという習俗については、金物で切るということは、戦地に征くものにとって禁忌であるとする。口で切るというのもおそらくは切り端を唾で示すというのがもとで、唾液の信仰によるものであり、眉唾と同じ信仰で、古代人は唾に神聖な呪力が潜んでいると考えた。「更級日記」などの黄色い紙の事例や黄麻の事例を引用し、黄色に染めることの古意に遡るべきとの指摘や寅年の女性は年の数だけ縫えるという習俗についても寅年だけでなく、辰年、巳年、申年、午年などの事例があることも紹介している<sup>(3)</sup>。

民間伝承の会による『民間伝承』には、昭和 12 年（1937）8 月の山田良隆「千人結び」（第 2 巻第 12 号）という事例報告をはじめに、榎戸貞治郎「戦争と弾丸」（第 3 巻第 1 号、同年 9 月）、榎戸貞治郎「事変と弾丸除」（第 5 巻第 4 号、昭和 15 年 1 月）などいくつかの事例報告が行われているが、考察を加えるまでには至っていない。ただ山田良隆は、上記の報告「千人結び」（第 2 巻第 12 号）の中で次のように千人針習俗研究の指針を提案している。<sup>(4)</sup>

最近北支事変発生と共に盛んになった千人結び、或は千人針についての各地の俗信をご報告を望む。それに縫ひ込むお守りの種類と霊験、千人結びに参加出来ぬ者等についても調べたい。兵庫県武庫郡瓦木村下瓦林では、千人結びは弾丸除けで、一針づ

---

(1) 昭和 12 年（1937）9 月 1 日に「千人針古意（上）」『皇国時報』第 646 号、同年 9 月 11 日に「千人針古意（下）」『皇国時報』第 647 号、更に昭和 15 年（1940）3 月に「千人針考」『俳句研究』7 卷 3 号を発表している。戦後になって、高崎正秀著『古典と民俗学 上』（講談社学術文庫、昭和 53 年（1978））に掲載されたが、戦時中の論考 3 本を一つにまとめたため、戦時下の言説は削除され、事例も少なくなっている。

(2) 「千人針古意（上）」『皇国時報』第 646 号、皇国時報発行所、p.5。

(3) 「千人針考」『俳句研究』7 卷 3 号、改造社、昭和 15 年（1940）3 月、昭和 12 年（1937）9 月 1 日、p.144。

(4) 「千人結び」（神戸 山田良隆）『民間伝承』第 2 巻第 12 号、民間伝承の会、昭和 12 年（1937）8 月 20 日発行、p.2。

ゝの力を貰ふ故に、あまり子供も年寄もいかぬと言ひ、寅歳の女にはその年の数だけ縫つて貰ふと良く、従つて寅歳の老女に競つて頼んでゐる。千人結びには、戦地ではシラメがよくわくので、クチナシの実を水でとき、それでウコンに染めるとよいさうである。それから西宮市付近では千人針でも千人力（男千人に力と書いて貰ふ。大阪市天王寺区の学生より拵る）でも、千と千四は戦死に通じる故不吉とし九百九十九だけ蒐めてゐる。千一集めてゐる人もある。下瓦林では干しても戦死言ふて何にもならんとて千三蒐めてゐる。新しい形に変わつて行くこの種の俗信の経路を探るのも有意義な仕事ではなからうか。明石市より始つた千人の男女より委任されたと言ふ証にその拇印を貰ふといふ風習等は近代色濃厚なものがある。

しかし、前述した昭和 14 年（1939）3 月の倉田一郎「時局下の民俗」（『民間伝承』第 4 巻第 6 号）の発言の影響もあり、民間伝承の会全体での戦時下における同時代の調査は積極的に行われることはなかった。

柳田国男は、ほとんど千人針習俗について言及することはなかったが、唯一触れているのは次のような文章である

人が独りの力ではどうすることも出来ぬことでも、多数の志を集めるならばなんとかなるといふことを、千人針というものはよく認めて居る。しかしそこには人間以上の高くすぐれた御力があって、我々の願いに応じて下さるといふ信頼は無いのだから、是もおまじないの一種でしか無い。日本人の曾てしっかりと持って居た信心は、決してそんなものでは無かった。<sup>(1)</sup>

書かれたのは太平洋戦争末期で、千人針も下火になった時期であつたからか、千人針に否定的な見解を示している。千人針は共同祈願のお守りであるが、神仏信仰に頼るものでは無いため単なるおまじないであるとの見解であろう。この後、前述のように民俗学の分野から戦争の民俗について触れられる機会は少なくなったが、赤松啓介は自らの戦争体験を記し、研究としては残りにくい性に関する千人針の事例を報告している<sup>(2)</sup>。また、昭和 56 年（1981）に千葉徳爾が「戦争と民俗」と題したエッセイで、千人針と氏神出征（村の氏神様たちが勢揃いして戦地へ出征されたという噂）を代表事例として取りあげ、戦争の民俗についての研究の視点を次のように提示している。

共同祈願と郷土の氏神・産土神の出征とが、ともに郷土の仲間意識の拡大昇華としての国民意識に編成されていったところに、出征者の行為としての戦闘も郷土防衛のための行動、すなわち祖国を保護し、永続させたいという願望のあらわれとして自他ともに持ったという理解が生まれたわけです。（中略）住民のもつ郷党感覚の延長とし

---

(1) 『柳田国男全集』14 巻、筑摩書房、平成 10 年（1998）、pp.399-400。初出は『週刊少国民』昭和 20 年正月号である。

(2) 赤松啓介「村落共同体と性的規範（上）」『季刊どるめん』26 号、JICC 出版局、昭和 55 年（1980）、pp.63-115。

ての、国家意識のあらわれとして説明されるのが妥当なのではないでしょうか。<sup>(1)</sup>

郷土での共同祈願から国家単位での共同祈願への移行を読み取っている。

太平洋戦争後、具体的に研究の素材として千人針習俗を取りあげたのは、歴史学の研究であった。なかでも大江志乃夫が「“徴兵よけ”の神から千人針まで」と題し、徳島県吉野川中流域の調査をもとに徴兵制に対する民衆の意識の歴史を考察している。日露戦争時に、十五年戦争時の千人針と同様の習俗が、「千人力」と呼ばれて行われていた事例を根拠に、「後世の千人針とおなじ形式のものが日露戦争時に存在した事実が史料的に確認できるのは、管見によれば、現在のところ徳島県下の「千人力」だけである」とし、また「のちの昭和十五年戦争時代とはちがって、公然と行われたわけではないと思われる」と述べている。しかし、日露戦争時の千人針習俗の事例が多く確認されている現在ではこの記述も再考されるべきであろう。ただ、徴兵除けや弾丸除けの系列に千人針習俗を位置づけ、その違いを考察した点は、千人針習俗研究に重要な示唆を与えている。<sup>(2)</sup>

昭和 58 年、文化人類学者の大林太良は、「女軍と千人針」という項目で、「千人針も結局は、一つの紐結びの形式を追ったものであって、古い呼び名が千結びといったのも、また女性によって結んでもらわねばならなかったのも、古代の玉の緒の伝統を引いたものであったからである。」と述べ、千人針習俗の本質を古代信仰に求めている。<sup>(3)</sup>

その後、千人針習俗について言及されることはなかったが、平成 4 年（1992）の「千人針」『民具マンスリー』25 巻 7 号）以降、岩田重則が千人針について積極的に論じることとなる。<sup>(4)</sup>

岩田は、千人針習俗の歴史について、「現在、確認でき得る範囲では、日清戦争においては、確認することはできず、日露戦争（明治 37 年（1904）2 月～ 38（1905）9 月）のときからである」とし、日露戦争時の事例を挙げ、「その後、管見のかぎりでは、第一次世界大戦（ドイツ領青島・南洋諸島など攻略）、シベリア出兵、満州事変に際しては、「千人結」ないしは千人針習俗の流行についての記録は、ほとんど見ることはできない」と述べている。しかし、少なくとも前述の江馬務や高崎正秀は満州事変での事例に言及しており、千人針習俗の推移を論じるには事例が少なすぎる。日露戦争と日中戦争の間の事例を分析すること、可能であれば日露戦争以前のどの段階で千人結の習俗が成立してきたのかを探るためにも、満州事変の事例こそ重要である。

岩田は、「日中戦争が始まる前と後では、千人針の大流行に大きな違いがあったのである。」とし、「寅年生まれの女は、年齢の数だけ結び目を縫うことができる」という俗信と死線（四銭）・苦線（九銭）を越えるという俗信が、「日露戦争の「千人結」の記録

---

(1) 千葉徳爾『民俗学のこころ』弘文堂、昭和 53 年（1978）、pp.128-129。

(2) 大江志乃夫「“徴兵よけ”の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第 39 号、新日本出版社、昭和 56 年（1981）、pp.523-539。

(3) 『日本民俗文化大系 第 3 巻 稲と鉄』小学館、昭和 58 年（1983）、pp.374-375。

(4) 岩田重則「千人針」『民具マンスリー』25 巻 7 号、神奈川大学日本常民文化研究所、平成 4 年（1992）10 月 10 日発行。平成 4 年（1992）。『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社、平成 8 年（1996）。



ではみることがなかった」としている。また日露戦争中に「その基本形は、女たちによる弾丸除け祈願にあった」が、「弾丸に当たらずに無事帰ってきてほしいという願いは、日中戦争以降二重になり、強い願いとして存続するようになった」とする。その後、さまざまな戦争をめぐる弾丸除けや武運長久の祈願が大流行を見せた事例を挙げている。

女学校で千人分の千人針を作った例などをあげ、「このような既製品や大量生産によって、千人針が作られたあと、(中略)十五年戦争の終わり近くには、召集があまりにも日常的になったためであろうか、あるいは、本土爆撃が日常茶飯事になり、出征者のみならず「銃後」の人々の生命さえも危うくなったためであろうか、いずれにせよ、千人針は消滅したのである。<sup>(1)</sup>」とする。

このあと、「千人針というこの奇妙なモノが、民俗学的に、どのような意味を持っていたのか」について、「妹の力」「女性の髪の毛」「女性の陰毛」などについて言及し、「千人針は、単にひとりの女による呪術であったのではなく、そこには、千人の女たちが一針一針縫うことによって力を合わせ、より強く異郷の戦地にある男たちを守ろうとする、“妹の力”の集中が行なわれていたのであった。<sup>(2)</sup>」とまとめている。また、前述したように大間知篤三の提示した“赤のフォークロア”についても言及し、さまざまな赤のフォークロアの民俗事例を紹介し、「このような赤色を利用した祓いが、災厄の象徴としての弾丸を除ける祓いに転化したのではなかったろうか。災厄を祓うための象徴的な色としての赤が、千人針の結び目の赤糸なり、弾丸除けとして災厄を除去していたと考えられるのである。」とする。実際には第1章で述べるように、日露戦争に際して作られた千人結や満州事変に作られた千人針は、必ずしも赤色限定でなかったことから、この説明の根拠については再考を要する。

平成9年(1997)に加藤良治が「奇なる呪物<千人針>(雑記)」と題して、日中戦争以降の千人針について、論点を整理して千人針習俗を分析している。<sup>(3)</sup> その項目は、「千人針の呪力」「千という数の呪力」「縫い玉の呪力」「赤い糸の呪力」「女性の呪力」「千人針と戦争」「千人針の製作」「弾よけ千人針」「戦意高揚と千人針」「武運長久祈願」であるが、基本的には日中戦争以降の事例を元に論じているため、日露戦争時の千人結について論じるまでに至っていない。

以上、千人針習俗についてのこれまでの研究をまとめてきたが、「戦争の民俗」研究の中での千人針習俗研究の重要性について二人の研究者が指摘しているので、それについて整理しておく。

まずは千葉徳爾が、『民俗学のこころ』(昭和53年(1978))で「戦争と民俗」として「千人針」と「氏神出征」について触れている。<sup>(4)</sup> 千人針習俗については、前述の「千人結び」『民間伝承』(第2巻第12号)の山田良隆の報告をもとに、「多数が力を合わせることで特定個人の生命力を延長することに作用しようとする呪術が、ムラの民俗から発生しつ

---

(1) 前掲『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』、p.204。

(2) 前掲『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』、p.210。

(3) 加藤良治「奇なる呪物<千人針>(雑記)」『歴史民俗学』7号、批評社、平成9年(1997)、pp.242-271。

(4) 千葉徳爾『民俗学のこころ』弘文堂、昭和53年(1978)、pp.123-130。

つ、国家活動としての戦争にまで応用されてゆく形を認めることができるでしょう。しかし、その形に本来のムラ共同体の姿の残るところでは、やはりムラで形成された協力の意識を残して、大勢の力をかりて個人に勢力をつけ加えるという意味が考えられるのです。ところが都市の相互に顔を見知らない群衆の中に入ると、その意識が次第に変わってゆくことに山田氏は注目しています。」とし、「ムラ共同体の仲間意識による協力方式は、『山村生活の研究』など、当時の全国的資料によっても関東から九州まで各地にみられ、それが仲間意識の拡大としての国家と結びついたのが千人針であったといえそうです。」とまとめている。

次に川村邦光はさまざまな視点から戦争の民俗を積極的に論じているが、「戦争の民俗学」(『比較日本文化研究』第7号)では、『民間伝承』において戦争の民俗について研究されなくなった経緯を分析しつつ、千人針習俗についても触れている。昭和12年(1937)の『東京朝日新聞』の記事を紹介し、「これらが街頭千人針のはじまりかどうかは分からないが、この新聞報道以降、他の新聞・雑誌にも取り上げられ、マスメディアが千人針という“戦争の民俗”を作りあげ、全国に流行させていったといえよう。<sup>(1)</sup>」とマスメディアと千人針習俗の流行について指摘している。

ここまで千人針習俗の研究を見てきたが、少数の事例を元に、さまざまな習俗との類似点を指摘するにとどまっていることが多い。戦争に関わる特殊な習俗であるためか、論文等に取りあげられる事例数が少なく、実証的に文献資料の紹介がされることも少なかったといえよう。

---

(1) 比較日本文化研究会編『比較日本文化研究』第7号、風響社、平成15年(2003)、p18。

## 第1章 千人針習俗のはじまりと展開

### 第1節 明治期の弾丸除け信仰

「千人針」といって一般的にイメージされるのは日中戦争以降のもの、例えば黄色い布に虎の絵が描かれたものであろう。しかし、これらの日中戦争以降に行われた千人針の事例から一足飛びにはじまりについて言及することは誤った解釈を導く恐れがある。何故ならば、日中戦争以降の千人針にはその前段に、明治期の流行があることが分かっており、明治期の千人針習俗の実態が解明されないまま、千人針の起源に言及することは間違った推測を導く恐れがある。そこで本論では、日露戦争から満州事変頃までの千人針習俗について通史的に整理していきたい。また、千人針習俗が生まれた時代背景を考察することで、千人針習俗の始まりについても言及していきたい。

本論文では、千人針習俗を弾丸除け信仰の一つとして捉えており、ここではまず、千人針習俗の前段階、あるいは平行して行われていた弾丸除け信仰、それに類する習俗について、整理しておきたい。

明治政府は廃藩置県の後、次々と国家としての近代化政策をすすめ、明治6年(1873)1月10日に徴兵令が布告された。そのような中、明治10年(1877)に国内で勃発したのが南九州で起こった士族による反乱である西南戦争(西南の役)であった。当時の戦況は、「薩軍戦力は約三万人、これに対し政府軍の戦力は六万人に達した。戦死者は薩軍約五〇〇〇人、戦傷者約一万、政府軍戦死者六八五八八人、戦傷者九二五二人に及」んだ<sup>(1)</sup>。当時としては、最大規模の内乱で、この時代にも戦地での無事を祈る家族の気持ちは同様に、明治10年(1877)の『読売新聞』の記事には、戦地から早く戻ってこれるようにとの願いを込めて張り子の虎を贈る祈願の方法が紹介されている。

#### ○明治10年(1877)5月28日付『読売新聞』

○西国の騒動が始まってからよく売れるのハ張子の虎にて昨今手遊屋にも限ものだといふから売れる子細を聞くに虎ハ千里いって千里かへるといふところから戦地へ出張された方のお家で婆さんや御新造が何でも早く帰る様にと神棚へかざり虎へ供物を備へて祈願されるといふ其証拠ハ西の久保辺の或る家の隠居さんの此の事を聞いて早速人力車に乗り浅草の中見世から芝神明前と諸方の手遊屋を探して歩行きどうしても無いのである画かきの家へいき無理に頼み込み待って居て虎を画てもらひ家へ持帰って押出し供物ハ、饅頭に竹の子笹まき鮎に藪蕎麦や竹門の油揚にお酒も餅と首をふりふり息子さんの帰国を祈るといふよりハ妙なり(下線筆者)

この段階では、千人針習俗のような女性に限定したものではなく、思い思いで準備した

---

(1) 北原糸子「西南戦争の銃後 一巡査の妻たち」『日本家族史論集 13 民族・戦争と家族』吉川弘文館、平成15年(2003)、p319。北原は、西南戦争期の銃後の女性に視点を向けているが、統計資料を基にした研究のため、当時の暮らしに具体的には言及していない。

様子が分かる<sup>(1)</sup>。

この時期の徴兵制について、当初は多くの免役条項(官吏・学校生徒・戸主・嗣子など)があり、免役のための養子縁組などの問題が出たため、明治16年(1883)12月には、徴兵令の全面改正が行われた。そのような中、庶民の間には「徴兵逃れ祈願」が行われるようになった。喜多村理子は次のような指摘を行っている<sup>(2)</sup>。

大勢の若者の中から選抜する徴兵制度の仕組みそのものが限られた若者とその家族に大きな負担を強いるという結果をもたらし、人々の間に「徴兵されるのは貧乏くじ」という不公平感を植えつけていた。(中略)徴兵されることを内心逃れたい若者と、愛する息子であり大事な働き手でもある若者を兵士に取られたくない家族。その個々の願いをムラ共同の願いと位置づけて、ムラの全戸が参加するかたちで徴兵逃れ祈願の山籠り・宮籠りを行っていたムラもみられた。(中略)軍国主義が強まり、いままではムラの内部では平気で語られていた、息子や夫を「兵隊にとられたくない」ということばは無論のこと、あらゆることばにカセがはめられていった。そのような外圧による言論統制のほか、兵士の家族とそうでない家族がムラという狭い空間でともに居住しなければならないという事情が、前者には不公平感を、後者には負い目の意識をもたらし、「兵隊逃れ」という願いがムラの中で共有されなくなったのである。

日本で対外的な戦争が始まり、徴兵制度がしかれるようになると、兵役逃れの習俗が増えたことはよく知られているが、徴兵制度が厳しくなった明治16年(1883)頃からは、ある種のあきらめ、戦地へ行かざるを得ない状況が生まれた。むしろ、愛国思想が芽生え始め、積極的に戦争へ参加する気運が高まった。そのようななか、残された妻や母は、地域の氏神へ参拝し、無事に戻ってこられることを祈願し、弾丸除けのお守りを持たせることくらいしかできなかった<sup>(3)</sup>。

弾丸除け祈願については、神社仏閣への参拝のみならず、お預け写真として神社へ写真を預けて出征兵士の無事を祈ることも行われ、サムハラなどの弾丸除けの呪符などのような、様々な守護札が配布されるようになった。

- 上代神社(鳥取県日野郡旧二部村大字福岡) = 日清戦争の頃、兵役逃れに御利益<sup>(4)</sup>。
- 虫井神社(鳥取県八頭郡智頭町大字大呂) = 出征兵士の無事を祈願する千度参り<sup>(5)</sup>。
- 旅伏神社(島根県出雲市旧鳶巣村) = 明治初年から徴兵除け祈願<sup>(6)</sup>。

---

(1) 日中戦争以降に千人針の寅年の女性、あるいは虎の絵の説明として引用される「虎ハ千里いって千里かへる」という説明がされている。

(2) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、平成11年(1999)。

(3) くじ逃れについては、大江志乃夫『徴兵制』(岩波新書、昭和56年(1981))や岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』(未来社、平成8年(1996))など様々な研究がある。

(4) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』前掲、pp.19-24。

(5) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』前掲、pp.141-142。

(6) 岩田重則『戦死者靈魂のゆくえ 戦争と民俗』吉川弘文館、平成15年(2003)、p.149。

- 奥山半僧坊大権現（静岡県引佐郡引佐町奥山）＝千本幟による徴兵除け祈願<sup>(1)</sup>。
- 三坂神社（山口県山口市徳地）＝日清・日露戦争期、出征者の写真を奉納すると無事帰還できる。
- 宮崎八幡神社（石川県六日町秀重院）＝明治27年と31年の「出征兵帰国祈願図絵馬」<sup>(2)</sup>。
- 真成寺（石川県金沢市東山）＝日清・日露戦争に「お預け写真」無事の帰還を祈願<sup>(3)</sup>。
- 友内神社（徳島県美馬郡旧端山村）＝明治初期から徴兵除け信仰が盛ん<sup>(4)</sup>。

また、第3章で取りあげる「サムハラ」という呪符が明治期にも流行する。そのきっかけは、玉尾需という人物が出征兵士へこのお守りを大量に寄付することから話題になった。『滑稽新聞』に「滑稽迷信 奇なる護身札」と題して取り上げられる。<sup>(5)</sup>

滑稽記者曰く、此奇なる護身札なるものは、ちえのうみ 智恵海、ひじまくら 秘事枕、ちじゆつぜんしよ 智術全書、などといへる古き本にも記されてあるが、此度征露戦地の某艦乗組軍人より左の寄書ありたり。

前橋旧藩士玉尾需翁は、しやはん 這般の征露戦に際し、報国の一にもとて、左の如きまもりふだ 護身札をば数十万枚、出征軍隊に寄贈された。

また、この時期にサムハラの御札（第3章参照）以外にも様々な神社仏閣が戦勝祈願などを行った。明治37年（1904）2月27日付『都新聞』には次のような例が取り上げられている。

▲軍中護符の寄贈 神奈川県足柄上郡南足柄村大雄山最乗寺の住職石川素童は道了大薩陞勝戦護身の守札数万個を出征軍人へ寄贈し次に芝公園地旧弥生館跡仏教忠魂祠堂にては九郎判官義経徳川家康公が陣中にて携帯せし守護本尊仏陣中護符を出征軍人従軍者に施与ばすと（中略）

▲百日護摩 府下北豊島郡石神井村字谷原東高野山長命寺にては戦勝祈禱敵国降伏出征者安全の百日護摩を修行し尚ほ軍人軍属及び遺族の姓名を端書に記し送り起せば百日間無料にて護摩を焚き祈願なすと

「勝戦護身の守札」や「陣中護符」が出征軍人にわたされたことや百日護摩焚きが行われていた。戦争に直面し庶民にできることが、神仏に対する弾丸除け祈願や徴兵除け祈願、張り子の虎やお守りであった。これらのバリエーションとして千人針習俗が生まれてきたと考えられる。千人針習俗が生まれる背景についての考察は本章第6節で試みるとこととし、以下では千人針習俗に関する文献資料を検証する。

(1) 大江志乃夫『徴兵制』岩波新書、岩波書店、昭和56年（1981）、p.119。

(2) 夏季特別展図録『銃後の人々 祈りと暮らし』石川県立博物館、平成7年（1995）、p.84。

(3) 前掲『銃後の人々 祈りと暮らし』、p.88。

(4) 前掲『徴兵制』、p.119。

(5) 『滑稽新聞』第71号、滑稽新聞社、明治37年4月26日発行、pp.226-227。

序章において紹介したように『広辞苑』などには、千人針習俗の始まりは、「日清・日露戦争の頃始まり」とある。果たしてどのような資料を根拠にしたのであろうか。明治期に入って、戦争が始まり、徴兵制度がしかれるようになると、兵役逃れの習俗が増えたが、徴兵制度が厳しくなった明治 16 年（1883）頃からは、積極的に戦争へ参加する気運が高まった。そのようななか、残された妻や母は、地域の氏神へ参拝し、無事に戻ってこられることを祈願し、弾丸除けのお守りを持たせることが第一にできることであったという<sup>(1)</sup>。明治 22 年（1889）に徴兵令が改正され、「忌避者優先徴集の処置をとってからというもの徴兵を忌避することが困難となり、多くの青年はいやおうなく兵営につれこまれた。」<sup>(2)</sup>というように、合法的なくじ逃れができなくなった状況の中、日清戦争は、明治 27 年（1894）7 月から翌年の 4 月まで、約 10 ヶ月間続いた。こうした時代背景を考慮すると日清戦争においてすでに千人針習俗が生まれていたことは考え得ることである。

いくつかの資料で日清戦争からとの記述があるので、それらの資料を検討することから始めることとしたい。昭和 12 年（1937）8 月 27 日付『東京日日新聞』に大間知篤三により「千人針」と題した記事が掲載された。<sup>(3)</sup>

千人針は何時からはじまつたかはよく知らないが。すでに日清戦争にはこれを肌にして出征し、今もそれを保存してゐる人のあることは聞いたし、日露戦争にもやゝ流行したことがたしか「風俗画報」に出てゐた。名称も「千人結び」といったらしい。しかしその時には、満州事変の際や殊に今日ほどに流行しなかつたことは、記憶してゐる人のきわめて少いことからでも想像し得られる。しかし日清戦争以前にこれがなかつたとは決していへないし、むしろ何所かの田舎でつゝましく行はれてゐたと想像する方があつてゐよう。（下線筆者）

「すでに日清戦争にはこれを肌にして出征し、今もそれを保存してゐる人のあることは聞いた」という記述があるのみで、具体的な事例はない。さらに想像として「日清戦争以前にこれがなかつたとは決していへないし、むしろ何所かの田舎でつゝましく行はれてゐたと想像する方があつてゐよう。」と推測するに過ぎない。

また、高崎正秀は昭和 15 年（1940）に記した「千人針考」<sup>(4)</sup>に、「私の得た愛知県小牧町地方からの報告によっても、日清戦争の時は盛んに行われたが、以前には余り聞かないことであつたとある。」とのみ報告している。管見の及ぶ限り、この二つの報告が千人針習俗が日清戦争において行われていた根拠となっていると考えられる。

日清戦争における出征の様子について記録した文献として、上方郷土研究会編集の『上方』（第 81 号、創元社、昭和 12 年（1937）9 月 1 日発行、）において、日清戦争時代号と

---

(1) くじ逃れについては、大江志乃夫『徴兵制』（岩波新書、昭和 56 年（1981））や岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』（未来社、平成 8 年（1996））など様々な研究がある。

(2) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争—帝国への歩み—』刀水書房、平成 15 年（2003）。

(3) 大間知篤三『神津の花正月』（六人社、昭和 18 年（1943））に再掲されている。

(4) 『俳句研究』7 卷 3 号、改造社、昭和 15 年（1940）3 月。後に内容を一部改訂して『古典と民俗学上』（昭和 53 年（1978）、講談社学術文庫）として刊行された。

して、日清戦争当時の風俗を記し、当時の日清戦争経験者に日露戦争期の手記を紹介している。関連すると思われる記述は、藤里好古「武運長久祈願の消長」であろう。

氏地よりの祈願状況としては、廿七年八月九日夜、天満滝川町有志中の御千度群参、十一日夕には雨中を冒して天満乾物商が御千度群参、十四日夕天満市之側住民の御千度群参の前後三回より団体参拝とではなく、最も個人的に参拝せし者は多かるべきも、到底現時の如き状況は呈せざりしものゝ如し。<sup>(1)</sup>

「御千度群参」の実態の詳細については不明である。この雑誌の特集の中に「千人針習俗」に直接通じる風習は見当たらなかった。また、『読売新聞』については、日清戦争の時期の記事を調査したが、見当たらなかった。日清戦争に始まった可能性は充分考えられるが、現在のところ、それを証明するには論拠が不十分であると判断しておく。次節において千人針習俗は日露戦争において盛んに行われるようになり、その事例も多く、それらを具体的に考察を加えていく。

---

(1) 上方郷土研究会編集『上方』第81号、創元社、昭和12年(1937)9月1日発行、p30。

## 第2節 日露戦争期に記録された千人針習俗

日露戦争は、明治37年（1904）2月6日から明治38年9月5日まで、朝鮮半島と満州が主戦場であった。この時、戦地へ向かう兵士の出征を見送る風景は盛大であったという。

出征と云へば、生きて還らぬ覚悟がある、骨肉親族其他縁故ある者が熱誠なる送別をなすのは当然であらうが予は別に一般国民諸氏の最も熱誠なる送別に対しては大なる感謝を捧げねばならぬ。（中略）各停車場付近は録門、旗、提灯、幔幕等に飾られ接待所には昼も夜も委員が詰切つて出征者に湯茶を供し、諸種の便宜を与へてゐた、（中略）送迎中殊に目立つたのは婦人の尽力であつた、かゝる事に就いては婦人の力が大なる感動を与へるのは云ふまでもない、中にも地方婦人の質素で活潑な待遇は確に予等に対する大刺激であつた、一般に送迎者の半数は婦人、或はそれ以上の処もあつたが湯茶を運び、征衣の綻びを綴つて呉れたりしたのは多くは婦人の手であつた<sup>(1)</sup>

この時期、まだ銃後という言葉は存在していないが、出征に際して、婦人たちの声援が何よりの勇気となっていた様子が分かる。しかし、同時に与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」という反戦的ともとれる長詩が詠まれる時代でもあつた<sup>(2)</sup>。大手を振って見送る女性たちの中には、軍国美談で語られる姿と、戦地での無事を祈る姿の二面性が個人の中にもあり、そのような状況で千人針習俗が流行する。次に紹介するのは、管見の及ぶところ、千人針習俗に関連する資料で最も古い新聞記事である。

**事例1** 明治37年（1904）4月24日付『読売新聞』朝刊（1）「その日その日」  
或る土地では婦人が通行すると、針と糸と白い布を持つた兵士が幾人も出て来て、一針で可いから、縫ひとりをして呉れと頼むので、婦人は大に五月蠅がつて、用事でもなければ成るべく外出しないことにしてゐるさうだ。これは千人の女に一針づゝ縫ひとりをして貰ふて、それを肌に巻きつけてみると、鉄砲の弾が中らないといふ迷信から出たのであるさうだ。これで見ると、一万人の婦人に縫ひとりをさせて、軍艦へ貼りつけて置けば、砲台でも何んでも恐ろしくないわけだ。（下線筆者）

この**事例1**については、地名、名称や形状については記されてはいないが、街頭で兵士が通行する女性へ針と糸を持って白布に縫い取りしてくれと頼んでいる。ここでは「一針づゝ縫ひとり」との表現が使われており、針を利用していたことが分かる。しかし、女性は依頼を面倒くさがり、また記事の内容も「軍艦へ貼りつけて置けば、砲台でも何んでも恐ろしくない」と皮肉めいている。

リチャード・ゴードン・スミス（1858～1918）は、明治22年（1889）、明治31年（1898）に来日した博物学者であるが、日露戦争期の当時の神戸・湊川神社の戦時風景を描写して

(1) 松本恒吉『日露戦役 婦人の力』洛陽堂、大正元年（1912）10月、pp.110-113。

(2) 明治37年（1904）『明星』9月号に発表。日露戦争のために召集された弟を思って書いたという。（海野福寿『日本の歴史⑱ 日清・日露戦争』集英社、平成4年（1992）、pp.278-281。）



おり、その日記の中の明治37年（1904）4月26日の記述に千人針に類するものが紹介されている。<sup>(1)</sup>

**事例 2)** The local reserves are about to be called up for service. Women and girls are seen in the streets carrying long yellow pieces of stuff- with 1000 black spots marked on them- All women are asked to put a stitch of coarse thread through the black spot, with result when the thousand stitches are in they have been put in by 1000 women. The thing is given to your soldier relative. It is said to turn bullets, but what it really is a sign that you have the good wishes of 1000 women, and there is no doubt you would remember this even in your dying moments. I think the idea is pretty. (下線筆者)

(地方の予備兵が召集される場所である。女性や少女らが通りに立って、長くて黄色い布を持っている。それには千個の黒い点がつけられていて、すべての女性たちが黒い印に太い糸で一針縫うよう頼まれて、その結果、千人の女性によって縫われた千の糸玉ができる。女性たちはできた布を親戚の兵士に贈る。その布は兵士を銃弾から守るといわれているが、その兵士が千人の女性の思いを身につけているという意味が込められており、きっといまわの際でさえもこれを思い出すのであろう。素敵なアイデアだと思う。(以上、筆者による訳文。下線筆者)

ここでもまだこの布の名称は不明である。文脈では、black spot (黒い点) は stich (結び玉) の結果の糸玉の色と考えられよう。そう解釈すれば、ゴードン・スミスが目撃した千人針に類するものは、呼称については記述が無いが、長い黄色い布に黒い糸で糸玉を作られたものであり、靖国神社内の遊就館に残されている日露戦争期の千人針に類するものと思われる実物資料と黒い糸という特徴が一致する。

続いての記事には、具体的な名称、形状、地域などが記されている。

**事例 3)** 明治 37 年 (1904) 4 月 29 日付『都新聞』「見たり聞いたり」

▲千人の女に一針づゝ糸を縫はせた腹巻を身に着けて居ると、弾に中らぬといふ馬鹿馬鹿しい迷信が京阪地方に行はれ、軍人は争つて此の腹巻を拵へる、婦人は寄つて群つて縫つて遣る、忽ち大流行を来して「千人力」といふ唄まで出来たが、大阪神戸辺の□□は是に突込んで贗軍人に化込み、千日前や楠公境内で風装の好い女を見付次第「済みませんが一針縫つて下さい」と腹巻を出し、女が一生懸命に糸を刺して居る油断に突入つて、頭物や懐中を抜くさうだ。(下線筆者)

ここではじめてこの千人針習俗についての名称「千人力」が出てくる。京都や大阪を中心

---

(1) 伊井春樹氏にご提供いただいた英文を筆者が訳した。伊井春樹『ゴードン・スミスの見た明治の日本 日露戦争と大和魂』(角川選書、角川学芸出版、平成 19 年 (2007)) の「千人針」(pp.51-54) の項目に、この記事について、詳しく記してある。英文で「千人針」の読みが記されているわけではないが、千人針として解説が記されている。

に、『千人力』といふ唄」ができるほど大流行したとあり、「千人力」という呼称がある程度の知名度を獲得していたこと、千日前や楠公境内など人での多い場所で行われたこと、「馬鹿馬鹿しい迷信」との記事の一方で、また、スリに狙われるほど熱心に縫ってくれる女性もいたことなどが分かる。

**事例 4)** 明治 37 年 (1904) 5 月 16 日付『東京朝日新聞』

●学校監督者に注意す 先頃大阪市にて兵士弾除のまじなひにとて千人結といふと流行すと聞しが目今東京にも伝染したりと見え各小学校の女兒にまで是非一針宛を縫はせんとして針の路筋の形を置たる布片を持込み嫌がる者にも教師の命令で之を縫はするより中には泣き出したる女兒もありしやに聞く全体学校にはまじなひなどといふことは之を戒むべき筈なるに却て教師より之を児童に命じて為さしむるに至る後児童の腦裏に觀戦するの甚しきを思へば憂慮に堪へず依て学校監督の任にある者速かに此等の弊害を一掃すべきなり

大阪市において兵士の弾丸除けの呪い「千人結」が流行した。このような呪いを教師が児童に強要するのは憂慮すべき事態で、すぐに一掃すべきとの記事である。千人結という呼称の初出である。教師の態度と記事のスタンスのギャップが大きいことがわかる。

**事例 5)** 明治 37 年 (1904) 6 月 21 日付『東京二六新聞』「世間話」

白布の六尺ばかりなのに紅い糸を通した針を添へて何処の家へでも構はず入込み女と見れば一針づゝ布に糸を通して貰ふ人が少くないこれは千人千針の数に達した上此の布を腹巻にすれば鉄砲玉を避けるとて戦地の人に送る家族の所為だといふが誰がそんな事を言出したか良くない洒落だ (下線筆者)

**事例 3** からしばらくして 6 月に東京で流行した時の記事である。6 尺 (約 180cm) くらいの白布に赤い糸という形状の特徴が出てくる。家族が「戦地の人に送る」というのは、この流行のときにはすでに戦地へ出征した後で、この腹巻きを戦地に送ることになったと考えられよう。またこの新聞は「良くない洒落だ」とこの習俗に対して理解を示していない。

**事例 6)** 明治 37 年 (1904) 6 月 28 日付『都新聞』「見たり聞いたり」

▲又た大阪、広島地方で一時大流行を極めた「千人力」と云ふ禁厭も、近頃になつて市中に輸入された、それは女千人に一針づゝ縫つて貰つた白布を腹巻にして軍へ出ると、弾が中らぬといふ迷信なので、浅草、上野又は招魂社など人の往来頻繁なる所へ針と布とを持って行き「ちよいと姐さん」を極込む者が大分ある (下線筆者)

大阪、広島で一時大流行した「千人力」という呪いが東京でも見られるようになったという。千人の女性に一針ずつ縫ってもらった白い布を腹巻きにすると弾丸除けのお守りになると、上野や浅草、九段などの人通りの多いところで行われたという。

**事例 3** に引き続き『都新聞』の**事例 6** の記事では、この習俗を「千人力」という名称で紹介している。この「千人力」という名称については、大江志乃夫が徳島県の事例として、

「現に今回の如きも頑迷不識の徒は「千人力」と称して布片に女子千人の手縫<sup>もと</sup>を需め之を腹巻用に製して以て出征軍人に贈りし者あり。」(『明治州七八年徳島県戦時史』)<sup>(1)</sup> という文章をあげ、日露戦争期のこの種の習俗を「千人力」と紹介している。日露戦争期の千人針習俗の名称として「千人力」が一部用いられたことが分かるが、この「千人力」の表現はこの記事以降見られなくなる。

**事例7)** 明治37年(1904)7月1日付『読売新聞』朝刊3面「流行遅れの千人結」

開戦当時大坂より始まりて追々各地に流行せる千人結びは遅れ馳せにも昨今府下にて大流行出征軍人の家族等は兎に角鉄砲玉を除ける<sup>まじなひ</sup>禁厭なれば千人結を拵へて戦地へ送り届けんものをと、例の寅年生れの四十歳以下の女千人より真心籠めて真紅の色もて布に結び付け貰ふとの方法にて苟めにも寅年の女千人を探し当てるは容易ならねば先づ浅草観音は婦女子の参詣する者多きを見込みて毎日五六人の母とも見ゆる老婆や妻とも思はるゝ婦人等が参詣の婦女子の袖に縫<sup>すが</sup>りて其年を問いつゝ彼の真紅の糸を布に結び付け貰ひけるを見受けられ陸軍省には諸方より送達方を届け出たる千人結は山の如く積めるほどなりと(下線筆者)

記事によれば、日露戦争開戦時に大阪から始まった「千人結び」は、遅れて東京でも流行した。寅年生まれ<sup>(2)</sup>の40歳以下の女性千人から真紅の糸を布に結びつけてもらう方法であったが、寅年の女性を捜し出すことは容易ではなかった。浅草観音<sup>(2)</sup>では女性の参拝客が多いということで、毎日、5、6人の母親や妻が参詣中の婦女子に年齢を尋ね赤い糸で布に結び目を付けてもらった。陸軍省にはあちこちから届けられた千人結が山のようにあったという。

「千人力」という名称に代わって、ここではじめて「千人結」という名称が出てくる。被依頼者の条件が「寅年生まれ<sup>(2)</sup>の40歳以下の女性千人」と設定されている。東京の浅草観音で行われていたことが分かる。事例3と同様、出征軍人に直接渡すのではなく、陸軍省を通して戦地に送るものであったことが分かる。

ここまで7件の新聞記事を見てきたが、次に千人力及び千人結びは、明治38年(1905)5月に発行された雑誌『風俗画報』316号にも取りあげられる。日露戦争は、明治37年(1904)2月6日から明治38年9月5日まで続いたので、戦争がまだ終結していない時期である。日々の状況を紹介する新聞に対して月刊の雑誌では、ある程度の期間の出来事や流行についてもある程度情報を整理して紹介するのが雑誌の特徴であろう。この千人針習俗についても日露戦争を振り返り、この流行を「千人結」として次のように総括している。

**事例8)** 明治38年(1905)5月、画報生「千人結」『風俗画報』316号、

---

(1) 大江志乃夫「“徴兵よけ”の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第39号、新日本出版社、昭和56年(1981)、p.221。

(2) 前述の伊井春樹『ゴードン・スミスの見た明治の日本 日露戦争と大和魂』(角川選書、角川学芸出版、平成19年(2007))の「狂気の迷信」(pp.165-166)の項でも、明治38年7月15日の日記に千人針習俗に類する事例が紹介されている。そのときの白い布と糸の多くはイギリス製であったという。

千人結とは誰かいひ始めけむ。彼是れ民間に伝りて今尚ほ行はるそは何事なるやというふに。一片の布帛をば一鍼づつ千人の手して結び縫ふことにて。かくしたるものを身に纏へば。弾丸を避くるを得べしといふ。所謂まじなひの類にて。迷信家より起こりしものなるべし。思ふに千人の女髪は大象を繫くを得べしといふが如く。千人の丹誠を籠めたる布帛は。弾丸も之を洞する能はずとの観念より出しものにや。此事浪華辺より流行し来りて東京にても実際に之を行ふものあるを目撃せり。大抵依嘱するものは婦人にて。依嘱せらるるものも勿論婦人なりとす。親戚知友に請ひ一鍼つつ縫ひ貰ふも。固より千人に及ふは容易ならさることなれば街路に出て婦人の来るに会へば之を請ふ。請はるる者も出征軍人の為めなりと心得て。快よく諾ふを常とす前にもいへる如くこの千人結というふはもと迷信より起こりしものにて一笑すべきことなれども只管に我子を思ふ親心を察し見れば亦人情の免れざる所なるべし。(下線筆者)<sup>(1)</sup>

浪花で流行したものが東京でも流行しだした。たいていは婦人が婦人に依頼するものであった。親戚知人に依頼して一針ずつ縫ってもらう。千人に頼むのは容易ではないので人通りの多い通りで通りがかりの婦人に声を掛ける。出征軍人の為であることを理解しており、快く縫ってくれるものであった。もともとは迷信であったが、親心を思い断る人はいなかった。

これまでの新聞記事では迷信として扱われていたが、ここでは「ただひたすらに我が子を思う親心」を察しており、この習俗を肯定的に理解していたことが分かる。また「千人の女髪は大象を繫くを得べし」ということわざを引用し、このあたりに千人針習俗の始まりをみている点は注目すべきであろう。

『風俗画報』316号の口絵には、「千人結」と題された彩色した版面が掲載されている(図1-1)。場所は、浅草雷門を入った仲見世通りと思われる、多くの女性たちが千人結を乞われる様子が描かれている。本文中にはその形状の特徴は記されていないが、手に持つ布は黄色に彩色してある。結び糸が何色かは描かれていない。



図1-1 『風俗画報』316号の口絵「千人結」

この他、時期は遡るが、明治37年5月20日の大阪での記事として、宮武外骨による記事にも「千人結」が登場する。まずは広告のパロディと考えられる『滑稽新聞』第73号(明

(1) 『風俗画報』316号、東陽堂、明治38年(1905)5月。



治37年（1904）5月20日）の裏表紙の記事である。

工女募集広告 人助けに成る至極有益の職業にして誰にでも出来得る容易き仕事なり、第八回千人限り募集す、美醜と年齢を論ぜず望みの者は至急左の所へ申込むべし、保証人一切要せず  
大阪市東西南北区各辻町（電話689番）千人結請負事務所<sup>(1)</sup>

もう一つは、『滑稽新聞』第74号（明治37年（1904）6月7日）の記事である。普通のふんどしも縫い取りをしてもらえば「千人結」になるというパロディとして紹介されている。<sup>(2)</sup> どれだけ実際の事例を反映

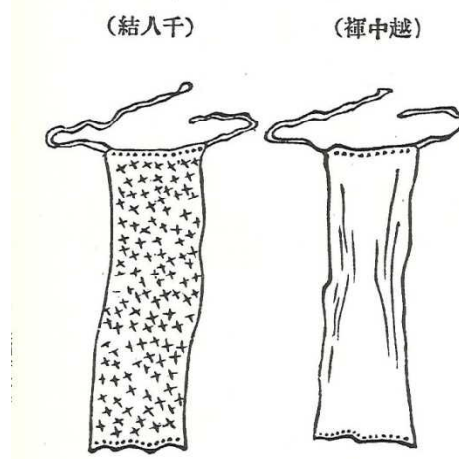


図 1-2 『滑稽新聞』第 74 号

しているのか詳細は定かでないが、当時の人々が噂している話題性のある記事として、パロディの題材にされるほど、一般的に知られる習俗となっていることが分かる。またその名称を「千人結」と紹介していることから明治37年5・6月にすでに「千人結」という名称が普及していたことが分かる。

前述の靖国神社遊就館が所蔵する資料には、いくつか当時の実物の千人針に類するものがある。所蔵リス



写真 1-1 遊就館所蔵資料① 法量：縦 55cm× 横 33cm



写真 1-2 遊就館所蔵資料② 法量：縦 256cm× 横 33cm

(1) 『滑稽新聞』第 73 号、滑稽新聞社、明治 37 年（1904）5 月 20 日、裏表紙。

(2) 『滑稽新聞』第 74 号、滑稽新聞社、明治 37 年（1904）6 月 7 日、p14。

トには、3 点の記載があるが、実見できたのは 2 点のみである（第 4 章「千人針所蔵の博物館・資料館等」参照）。

どちらも未晒しの木綿生地で織り目が粗い太めの黒色の木綿糸をひとすくい縫って、2 本ずつの糸を垂らし、その 2 本ずつの糸を何度か結んでいる（写真 1-2・3・4）。あらかじめすべての千人分の糸を事前に縫い、均一な長さに切りそろえ、針を使わずに結ぶだけの仕様になっていたと考えられ、それが千人結の由来なのかも知れない。ちな



写真 1-3 遊就館所蔵資料②の結び目

みに昭和 10 年（1935）9 月に刊行された『国民百科大辞典』（富山房）には、「日露役中行ハレ、千人ノ女性ニ小切ヲ結ンデ貰ヒ出征軍人ニ贈リ、之ヲ肌ニツケル者ハ敵弾ニ中ラヌトイフ」とあり、小さく切った糸を結んでもらう形態とも理解でき、「満州事変ニハ千人針盛行、之モ恰モ雑巾ノ如ク布ヲ千人ノ女性ニ一針宛縫ッテ貰ヒ」との表現のようにこちらは針と糸で縫う形態を紹介しており<sup>(1)</sup>、縫う方法を区別して説明している。

明治時代の軍事郵便にもすでに千人針習俗を思わせる女性の姿が描かれている。写真 1-5 の絵はがきは、「明治 38 年 8 月 12 日」<sup>おうりよくこう</sup>「鴨緑江軍」「第五野戦局」の消印このはがきに描かれているのは、一人ですべてを縫おうとしているのか、街頭で結んでもらう準備をしているのかは不明であるが、こうした女性が一人で縫う千人結の姿は日中戦争でもよく描かれている<sup>(2)</sup>。



写真 1-4 日露戦争の軍事郵便

日露戦争期の千人針習俗についての今後の課題としては、当時の実物の千人結・千人針の情報を収集することであろう。本論文においては、全国的な調査を実施するには至らなかった。例えば、沼津市明治史料館編『企画展解説書 沼津市域にみる日清・日露戦争—明治の戦争と民衆—』（沼津市明治史料館、

(1) 富山房国民百科大辞典編集部編『国民百科大辞典』富山房、昭和 10 年（1935）。

(2) この点については、ジェンダーの視点から千人針を分析した次の論が参考になる。

山崎明子「表象としての『千人針』—『千人針』の表象分析のジェンダー理論によるアプローチ—『父家長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的な研究』（研究課題番号 17310153 平成 17—18 年度 科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書、平成 19 年（2007）3 月）。

平成 2 年 (1990 年)、p.2) には、個人が所蔵している日露戦争時の千人結と思われるものの写真が掲載されている。形式としては、遊就館所蔵資料①に類似すると見える。日露戦争期の千人結はいずれも結び目だけを施したもので、絵や文字が無いシンプルなものであり、さまざまな俗信が付されていくのは日露戦争以後のことと考えられる。こうした特徴を明らかにするためにも、実物の千人結の情報を収集することが重要となる。

ここまで明治期の千人針習俗について、新聞、雑誌、当時の実物資料を見てきた。日露戦争の開戦の 2 月から遅れて 4 月頃から記録に表れてきた「千人力」「千人結」と称される習俗が流行したことを確認できた。この習俗は最終的には「千人結」という名称で落ち着いたとみえ、日露戦争以降の記録にも「千人結」として紹介されるようになる。よって本論文では、便宜上日露戦争において流行した千人針習俗を「千人結」と記すこととする。

第 1 章「千人針習俗をめぐる研究史」において、徴兵忌避、徴兵除け祈願から弾丸除け祈願へと移行した先行研究を整理したが、徴兵除け信仰は日露戦争後から大正時代にかけて拡大していったという。

日露戦後に徴兵よけ信仰がむしろ拡大した理由については、日露戦後とくに大正デモクラシー期における厭軍的風潮の拡大、日露戦争中の弾丸よけ信仰の普及が戦後の徴兵よけ信仰に直結したことなどの原因もあげられるが、最大の原因は、徴集兵卒数の激増であった。(中略) くじ逃れで現役をまぬかれることができたものは、抽せん該当者中、日清戦争前は六人に五人、日露戦争前は二人に一人が落せんの割合であったが、日露戦争後は三人に一人しか落せんの好運をつかむことができなくなった。このことが徴兵よけ信仰の拡大にいつそう拍車をかけたといえよう。<sup>(1)</sup>

徴兵除け信仰が拡大する中、千人針習俗の事例は、現在確認したなかでは、新聞記事などからはしばらく見られなくなる。実際に戦争の開始とともに流行するのが千人針習俗であり、次に流行するのは満州事変の頃である。それまでは次章で述べるように、日露戦争期において流行した「千人結」を回想するかたちで紹介されることとなる。

---

(1) 大江志乃夫「“徴兵除け”の神から千人針まで」『季刊 科学と思想』第 39 号、新日本出版社、昭和 56 年 (1981)、p.524。



### 第3節 日露戦争後に記された千人結

#### 第1項 千人結の全国的な普及

大正2年(1913)1月に刊行された櫻井忠温著『銃後』には、明治37年(1904)8月に参加した日露戦争での経験談の中に「千人結び」についての記述がある。<sup>(1)</sup>

**事例 9)** 兵隊で千人結びといふものを持つてゐるものが非常に多かつた。動員の前後に、停車場や町の角の多勢人の集まつてゐるところで、手拭くらゐの大きさの白い布と針に糸を通してあるものを出して、「御面倒で御座いますが、お願い致します、」などと一人づつひとりづつ、糸を通して結目をしてもらつてゐるのを見たことがある。そうして之れを結ぶのは女に限つてをり、千人の女が結ぶのださうだ。甚だしいのは、女学校の門などへ持つて行つて、生徒の帰りを待ち受けてゐるものもあつた。此の千人結びは何にするかと思ふと、弾避けになるのださうである。腹巻にもしたり、服の裏へも縫い付けたり、襦袢の上へ襷にもしたりしてをつた。この千人結びで可笑しかつたのは、予の連隊で戦死の魁をやつた何某といふ兵が、血まみれになつて担架で担がれて山から下りて来たとき、この千人結びが担架の外に垂れてゐるのを見て、イヤ千人結びは危いと、俄かに評判が悪くなつて、誰いふとなしに、コソコソと取つて捨てたものもあつたやうである。折角女千人が一心を籠めた、弾の中らぬといふ重宝な<sup>あ</sup>お禁厭が、どこにもこゝにも棄ててあつた。(下線筆者)

多く兵隊が「千人結び」を持つており、停車場や町の角の多勢人の集まっているところで、手拭くらい大きさの白い布と針に糸を通してあるものを出して、糸を通して結目をしてもらっていた。これを結ぶのは女のみで千人に御願ひする。女学校の門などで生徒の帰りを待ち受けているものもあつた。千人結びは弾避けで、腹巻にもしたり、服の裏へも縫い付けたり、襦袢の上へ襷にもしたりした。ある兵士が、血まみれになつて担架で担がれて山から下りて来たとき、この千人結びが担架の外に垂れているのを見て、千人結びは危いと、俄かに評判が悪くなつて、コソコソと取つて捨てたことがあつたという。「腹巻にもしたり、服の裏へも縫い付けたり、襦袢の上へ襷にもしたりしてをつた。」とあり、千人結の形態には、腹巻以外にも服の裏に縫い込んだり襷にしたりするなど幾通りかあつたことが分かる。

大正元年(1912)10月刊行の『日露戦役 婦人の力』(松本恒吉著、洛陽堂)に、「戦死は国家のため」と題して、日露戦争の南山の戦いの後、明治37年(1904)6月、戦場で亡くなった兵士たちを弔つたある兵士の報告に次のような記述がある。<sup>(2)</sup>

**事例 10)** 戦死者の母・守屋ちう(明治37年6月16日)「戦死は国家のため」

(1)『現代日本文学全集 第49篇』改造社、昭和4年(1929)。この著書は、「銃後」という言葉の初出とされる。

(2)松本恒吉『日露戦役 婦人の力』洛陽堂、大正元年(1912)10月、p.33。



斯くて自分は差図して遺物たるべき貴重品を探させて見れば、両親の写真を持つあり、お守札を身に着くるあり、千人縫ひの腹巻を為したるあり、是等をみるにつけても情緒寸断する思ひであったが、更に膚に着たる真綿のチョッキを見ては、之亦最愛の母が一念込めて作り為したるものでないかなぞと考へて、いつしか自分は唯涙にむせぶのみ（下線筆者）

両親の写真、お守り札とともに、「千人縫ひの腹巻」と「真綿のチョッキ」を肌身に付けた者がいたことが報告されている。ここではじめて「千人縫」という言葉が「千人針」という名称に先行して登場する。おそらく千人結という名称以外にも様々な名称があったと思われるが、記録に登場する言葉としては、この後「千人縫」という名称も取り上げられるようになる。「結ぶ」から「縫う」にその意味が変化していることはその後の「針」への変化を考えると重要な名称であろう。

また、大正 11 年（1922）の『奇態流行史』に宮武外骨が寄稿している。

#### 事例 11) 「出征軍人に贈る「千人結び」<sup>(1)</sup>

日露戦争中の明治三十七年の秋頃、街路の四ツ辻に老婆又は薄汚い女が立って居て、行人を呼止め「御面倒ですが、チョツトこれへ糸を結んで下さい」と云って、手巾位の布に糸と針を添へて出す事が流行した、これは「千人結び」といって、千人に結んで貰った雑巾のやうな小切を出征軍人に贈り、軍人がそれを懐中にして居ると敵弾にあたらぬといふ愚説が行はれたので、息子や夫の身の上を気支ふ連中がやつた事である、千人の念力が籠つて居る物だから、其念力で身体を保護するとの迷信に困つたのであらう、

昭和 12 年（1937）9 月、若井積「随筆 千人針の思ひ出」（『日本婦人』第 44 号、大日本婦人会）では、筆者が、明治 38 年（1905）3 月 10 日の奉天陥落の朝のことを次のように記している。

事例 12) その時、その軍曹は、ポケットから何か出してくれと頼むようにするので、探り出してみると、それは方一尺位の布片で、黒木綿糸でブスブスさしてある雑巾やうのものでした。（中略）近頃「千人針」について、赤糸の結び目にしらみが卵をうむから不衛生だとか、赤糸は血が流れたようにしみるから白糸がいいとかいう議論を聞きますが、日露戦役当時私が見た「千人針」は此頃のように大きなものでなく雑巾位の大きさでした。そして一人が一結びしなければならぬというものでもなく、誠意をこめて一針づつ縫うたところに意義があったもので、その布の大きさとか、縫糸の色合などは全然関係ないように思われます。（下線筆者）

この若井積という女性が目撃した千人結は、「方一尺位の布片で、黒木綿糸でブスブスさ

---

(1) 『奇態流行史』半狂堂、大正 11 年（1922）、p.98（『宮武外骨著作集 第 4 巻』河出書房新社、昭和 60 年（1985）、p.430）。

してある雑巾のようなもの」とあることから約 30 センチ四方の布に黒木綿糸で作られた物であったという。日露戦争期にも様々な形の千人結が存在したことが分かる。

## 第2項 千人結から千人針への移行

ここまで日露戦争期に流行した千人結の事例についてみてきたが、この「千人結」という言葉が、日中戦争以降「千人針」と呼ばれるようになった。管見の及ぶ限りその初出は次に紹介する講談本。大正4年(1915)5月刊行の『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』(早川貞水著、大江書房)に明治37年(1904)7月4日、東京の新橋駅の街頭で腹巻に一針を乞う老婆のエピソードが紹介されている。<sup>(1)</sup>

**事例 13)** 明治三十七年の二月、日露の国交断絶し、宣戦の詔勅下り、それより第一軍の軍司令官黒木閣下が御出発になり、続いて第二軍司令官の奥閣下が御出発になり、第三軍の乃木閣下が五月の二十六日に御出発になり、総指揮官の大山閣下、参謀総長の児玉閣下が七月の四日に御出発になり、其の翌日、第四軍の野津閣下が御出発になりました。

其の七月四日、大山閣下、児玉閣下御出発の日、新橋の停車場前は、各区の有志が国旗又は思い思いの旗を立てまして、総指揮官、参謀総長閣下の御出発を御送りをする。実に全市振っての奉送、新橋近傍は云うに及ばず、御通行筋は立錐の地も無く、市民の熱誠、実に湧くが如くで御座いました。

其の今、大山閣下の御馬車が停車場に著き(ママ)まする少し前、年の頃は六十三四になりまする老婆が「おばこ」に髪を結んで、鬢の毛は左右に垂れ、洗いざらした粗末な単物を著て、心の現はれて居る如何はしい帯を締め、草履だか下駄だか分からないような、歯の減った薄い下駄を穿き、手には四五尺ばかりの白木綿と針と糸とを持って、汗ビッシュヨリ発いて、其の大勢の人込の中を割って、御婦人と見ると『モシモシ』と声を掛け、美しい服装をして総指揮官、参謀総長閣下を御送りしようと云って来て居らるるお御方を呼留める。

『御婆さん、何です?』『あなた、誠にすみませぬで御座いますが、どうか一針縫って戴きたいので御座います。私の倅が今度戦地に参るので御座いますが、千人の婦人が一針づつ縫って下すった腹巻を締めて参りますと、敵の弾丸が中らないと申します

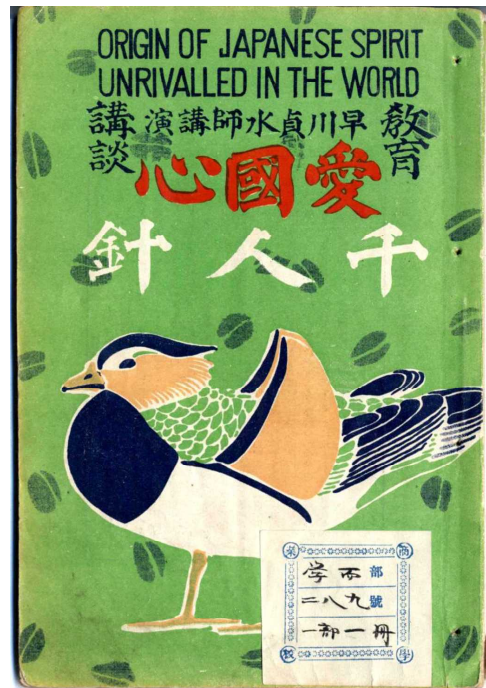


写真 1-5 『愛国心千人針』表紙

(1) 早川貞水『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』大江書房、大正4年(1915)、pp.2-6。

から、誠にすみませぬが、どうか一針縫って戴きたいので御座います。』

(中略)

二

貴婦人たちは汚ない老婆が側へ寄って来るから、身を少し避けて居たが、出征軍人の母であると聞いて『そうですか。お前さんの息子さんが戦地へ行きなされるのですか』

『ハイ、独っ子で御座います、戦争のことゆえ死ぬのは仕方が有りませぬが、成ろうことなら無事に帰って参るように致したいので』『御尤もです。サア縫って上げましよう』『どうも有難う御座います。』

『あなたも御縫い下さいまし』『アア縫って上げますヨ』『有難う御座います。・・・そちらに居らっしゃる束髪うちの御方、御縫い下さいまし。・・・丸髷おつむりの御方・・・夜会巻きの方・・・花月巻きの御方・・・どうぞ御願ひ申します。・・・有難う御座います。大ハイカラの御方、どうぞ』『アラいやですヨ』。皆さんの御様子が分からないので、老婆は頻りに髪おつむりの結ひ方いを呼んで、一針づつ縫って戴きたいと頼んで居ります。

てんでんに『サア縫って上げますヨ』と言って、縫って下さる中に、何処の御令嬢うちだか分かりませぬが、女中を連れ、蝙蝠傘を翳して、紫色の袴を召し、御年の頃は十二三歳、誠に御容姿の美しい、可愛らしい御方が『御婆ちゃん』と柔しい声を御掛けになる。『ハイ、ハイ』『お前さんの息子さんが戦争に御いでになるなら、私も一針縫って上げますヨ』『有難う存じます、さぞ倅が喜ぶで御座いましょう』

之を觀たる人々、ただ感心をして御嬢様を見て居る。何れ良い御家庭の御教育を御受けになった御令嬢だろうが、此の多くの人の中で、老婆に満足を与えて御やりになるのは感服だ、さすがに日本も人智が進んだり、心ある人は喜んで居りました。

其所へ四十格好の立派な服装をした御婦人が参りました。老婆は其の側に来て『誠に



図 1-3 『愛国心千人針』挿絵

済ませぬが、あなたも一針縫って下さいまし』。御婦人は、私は此の年齢になるまで、針を持ったことは無いのです、偶たまに持つと此の間も指を突っついて痛くしました。私の所では糠袋でも何でも皆な三越たまに頼むのですヨ。此の節は調法です。お金さへ出せば何でも間に合ひます。私は針を持つことは出来ないのですヨ。言ふと、傍に居た人がハハハと笑った。其の御婦人は真赤な面をして、人込の中へ姿を隠して御仕舞ひになつた。(下線筆者)

断った女性を見て、書生が私でもそれくらいは縫えると云って、縫おうとするが、おばあ

さんは女性だけしか縫えないと断ったあとに、愛国婦人会の総裁閑院宮妃殿下をお出迎えた女性の袴をつかんで「私の俵が明日、戦争に参るので御座いますが、千人の婦人の御方が一針つつ縫いましたものを締めて参ると、敵の玉が中らないと申しますから、あなたも一針御縫い下さいまし」と声を掛けた。その様子を見た宮様も一針縫っていただいた。「あの御方御一人の御縫ひくださったのは、普通の人の千万人にも当る位のものだ。モウ他の人の手に渡すと恐多いから、其のまま早く家へ帰って息子さんに話すのが宜い。」と助言を受けた。その後、息子は戦地へこの腹巻を持って出征する。戦地での息子の様子などを語った美談が紹介されている。

この文献が管見のところ、「千人針」という言葉の初見である。日露戦争の時には、千人結と呼ばれていたものを「千人針」と呼ぶようになった最も早い著書として大変重要な文献であり、千人針ということばが広がるきっかけになった可能性も考えられる。ただし、この講談本では、「千人針」という言葉はタイトルにしか出てこず、作品の中では常に「腹巻」とのみ記されている。以下、この早川貞水という人物、及び教育講談の影響について触れておきたい。早川貞水という人物については、『日本芸能人名事典』に次のようである。<sup>(1)</sup>

はやかわていすい 早川貞水 文久元(一八六一)十二～大正六(一九一七)五／十五。明治・大正期の講釈師。江戸・神田生まれ。本名與吉。十七歳で講釈界にはいり、旭堂南慶(きょくどうなんけい)門で慶治。以後四代一龍齋貞山、二代松林伯円、初代桃川如燕門を転々とし、明治二四年(一八九一)に三代真龍齋貞水門となって三代双龍齋貞鏡三二年四代真龍齋貞水(明治末年亭号を本姓にあらため早川貞水とした)。教育講談師と称し、寄席よりも地方講演で知られた。「力士伝」が得意で通称お相撲貞水とよばれた。

晩年の教育講談師としての活動として作られたのがこの『愛国心千人針』である。『愛国心千人針』の冒頭では、この教育講談についての趣旨が述べられている<sup>(2)</sup>。

教育講談も段々と御愛読を蒙りまして、貞水有難く感謝いたします。欧州の戦乱未だ局を結びませぬ。此の戦争に付きましては何くの人々も恟々として居られ、外国の戦いとは申しながら、我が日本帝国にも関係が有ることと思ますと、何人も皆な心配を致して居ります。それに付けても明治三十七八年の戦役の当時を思いやられます。唯今は外国と外国とで戦って居るのでありますが、決して外国だけで戦いをして居るものと貞水等は考えて居りませぬ。世界の勢も日に月に変わり行きますので、将来に於きまして、我が日本帝国の位置も段々重んぜられることに相成りましようが、或は今日の欧州諸国の人人の如くに、昼夜安き心も無く、戦争をしなければならぬような、不幸な時が来わせぬかと存じますと、一層、日露戦争の当時に国民が上下一致をして、国家の為に 天皇陛下に御奉公を致しましたことを思い出

---

(1) 倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』三省堂、平成7年(1995)。

(2) 早川貞水『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』大江書房、大正4年(1915)。

しまして、国民の責任と云うことも段々重く相成りまする訳であります。故に、皆様に於きまして、将来に対して堅き決心を持って、陛下の忠良なる臣民となって、十分に国家に御尽しになり、帝国臣民の本分を全うせらるることを祈る次第で御座います。貞水が此度『愛国心千人針』と云う講談を申し上げますのも、聊か皇国を思う一端に外なりませぬので御座います。

更にこの講談を演じたきっかけを巻末に紹介している。明治 38 年（1905）1 月に帝国教育会の会で、一席講談を演じると、もう一席と要望があった。そこで「それでは貞水が戦地に行く前日に新橋で見て、帰るときに広島で見た御話をしませう。まだ是れは講談と云ふ程に出来上つては居りませぬが」といってこのエピソードを話したという。「それから屢々各学校で此の講談を演じまする毎に、皆様が非常に御感動ください、それより全国各地に於いて此の講談を演じましたことは何十回であるか知れませぬ程で御座います。」と説明している。更に明治 42 年（1909）の春に東京府知事からこの講談を演劇にする話があり、実際に上演することとなった。そして教育講談のシリーズ第五弾として刊行されたのである。ちなみに明治 41 年（1908）3 月 7 日付『東京朝日新聞』には、「愛国心千人針」が上演されたことが記されている。早川貞水は、寄席には出ず、教育講談師として全国を回り、学校を中心に上演したものと思われ、千人針という言葉の普及に影響を与えているものと考えられる。

さらに、この講談は上記のように刊行され、大正 4 年（1915）5 月 11 日付『東京朝日新聞』（1 面）には、「該講談は国民教育上絶大の効果ありとの衆評を博せり 斯の如く面白くて為めになる 健全な講談書は他二類がありませむ 愛国心千人針は靈妙不可思議なる帝国精気現象 大いに読め読め読め読め 六千万同胞諸君」と大々的に宣伝されており、広く販売されたことが分かる。なお、この「愛国心千人針」は、昭和 11 年（1936）頃に SP レコードで浪花節「愛国心千人針」（1～4）（二代目天中軒雲月、テイチクレコード）として販売されている。二代目天中軒雲月が人気絶頂の時で、当時、著名な作品として選ばれたということであろう。

## 第4節 満州事変の頃

日露戦争開戦の明治37年(1904)から27年後の昭和6年(1931)9月18日に、満州事変が勃発。昭和7年(1932)2月18日に一応の停戦を迎える。これは陸軍が主導で行ったとされ、同年1月28日に起こった(第一次)上海事変は日本海軍が主導で行ったとされる。

**事例14)** 昭和6年(1931)11月19日付『朝日新聞』朝刊7面「弾丸除けの腹巻」

【新潟電話】弾丸除けには五黄寅年生れの千人の処女の手で縫われた腹巻がよいからと新潟市立女子工芸学校へ盛んに頼みに来るので同校では県立、市立の各女学校に応援を求め一週間以内に同市出身兵士七十九名全部に千人縫の腹巻を贈る事になり十八日森教諭が市役所へ送付方を申出た(下線筆者)

「五黄寅年生れの千人の処女」とは、具体的には大正3年(1914)生まれで、昭和6年(1931)の段階で、満17歳を迎える女性のことである。「五黄寅年」の女性は、「性質寛仁で、運気が強い」<sup>(1)</sup>とされることから、この後、「五黄寅年」にあやかるとされたようである。管見の範囲においては、この新聞記事は「五黄の寅」の事例の初出である。この「五黄寅年」とは、九星暦に基づく用語である。

**事例15)** 昭和6年(1931)11月27日付『朝日新聞』朝刊11面「列車中で胴巻」

【千葉電話】二十六日の昼房総線の列車中でサラシをだした五六人の女学生「満州の兵隊さんに贈る弾丸除けの胴巻です一針縫って下さい」と持まわると忽ちいくつも胴巻が出来上がった、女学生は千葉市の学校に通っているものらしい(下線筆者)

**事例16)** 昭和6年(1931)12月2日付『読売新聞』夕刊2面

「雷門に四少女 「千本針」の願ひ 巷に満つる後援の真心」  
一日朝から雷門に現れて満州軍の弾丸よけの腹巻をつくるため白木綿に千人針の願ひ、行人の足を止めて誰かれが一針つつ刺してゆく(下線筆者)

**事例17)** 昭和6年(1931)12月10日付『朝日新聞』朝刊3面「銃後の者」

(前略)この寒空に夜のふくるのも忘れ、ひたすら民族的衝動に駆られて奔走する一群の可憐な少女達を自分は見た。彼女等の手にしているのは一枚のフランネル、その行人に求むるところは、二つ欠けるも一つ増すも許されぬ一千回の縫針だという。昔から千人の女が縫った腹巻は弾丸除けに不思議な効目があるといわれます。(中略)然し今も昔も弾丸は物理的法則に従って飛来すると同様に、迷信も日露戦役の時代と同一の迫力を以て昭和人の精神を支配しているかも知れない。ただ我々は、千本針の腹巻をかけていたにもかかわらず、鉄甲を与えられなかったために殺られたという戦死者の遺骨がとどくのを、きょうきょうとして恐れるのである。(下線筆者)

---

(1)『広辞苑』第4版、岩波書店、平成3年(1991)。

昭和6年(1931)までのこれらの事例で分かるように、満州事変に入ってから新聞記事の千人針習俗に対する姿勢は好意的なものである。地域としては、新潟、千葉、東京と各地に広がっており、名称も千人縫・千本針・千人針と様々である。

『国際写真情報特輯号 満州大事変画報』(国際情報社、昭和7年1月)にも「千本針弾丸除け腹巻」が登場する。

**事例 18)** 厳寒に苦闘する在満の我が戦死の為に谷中真島町青年団では昔からその利益を伝えられてゐる、千本針弾丸除け腹巻三百枚を慰問として贈ることとなり、廿三日午前十時から上野松坂屋北側入口に団員多数出張つて買物に出入りする婦人客或は通行の婦人達に一針の運びを懇望した。頼まれる婦人令嬢達も、お国の為に奮闘する派遣軍に心からなる奉仕として悦んで混雑の中に針を運んで行く・・・一針の運びにも一目の糸にも真心こめた此の情景こそ涙ぐましいものである。同青年団では午後から日暮里諏訪神社で祈願式を挙行し、直ちに是等の腹巻を満州へ送る筈である。<sup>(1)</sup>  
(下線筆者)

昭和7年(1932)2月『アサヒグラフ 昭和7年2月5日 臨時増刊 満州事変写真全輯』(朝日新聞社)の「国民の熱誠」というページの「千人針」という項目に「高岡市にて」「呉市にて」「東京市にて」「岡山市にて 広島県増川高女生たち」「奈良県御所高女生たち」と説明のある写真が6点掲載されていることから、すでにこの時にはかなり全国的な流行を見せていることが分かる。

**事例 19)** 昭和7年(1932)2月29日付『朝日新聞』朝刊3面「千人針の追撃」  
浅草仲見世の二百メートルは針と糸とのざんごう地帯。戦地の兵隊さんに贈る弾丸除けの胴衣を縫うため文字通り一騎当千の群——千人針が参詣の女群を追撃する、参詣人はこの渦巻に巻こまれて老も若きも女性のすべては針を握ってたん念に縫継いで行く「そう、お父さんの腹巻—感心ねえ」と始めのうちは糸切歯で無器用に糸をかんでいたモガも、一人に二へんとして百からのざんごうだと都合で二百ぺんからの歯痛ではたまらぬと計り駆足で観音堂内に逃避すれば、その先にも又伏兵(?)だ、今市内では大通りや駅前夜おそくまでこうした千人針の風景が見うけられる。(下線筆者)

日露戦争での『風俗画報』の口絵の例同様ここでも浅草仲見世が千人針習俗のメッカであり、ここでは結んだ糸を糸切り歯で切っていたことが分かる(後に千人針の糸はハサミで切ってはならないと説明される)。

**事例 20)** 昭和7年(1932)3月10日付『読売新聞』朝刊7面  
「京阪の戦時異変 支那趣味の没落 ニセ廃兵と千人針利用のスリ横行」

---

(1) 『国際写真情報特輯号 満州大事変画報』国際情報社、昭和7年。



更に嘆かわしい現象は最近日毎に増した千人針の人込を利用して真心を込めて縫う婦人達からスリを働く悪漢の激増した事で市内に毎日廿数件に及んでいる、街頭には婦人の「千人針」に対して男子の「千人力」「千人忠」「千人大」などの進出目覚ましくこれは一枚の紙上に墨で力、忠、大などの字を千人の男子に書いて貰い之を肌身に付けて居れば千人の力と忠を一身に集めるので一人で千人の敵に匹敵し得るとの趣向だがこの所千人針戦線も紅白とりどりの賑かさで何れも軍国ならでは見られぬ面白い光景を現出している。(下線筆者)

ここでは女性による千人針だけでなく、男性が力という字を書く形式の千人力・千人忠・千人大という男性版の千人針も登場している。

つづいて『軍国と新女性』と題して、「学窓を出る女学生座談会」の内容が連載されており、その中で千人針について触れている。

**事例 21)** 昭和 7 年 (1932) 3 月 10 日付『読売新聞』夕刊 2 面

**手島** (中略) また私としてしまったことは、お隣の方の御親戚に当る方がやはり満州へいらつしやるとふうことで、一針でもいゝから千人針を縫ってくれといていらしましたから、私、沢山縫てあげようと思まして、学校へ持つて行つたりして四百針ぐらゐ縫ひました。

**中村** 私たちの学校では、お金を寄付いたしました。それから裁縫学校、これは私どものお姉さまのやうになつてゐる学校ですから、千人針をよく頼みにいらつしやいます。それで大抵一日一枚ぐらゐづゝは、クラスを返して拵へることになつてをります。(中略)

**高橋** 私の学校でもお金を送りました。また生徒たちで手紙を書いて、慰問のために送つたことがあります。それに街頭で、千人針を頼まれて縫ひますし…。私たち五年生は、五黄の寅年が多いといつて持ち込まれますので、お遊びの時間は千人針を縫ふのが仕事のやうですが、皆もう我れも我れもと、我れ先きに一針でも余計に縫つてあげようといふ気持ちで、これは私たちとして嬉しひと思ひます。私たちのために働いて下さる兵隊さんのために、私たち女学生としては、これくらゐのことはもちろんするのが当然のことだと思ひます。(中略)

**高木** 私どもの学校では寄付金の箱を出しまして、一週間ばかり私たちのお小遣ひを割いて、それをためて陸軍省へ送りました。千人針も方々から頼まれましたんで、学校へ持つて行つて毎日々々、千人針が第一だか学校が第一だかわからんほどしてをります。道を歩いてゐても頼まれるなど、ほんたういへば面倒くさくなりますけれども、やつぱり日本のために働いて下さる兵隊さんのためだからと思ふと縫はずにはゐられない気になります。(下線筆者)

当時の女学校は、5 年制であり、昭和 7 年 (1932) の 5 年生は、大正 3 年 (1914) 生まれの女性である。短時間に千人針を仕上げるには、女学校は特に重宝されたことが分かるし、「五黄の寅年」生まれの女性の力が頼りにされていたようである。

次に紹介するのは、新聞に掲載されたカルピスの広告記事の一部である。



**事例 22)** 昭和 7 年 (1932) 3 月 11 日付『大阪毎日新聞』

「千人針風景 銃後に光る婦人の力」

省線電車の駅頭に、各デパートの入口に、夫を思う妙齢の夫人、孫を御国の軍に捧げる白髪の老婦人、さては出征軍人の女兒とおぼしきいたいけな小児の、布と針を持って通行の婦人に一縫の針を求むるの光景は軍国日本のみが持つ床しい現れである。肉親の家族が出征軍人のために身の安全を祈願して、千人の婦人から求め得た一片の腹巻こそは新発明の防弾チョッキにも優る尊い御守である。縫い与うる途上の女性、受くる婦人、この涙ぐましいシーンは世界何れの国民にも真似は出来まい、日本婦人のみの誇り得る優しさである。(下線筆者)

前掲の『アサヒグラフ』とともに千人針風景が日常となっていたことが分かる記事である。

**事例 23)** 昭和 7 年 (1932) 3 月 15 日付『読売新聞』夕刊 3 面、平山蘆江「花柳百話」

上海の戦線、殊の外苦戦にて、一昨日も中尉さんが戦死をなすつた、きのうふは大尉さんがと、新聞の噂をお座敷で聞くにつけ、女ながらも日本に籍を置いて、お伊勢様のありがたさを知る以上、何かしらお国の為めになりたしと、殊勝な心がけ、芸者たちにも、出はじめたり。

姐さん、私も千人針の腹巻といふのをつくつて来ましたわと、赤糸を隙間なくかぶつた腹巻をお座敷から持つてかへる。

おや、お前さん、さらしを切つたのはけさのやうだつたが、もう出来たのかへと、姐さんの聞けば、え、早い方が好いと思つたから、今夜、お座敷で、お客様にすつかり刺して頂きましたといふ。冗談ぢやない、これは女の手でなければ駄目なんです、と云はれて、あらさう、それじややりなほすわと、今度はその夜の中に自分の手で、そつくり糸をかがつて、それ出来ましたといふ。

まア、何てこの人は呆れた人だらう、千人の手で縫ふから千人針です、一人で縫つては何にもなりません。それにしても、一体その腹巻は誰にしめさせるのと聞けば衛成病院に負傷兵の方が見えてるさうですから、あした持つてゆくつもりでした。(下線筆者)

出征する前に弾除けのお守りとして持たせることの説明無しに三段落ちが付けられていることから千人針がどういうものか広く知られていたことが分かる。

昭和 7 年 (1932) 3 月の思想研究資料号外『銃後の力 (上海事変に際し伊勢乗員宛激励文集)』(海軍省教育局)には、軍艦伊勢の乗組員に対しての家族からの手紙が集められており、その中に千人針習俗について記載されたものが多く、銃後という言葉の定着と千人針習俗の関連性をうかがうことのできる資料である。

**事例 24)** ○母及兄より

老婆の心尽しに依る千人針作製の状況、及本人が伊勢乗組なる故、わざわざ参宮の上伊勢大神宮の御印を其の千人針の布片に特別の詮議を以て頂きたる状況等を細々と書

き、最後に

コノ千人針ハ其ノ様ニ伊勢神宮ノ生念ノ入ッタ立派ナ物デ尚御守札ト共ニ入レテアリマスカラ、受取ッタナラシッカリト腹ニ巻付ケテ体ヲイツモ壮健ニシテ、イザト  
言ウ場合ニ自分ノ本分ヲ完全ニ果シテ、御国八千万同胞ノ為ニ大イナル活躍ノ出来ル様陰ナガラ神仏ニ祈ッテ居マス  
と純情込めた中にも尚いざと云う時は一死国に報ずべく激励しあり。(下線筆者)

#### 事例 25) ○父より

又本日包を以て女千人針と称し女千人の手をかけて縫いしチョッキ一枚、これは父が  
日露役の時終始着用せし最も記念すべきものに付弾雨の下に行くときは必ず着用せよ。(下線筆者)

#### 事例 26) ○弟より

(中略) 今送った此の千人縫こそ女工さんが上海に行って居る兵隊さんの為だと我れも人もと作って呉れた千人縫だ。此こそ我々同胞八千万の民の心が此の中に入って居るのだ。此の御守様は僕が九時頃熱田様に千人縫を持って参拝して御受して来たのです。(下線筆者)

#### 事例 27) ○姉より

・・・此の度千人縫いを拵えました。紀元節の日に皆様の御厚志によって忽ちの中に出来上がりました。第一日には向山校の女生徒の方にお願ひしました。皆んな『私ニモ縫ハセテ下サイ』とて順番を取って一針一針真心こめて縫って下さいます有様はほんとうに嬉しく感じました。御国の為だからとて「カヂカンダ手」に力を入れて一生懸命で御座いました。次の日は女学校へおとなりの佐々木の小母様が『宅ノ子供ハ今女学校ニ行ッテ居リマスガ彼ノ子ハ虎年生れですが』『女学校ヘイラッシャレバ皆サンガ嬉ンデ縫ッテ下サイマス』と仰って下さいました。御願ひに参りました処先生も便宜をはかって下さいまして此処でも前日以上に熱心に縫って下さいました。此処には辰年生れや虎年生れのお方が多く「私ハ十七ヨ」と辰年の方が申され、虎年の方は「私ハ十九ヨ」と縫う針の数とりが大変で時ならぬ賑やかさで御座いました。中には『貴女十九モ縫うの』と言われるれば縫わるる御本人は『エエ私五黄ノ虎ト云ッテ一番ヨイノヨ、ソレニ愛国心ハ人一倍デスカラネ』ってとても皆様が心よく縫って下さいました。路傍の方にも少々御願ひしました。けれど大部分はこうした力強い若いお方の手に依って出来上ったのが此の千人縫です。(下線筆者)

この書簡集からは、新聞記事等では分からない千人針へ込められた家族の気持ちが伝わってくる。事例 24・26 のように伊勢神宮や熱田神宮へ参拝し千人針に魂を込めてもらった例や、事例 25 のように父親が日露戦争期に着用したものを送った事例も見られる。事例 27 では、辰年や寅年の女学生が年齢の数だけ縫ってくれたことが分かるが、寅年にのみ「五黄ノ寅」と説明している。続いて同時期の雑誌に掲載された随筆の一部に千人針の記述がある。

**事例 28)** 昭和 7 年 (1932) 4 月、寺田寅彦「千人針」(『セルパン』)<sup>(1)</sup>

この頃では到る処の街頭で千人針の寄進が行われている。これは男子には関係のないだけに、街頭は街頭でも、何となくしめやかにしとやかに行われている。(中略) そうした事柄が如何にも純粹に日本的だという気がするのである。迷信だと云ってけなす人もあるが、たとえ迷信だとしてもこれらはよほどたちのいい迷信である。(中略) 千人針にもついでに五銭白銅を縫付け「しせんを越える」というおまじないにする人もあるという話である。(下線筆者)

千人針風景が定着した様子を垣間見られる寺田寅彦の文章である。この中で「五銭白銅を縫付け「しせんを越える」という俗信が取りあげられているが、この俗信は、「死線(四銭)を越える」ために五銭硬貨を、「苦戦(九銭)をまぬがれる」という意味で十銭硬貨を縫い付けるという意味であり、日中戦争以降、五銭と十銭合わせて十五=銃後の守りとセットで語られることが多い。満州事変の頃にはまだ「苦戦(九銭)を免れる」という表現は見られない。「銃後」という戦時用語が定着していない時期であると考えられ、「死線(四銭)を越える」という俗信が先行していたと考えられる。

満州事変の千人針習俗を概観するように、風俗史、及び有職故実研究で著名な江馬務が『風俗史研究』143号(昭和7年4月1日、風俗研究所発行)に「千人針のおこり」という文章を掲載している。前半では千人針習俗の起源について記し、それに続いて、当時の千人針習俗の特徴についてまとめている。

千針は戦死に通ずるといふので、近ごろ九百九十九、千一、千三針が用ひられるやうで、これは日本人の三とか九の奇数好みから来てゐるのでせう、糸も四子糸は、四が死に通ずるので嫌はれ、三子が神子に通ずるので喜ばれますがこれは徳川時代にはなかつたことです、糸の色はただ今緑を用ひてゐるが、昔は緑のほか青などいろいろの色を用ひました、近來勝色(藍)が縁起がよいので好まれます、糸を切るのは齒か手かいづれかがよいので、刀を忌むところから切れ物では切らぬことになつてゐます、また五黄の寅は強いので、今年は十九歳の女に縫つてもらうのが一番よいといはれ、しかも月経のある時が精がついてゐる意味から特によいといはれてゐます、<sup>(2)</sup>

必ずしも千針縫うわけでは無かつたこと、糸も緑、青、藍色と決して赤色が普通では無かつたことが分かる。大間知篤三や岩田重則が千人針の特徴として赤い糸から赤のフォークロアを論じているが、この時期には必ずしも赤に限ってはいないことから、赤のフォークロアを千人針習俗に当てはめて論じるには無理があることが分かる。

満州事変から2年後、昭和9年の『つはもの叢書(8) 兵士と母』<sup>(3)</sup>に「条理を尽くした息子の手紙と健気な母親」と題した文章が寄せられている。

---

(1) 『寺田寅彦全集 第七巻』岩波書店、平成9年(1997)

(2) 江馬務「千人針のおこり」『風俗史研究』143号、風俗研究所、昭和7年4月1日、p.11。

(3) 陸軍省つはもの編集部編『つはもの叢書(8) 兵士と母』つはもの発行所、昭和9年4月25日、pp.78-80。

## 事例 29)

「女千人の手で一針ずつ縫い合した腹帯をしめて居れば、戦場に出ても鉄砲の弾丸にあたらない」昔からそんな風に言い伝えている。殊に老人達はそれを信じているらしい。

滋賀県蒲生郡神崎地方には、小学校補習科の女生徒や、高等女学校の生徒達の手を煩わして、此の千人縫いの腹帯を作っている母親達がめつきりふえた。

蒲生郡桐原村大字池田の青山きぬさんも、その母親の一人である。昨年の冬、朝鮮龍山の歩兵第七十九連隊に入営して、事変と共に満州に出動した、きぬさんの三男、正二君（二三）に、千人縫の弾丸よけ腹帯を送りたいのであった。子を思う親の心は誰しも皆変わりはない。

きぬさんは、この程来、同村小学校補習科の先生や、八幡高等女学校の生徒達、さては、街路に行き交う婦人達に願って、一針又一針と、腹帯の千人縫を急いでいたが、或る日のこと、何を思ったのか、突然腹帯を作ることを止めてしまった。村人達が不思議に思ったのは勿論である。がこれには深い事情があった。母親からの手紙で、腹帯のことを知った正二君から左のような返事があった。

「あふれる母の愛情は、涙を流して有難くお受け致しますが、畏れ多いことながら、私既に一命を 天皇陛下に捧げた身体です。此処満州で、鉄砲の弾丸にあたって死ぬのは皇国のためではありませんか、名誉の戦死ではありませんか。

お母さん、私は生きて帰ろうなどとは少しも考えては居ません。どうか、そんな古い迷信など捨てられて、腹帯の千人縫いは思い止まって下さい。」

此の正二君の決心が、母親の心を動かしたのである。

始めてその事情を知った村人達は、正二君の見上げた志、母親の覚悟に非常に感動した。そして、今迄血眼になって千人縫いを作っていた人々も、迷信からさめて、千人縫腹帯を送ることを思い止まった母親達も少なくないと云うことである。

『つはもの叢書（8） 兵士と母』は陸軍が編纂した刊行物だけに、兵士としての理想を紹介している。この時代における、送る側と送られる側の千人針習俗にたいする意識の違い、あるいは個々人の中での千人針習俗に対するジレンマを実に象徴的に表している文章であろう。ちなみにこのエピソードは、昭和 12 年 11 月に刊行される小野清秀著『国家総動員』で取りあげられる<sup>(1)</sup>。前の戦争での千人針習俗の流行が次の戦争での流行の参考となる例である。

---

(1) 小野清秀『国家総動員』国風社、昭和 12 年、pp.220-222。

## 第5節 日露戦争・満州事変の千人針習俗の特徴

ここまで紹介してきた**事例1～29**を項目ごとに整理したのが、表1-1「日露戦争・満州事変の千人針習俗に関する事例分析」である。以下、「年代・地域」「名称」「依頼者」「被依頼者」「糸色・布・用途」「理解・評価」の6項目に分けて分析を加えていくこととする。

### 1、年代・地域

日露戦争期には、明治37年(1904)4月頃に関西方面で流行し、同年6・7月頃には関東でも流行するようになった。その他、神戸・広島・徳島などで行われていた。その後、日露戦争を回想する形で、千人結・千人縫などの事例が紹介されるが、次に事例として現れるのが、満州事変、それに続く上海事変の時期である。満州事変期には、昭和6年(1931)11・12月頃に新潟・千葉・東京の記事が見られ、昭和7年(1932)2月頃には、高岡市・呉市・東京市・岡山市・奈良県の例もあり広範な地域に広がっていた。

### 2、名称

名称について、日露戦争から満州事変において記録に表れる呼称を古いものから順にみると、おおよそ「千人力」「千人結」「千人縫」「千人針」という推移が見て取れる。

**事例3**の明治37年4月29日付『都新聞』の「千人力」の記事には、「『千人力』といふ唄」ができるほど大流行したとあり、「千人力」という呼称がある程度の知名度を獲得していたと考えられよう。「千人力」という名称については、大江志乃夫が日露戦争期の徳島県の事例を報告している<sup>(1)</sup>。明治37年5月20日付『滑稽新聞』の「千人結」の記事との時期が近いことから、二つの名称が併存していた可能性は高いと考えられよう。

「千人力」という名称について検討する。千人力には、『広辞苑』によると「千人分の力」と「千人の助力を得た程の強いたよりになる力」の二つの意味がある。ここに弾丸除けのお守りとしての固有名詞の「千人力」が加わると、文脈上、どの意味かを判別するのが困難となる。そのために、新聞や雑誌などでは「千人結」が選択されたと考えられないだろうか。

「千人結」の名称については、日露戦争期代の千人針習俗では、針と糸で縫う形態と平行して、靖國神社の事例(写真1-2・3・4)のように針と糸で糸玉を作るのではなく、あらかじめ切りそろえられた複数の糸の束を手で結ぶ形態がある。「千人結」という名称は、その結ぶという行為から「千人力」の別称として使われるようになったという可能性を指摘しておく。

日露戦争期に『滑稽新聞』『風俗画報』において「千人結」、さらに大正2年(1913)1月刊行の櫻井忠温著『銃後』に「千人結び」として紹介され、こうした出版物を元に日露戦争期の習俗が「千人結」として定着することとなる。

ちなみに「千人針」に先行して登場する「千人縫」という名称は、**事例10・14・26・27**

---

(1) 大江志乃夫「“徴兵除け”の神から千人針まで」『季刊 科学と思想』第39号、新日本出版社、昭和56年(1981)、p.524。

・29の6例が見られ、千人針とともに日中戦争においても多く聞かれる。「千人結び」と「千人針」を「縫う」という行為がその二つをつないでいると言えよう

本稿で取り上げた文献には主に「千人結」「千人縫」「千本針」「千人針」の名称しか現れていないが、実際には地域的なバリエーションがあったようである。高崎正秀が次のように紹介している。

上海事変当時、出征中の第三師団管下に奉職時の調査。尾張から美濃にかけて「千結び」、伊勢の松坂で「千人結び」、新潟で「千人針」、東北地方では「千縫い」「千人縫い」という報告があった。<sup>(1)</sup>

昭和7年1月～3月に起こった上海事変当時には、愛知県から岐阜県にかけて「千結び」、三重県で「千人結び」、新潟県で「千人針」、東北地方では「千縫い」「千人縫い」という地域的なバリエーションがあったことが分かる。こうした地域的なバリエーションがある一方で、千人針習俗を総称する名称が選択され、定着していく。そのあたりを事典・辞典から見ていくこととする。満州事変後の昭和8年(1933)2月に刊行された『大百科事典』(平凡社)<sup>(2)</sup>には、藤沢衛彦が解説を次のように書いている。

帛を一針づつ千人の手して結び縫えるものを身に纏えば弾丸を避くるといふ迷信。(中略)世界大戦の頃一しきり流行し、昭和七年満州事変後、殊に上海事変当時盛んに各所に行はるるを見た。

とあり、まだ「千人針」の記載はなく、「千人結」という言葉で、すでに当時流行していたことが分かる。昭和8年(1933)11月刊行の中山太郎による『日本民俗学辞典』<sup>(3)</sup>には、

千人結び 日露戦争中『千人結び』と云ふが流行し、千人に結んで貰った小切を出征軍人に贈り、それを懐中して居ると敵弾に中らぬと云ふのであった(奇態流行史)。近くは千人針とて千人に縫って貰ふことが、同じ意味で流行した。

とあり、この時期に「千人結び」から「千人針」という習俗に変わったことが指摘され、中山は一応「同じ意味で流行した」と、慎重な姿勢を見せている。昭和10年(1935)9月に刊行された『国民百科大辞典』(富山房)<sup>(4)</sup>には、「千人結」と「千人針」の両方の項目があり、「千人結」にのみ次のような説明が記されている。

千人結 日露役中行ハレ、千人ノ女性ニ小切ヲ結ンデ貰ヒ出征軍人ニ贈リ、之ヲ肌ニ

---

(1) 高崎正秀「千人針古意(上)」『皇国時報』、皇国時報発行所、昭和12年9月。

(2) 下中彌三郎編『大百科事典』平凡社、昭和8年(1933)。

(3) 中山太郎編『日本民俗学辞典』梧桐書院、昭和8年(1933)。

(4) 富山房国民百科大辞典編纂部編『国民百科大辞典』富山房、昭和10年(1935)。

ツケル者ハ敵弾ニ中ラヌトイフ。近ク満州事変ニハ千人針盛行、之モ恰モ雑巾ノ如ク  
布ヲ千人ノ女性ニ一針宛縫ッテ貰ヒ、前ト同ジカヲ信ジタ。

ここでも「千人結」が日露戦争期に行われ、同様の「千人針」が満州事変で流行したとある。以上のように最終的には日露戦争の「千人結」、満州事変以降の「千人針」へと名称が集約されていったと考えられる。

### 3、依頼者

**事例 1・3** での依頼者が男性兵士である例が重要であろう。弾丸除け祈願のお守りと考えれば、特に依頼者が女性に限定される必要は無かったと理解できよう。その後、千人針習俗が女性の準備するものとして認知されるようになって、依頼するのも女性に集約されて行ったと考えられよう。

### 4、被依頼者

日露戦争期から依頼されるのは女性のみである。しかし、女性の中でも限定的な条件が付いている事例がある。そこには、条件を厳しくするという方向性と条件を緩くするという方向性の2種類がある。

#### A：条件を厳しくする。

作製過程の条件を厳しくすることで、千人針習俗による祈願が達成した場合の弾丸除けの効果を大きくする。**事例 7**「例の寅年生れの四十歳以下の女千人」で、寅年という条件が付けられるが、この段階で「五黄の寅年」の事例はなく、満州事変の**事例 14**「五黄寅年生れの千人の処女」からであることが分かる。また、江馬務は「五黄の寅は強いので、今年十九歳の女に縫ってもらうのが一番よいといはれ、しかも月経のある時が精がついてゐる意味から特によいといはれてゐます」<sup>(1)</sup>と記しており、千人針習俗の効力を増すためにある程度高いハードルを課しているといえよう。

#### B：条件を緩くする

千人分の糸玉を集める作業を容易にするために、ある条件の女性であれば複数の糸玉を縫えるというように条件を緩くする。**事例 27**「虎年の方は『私ハ十九ヨ』と縫う針の数とりが大変」という事例のみで、この時期の資料には日中戦争以降のように寅年の女性は年の数だけ縫えるという表現は見られない。

ここで「五黄の寅」という言葉について検討してみる。「五黄」は九星の暦の一つで、九紫・八白・七赤・六白・五黄・四緑・三碧・二黒・一白と毎年順に付けられているもので、数字の特徴であるいわゆる魔方陣を利用した暦で、基本的には9と12の最小公倍数で、36年に1度回ってくるものである。

九星の暦については、明治15年11月26日付『大阪朝日新聞』の新聞広告で『九星日取便覧』(1冊4銭)、『九星日課一覽』(1冊3銭)が紹介され、民間には普及していたことが分かる。こうした暦はいわゆる「お化け暦」として普及した。「五黄の寅」という言

---

(1) 江馬務「千人針のおこり」『風俗研究』143号、風俗研究所、昭和7年(1932)4月1日。

葉は一部の間では浸透していたと考えられる。五黄の女性は運気が強いとされ、その運にあやかるといふ意味がある。

なお、大正3年(1914)生まれの戸塚静枝さん(東京都中央区人形町)に聞いた話では、「五黄の寅年」だから縫ったのではなく、厄年だったので縫ったとの説明があった。確かに大正3年(1914)生まれの女性は、昭和6年(1931)の段階で、数えて18歳を迎え、前厄にあたっていた。厄払いとして、この年齢の女学生が積極的に千人針を年齢分だけ縫うことを厭わなかった理由の一つであろう。

さらに**事例 21**の女学生の対談を参考にしても、女学校へ千人針を依頼することが増えてくる。普通の女学生がかかれば千人必要なところを、「五黄の寅年」の女学生がかかれば18分の1の手間ですむことになる。こうした作製の簡略化のための条件は、**事例 27**のように寅年だけでなく、辰年も年齢分だけ縫ってもかまわないなどのように、日中戦争以降さまざまな事例が聞かれるようになる。「五黄の寅年」という条件を短期間に多数見つけるのに効果的なのは女学校であったことは容易に考えられ、「五黄の寅年」の俗信と女学校の関係は今後検討すべき課題であろう。

日中戦争以降は寅年の理由として別の説明がなされるようになる。例えば、昭和12年(1937)7月17日付『読売新聞』には、

また最近五黄の寅の女の一針は、特に運が強いとか、普通は一針が原則だが、この歳の女は三十針でも差支ないなどと云っていますが、これは虎は千里行って千里帰るの云いならわしを、千人針に当嵌めたもので、深い根拠は勿論ありません

とあり、「虎は千里行って千里帰る」の説明の事例は、満州事変・上海事変までは見られず、「五黄の寅」という事例が先行しているが、こうしたメディアなどによる再解釈や意味づけにより新しい俗信が生まれたと考えられよう。

## 5、場所

千人結を行っている場所を見ていくと、屋外は**事例 1・2・3・6・7・8・9・11・13**、学校は**事例 4**、家は**事例 5**と、街頭が中心であることが分かる。日露戦争期の段階から屋外の人通りの多いところで行うことから始まっており、例えば地域の神社仏閣など地域の合力祈願がよく行われているような場所で始まったものでないことが分かる。つまり、千人針習俗の始まりの段階から信仰的な意味合いは薄かったことが指摘できよう。もし、地域的な共同祈願をその発生の母体と想定すれば、千人結の場は宗教的な施設が選ばれるのではないか。

## 6、糸・布・俗信の付与

糸の色については、最も多いのが赤色であるが、この他**事例 2・12**のように黒色の例があること、江馬務による「糸の色はただ今緑を用いているが、昔は緑のほか青などいろい



ろの色を用いました」<sup>(1)</sup> という証言から、かならずしも赤い糸が千人針習俗の本質ではないことが分かる。ただ、**事例 5・7** のような赤糸に日中戦争以降集約されていったという説明は可能であろう。それは民俗学による「赤のフオークロア」の解釈よりも、戦時体制の中で使用された「赤誠」などの用語で説明されるべきではないか。

布については、**事例 1・5・6・9・12・16** の白布の例と**事例 2・8** の黄色の例があり、日露戦争期から併存していたことが分かる。そのために白と黄色の布のどちらが先行するかについては今のところ判然としない。

布の形状については、腹巻、胴巻、腹帯など、ほとんどが腹巻に使うくらいの長さを必要としていたことが分かるが、なかには、長尺の晒し木綿や雑巾などの小さな布など形状は様々であった。千人分の結び目を縫おうとすれば、ある程度の面積を必要とするため、小さな面積の雑巾大の事例などは「千人」を「たくさん」の意味で解釈し、千人分の集められていない可能性もあろう。

日中戦争以後、千人針習俗の特徴としてあげられる俗信の付与について検討する。日露戦争期の千人結には、特に俗信の付与が見られない。虎の絵を描くとか、「サムハラ」文字を書き込むという日中戦争以降見られるような特徴はここまでの資料からは見られなかった。

五銭を縫いつける事例は、**事例 28** 「五銭白銅を縫付け『しせんを越える』というおまじないにする人もあるという話」が最も古いことになる。「死線を越えて」の死線と四銭とをかけた言葉であるが、この前提として、「死線を越える」という言葉が普及している必要がある。大正9年(1920)1月号から雑誌『改造』で、賀川豊彦による小説「死線を越えて」が連載され、その後、単行本として出版され、大ベストセラーとなっており、この小説の影響がうかがわれる。

日中戦争以降、四銭(死線)を越えて五銭。九銭(苦戦)を越えて十銭、あわせて十五銭(銃後)であり、銃後の護りとなるとの説明もされるが、このことばの背景には、「銃後」という言葉の定着を前提としている。銃後という言葉は、前述の大正2年(1913)の櫻井忠温著『銃後』が初出とされている。しかし、「銃後戦場の後方。直接戦闘に加わらない一般国民。」(『広辞苑』第六版)の意味で一般に普及するのは、昭和6年(1933)以降と考えられる。『読売新聞』には、昭和6年11月21日の記事から「銃後の奉仕」「銃後の活動」「銃後の女性」「銃後の郷土」「銃後の護り」など銃後という言葉が見え始める。まさに満州事変とともに定着していった言葉であることが分かる。さらに前述の海軍省教育局編集『思想研究資料号外』(昭和7年3月)には、「銃後の力(上海事変に際し伊勢乗員宛激励文集)」という報告書があり、軍部と銃後という言葉に何らかの関わりがあると考えられよう。

## 7、理解・評価

理解度については、**事例 1** 「婦人は大に五月蠅がつて、用事でもなければ成るべく外出しないことにしてあるさうだ。」、**事例 3** 「馬鹿しい迷信」、**事例 4** 「嫌がる者にも教師の命令で之を縫はするより中には泣き出したる女兒もありしやに聞く」、**事例 5** 「誰がそんな事を言出したか良くない洒落だ」というように、明治37年(1904)の記事はどれも迷

---

(1) 江馬務「千人針のおこり」『風俗研究』143号、風俗研究所、昭和7年(1932)4月1日。

信として解され、断る女性がいることや戦地で棄てられた事例が紹介されている。このことは日中戦争以降の千人針との大きな違いである。

しかし、次第に親心や無事を祈る女性の気持ちが語られる言説が増えていく。日露戦争中に、千人の女性たちが一心を籠めたお守りが流行したことが文字化され、日露戦争後に語られることによって全国に知られることとなった。

千人針習俗への思いは、送る人、協力する人、送られる人、傍観者の四者四様の違いがある。戦地での無事を祈るお守りとして、一般の女性千人からの糸玉を集めると、弾丸に当たらずに無事に戦地から戻って来られるという願いを込めた千人針風俗は、母親・妻の純粋な気持ちのあらわれであった。多くの女性は積極的に千人針作製に協力しているようであるが、一部にはまだ、面倒くさがっている女性もいた時代だったようである。しかし、こうした習俗は、一般にとっては迷信の一つでしかなく、傍観者である新聞や雑誌には、千人結を揶揄する記事が目立った。

一方、送られる側である兵士にとっては、国の為、天皇のために命を惜しまない兵士としての気構えが、愛国美談などとともに普及しつつあり、**事例 29** のように送られる側の兵士自らが千人縫を断ることは理屈にあった説明である。さらに、こうした迷信が公に許されていたのは、婦人会などとの合意とともに、軍事上の理由も考えられていたようである。上海事変当時、「千本針の腹巻」と題して、海軍少尉柳沼七郎氏が執筆した文章を、高崎正秀が引用している。<sup>(1)</sup>

寒空の夜更けに千本針の弾丸除けを縫う少女諸君！諸君の真剣な奉仕こそ、千本針を介して皇軍の将士を「死んで帰る」とまで激励し、以て実戦射撃効果を高める、という立派な心理的法則に随う所の見事な国民的行為である。断じて余興的行動でも、自慰的行動でも、迷信的行動でもない。

千本針は一部の将兵個々には無効でも、全軍にとっては甚大な効果がある。多い程よい。鉄鎧の用意には、別に其の職責者がある。「弾丸は物理的法則に随って飛来する」という独断の中にこそ、偉大な迷信が潜在する。

このあと、日中戦争が始まるとともに、千人針は日本中の人々が知ることとなる。

---

(1) 高崎正秀「千人針古意（下）」『皇国時報』第 647 号、皇国時報発行所、昭和 12 年（1937）9 月 11 日。

## 第6節 婦人会の活動と千人針習俗

ここで千人針習俗の普及に一役買ったと思われる存在、婦人会について検討することとする。女性による千人の糸玉を集めるという作業は、街頭に立って、行き交う女性を呼びとめ、千人針習俗についての説明をし、場合によっては女性の年齢や生まれ年を確認して、一針、条件が合えば年齢数だけなど多くの糸玉を縫ってもらうことになる。これを個人で行おうとすると大変な労力であり、日露戦争期には存在していた婦人会の関与が想像できる。本節では、初期段階での千人針習俗への婦人会の関わりについて検証する。

愛国婦人会は、北清事変を契機に明治34年(1901)2月6日、皇族・高級将校婦人などを中心に我が国最初の全国的な軍事援護団体として発足した。そして明治37年(1904)2月に日露戦争が勃発。開戦後の出征軍人送迎回数は、17万9571回、出征軍隊向け寄贈品は555種と活躍した<sup>(1)</sup>。愛国婦人会は上流階級の発想が基準になっているため、募金や慰問品などの寄付のように、金品を中心に協力活動が求められていた。そのようななか、『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』<sup>(2)</sup>には、愛国婦人会と千人針習俗の出会いが劇的に記されている。みすばらしい老婆が息子の出征に対して千人針を縫ってもらうために街頭に立っているところに愛国婦人会の総裁閑院宮妃殿下が現れて、協力をするというエピソードである。「前内務大臣平田東助閣下及び文部大臣小松原英太郎閣下より貞水は教育講談に依りて国家に力を尽せよとの御内命を受け」と教育講談は、文部省との関わりがあったことが伺える。

また、昭和5年(1930)12月、大日本連合婦人会は、文部大臣訓令を契機に家庭教育振興・家庭生活改善を目的に、地位・職業・信仰などに関係なく既婚女性のすべてを網羅した組織として発足する。大日本連合婦人会の「婦人会指導経営資料」という資料の「社会奉仕に関する事項」に「満州事変上海事変ニハ神社ニ於テ皇軍戦捷武運長久ノ祈願ヲナシ且ツ兩度ニ涉リ金二百拾円六拾一銭ノ慰問袋代ト慰問袋五十袋ヲ贈リ本村ヨリ従ノ軍者ニハ千人縫才守並慰問状ヲ送り又其留守宅ヲ慰問セリ」<sup>(3)</sup>と満州事変・上海事変に際して、婦人会の活動に千人針が組み込まれている事例もある。

昭和6年(1931)9月18日、満州事変が開始されると、久しく停滞状態に陥っていた女性の軍事援護活動は急速に活気を取り戻した。この頃から新聞でも「銃後」という言葉が使われるようになる。この後、日中戦争・太平洋戦争を支える銃後という枠組みが、婦人会の展開と軌を一にしていることは偶然では無いだろう。

「銃後」という言葉が巷に広がりつつあるなか、大阪国防婦人会が結成されることとなるがそのきっかけとなったエピソードに千人針が係わっている。昭和7年(1932)7月27日付『関西中央新聞』にその記事は紹介されている<sup>(4)</sup>。

---

(1) 『日本女性運動資料集成 第10巻 戦争』不二出版、平成7年(1995)。

(2) 早川貞水、『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』大江書房、大正4年(1915)。

(3) 『系統婦人会の指導と経営』大日本連合婦人会編、昭和10年(1935)、p.339。

(4) この新聞は、大阪府立図書館にも所蔵されておらず実見していない。『日本女性運動資料集成 第10巻 戦争』不二出版、平成7年(1995)、p.20。

昭和六年九月、満州事変勃発、続いて上海事変だ、世の中は戦争談のるつぼと化した。去る日も来る日も出征だ。子のようにしている甥の井上中尉をもつ安田夫人はじっとしてられなかった。出征軍人の見送りに、また哀れな遺族の慰問に千人針の依頼に、雨の日も風の日も街頭に立った千人針を市場やデパートや郊外電鉄の入口で依頼して歩いた頃は人も知るあの酷寒骨を刺すさ中だった。頼んでも「今手袋をはめていますから・・・」とか「荷物をもっていますから・・・」などと断られることが幾度かあった。その度に冷淡なこれらの同性に興奮を燃やした婦人は最後にすっかり情けなくなつて了つた。(下線筆者)

昭和 7 年 (1932) 3 月に発足した大阪国防婦人会の活動内容は、ほとんど出征兵士への慰問品贈呈と歓送迎に絞られていたが、この会を足がかりに昭和 7 年 (1932) 12 月に大日本国防婦人会が創設された。

昭和 12 年 (1937) 日中戦争開始直後、三女性団体はほとんど同時に、いっせいに軍事援護活動を精力的に展開し始める。昭和 17 年 (1942) にすべての婦人会が大日本婦人会に統合された。<sup>(1)</sup>

このように婦人会の結成と活動の流れを見ていくと、千人針習俗の流行と一致することが分かる。そして日中戦争以降には、明らかに千人針習俗と婦人会の活動は結びついてくるが、この点について川村邦光は次のように説明している<sup>(2)</sup>。

郷党意識は、日中戦争が始まり、竜巻のように一挙に全国を席卷し、皇国ナショナリズムへと発展していった。大日本国防婦人会や愛国婦人会(一九四二年に統合され、大日本婦人会となる)の出征兵士の歓送迎、千人針、慰問袋づくりなどといった、共同活動は、これまでほとんどなかった郷党意識そして国民意識＝皇国ナショナリズムを盛り上げたであろう。とくに大日本国防婦人会は、軍部の支援のもとに、在郷軍人会を動かし、町ぐるみ村ぐるみで結成され、燎原の火のような勢いで広まっていったのである。

しかし、それぞれの婦人会の活動内容をみても、その項目の中に「千人針づくりへの協力」のような記述はまだ見られない。このことは、日中戦争より前には、千人針習俗があくまでも個人レベルの活動であって、神社参拝などと違い、婦人会の活動内容としては明文化されず、婦人会がボランティアでサポートするという姿勢を前提としていたためと考えられないだろうか。婦人会の参加が積極的に行われるようになるのは日中戦争以降となる。この点については第 2 章及び第 4 章でも論じることとする。

---

(1) 『日本女性運動資料集成 第 10 巻 戦争』不二出版、平成 7 年 (1995)。

(2) 川村邦光『〈民俗の知〉の系譜—近代日本の民俗文化』昭和堂、平成 12 年 (2000)。

## 第7節 千人結のはじまり

ここまで日露戦争から満州事変にかけての千人結・千人針の事例をみてきたが、これらの事例の特徴を整理することで、この習俗の始まりについて考察してみたい。

民間の習俗の始まりをたどることは容易ではない。身近な習俗のなかに古い習俗との共通性や類似性を見出すことで、その習俗があたかも古くから連綿と行われてきたと解釈される例が多いが、千人針習俗もこうした作られた伝統の可能性が高い。

ここまでの事例から千人結の特徴を記しておく。

- ・街頭に立つ者は、初期の段階では男性もいたが、後に女性のみになる。
- ・千人、あるいは不特定多数の女性によって縫い玉が付けられる。
- ・糸玉を付けた布を出征兵士に贈る。
- ・戦争から無事帰れるように願い、祈りを込めたお守りである。
- ・街頭や学校など女性の多い場所で行われることが多かった。

こうした要素を検討することで、千人針習俗の始まりを類推することができよう。

千人針習俗のはじまりについて、日中戦争以降は特に、庶民がその習俗を理解するために意味づけされていく側面と、民俗学者や歴史学者、あるいは神道や仏教の宗教者によって説明したことがあたかも通説のように流布する側面が混在している。このような点を腑分けすることで、千人針習俗の始まりについて考察ができると考える。

### I 古代信仰・民間信仰の影響

- ① 旅の安全祈願としての「玉の緒信仰」
- ② 信仰を伴わない合力祈願

### II 歴史的事象の影響

- ③ 戦国時代の出陣にまつわる事例の影響

### III 明治期の社会的背景

- ④ 徴兵忌避から弾丸除け習俗へ
- ⑤ 都市的祈願方法
- ⑥ 愛国美談とともに形成された母親の愛
- ⑦ 募金

まず、「I 古代信仰・民間信仰の影響」について検討する。これまでの民俗学者によって古代信仰から派生しているという説明がなされているが、それが直接に影響していることを証明することは困難である。その類似性からそれぞれの民俗事象の関連性を指摘するにとどまっている。

#### ① 旅の安全祈願としての「玉の緒信仰」

古代において、旅の安全を祈る方法として、玉の緒信仰があげられよう。これについては多くの研究者が触れているが最も詳しく述べているのは高崎正秀であろう。<sup>(1)</sup>

---

(1) 高崎正秀「千人針考」『俳句研究』7巻3号、改造社、昭和15年(1940)3月、p.146。

淡路の 野島が崎の浜風に

妹が結びし紐吹きかへす (『万葉』 卷第 3、251 一人麻呂)

海原を遠く渡りて年経とも

子らが結べる紐解くな ゆめ (『万葉』 卷第 20、4334 一家持)

かうした歌によれば、古くは旅路の安全を祈つて、其の家なる妹が紐を結んで旅行者につけて出立させたことが詠る。即ち玉の緒信仰で、女性の霊なる魂の一部分を紐に結び込めて、之を男の旅衣に結び止めたのであつたらしい。呪力を有する女性にして、始めて解き結び出来る神秘的な紐結びがあつたのである。

紐を結ぶという行為自体が旅の安全を祈願することとなった事例は、「千人結」の「結び」につながる事例と考えられよう。玉の緒信仰は、刺し子を利用した、戦国武将の武具や漁師の労働着ドンザなどとして日本の民俗文化に根付いており、そうしたバリエーションの一つとして千人結も捉えられよう。

## ② 信仰を伴わない合力祈願

不特定多数の女性の協力により完成するという意味では、千人結も千人針も女性による合力祈願である。様々な民俗儀礼にこうした合力祈願は見られ、そうした儀礼が基層文化としてあったことが千人針習俗の始まりにも影響していると考えられる。例えば、瀬川清子が指摘する人生儀礼の事例がある<sup>(1)</sup>。

切れをつぎ合わせる事に対しても、日本の婦人は、特別な信仰を持つてゐた。子供の育ちの悪い家では千人から布切れを貰ひ集めて、それを縫ひ合わせてセンマイゴをつくつて着せるとよいと云つて、三十三軒から小切れを貰ふとか、つぎゞの着物を着せると寿命が長いとか、百反着物、百とこ集めの着物を着せると丈夫に育つ等云つて、余り切れを貰ひ集めて愛児の着物をつくる風がある。それがやがて千人針を生み出したのかも知れない。

こうした親戚知人を通した村落共同体内の合力信仰が底流に有り、不特定多数の女性による千人針習俗を生み出す母体の一つとなつたと考えられよう。

## ③ 戦国時代の出陣にまつわる事例の影響

次に「Ⅱ 歴史的事象の影響」としてあげている歴史的な事象を結びつけて考えられる説明としては、戦国時代の出陣等と出征を重ね合わせて説明されることが多い。この点については、風俗学、有職故実研究の江馬務が「千人針のおこり」と題して、満州事変時の千人針習俗の実態とその起源を昭和 7 年の『風俗研究』143 号には、次のように説明している。<sup>(2)</sup>

---

(1) 瀬川清子『きもの』六人社、昭和 17 年 (1942)、p283。

(2) 江馬務「千人針のおこり」『風俗研究』143 号、風俗研究所発行、昭和 7 年 (1932) 4 月 1 日。

千人針の淵源ともいふべき、二枚三枚重ねた裂れを針で縫ひ腹に巻くことは、古くからあつたもので戦国時代から桃山、江戸時代にかけて、戦争に行く時は必ず下に分厚い肌衣を着たり、鎧の間隙や膝小僧には殊に分厚い糸でさしこにしたものをつけたりしたものです。天文期には鉄砲が入り、貫通を防ぐために今まで皮であつた鎧が鉄製の鎧となつたが、不完全なので饅頭輪とか周輪とか、肩当、脇引などで捕つたり、そのほか膝頭には十王頭、草摺の部分には下散を用ひたものですが、これらはみな裂れを厚く重ねたり綿を入れたりなどして、糸で亀甲形、或ひは十の字形に縫つたのです、裂れの鎧にしても着込にしてもみな亀甲形か十字形かにさしこにしたもので、裂れが石や矢、弾丸の防止に非常な効力のあることは夙に先人が発見してみたことです。平安朝や源平時代には背に垂れた母衣を頭にかぶつて敵前に進んだもので、これを利用したのが布団で、布団のやうな分厚い裂れを小手などにも用ひました、また綿入れの効果は奈良朝にはすでに発見され、綿甲が用ひられました、これがいはゆる千人針として現はれたのは日露戦争の時からで日清戦争の際はまだ現はれてみませんでした。

その後、江馬は、昭和 12 年の「千人針の由来」『風俗研究』207 号では、日清戦争期には文献に出てこないことを指摘している。

又支那との関係険悪、千人針が流行る。これは元来武事と社寺の行事には千の字が多く用いられるからで千人力、千人斬、千刀奪いなどがこれである。それで私はこの種の文献を一通り見たが、一向に千人針は書いていない。唯一つ記憶に存しているのは、出陣には昔から弾丸刀の害を防ぐ為め、綿入の肌着を作り、之を千針綴じるといふことがある。これらあたりから来たことではないかと思う。

「綿入の肌着を作り、之を千針綴じるといふ」この習俗から来ているとの指摘をしている。こうした戦国武将などに由来を求める説明は日中戦争以後も木村重成の逸話のように多く行われた。

これまで民俗学では、類似の民俗事象を挙げ、そのはじまりについて説明してきたが、こうした直結しない間接的な事象と違い、千人針習俗を生み出した、同時代における社会的背景を考慮すべきと考え、「Ⅲ 明治期の社会的背景」という項目を設けた。

#### ④ 徴兵忌避から弾丸除け習俗への変化

第 1 章第 1 節においても触れたように、明治期に入って徴兵制度がしかれるようになると、兵役逃れの習俗が増えたが、明治 16 年（1883）頃からは、積極的に戦争へ参加する気運が高まった。そのようななか、残された妻や母による弾丸除け信仰が流行するようになった<sup>(1)</sup>。弾丸除けとして様々な習俗や俗信が行われ、そのバリエーションの一つと

---

(1) くじ逃れについては、大江志乃夫『徴兵制』（岩波新書、昭和 56 年（1981））や岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』（前掲）など様々な研究がある。

して千人針習俗が行われるようになったと考えられる。

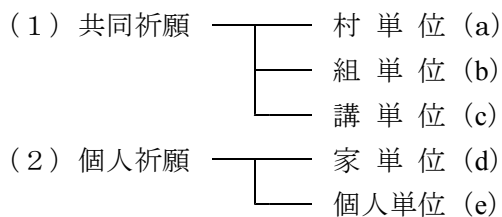
#### ⑤ 都市的合力祈願方法

この点については、千葉徳爾が、『民俗学のこころ』で「戦争と民俗」として千人針について触れている<sup>(1)</sup>。前述の山田良隆『民間伝承』の報告<sup>(2)</sup>をもとに、

多数が力を合わせることで特定個人の生命力を延長することに作用しようとする呪術が、ムラの民俗から発生しつつ、国家活動としての戦争にまで応用されてゆく形を認めることができるでしょう。しかし、その形に本来のムラ共同体の姿の残るところでは、やはりムラで形成された協力の意識を残して、大勢の力をかりて個人に勢力をつけ加えるという意味が考えられるのです。ところが都市の相互に顔を見知らない群衆の中に入ると、その意識が次第に変わってゆくことに山田氏は注目しています。

(中略) ムラ共同体の仲間意識による協力方式は、『山村生活の研究』など、当時の全国的資料によっても関東から九州まで各地にみられ、それが仲間意識の拡大としての国家と結びついたのが千人針であったといえそうです。

と共同祈願の意識が国家と結びついたところに千人針習俗があるとその関係性を指摘している。おそらくこの考え方は、日中戦争以降の千人針習俗について言及したもので、この指摘を日露戦争の千人結と日中戦争の千人針との対比で検討できると考える。宮田登は、祈願について、共同祈願と個人祈願の関係性を次のように整理している<sup>(3)</sup>。



民間信仰の中の祈願の性格の構造として、(a)～(d)は村落社会において、(e)は都市社会において濃厚に表出するとしている。日露戦争における千人結では、まだ世間の理解が得られておらず、個人の努力によって千人結を完成せざるを得なかった。さらにハードルの高い条件を付けてそれを完成させるこの段階では、都市的個人祈願であった。それが日中戦争以降、千人針が全国的に認知され協力することが前提となると、国家と結びついたところで行われる不特定多数による共同祈願へと変化したと考えられないだろうか。

不特定多数の女性千人に、あるいは更に様々な条件の付いた女性千人を探し出し糸玉をお願いするなどの作業を可能とするには、まず絶対的に女性の数が必要である。日露戦争に行われた千人結においても具体的に数字としての千人の女性の協力が前提の習俗であっ

---

(1) 千葉徳爾『民俗学のこころ』、弘文堂、昭和53年(1978)、pp.124-126。

(2) 「千人結び」(神戸 山田良隆)『民間伝承』第2巻第12号、民間伝承の会、昭和12年(1937)8月20日発行、p.2。

(3) 宮田登『宮田登日本を語る4 俗信の世界』吉川弘文館、平成18年(2006)、p.14。



た。その意味でも都市部を中心に始まった流行と考えられるであろう。

都市社会において、夫や息子の無事を祈るという個人祈願から不特定多数の女性の力を合わせることによって叶えられるという千人結が発生した。いわば「個人による都市的合力祈願」と言えよう。千人結が日露戦争期には個人祈願の色合いが強かったのに対して、日中戦争以降は国家意識が強くなるという、非常に危ういバランスのなかに千人針は存在していた。

#### ⑥ 愛国美談とともに形成された母親の愛

戦地へ見送る女性の心持ちとして、戦争への嫌悪へ向かうのでは無く、天皇のために死ぬことが名誉だという考えのもと、「一太郎やあい」などの愛国美談が語られるようになっていた。そのような時代に千人針習俗が無事に帰ってきてほしいという気持ちを示す物として必要とされたと考えられないか。

これまで民俗学の「赤のフォークロア」「妹の力」「女のフォークロア」などの視点で分析されることが多かったが、日清戦争以降の愛国美談は、そうした視点とは違った男女の関係性が確立されていった。つまり母と息子の関係性が強調される時代に千人結が生まれてきたのである。

#### ⑦ 募金

日露戦争前から愛国婦人会は成立し、恤兵募金として盛んに現金の募金が行われていた。愛国婦人会などは、その社会的地位もあり、現金や慰問用品を集め、戦地へと大量の物資を送っていた。そうしたなか千人結は募金の代わりとしてお金のかからない出征兵士を送る母や妻への金品を不要とした協力として生まれたのではないか。

日清戦争の銃後は、上記の軍事援護組織の活動のほか、献金・献納の地域的組織者として赤十字の役割が大きく、そのほか、同世代の出征者を援護すべく青年集団の一部が戦争熱喚起に動き、学校生徒の一部が軍事関連行事に動員され、宗教者は戦勝祈願に動き、経営を刷新して新発足しつつあった地域ジャーナリズムが戦争熱形成に一役買った。従来地域の軍事援護（徴兵援護）とは関係が薄かったこれらの諸組織が銃後の送別、献金・献納、停車駅構内での宿軍、戦勝祈願など、その後の銃後の基本形となる援護行動を形成していったのである。<sup>(1)</sup>

献金・献納に対する活動として様々な援護活動が生まれていったが、その一つとして、現金や慰問用品の代替行為として、千人針の一針が機能したと考えられる。また、街頭に立って千人針を乞う千人針風景と街頭に立って募金を呼びかける街頭募金の共通性については、容易に関連性を指摘しうるが、その前後関係については今後検証が必要であろう。

この他、裁縫が誰にでも可能となる女性への裁縫技術の普及など様々な状況のもと、千人結は、生まれてきたと考えられる。以上、ここまでの千人針習俗の始まりについて整理

---

(1) 荒川章二『シリーズ 日本近代からの問い 軍隊と地域』青木書店、平成13年(2001)、pp.294-295。

すると表 1-2 明治期までの千人針習俗の文化的背景に表される。

表 1-2 明治期までの千人針習俗の文化的背景

古代	戦国時代	明治期以降	日露戦争の頃	満州事変の頃
玉の緒信仰 合力祈願	戦国時代の出陣	徴兵忌避から弾丸除け習俗へ 都市的合力祈願方法 愛国美談 募金	千人結の登場	千人針への変化

## 小括

本章の最終節第7節においては、本章を振り返るかたちで、千人結の始まりについて考察した。千人針習俗が生まれてきた背景には、古代から行われていた旅の安全祈願としての「玉の緒信仰」、歴史的事象の影響として戦国時代の出陣にまつわる装備といった具体的に類似の習俗が存在している。更に、明治期の社会的背景として、徴兵忌避から弾丸除け習俗へ、そして千人針習俗へという変容、個人による都市的合力祈願への変容、愛国美談とともに形成された母の愛の強調、街頭という場の発生、募金や慰問品の代替としての一針、などといった要素が千人針習俗を生み出した背景と考えられる。

第1節においては、日露戦争前の弾丸除け信仰や千人針習俗について検討した。西南戦争の頃から弾丸除けのお守りは見られ、その後も様々な弾丸除け信仰が行われていた。千人針習俗については、日清戦争の頃に始まったと考えられるが、それを証明する確たる資料は見当たらない。管見の及ぶ限りでは千人針習俗の記録は日露戦争からである。

第2節においては、日露戦争期に千人針習俗について記録された新聞などの記録について検討した。日露戦争期には、明治37年(1904)4月頃に関西方面で流行し、同年6・7月頃には関東でも流行するようになった。その他、神戸・広島・徳島などで行われていた。当初「千人力」と記録されていた千人針習俗は、「千人結」という名称に集約されていった。

第3節においては、日露戦争を回想する形で発表された新聞雑誌などの記事、小説、講談などの資料について検討を加えた。櫻井忠温著『銃後』をはじめとした記録によって日露戦争期の戦地で見た千人結のことが記され、それを元に全国的に知られるようになった。また、『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』が刊行された大正初年頃から、千人針という名称が使われるようになる。

第4節においては、満州事変の頃の時期に記録された資料について検討を加えた。満州事変期には、昭和6年(1931)11・12月頃に新潟・千葉・東京の記事が見られ、昭和7年(1932)2月頃には、高岡市・呉市・東京市・岡山市・奈良県の例もあり広範な地域に広がっていたことが分かる。

第5節においては、日露戦争及び満州事変期に見られた資料をもとに、この時期の千人針習俗についてその特徴を「年代・地域」「名称」「依頼者」「被依頼者」「場所」「糸・布・俗信の付与」「理解・評価」という項目を立てて検討した。

名称に関しては、おおよそ「千人力」→「千人結」→「千人縫」→「千人針」という推移が見られる。千人力については、「千人分の力」と「千人の助力を得た程の強いたよりになる力」の二つの意味の使い分けが難しくなったためか、新聞や雑誌などでは「千人結」という名称が採用されるようになったことを確認した。「千人結」という名称について、あらかじめ切りそろえられた複数の糸の束を手で結ぶところから「千人結」と呼ばれた可能性を指摘した。

日露戦争期の新聞記事では、依頼するのは、特に女性に限定される必要はなく、軍人自ら女性に依頼した例もあった。一針を依頼されるのは女性のみである。ただ、そこに付される条件には、作製過程の条件を厳しく設定し、弾丸除けの効果をより大きくするための

ねらいもあった。一方、日中戦争以降は、年齢の数だけ複数の糸玉を縫えるといった作業を容易にするためのものの2種類があったことを指摘した。

糸の色については、日露戦争期には黒色の例があることから、必ずしも赤色が千人針習俗の特徴とは言えない。千人針を赤色の呪力だけから説明することは難しいことを指摘した。布については、白布の例と黄色の例が日露戦争期から併存していたことが分かる。布の形状については、ほとんどが腹巻に使うくらいの長さを必要としていたが、なかには、長尺の晒し木綿や雑巾などの小さな布の事例もみられる。千人針習俗にまつわる俗信について、五銭玉を縫いつける事例は、昭和7年(1932)4月の寺田寅彦の記述が管見の所、最も古い。この俗信の登場については、大正9年(1920)1月号から雑誌『改造』で連載された賀川豊彦による小説「死線を越えて」の影響を指摘した。

新聞記事での理解については、明治37年(1904)の記事ではいずれも迷信として解され、断る女性がいることや戦地で棄てられた事例が紹介されている。その後、次第に親心や無事を祈る女性の気持ちが語られる言説が増えていく。

第6節においては、婦人会と千人針習俗についての関わりについて検討した。それぞれの婦人会の活動内容をみても、その項目の中に「千人針づくりへの協力」のような記述は見られなかったが、このことは、日中戦争より前には、千人針習俗はあくまでも個人レベルの活動としての性格が強く、神社参拝などと違い、婦人会の活動内容としては明文化されず、婦人会がボランティアでサポートするという姿勢を前提としていたためと指摘した。

本章では、日露戦争から満州事変頃までの千人針習俗について資料を整理し、分析を加えてきた。これまでの千人針研究では見えていなかった千人針習俗の変遷の一端を捉えることができた。ここまでの時期の千人針習俗がこの後の日中戦争での全国的な流行にどのように引き継がれていくのかを次章で検討する。

## 第2章 千人針の全国的展開とその終焉

### 第1節 日中戦争と全国的広がり

#### 第1項 日中戦争開戦時の千人針

満州事変が落ち着いた後でも満州との軍人などの行き来は継続していた。職業軍人は、異動という形で各地へ配属され、志願兵も定期的に補充されていた。外地へ行く者にとっては、戦闘が行われていないとしても、戦争勃発の火種はくすぶっている状態であった。昭和11年7月の『日本婦人』（第29号）には次のような記述がある。

**事例1)** 広島県支部では、第五師団管下の一部が北支警備の為渡支するに当り、厳島神社御守四百六十体を派遣各将兵に贈呈、又同地四高女愛国子女団員三千六百による精神をこめた千人縫腹巻一枚宛を贈呈した。<sup>(1)</sup>（下線筆者）

厳島神社のお守りを460体渡したということは460名の将兵に、3600名の愛国子女団員によって作製された千人縫腹巻を一枚ずつ贈呈したということであろう。さらに昭和11年11月1日付『東京朝日新聞』では千人針行脚が始まったことが記されている。

**事例2)** 昭和11年（1936）11月1日付『東京朝日新聞』夕刊

「千人針行脚へ けさ先づ王子駅前に立った 若い一女性の赤誠」

三十一日朝省線王子駅前に立った盛装のうら若い一女性が路ゆく婦人を呼びとめては手にもつた萌葱色の木綿に赤い糸を一針ずつ縫ひつけて貰つてみた

一目でわかる千人針の念願だ、大きな荷物を抱へた老婆が通れば自分でその荷物を持ち換へてやつたり、幼児づれの婦人が通れば子供をあやしながら誠意の一針を頼むなどつましいこの女性の態度が人目をひいた、名を訊いても首を振つて語らぬ彼女は 唯満州の兵隊さんに差し上げたいのです、戦死の報道を知る度に胸がいつばいになりますので・・・と多くを語らず

この日をスタートに市内のデパートや駅前を巡つて十枚の千人針行脚に立つのだといふ（下線筆者）

日中戦争開戦前であり、出征する身内の為の千人針ではなく、満州に残る兵士へ贈る千人針であることが分かる。

**事例3)** 昭和12年（1937）3月20日付『東京朝日新聞』

福島県湯本町県社温泉神社で「神風」成功祈願をした、同町青年団、愛国婦人会、小学生、各種団体、石川町長等代表として後藤静夫、飯淵繁三郎両氏は十九日朝来社、

---

(1) 『日本婦人』第29号、日本婦人編集部、昭和11年（1936）7月、p.27。

神符、激励文、千人針、腹巻を両飛行士に贈り激励の辞を伝へた

日中戦争開戦前の記事であるが、戦勝祈願の後に、「神符、激励文、千人針、腹巻」を贈っている。

昭和 12 年（1937）7 月 7 日に盧溝橋事件が発生し、日中戦争が始まるが、千人針の記事は、管見の所、少し遅れた 7 月 14 日以降に登場することとなる。この経緯について藤井秀俊の説明を以下に要約する。<sup>(1)</sup>

7 月 11 日の夕刊（13 日付）は「一部部隊に召集下令」（『中国新聞』）と報じたが、13 日には治安当局から記事差止の通牒「今回ノ事変ニ関スル動員派兵等ニ関スル件」（差止 32 号）が出されたため、その続報は出なかった。戦時動員が下令され、多くの在郷軍人に臨時召集令状が伝達された。『中国新聞』では 14 日に「愛国婦人会支部長より県下高等女学校、愛国子女団に対し一週間の期限で千人針の調製を依頼」という報道があり、動員までに 1 万 4000 枚を確保とある。兵士の召集状況の記事が差し止められたために、出征に関する記事が遅れたことがわかる。以上が藤井の開戦当時の状況についての説明である。

以下、全国各地の新聞の千人針に関する日中戦争開戦当時の記事を通して千人針風景を見ていくこととする。

#### 事例 4）昭和 12 年（1937）7 月 14 日付『神戸新聞』（2）

「早くも千人針」「各神社へ皇軍の武運を祈る群れ」「街頭に描く非常時局」

北支の風雲いよいよ急を告げる時港都神戸の守護神湊川神社はじめ生田、長田神社に参詣、北支の戦野に活躍する勇士の武運長久を祈願してゆく人々が事変勃発以来、日を逐うて多くなり十三日など早朝そば降る雨天にもかかわらず楠社には参詣人引きも切らず、又市内各所には早くも兵隊さん達の弾除けになる千人針の胴巻きを持出し道ゆく人々に心の籠った一と針ひと針を縫ってもらつてゐる美しい軍国風景も展開しはじめた（下線筆者）

神戸市内の各所で千人針風景が見られ、新聞では「美しい軍国風景」と好意的に表現されている。

#### 事例 5）昭和 12 年（1937）7 月 15 日付『京都日日新聞』（7）

（前略、筆者）愛国女学校として名を知られてゐる洛西春日町の洛陽高等技芸女学校生徒は“戦地の兵隊さん安かれ”と祈る乙女心の優しさから三々五々と打連れて受持の先生も加はり針と糸と布とを持つて放課後炎天下の街頭に立ち“どうぞ一針”と道行く人を捉へては千人針の援助を求めてゐた（下線筆者）

洛陽高等技芸女学校生徒が「千人針の援助」を求めていたとあることから、ここではあくまでも手伝いであったことが分かる。続いて愛媛県の記事からである。

---

(1) 藤井忠俊『在郷軍人会』岩波書店、平成 21 年（2009）、pp.261-263。

**事例 6)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 15 日付『海南新聞』(2)

皇国の興廢は此の一針にあり一とばかり松山でも千人針がそこ此処に見かけられ出した、何と云っても集団的な女学校が一番手取り早いと言ふので二三日来松山高女へは約十人、城北高女でも四五人、済美も四五人その他東雲、松山技芸、専売局等それぞれ千人針が依頼されて来て居る。街頭風景としてはまだ見かけられないが郵便局、工場等でも求められれば喜んで応じる準備をしてゐる (下線筆者)

愛媛県松山市では、街頭での千人針風景が見られるようになる前に、7 月 13、14 日頃から女学校に依頼に来るようになり、他の学校でも行われたことが分かる。続いて神戸の『神戸又新日報』である。

**事例 7)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 16 日付『神戸又新日報』(4)

「千人針にこめる愛国の熱情」「日支の危機に起つ 加古川高女生ら」

北支の危機に非常時気分横溢し銃後の赤誠こめた千人針、各地で非常時気分を示してゐたが県立加古川高女では十五日午前九時全校六百五十余名の生徒が校庭に集合し千人針を行つた、白布をリレー式に廻し愛国の熱情をこめて約三時間を時間を経て一巡したが、残り三百九十針を夫々街道に飛び出してこれを完成させるが両日後、全部を取纏め加古川憲兵隊を経てそれぞれ贈ることゝなつた。なほ千人針を求める婦女子の姿は昨今一時に増加し加古川駅待合所町内辻々で愛国気分をあふつてゐる (下線筆者)

加古川高等女学校では 7 月 15 日 9 時から校庭に集合し、約 350 名の生徒がリレー方式で千人針を 3 時間かけて作製し、足りない分を街頭で補つたことが分かる。次は京都の『京都日出新聞』である。

**事例 8)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 16 日付『京都日出新聞』

「“千人”何のその“万人針”!」「きのふ街頭に描く戦時風景」

いまにも天の一角崩れるか? 来るかサアツと一雨、風吹き天曇る昨十五日の午後三時頃マルブツ前で道行く人に千人針の一針々々を頼む三人連れ“私の孫が・・・”と腰の曲がった老婆“うちのも・・・”“私は二人とも・・・”と子に孫に贈る心からの餞けだ、立派に尽せよ国の為散れば護国の鬼となれと祈る親心、道行く子供抱へた婦人が不自由な手付きで、カバン抱へた児童が、ハイヒールの颯爽ガールが、又“どれどれ私も・・・”と袂から眼鏡とり出すおばあさん、彼女らの胸にも非常時日本の血は脈々と躍る、戦ひの怒和に起つても立たぬも国を思ふ心に変りはない祈るはたゞ第一線に国を拠つて立つ勇士の健闘だけだ、一針々々に無言の祈りを籠めて縫ひ続けて行く“千人針”一どうぞ御無事で一贈らるゝ勇士よ頑張つて呉れ! 彼女らの心のこもつた“千人針”を身に着けて一

7 月 15 日午後 3 時頃からマルブツ (丸物百貨店) 前に多くの千人針をお願いする人々の姿が見られた。次は宮崎県の宮崎神宮前での様子が『宮崎新聞』に記されている。

**事例 9)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 18 日付夕刊『宮崎新聞』

「神武の原頭に 愛国千人針 在支将兵に贈らる」

「銃後の護りは私達の腕で」と甲斐々々しく叫んで起つた国防婦人会宮崎支部福島支部長ほか会員五百名は十七日午前七時四十分宮崎神宮へ集合午前八時から社頭で心からなる北支駐屯軍将兵の武運長久を祈つたがさらにそれと同時に神宮第一鳥居脇で千人縫を行つて非常時の国の婦人の意気をみせてゐる、早朝からの人々で一人々々による厚い愛国心に千人縫の完成も近いがこれは総て直ちに在支将兵へ送るのである。  
(下線筆者)

**事例 4** では、7 月 14 日に「早くも千人針」として千人針が紹介されている。**事例 5** では、女学生が教員とともに街頭に立っている。**事例 6** は、愛媛県の新聞であるが、千人針の会場として各女学校が選ばれていることが分かる。**事例 7** では、女学校の校庭で千人針をリレー形式で全校生徒 650 人余で行い、残りを街頭で実施し、後に憲兵隊経由で贈つたとある。**事例 8** では、3 人の女性が街頭で千人針を頼む様子が描かれている。**事例 9** では、国防婦人会の活動として、神社での武運長久祈願と千人縫作りがセットとなっており、出来上がった千人針は戦地の将兵に贈られたことが分かる。

以上の記事のように、14 日から 18 日までの短い期間に、全国各地で一斉に千人針風景が見られ、そして、千人針を役に立たない俗信などと揶揄する記事が見当たらないことは、満州事変期の記事と大きな違いであろう。また、外地である朝鮮半島でもでも 7 月 15 日にすでに千人針風景が記事として紹介されている。

**事例 10)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 15 日付『大阪朝日新聞 (南鮮版)』

「全半島に描く非常事風景 神社参拝に千人針に沸る朝鮮同胞の至誠」

北支事変の衝撃が伝わるや朝鮮神宮、京城神社をはじめ主要地各神社は武運長久を祈願する人々が早朝から深夜に至るまでひっきりなしに続いている、日本人の血が爆発して大和魂が今こそ躍動して来たのだ、しかも半島の誇りとして感激を呼起すのは武運長久を祈る人々が単に内地人だけでなく朝鮮人も内地人もまげず多いということである／満州事変を契機として日本意識に目覚めた朝鮮人が北支事変の衝撃によりさらに強烈なる日本人意識を昂めここに半島全土内鮮一体となって武運長久の国民が行なわれており挙国一致は我半島において最も誇るべき姿となって現われて来たのである／さらに街頭を見よ・・・そこには至るところに千人針風景が描き出されているではないか、京城本町通りをはじめ全鮮主要都市の繁華街には千人針風景が数十数百描き出されてたのは北支駐屯の皇軍の武運長久を祈る愛国人の発露である、ここにも朝鮮婦人達が自から進んで愛国の熱誠をこめた一針が縫い綴ってゆく／このほか国防献金を申出るもの慰問袋を送るもの等々々、半島全土は今や灼熱の空にも似て熱血の愛国心がたぎって来た

日本本土において 7 月 14 ～ 18 日に千人針風景の記事が集中しているが、植民地である南朝鮮においても、武運長久祈願、千人針風景、慰問袋活動が同時に実施されている。その



背景に婦人会などの団体が日中戦争の開戦を受けていっせいに活動を起こしたことなどが考えられる。

次に開戦直後の7月から10月までの千人針に関する『宮崎新聞』の記事を紹介することで、地方における開戦直後の千人針風景を見ていくこととする。**事例 9)**の昭和12年(1937)7月18日付夕刊『宮崎新聞』を皮切りに、**事例 29)**の昭和12年(1937)10月16日付『宮崎新聞』の記事まで、7月から10月までに『宮崎新聞』では20件の記事に千人針について掲載されている。

**事例 11)**昭和12年(1937)7月20日付(夕刊)『宮崎新聞』

「“千人針”の作成に 都高女生が街道進出 道行く人に呼びかく」  
尽忠奉公を誓つて北支に活躍しつゝある吾が皇軍へ贈る銃後大和撫子の真心は澎湃ほうはいとして燃え涙ぐましい迄に皇軍後援の誠を致しつゝあるが、都城高等女学校生徒七百八十名は炎天下の街頭に立ち道行く人々に呼びかけて千人針を作成しつゝあるが、この非常時風景に何れも感激してゐる。(下線筆者)

筆者の調査によっても、当時の都城高等女学校の生徒が、校内でなく、街頭に立って、千人針作りを行っていた話や、流れ作業で作るのはよくないという話が聞かれた(第4章第4節聞き取り⑤参照)。この時期には、街頭に立って、集めるものと考えられていたであろう。ただ、別の地域では、校内で大量に作られた事例もあり、時期や地域によって違いが見られる。

**事例 12)**昭和12年(1937)7月21日付『宮崎新聞』

「銃後の街話 千里を走れ 愛婦支部と宮崎市役所 社中一記者」  
寅歳生れの懐妊婦人が千人針縫へば一騎当千の弾衣となるといふので二十四歳、三十六歳の婦人は全国津々浦々でお針を持たされてゐる。日向路でも宮崎都城両高女生をはじめ女学生。各団体婦人が総動員で千人針や慰問袋づくりに心づくしの愛国風景をえがき出してゐるが、二十日午前十時半炎天下にハイヤーを飛ばして宮崎市役所を訪れた二婦人は揃つて寅歳生れの三十六歳で玄関右脇に移転した学務課室から課員らは『縁起がよい』と、北支事変最悪の事態へ我々独自の行動口の号外入りながら微笑した。(下線筆者)

「寅年生まれの懐妊婦人」という条件は、珍しい事例であるが、地方にはこうしたさまざまな条件が付加され、広がったものと思われる。満州事変で19歳であった五黄の寅年の女性たちはこの年24歳を迎えていた。

**事例 13)**昭和12年(1937)7月21日付(夕刊)『宮崎新聞』

「千人縫を求めて 高女生街頭へ進出 児童等は神宮祈願」  
宮崎第一小学校一年生から六年生まで約一千二百名は二十日午前八時全先生に引率され宮崎神宮へ参拝、在支皇軍兵士の武運長久を祈つた。また宮崎高等小学校生徒千名も同日午前八時半から宮崎神宮へ参拝皇軍兵士の祈願を行つた更に宮崎高等女学校一

年生から四年生専攻科生は二十日街頭の焼きつくやうな陽をうけながら道行く人に千人縫を求め、宮崎市民一同を感激させた。(下線筆者)

「千人縫」という呼称は「千人針」に次ぐ全国的なものである。小学生及び高等小学校生徒が武運長久祈願を行い、女学校一年生から四年生までが千人縫のために街頭に立っている。

**事例 14)**昭和 12 年 (1937) 7 月 22 日付『宮崎新聞』

「延女校生も 千人針 作製に街頭へ」

北支事変は〇〇化してこれら敵前に活躍する我が将兵の激励慰問は各方面より慰問袋献金が委託されつゝあつて延岡市兵事係では愛国民の行為に感激をなしてゐるが、二十一日は延岡高女生が市内各所に立つて道行く人々に呼びかけ、愛国真心の千人針縫を行つたが、北支に活躍の兵士に送ることゝなつた (下線筆者)

街頭で作成した千人針は北支の兵士に別途送つたことから、特定の兵士への千人針ではなく、不特定多数の兵士に送るために女学校で大量に作成したと考えられよう。

**事例 15)**昭和 12 年 (1937) 7 月 23 日付『宮崎新聞』

「銃後の声援高潮 献金二千二十九円六十九銭 都連寄託 (廿二日正午まで) 随所に湧く愛国美談」(中略)

(その六) 都城高等女学校では北支の広野に活躍する戦士に送るため真心をこめて千人針を作成中であつたが一部が出来上がったので二十二日司令部に第回一分を寄託したが戦士達もその熱誠さにいたく感激してゐた (下線筆者)

ここでも作成した千人針は司令部経由で戦地へ送っている。

**事例 16)**昭和 12 年 (1937) 7 月 23 日付 (夕刊)『宮崎新聞』

「あたいも一針と 可愛いゝ小学児童 各所に描く愛国風景」

宮崎高等女学校生徒約三百五十名は数班に分れ一班はやきつくやうな橋通り專線舗道に立つて道ゆく人に千人針の一針を依頼し一班は小学校校門前に帰校の女生徒を捕へて幼い子供達からも赤誠の一針を受けてゐるが一班は製糸工場等の休憩時間を利用して女工さん達に一針づゝを依頼するなど実に愛国の美しさを描き出してゐる(下線筆者)

橋通や小学校校門前、工場などで千人針を受けていた。

**事例 17)**昭和 12 年 (1937) 7 月 23 日付 (夕刊)『宮崎新聞』

「車掌さん 千人針」

宮崎バス会社の車掌さん九十六名は目下仕事の余暇に千人針を行つてゐる、また高鍋高等女学校一年生から四年生まで二十二日同地で街頭で千人針を道行く人に求め、うるはしい愛国風景を描いてゐる (下線筆者)

会社単位でも千人針作成を行っていた。

**事例 18)**昭和 12 年 (1937) 7 月 23 日付 (夕刊)『宮崎新聞』

「勇士の越中を 女学生から贈る 宮崎技芸の全生徒」

宮崎女子高等技芸学校では非常時局に対する国民の熱意に刺激されて毎週の月曜日を節約デーと定め、お小使いを貯めた金で全校生徒三百八十名が白木綿を買ひ、可憐な愛国の情を傾けた千人針入りの禪三百八十枚を作成して北支、北満の第一線将士へ送ることゝなつた、既に十九日より作成を急いでおり二十四日には全部完成するはずであるが完成と同時に都城連隊区司令部に届けられるはず (下線筆者)

「千人針入りの禪」という事例は珍しい。日露戦争の際の事例を宮武外骨が記しているが、詳細は不明であった。<sup>(1)</sup>

**事例 19)**昭和 12 年 (1937) 7 月 24 日付『宮崎新聞』

「染めた国旗 十五枚を献納する明道校児童 愛国の至誠に感激」

皇威宣揚の国民的熱情は今や高潮に達し幾多の感激的なニュースが毎日の如く伝へられてゐるが、都城明道小学校児童達は今回の事変について種々先生から話を聞かされ暴虐なる支那の態度に憤怒を感ずると共に童心にも誠忠の赤心は熾烈に燃え、皇軍へ贈るために日の丸の赤を千人針の赤糸で染め抜いた国旗十五枚を児童の手で作成中であつたが、この程完成したので近く森山校長が此の児童の赤誠を司令部へ届けることになつて居るが職員達も児童の愛国的至情に痛く感激してゐる (下線筆者)

「日の丸の赤を千人針の赤糸で染め抜いた国旗」の事例は把握していたが、小学校で作成されていたことは貴重な事例である。

**事例 20)**昭和 12 年 (1937) 7 月 24 日付『宮崎新聞』(2 頁)

「千人針が 街頭氾濫 富高地方女生」

北支事変と共に富高地方には千人縫ひの群が街頭此処彼処に現はれてゐるが富高実業学校女子部と第一富高校女子生徒が今や全町に氾濫して通行の婦人を捉へて千人縫をなしてゐるが捉へられた婦人は吾先きにと針を取る有様は北支における皇軍の労苦を遙に思ひを馳せて一針を縫ふ愛国の至情には何れも敬虔の口湧然として湧き出づるものがある (富高) (下線筆者)

富高地方 (宮崎県日向市) においても「千人縫い」と呼ばれ、盛んだつた。

**事例 21)**昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日付『宮崎新聞』

「県民極度に緊張して 神宮参拝三万人 御符を受けたものも約千人 街頭に活躍の

---

(1) 『滑稽新聞』第 74 号、滑稽新聞社、明治 37 年 (1904) 6 月 7 日。

女性」

(前略、筆者) また市内街頭通り繁き処には愛国心に燃へたつ女学生が婦人に千人針を求め宮崎駅、花ヶ島駅、大淀構内でもこれ等女学生の雄々しい姿がみうけられ非常時意識が全市にみち溢れてゐるが宮崎技芸女学校全生徒は二十六日越中禰を三百五十枚、千人針三百三十八枚を在支皇軍将士宛に発送、皇軍、将士の志気を高めてゐる。なほ神宮の御符を受けたものも正午までに約千人の多きに達してゐる (下線筆者)

宮崎駅・花ヶ島駅などの駅でも千人針風景が見られた。

**事例 22)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日付『宮崎新聞 (夕)』

「未明から正午までに 五万人の参拝者 しのだく雨中に宮崎神宮へ お賽銭が千円突破!!!」

北支事件勃発と同時に街から津々浦々に至るまで千人針を依頼する人達で非常時の美しい情景を描いてゐるが同時に宮崎神宮における将兵の武運長久を祈願する人達も日について増加し参道は恰も終日蟻の行列の観を呈してゐるが二十八日は土砂降りの雨の中を意ともせず各市町村区民各官庁団体の祈願者が未明からまるで精米機の口から吐きだされる米の如くで正午までにはすでに三万円の参拝者を突破し御守御符が生へた如く八百五十を越へるに至つた。午後は市内在住者よりも郡部からの参拝者が多く児湯郡、東諸県郡方面から子供を背負つて篠付く雨の中に一心に祈願した、参道の両側には女学生、国防婦人会員が参拝者の一人一人を捉へて千人針を依頼してゐたが日没までの参拝者は五万一千人で近来にない記録を作り夕刻までの御守売上げは二千三百枚お賽銭の上り高は千円を越したと謂はれてゐる (下線筆者)

**事例 23)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日付『宮崎新聞 (夕)』

「慰問袋や千人針作成」

宮崎郡佐土原校ではさきに職員・生徒全部佐土原神社に参拝を前に整列して皇城遙拝後戦勝祈願祭を執行し皇軍の武運長久をいのり原田校長の北支事変に関する講話と生徒の執るべき覚悟等につき諄々として訓諭があり茲に生徒等は愛国の至情に駆られ自発的に児童に口しき慰問袋の寄贈をなすものや女子では千人針のやさしき思ひ立ちやそれぞれ赤心こめた小国民の健気な心尽に一般を感激せしめてゐる (下線筆者)

この事例では、あくまでも自発的に思い立ったことが強調されている。

**事例 24)** 昭和 12 年 (1937) 8 月 7 日付『宮崎新聞』

「やさしい手紙に 添へて贈る千人針 出稼ぎ娘の国家愛」

今や日支事変をめぐる銃後の熱誠は最高潮に達せんとしてゐる、このとき又健気な女性が二人あつた、それは今姫路の東洋紡績に働いてゐる西諸県郡須木村出身の女工平田百合子と永井ミサエさんの二人である、去る五日次のやうなやさしい手紙と共に千人針を送り池田村長含め吏員一同を感激せしめてゐる (下線筆者)

個人で作成した千人針を役場に届けた事例である。

**事例 25)**昭和 12 年 (1937) 8 月 7 日付『宮崎新聞』

「女給さんの千人縫」

延岡市カフェー、キリン女給さん達が千人縫六枚を五日市兵事課に託した (下線筆者)

ここでも作成した千人針を役場に届けている。

**事例 26)**昭和 12 年 (1937) 8 月 13 日付『宮崎新聞』

「血染のハンカチと千人針献納 ベ社女工さんの誠心」

北諸県郡庄内町出身現延岡旭ベンベルグ女工して働いてゐる吉田ハツ子さん (二〇) は自分の町から入営者があるとの由を知り、薄給をさいて白木綿一反を買ひ千人針と血染のハンカチ七枚を作成して赤き誠を司令部を通じて献納したが係官も乙女の至情に痛く感激してゐた (下線筆者)

白木綿一反から千人針を作成したことが分かる。血染めのハンカチは全国的に行われた。

**事例 27)**昭和 12 年 (1937) 9 月 23 日付『宮崎新聞』

「延岡高女生の 千人針を貰ふ 銃後の赤誠に感謝」

〇地へ上陸し西南方面の敵と対抗して居りますが、逐次敵兵の姿も消えて行きます。昨日は郡司令部全員の追撃が行はれました。(中略) それから先日水安紡績工場に〇した際、延岡高等女学校からの千人針をいただきました全員腹に締め込んでゐますが銃後の熱誠なる御後援に深く感謝してゐます (上海に活躍する宮崎郡田野村本社支局長安藤栄七氏の通信) (下線筆者)

作成した千人針が実際に戦地の兵士に届けられていた例である。

**事例 28)**昭和 12 年 (1937) 9 月 30 日付『宮崎新聞』

「千人針六枚で 六千人力だ 元気百倍の安藤君」

宮崎郡田野村出身安藤栄七氏は上海方面の戦闘に活躍してゐるが、こまごまと現地の模様を郷里に留守居の妻ハツさんに宛て通信した。

今日は十三かね、日付も忘れるやうな気がする、上陸早々〇名の負傷者を出したが其後皆元気で西南から夜に入るとボツボツ出てくる支那兵と戦つてゐるがやはり大演習のやうな気持で弾が飛んで来るのも平気だ、(中略、筆者) 助役さんの奥さんや鳥山先生、和気さんや皆さんによろしく、千人針六枚を身につけて六千人の力をいたゞいて元気百倍、皇国のために働く (下線筆者)

個人に 6 枚の千人針が送られ、すべてを身につけていたことが分かる。

**事例 29)**昭和 12 年 (1937) 10 月 16 日付『宮崎新聞』

「愛妻の心をこめた千人針・・・敵弾にあつと倒れた 兵士が城内突入 不思議・・・  
奇蹟幸運の勇士 感激して華々しく活躍」

新樂十五日発同盟 去る八日夜の正定攻撃に又も千人針の奇蹟が起つた・・・。我が砲弾の炸裂、紅蓮の焰が夜空を焦がし、神田、猪木両部隊が攻撃を続けてみるとき一名の兵士が二丈余りの城壁に縄梯子をかけて猿の如くかけ上つた。敵弾は、雨、霰あられと飛んで来る。あつと兵士は叫んでどつとなかり城壁上に倒れたが・・・と一瞬にしてむくむくと起上つて城内めがけて飛び込んだ弾丸は右腹部に当つたのであるが何と云ふ奇蹟であらう、弾丸は愛妻が心をこめて仕上げてくれた千人針の糸と糸との間二本を抜いて左腹部に収めてあつた伊勢大神宮の御札が二つに割れてゐる弾丸は更に右袖を抜いてゐるのだが腹部は勿論何処にもかすり傷一つでもできてゐなかつたのだ、この幸運な勇士は神田部隊に配属せられてゐる通信手南條正成君（二六）だ、同君は神戸市湊区東楠町五ノ七十一番で二、三年前結婚した愛妻淑子（二二）さんとさゝやかな愛の巢を営み自動車の運転手をしてゐた今度の事変で遠く征途につくべき召集をうくるや早速淑子さんを伴ひ伊勢大廟に参拝何卒日本男子として戦場で立派な働きが出来ますやうにと心をこめて祈願した、この時神前で淑子さんは心をこめて仕上げた千人針をその場でキリつと腹に巻込み共に神前にぬかづき内宮の御札を有難くいただき八月一日出発征途につき万里の長城を越へて北支を縦横に活躍してゐたが南條君は今更ながら神の加護と愛妻の心つくしによる千人針の奇蹟に感激して第一線に花々しく活躍を続けてゐる（下線筆者）

当時の人々の千人針に対する送る側、送られる側の気持ちが記されている。

以上、昭和 12 年（1937）7 月から 10 月までの千人針に関する記事 20 例を紹介してきたが、このうち事例 9・11～18、20～22、27 の 13 件には女学生が登場してくる。宮崎県においては、日中戦争の開始とともに女学生が街頭に出て千人針作製を手伝ったり、学校でまとめて作ったりして活躍している。以上のようにこの時期の新聞記事を見ることにより、宮崎県における日中戦争開戦当時の千人針の広がりの様子を理解することができよう。

いったん流行が始まると、その流行について反対意見が出てくるのは常であり、このような迷信を信じないよと言ふ意見は少なからずあつたようである。例えば、朝日新聞の一般投稿欄「鉄箒」にこのようなやりとりがなされた。

**事例 30)** 昭和 12 年（1937）7 月 27 日付『東京朝日新聞』、鉄箒「千人針」

◇昨今、新宿駅に下車した人は、そこの広場の一個大隊もあろうかと思われる娘子軍に驚かされたことと思う。それは皆が布と針とを持った千人針の女人軍なのである。

◇この分で行ったら、万一国家総動員とでもいうような際、一人の出征軍人の後ろに少くとも一人の女人が街頭に立って、路行く千人の女人の足を止めることになるであらう。そうなったら、能率の低下、事務の停滞は恐るべきものがないであらうか。◇それも、多少なりとも効果が考えられることならまだしもであるが、一片の迷信に外ならないことのために、皇軍の誇りを傷けたり、昭和日本の文明を疑われたりするよなことがあつてはなるまい。（後略）（鉄川生寄）（下線筆者）

迷信のために人々の生活から無駄な時間を費やさせるのは問題であるとしているが、これに対して反対の意見が続いて掲載されている。

**事例 31)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日付『東京朝日新聞』、鉄箒「千人針礼賛」

◇鉄川生の千人針反対論には賛成し得ない。君は千人針は効果がない、一片の迷信であり、皇軍の誇りを傷つけるものと断じているが、認識不足も甚だしいと思う。◇勿論千人針を持っていたからとて、弾丸が外れるとは限らない。迷信だと簡単に片づけられればそれまでであるが、その精神的に及ぼす影響効果は大きい。(中略) ◇千人針至極結構である。一枚でも多く前線に送って頂きたい。同時にこれら銃後の婦人の赤誠に心から感謝する。(礼賛生寄) (下線筆者)

「千人針至極結構である。一枚でも多く前線に送って頂きたい。同時にこれら銃後の婦人の赤誠に心から感謝する。」という言葉のように、千人針は出征兵士にとって必要なものとして受け入れられていくことになる。こうした千人針についての論争は宗教関係者によっても行われている(この点については、第 2 章第 4 項「浄土真宗における千人針論争」を参照)。

赤松啓介は軍によっても禁止されたことを紹介している。

千人針など弾丸の当らぬマジナイが盛んになって、ある時期に軍が禁止したところもあるようだ。弾丸に当らぬマジナイなど、兵士として不心得千万であり、弾丸に当たって突撃してこそ、忠義を尽して名誉の戦死ができるわけである。タテマエとして戦場へ行く兵士が弾丸に当らぬようにというのでは、指揮官としても困るだろう。(中略) 日支事変に拡大した頃、部隊によって弾丸の当たらぬマジナイ類似のものを一切、禁止したり、また召集兵が持参したのを取上げたり、家へ返送させたのである。<sup>(1)</sup>

この「千人針は迷信である」という意見に対抗するかのようになり、戦地において千人針が奇跡的に弾丸を止めたという報告が、昭和 12 年 10 月 15 日付『大阪時事新報』「奇蹟の“千人針”」「護符を真二つに敵弾喰ひ止む」「神の加護と愛妻の心尽しに涙の感激」などのように新聞に度々掲載された。

日中戦争の開戦とともに千人針風景が全国的に見られるようになり、千人針に関心を持たれるようになると、人々は千人針の由来や始まりについて知りたい欲求が高まってくる。そういった要請に応じて識者が様々な解説を行うようになり、そうした解説が一般に流布していった可能性が高い。

大間知篤三は、昭和 12 年 (1937) 8 月 28 日付『東京日日新聞』に「千人針」と題した記事を寄せている。12 年 (1937) 8 月ということもあり、千人針に対しては、「何か私の心に響いてくるものがあつた」であるとか、「およそ街頭寄進行為としてこれほど厭な気

---

(1) 赤松啓介「村落共同体と性的規範(上)」『季刊 どんめん』36号、JICC出版局、昭和55年(1980)、p.71。

持ちなしに受けとれるものは少ない」などと思入れのある言葉が目立つ。千人針習俗が、古来日本に多かった「合力呪願」であり、「今日では古く村を構成した家々の結合力が弱まり、国民的団結がこれに代って現れ」、「村から国への発展というものが、七や三三の数を千という数にまで発展せずにはおこななかったとも考えられよう」という考察であった。「さまざまの古い伝承が織りこまれているということからでも、やはり古くからの日本のものであったといえる。」と千人針習俗は似たような類例があるので古い習俗であると断定している。

こうした専門家によって解説されるほか、人々の間でも様々な由来について語られるようになる。例えば昭和12年10月に楠木正成夫人久子を顕彰する雑誌『銃後の婦人』には次のような会話が紹介されている。<sup>(1)</sup>

### 事例32) 「対話 千人針」

男「昔ね。木村重成の奥さんが、良人重成の出陣に、黄色い鎧下一鎧の下へ着るやつで、いまお相撲の行司の着ている、あんなものだ。一赤い糸で一針縫いつけて、妻の優しい心づくしを記念にした。スルト、腰元たちが出て来て、奥さんのなすつたとおり、みんな一針ずつ縫った。千人ではないが、まあ十人針くらいだろう。・・・それが千人針の元祖だということだよ。」

(急に厳な調子になる。)

女「スルト、あんまり縁起がよくないのね。重成は討死にしたぢやありませんか。」

男「生きて還るためだとか、弾丸があたらないためだとかいうのは、あとからくっつけたんで、男の出陣に対する女の優しい心づくしを見せたものだ。千人の女の心づくしと言えば大きな力になるからね。日本の女の本職はどこまでもお針一裁縫一にあるのだから、梁川星巖の夫人紅蘭女史のような人さえ、あの立派な画をかくて、落款に、針線余事という印を押しているよ。」(得意気に話し出す。日が暮れかかる。)

木村重成婦人の例を千人針の起源と説明されている。次の事例も同様である。

### 事例33) △千人針情景

このごろの街頭風景の随一は、千人針である。昔、木村重成の妻が、良人(おっと)の最後の出陣に際し、心を籠めた赤い糸の一針をその黄色い鎧下の帷子に縫い付けると、侍女たちもまたそれに倣ったので、重成は女たちの至情を喜んで、勇ましく馬に跨ったというのが、千人針の起原と言えれば起原になるという話を聞いた。<sup>(2)</sup>

千人針の起源について、多く聞かれる木村重成の妻の話は、愛国美談として紹介されることが多いが、そうした逸話の中には管見のところ千人針が描かれることはない。

---

(1) 『銃後の婦人』第1巻第1号、大楠公夫人婦徳顕揚会、昭和12年(1937)10月。

(2) 上司小剣「千人針情景—社会時評—」『文藝春秋』文藝春秋社、昭和12年10月1日、pp.142-144。



## 第2項 統制下の千人針

日中戦争開戦後、昭和12年9月から国民精神総動員が実施された。これは国家総動員計画のうち、精神面の部分が先行して実施されたものであった。

国家総動員計画の完成前に日中戦争が開始された関係上、急遽総動員計画のなかから国家総動員の基底を担う国民意識の統合部分を分離して、政府は1937年（昭和12）9月から国民精神総動員運動を先発させた（中略）そこでは、八紘一宇、挙国一致、堅忍持久などのスローガンのもとに消費節約、貯蓄奨励、勤労奉仕、生活改善が説かれ、国民の自由な私生活を統制して総力を戦争に集中させようとした。さらに言論統制もいっそう強化されて、国民が戦争を批判することはもとより、戦争に少しの疑問を持つこともないよう一切の民主的組織や思想に対する取り締まりが徹底される。<sup>(1)</sup>

昭和12年9月に掲載された戸坂潤「挙国一致体制と国民生活」（『改造』改造社、昭和12年（1937）9月号）には、次のように挙国一致の象徴として千人針が取りあげられている。

**事例 34)** 七八百万円にのぼる国防献金、街頭至る処に所狭いまでに氾濫している千人針婦人、これは生きた事実である。決して空疎な流行でも何でもないだろう。国防献金の可なりの部分は……団体の統制による献金であるが、団体をしてそういう行動を取らせ、又団体のこの行動に団体員が喜んで付和するということは、決してただの模倣などではなくて、或る現実の力の現われだ。——世間には千人針を以て迷信であるとけなす「迷信打破」主義者も少なくない。千人針は迷信だから宜しく某々神社のお札に代えよ、という意見さえ見たことがある。千人針が迷信であってお札が迷信でないというのは少し妙だと思うが、実はどちらも単なる所謂「迷信」ではあるまい。仮に之を迷信だとしても、この迷信を信ぜざるを得ない心理には真実があるだろう。処が本当の迷信は、弾丸が当たるとか当らぬとかいう物理にあるのではない、こういう「迷信」的な行動のもつ 或る一定の社会的意義と役割とを、肯定しないかするという社会判断にあるのだ。だから肯定的精神とかいう奴こそは往々本当の迷信であって（従って物理的には之は迷信ではないとされる）、大いに主張を迷信化せねばならぬなどと云い出す男まで出て来る。要するに千人針もただの迷信ではないのである。

だがそれにも拘らず、この挙国一致的街頭風景や、恤兵部風景が、著しく観念的であることに変わりはない。莫大な国防献金と云っても、膨大な軍事予算や事変追加費予算の嵩に較べれば、まるで桁が違ふのである。之を物質的に計量比較する気ならばやや滑稽だろう。価値はその精神にあるとされる。……弾丸に当たらないための千人針というのは本当ではなくて、出征者の身内の者が出征者の肉体的無事を切望する観念の、或る芸術的表現にしか過ぎない。問題は千人針の布という物質にあるのではない。そればかりではなく、出征者と出征者の身内の者とが心配する最も大きな危険は、必

---

(1) 小澤熹「国家総動員体制下における教育制度改革～青年学校男子義務制化への動き～」『東北女子大学・東北女子短期大学 紀要』50号、東北女子大学・東北女子短期大学、平成23年、p.68。

ずしも肉体的な損失だけではない、社会生活に於ける損失なのである。千人針の心理は確かにこの社会的生活の不安の鎮静を縫い込むことだ。処がそれをそうとは自覚しないで、弾丸に当たらないようにということだけで凡てを表現し得たと思っているから、女達の社会的政治的常識が、観念的に宙に浮いていると云われることにもなるのである。

挙国一致というものの最も端的な表現であるこの銃後の熱誠は、こうして、如何なる意味に於ても、観念的な本質のものであることを卒直に認めなければなるまい。挙国一致というものは、今日抑々民衆の手頼りの綱でさえあるのだ。と云うのは国民は之によって生活安定の安心を得たいと願っているのだ。確かにこの所謂「挙国一致」は国民に生活安定感を与えることが一応出来る。兵隊さん大いにやって下さい、と云うことで以て、気が休まるように思うのである。処がそれにも拘らず、いやそれであるが故に、この国民生活安定感は、観念的な安定感だというのである。——現実の実際の国民生活安定の代わりに、国民は、生活の観念的な安定感を与えられる。夫が軽々に理解された「挙国一致」というものの現実であると見ねばならぬ。(下線筆者)

千人針というものが戦時下の人々の心の安定をもたらすものであるとの認識があったことが理解できる。また、昭和 12 年 11 月に刊行された小野清秀著『国家総動員』(国風会、昭和 12 年 11 月 28 日発行)には、「第九章 祈祷と公葬」のなかに「第四項 御守と千人針の威力」「第五項 勇士と千人針」「第八項 千人針の御陰」「第九項 お伊勢様と千人針」「第十項 千人針と墓口と母の声」と、五つのエピソードが取りあげられている。

#### 事例 35) 第四項 御守と千人針の威力

神仏の御守や、仙道の呪符、霊符といふものは、古くから流行したものであるが、それには神仏の霊力がこもつて居る、そして又それを調整する神主とか僧侶とかいふものの念力も加わはつて居る。(中略)

お守には、神仏幾万種もあるが、其の他に陰難除け、砲弾除け等あつて相当持て囃さるゝが、それは大抵支那の陰陽道仙人修法から出たものである。加藤清正が一生肌身を離さなかつたといふ、砲弾除けの御守等は、其の功德靈験が著しいと云はれて居る。

千人針も昔くから厄除禁厭として行はれて居つた。其の方式は径五寸位の日の丸を襯衣しんいに書くとか、布に数箇の文久銭を縫ひつけたものを身に着けるとか、寅の年の女の作つた千結びとか、一人一結びづつ千人の婦人によつて作られた紐を腰に纏うとか、その他いろいろある。

千人の念力がこもつて居る、たとへ極単純であるとしても、純雷同的の無意識ではない、千人の念力殊に婦人の同情的精神力である。それが貰つた人の心がけ一つで効力のない筈はない、千人の結合意識といへば、大したものである。

併し軍人としてはそういふ厄除とか禁厭とかいふ事に囚われず、唯だ千人の婦人達が、どうか兵隊さんが皇国の為めに働いて敵兵を撃滅し、是が非でも大勝を博し、無事に凱旋して貰ひたいといふ偉大なる精神力に対し、深く感謝し、敬虔な心持を感じて之れを所持し、皇国の為めに奮戦力闘して此の千人の婦人の精神力に報いなければなら

ぬといふ責任観念を以てし、生死を超越して、たゞ一死報国あるのみの精神を以て進まねばならぬのである。<sup>(1)</sup> (下線筆者)

お守りの重要性を宗教のなかに位置づけようとする文章である。「加藤清正が一生肌身を離さなかつたといふ、砲弾除けの御守」とはサムハラのことである。千人針の形式について、「直径五寸(約 15.2cm)の日の丸を肌着やシャツに描くに書く」「布に数箇の文久銭を縫ひつけたものを身に着ける」「寅の年の女の作った千結び」「一人一結びづつ千人の婦人によつて作られた紐を腰に纏う」などの千人針のバリエーションを列記している。また、軍人としては千人針が「厄除とか禁厭」であることにとられること無く、「皇国のために奮戦力闘して此の千人の婦人の精神力に報いなければならぬといふ責任観念」を持つべきだと鼓舞している。

### 事例 36) 第五項 勇士と千人針

これは昭和六年満州事変の時の事である。

滋賀県蒲生郡桐原村、青山きぬの一人息子正一は、挑戦在営中であつたが、母一人子一人のきぬ女は、正一の無事凱旋を祈る心から、例の千人針の腹帯を作らうと、八幡高等女学校の生徒や、街路を行き交ふいろいろの婦人達に、一人一人頭を下げて、しきりに一針一針と千人針の完成を急いで居た。

然るに何と思つたか、その千人針も追々完成しやうといふ間際になつて、きぬ女は突然ブツリと其の腹帯を作ることを止めてしまつた、村の人々は一斉に驚き不審に思ふた、あんなに熱心にやて居つたのに、どうしたといふのだらうと、或人は到頭<sup>とうとうこらえ</sup> 怯へきれず、村人の代表格となつて、きぬ女を訪ひ中止の訳を問ひ質した。

勿論それは大なる理由があつた。息子は母の手紙によつて、自分のために千人針をつくつてゐることを知つたので、母に対して左の如き手紙をよこしたのであつた。

千人針を作つて戴いて居る由、溢れるばかりのお母さんの御慈情は、ただ涙を流して有りがたくお受けいたしますが、一兵士として戦場に参りました私の一命は、畏れ多くも、もともと陛下に奉つてゐるのです、敵の弾丸にうたれて死ぬのは、もとより覚悟の前です。

生きて帰らぬ覚悟の私に、どうして千人針の腹帯などがいらしましやう、まして万一にもさういふ腹帯をしめたまま、戦死するやうなことがありましたならば、ああ日本男児ともあらうものが、これ程までに生命を惜しかつたかと、折角華々しい討死をしても、屹度<sup>きつと</sup>人々の物笑いの種になりましやう、私は死んで恥をさらしたくありません、何卒古い迷信的な千人針などは思ひ止まつて下さいますやう、くれぐれも御願ひ申し上げます。

此の事を聞き知つた村の人々は、極度に感激した、伝へ伝へて近村まで千人針のあとを絶つやうになつた。と云ふことである。此の手紙一本は、百席の講演にも、千座の祈祷にも、万卷の書冊にも勝る実際上の効果があらう。然し千人針も決して悪い事で

---

(1) 小野清秀『国家総動員』国風社、昭和12年11月28日、pp.218-220。

はない。<sup>(1)</sup> (下線筆者)

第一章でも別の文献で紹介した満州事変時の実話である。「これ程までに生命を惜しかつたかと」「人々の物笑いの種」になるので千人針の準備をやめてくれとの手紙を受けた事例を紹介している。

### 事例 37) 第八項 千人針の御陰

加納部隊をはじめ津田部隊は昭和十二年九月廿八日楊行鎮東南の最前線に出て朱家宅、金家宅、張宅の各部落に亘って蜿蜒三、四里の陣を布く敵と対峙、早くも各所に初戦闘を開始し各部隊とも歩一步前進をつづけ、中でも加納部隊はいよいよ呉淞クリークを前に鉄条網を張つてこの線は決して渡さぬと死守する敵の堅固な陣地の攻撃にかゝつた、山田部隊が撃ち出す掩護射撃の砲声は江南の野に殷殷と響き渡り、各部落とも火に包まれて黒煙は天を掩ひ壯絶を極めた。

此の時加納部隊前面の最大難関たる呉淞クリーク上流の紀家橋といふ橋による敵陣の偵察といふ重大任務を帯びて廿八日朝十一時石川好雄伍長（荏原区戸越九三四）を隊長に篠原治次一等兵（荏原区小山二五三）渡邊義経一等兵（目黒区上目黒八ノ二九二）小林芳郎上等兵（蒲田区新宿六一）の四名が斥候に出たはやくもこれを知った敵はクリークを挟んだ左右からこの四人めがけて十字砲火を浴びせかけて来る。

四人はぴつたり地を這ひつゝもクリークに六十メートルの地点まで前進した、こゝで小林上等兵が大胆にも悠々地図を広げて地形をみようとした。その瞬間だ、敵の一弾は小林上等兵の右腹部に命中した「あッ」と叫んだ小林上等兵はドツと後に倒れた、驚いた三人は「しつかりしろ」とばかり小林上等兵を抱き起すとナンと小林君はケロリとして眼をぱちぱちして起き直つた、どこも痛くも痒くもないといふ、何しろ重大使命を帯びて敵弾雨飛の最前線だ、そのまゝ前進無事使命を果して一人の犠牲者もなく味方の陣地に帰つて来たさてこの当つた筈の敵弾の行方を調べてみると弾はまづ小林君のもつ銃の遊底の上を貫き、更に上等兵の革帯を裂き洋服を被つてグルリと腹を一廻り尻に廻つて後の弾薬盒の[油箱に当りそのまゝ外にとび出したものだった、ところが小林上等兵の破れた服の下からは千人針の腹巻がはみ出てゐる、しかもこの腹巻に縫ひつけた五銭玉が無残にひしやげてゐるではないか、奇蹟はこゝから生れたのだ、腹巻がずれて前にあつた五銭玉がわき腹の方に廻りこゝで瘤のやうによつてゐるんでゐたゝめ敵弾は横腹に喰ひ込み得なかつたといふことである。<sup>(2)</sup>

千人針があくまでもまじないのついに過ぎないという意見に対して、千人針に縫ひ付けた硬貨によって命が助かった事例を紹介している。

### 事例 38) 第九項 お伊勢様と千人針

正定城攻撃に赫々たる武勲をたてた神田部際通信班南條正成（二六）上等兵は、前

---

(1) 前掲『国家総動員』pp.220-222。

(2) 前掲『国家総動員』pp.224-225。

線部隊と連絡のため折から昭和十二年十月十六日三日月の薄明りのなかを通信班の真先かけて縄梯子をたよりに敵弾が雨霰のやうに降り注ぐ正定城門の城壁をのぼった、城壁上には敵の死体が堆く積まれた城内には濛々たる火焰が三日月を焦して悽愴の気が充ち満ちてゐるのだ、南條上等兵の上着の右ポケットに飛込み軍隊手帳を見事打抜いた許りか更に上着の左袖を貫いてみた、南條上等兵はニツコリ笑ひ、同僚に話した、君は円タクの運転手だが去る日召集を受けるや愛妻よし子（二二）さんと相携へて郷里、伊勢大神宮に参詣した、夫の武運長久を只管祈つた、よし子さんは真綿を包んだ木綿に御伊勢様の加護をいただき、その日から郷里の婦人達から銃後の赤誠を縫いつけて貰い、これを夫の華々しい首途の躰として夫の武運長久を祈つて出征を見送つたのであつた。<sup>(1)</sup>（下線筆者）

夫の出征の為に伊勢神宮に武運長久祈願と千人針の祓いをしてもらった事例が紹介されている。宮崎神宮でも同様の千人針祓が行われており、神社の中にはこうした依頼を受けていたことが分かる。

#### 事例 39) 第十項 千人針と墓口と母の声

〇〇部隊小川一等兵、故郷を出る時親戚から餞別に貰つた五十銭銀貨を二十枚を巾着に入れ千人針に包んで巻いてみた、昭和十二年十月五日の激戦で、左腹部に一弾を喰た、其弾丸は千人針を貫いたが腹には、かすり傷もなかつた、巾着を逆に振ると銀貨と一緒に弾丸が転がり出た、そして一枚の五十銭銀貨がぐつとへの字に曲つてみた。<sup>(2)</sup>（後略）

戦地での奇蹟の話をつつ紹介しているが、その中の一つが千人針にまつわる事例である。「五十銭銀貨を二十枚」という金額にどのような意味があるかはこの文章からは読み取ることができない。

以上、昭和12年11月に刊行された小野清秀著『国家総動員』に紹介された千人針にまつわるエピソードを紹介してきた。この事例のように、国民精神総動員運動が実施されることによって、世間に行われている様々な俗信について再定義が行われたものと考えられる。

昭和12年(1937)に動員された兵士は、93万人に達し、なかでも赤紙による召集兵は59万4000人に及び、現役兵の33万6000人の倍近い数であつた<sup>(3)</sup>。日中戦争の開戦以降、国民精神総動員運動などの政治的な動きを後ろ盾に、様々な形で千人針が普及していく。そして、こうした千人針の普及をメディアが取りあげていくこととなる。

---

(1) 前掲『国家総動員』、p.226。

(2) 前掲『国家総動員』、pp.227-228。

(3) 藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカッポウ着一』岩波新書、岩波書店、昭和60年(1985)、pp.147-148。

## 第2節 千人針と多様なメディア

千人針が広く普及し、その由来についても古くからのものであるとされるなど、日中戦争期における千人針の流行が定着していく。こうした状況に呼応するかのようには舞台などでは千人針をテーマに演じられるようになる。

### 1、演劇

昭和12年(1937)7月30日付の『京都日日新聞』『東京朝日新聞』に、「ラヂオドラマ “銃後の人々”」が紹介されている。「涙ぐましい愛国千人針・事変風景、東京新派総動員で綴る名篇」、田島淳作・演出とあり、あらすじが紹介されている。夜8時から全国で(確認すること)放送されたようである。

また、昭和12年(1937)8月15日付の『大阪時事新報』『神戸新聞』『京都日出新聞』『東京朝日新聞』に大阪の道頓堀中座で開催された「舞台劇 千人針」が紹介されている。茂林寺文福作・尾崎倉三脚色の「松竹家庭劇」とある。

### 2、小説

日露戦争以来、行われてきた千人針風景を扱った小説にも登場してくる。例えば、小説家・宮本百合子はいくつかの小説に千人針風景を描いているが、その一つ「築地河岸」(『新女苑』昭和12年(1937)9月号)をここで紹介する。

視線の先は駅の入口で、そこには乳呑子を背負った二人の中年のおかみさんが、必死の面持で通行人をつかまえては、鬱<sup>うこん</sup>金木綿に赤糸で千人針をたのんでいるのであった。

「一人だっておんなじ人が縫ったら駄目になっちゃうっていうんですもの——」

その女学生たちは、ゆきと同じ処でそのおかみさんの千人針を縫ってやったものらしい。帰りに同じひとがまだいる。又たのまれたら二度一人が縫うことになるし、断れば信じまいと、真面目にこまっているのであった。七月このかた、市中の人出の多いところは到るところで千人針がされていた。(中略)

赤坊を背負ったおかみさんは、気のたかぶっている眼の端に道子の来かかる姿をとらえると、自分の手を持ちそえて一人の若い女に縫って貰っている最中なのに、「あ、ちょっとすみませんが願います」と気ぜわしく呼びとめ、前のひとが赤糸の丸をしごく間ももどかしそうに、「おねがいします」と二足ばかり小走りによった。道子は、ハンドバッグを腋の下へ押えこんだ不自由な手頸の動かしかたで縫いながら、「御主人ですか?」と訊いた。「ええ、そうなんですよ、あなた。子供が三人いるんですよ」真岡の袂でのぼせあがっている顔をふきながら、おかみさんは、「すみません」と礼を云った。(中略)

道子の働いている医療機械雑誌関係の用で、或る外科の大家を訪問したとき、時節柄千人針の話が出た。千人針を体につけていて弾丸に当たると、弾丸はぬくことが出来ても、こまかい糸の結びの目と布とが傷の内部に食いこんで危険だということであ

った。人間の腕力だけでふるわれた昔の素朴な武器にふさわしいそう いうお守りを、今日もやっぱり縫って、せめては身につけて行かせようとする家族の心持というものが、道子に惻々と迫って来て、それがただ心持の上だけのものとなっているだけ一層切ない街上の風景なのであった。

全国の街頭・駅・百貨店・学校など人々の集まる場所で行われた千人針風景。小説家にとって、開戦当初の町の雰囲気を取り切るにはよい題材だったのであろう。宮本百合子はこのほか「三月の第四日曜」(『日本評論』昭和 15 (1940) 年 4 月号)などに千人針のエピソードを盛り込んでいる。

### 3、浪花節・落語

また、世相を表す分野としては、講談や落語がある。先に日露戦争後の千人針という言葉の管見の所の初出が教育講談『愛国心千人針』であることを紹介したが、その「愛国心千人針」と関係すると思われるレコードがある。

○浪花節「愛国心千人針」(1～4)(二代目天中軒雲月、テイチクレコード)

『演芸レコード発売目録』(国立劇場芸能調査室編、平成 2 年(1990))によると昭和 11 年(1936) 1 月となっており、発売はその前年頃と思われるが、昭和 12 年 10 月 2 日付『大阪時事新報』にレコードの宣伝広告が掲載されている。内容は日露戦争に出征する息子に弾丸除けの腹巻きを渡すが、息子は戦地で死ぬ覚悟で出征することを母に言い聞かせる内容となっている。先の早川貞水作の教育講談をもとに上演したものと考えられる。日中戦争を前にしてすでに千人針を世に知らしめる役割を果たしていたと考えられよう。

この他、浪曲余興として、時局都々逸というレコードも販売されている。

○浪曲余興「時局都々逸(千人針)」(歌・宮川左近、アサヒレコード)

講談や浪花節が戦争時期に流行するのに対して、落語は不謹慎であるとして、一部の演目を嚙塚に封印した。落語の内容も時局に合わせた新作落語が作られた。昭和 12 年(1937)、秋風亭瘦語楼が「千人針」と題して『家の光』に新作落語として掲載しているが、この秋風亭瘦語楼については素性が不明である。また、昭和 14 年(1939)の『週刊朝日』には、古典落語・新作落語を両方扱う名人・三遊亭金馬も「千人針」を落語化している。ちなみに三遊亭金馬による落語「千人針」は SP レコードとして販売もされた。

新作落語「千人針」秋風亭瘦語楼(昭和 12 年(1937) 11 月 1 日発行『家の光』)  
(前略)

大 雑巾ぢゃないよ。千人針だよ。うちの倅も近い内に出征するから縫ったんだが、なおこの真ん中のところへ、寅年の男の人から五銭玉を縫いつけて貰うと、余計きき目があると聞いてね。

熊 どういうお呪まじないですかい。  
大 つまり、四銭（死線）を越える。  
熊 なある程。  
大 五銭玉がなかったら、十銭玉でもいいよ。  
熊 と言うと。  
大 九銭（苦戦）を越えて、実戦に勝つがな。  
熊 うまいな、大家さんは。いっそ落語家はなしかになった方がいい。  
大 人から聞いて来たんだよ。誰でも縁起は担ぐもんだ。そのつもりで一つ縫いつけておくれ。  
熊 よし、引受けた。ほかならぬ大家さんの頼みだ。  
大 いやに恩に着せるね。だが、家賃は棒引にしないよ。  
熊 チェッ、がっちりしていやがるんですね。おや、清正公様（せいしょうこうさま）のお名前が書いてありますね。  
大 清正公様は軍神だ。わざわざ今朝芝の清正公様まで行って、いただいて来たんだよ。  
熊 なるほど。益々虎に縁があるね。そのつもりで、あっしも真心こめて一ぢゃ、五銭玉でも十銭玉でも出して下さい。  
大 ところが、その金は縫ってくれる本人が出してくれないと、きき目が無いんだ。  
熊 いやいよがっちりしていやがらあ。あっしが出すんですかい五銭玉を。  
大 済まないが、出してくれ。これも倅のためだ。いや、国家のためだ。  
熊 やれやれ、仕方がない。たった一つよりない五銭玉だが、国家のためだ。献金しよう。お陰で晩のおかつの豆腐が買えなくなる。  
大 そのかわり、お礼にこっちから、五十銭あげるよ。だったら、いいだろう。  
熊 有難い。そう来なくっちゃ嘘だ。そんなら一杯飲める。こんなことなら、ちょくちょく頼みに来て下さい。（後略、筆者）

三遊亭金馬「千人針」（昭和14年（1939）1月号『週刊朝日』）

（前略）

「それからお前さん、これも持ってっておくれ」

「何んだい、この長いゾオキン見たいな物は」

「馬鹿だねーそれが千人針の腹巻だよ」

「おれのか」

「当り前さ、丁度あたしが酉年だから縫って貰ったんだよ」

「アア有難い有難い、ふだんからお前は不精だから、俺れの腹巻なんか出来やーしねーと思ってたんだ、持つべきものは女房とコウモリガサだよ」

「へんなものと一緒におしでないよ」

「それにしてもおかしいな、千人針は寅年とかぎったものだが何んだって酉年を選んだんだ」

「だってお前さんが飛行隊だもの」



文字化されたものだけでなく。当時はこうした千人針風景は落語家のネタとなっていたことであろう。

#### 4、映画

さまざまなメディアに千人針は、題材として取りあげられているが、多額の予算のかかる、しかし影響力のあるメディアとして映画がある。一般的には知られていないが、最も古いカラー映画として昭和12年10月に映画『千人針』が封切されている。

荷船の船頭佐伯正太郎と許嫁のお芳とは秋にはいよいよ結婚と結った折も折も、北支事変突発、正太郎に召集令が下る。祖母は千人針を街道に、然し祥太郎には今は何処にか姿をかくした母がある。出征には是非一目遇つて行きたいと思ふ時その母は今は実業家高杉家に嫁し一女がある。母は正太郎を訪れたが義理堅き祖母の為に帰へされる。母と呼ばれ子と呼びたい親子が世の義理故に泣いた。然し情ある人の為に幸福になれる時が来る、いよいよ出征の日高杉に許され祖母も許しお互に母と呼び子と呼んでいさぎよく出征する。<sup>(1)</sup>

詳細については『キネマ旬報』628号を資料としてみていくこととする。<sup>(2)</sup>

製作・配給：大日本天然色映画社、脚色：佃血秋、監督：三枝源次郎、撮影：漆山祐茂、主演：井松之助、封切10月21日・浅草電気館。

大日本天然色映画社の第三回作品で「一太郎やあい」式の時局物語を五巻にまとめた小品ではあるが、先づ色彩的に第一回作品の「月形半平太」より著しく改善せられて二色プロセス・システムに依るものとしては相当効果的色彩を出せる様になった事を挙げねばなるまい。殊に上写に於ける場合は非常な好い調子を出して居るが、ロングになると依然鮮明をかく憾みがある。

然し色彩的には斯様に一段の進歩を見せては居るが此作品に於ける映画構成は依然幼稚で全体に間延びのした作品にしか仕上がって居ない事は、今後の発展に支障を来す事でもあるから色彩の改善と併せて映画構成にも力を注がねば此社の色彩映画はその存在すら到底望めまいと思う。

玄人の筈の三枝源次郎も色彩撮影に捉われて更に精細なく、素人の役者に大写的の長いアクションを与えたり必要以上の色彩表現に長々しい場面を多く挿入するなど総て色彩撮影の機械に動かされる彼と見るより外はない。

俳優は澁澤静子、若松文男の外は殆んど無名の俳優ばかりであるがその割には出来がよく老婆役などおぼつかない途切途切の台詞が返って実感を出て得居た。

この映画フィルムは、日本には現存せず、ロシアのフィルム保管施設で発見された。この事実は、「戦争と平和を見つめるNHKスペシャル」において、平成15年（2003）8月14

---

(1) 『キネマ旬報』624号、キネマ旬報社、昭和12年（1937）10月1日、p.175。

(2) 『キネマ旬報』628号、キネマ旬報社、昭和12年（1937）11月11日、p.98。

日に「映像記録 昭和の戦争と平和～カラーフィルムでよみがえる時代の表情～」という番組で紹介された。

<映画「悦ちゃんの千人針」>

(昭和 12 年 (1937) 12 月 11 日『キネマ旬報』631 号)

製作・配給 日活、原作 酒井俊、脚色・監督 倉田文人、撮影 気賀靖吾、主演 悦ちゃん・村田知榮子、封切 11 月 25 日、浅草富士館、新宿帝都座、神田日活館、参考 トーキー、6 巻、1716 米。

略筋一街には戦時気分が満ちてゐた。喫茶店「タンゴン」の喫茶ガール達も毎日千人針を縫ふのにいそがしかつた。或る日マスターは三島と云ふ男に「タンゴン」を譲る事を皆に話したのだつた。この店に働いてゐたふじ子は、兄の勝浦を一人前の車輻主にするために一生懸命になつてゐた。二人が引越したアパートの隣室には酒場を經營してゐる加代とその子供の悦ちゃんが居た。子供好きな勝浦と悦ちゃんはすぐ仲良しになつてしまつた。悦ちゃんの遊び友達、広ちやんととしちやん、それに飛行機屋の子供グン坊は、いつもアパートの脇の広場で、国防婦人会遊びや兵隊ごっこをして遊んでゐた。(中略)悦ちゃんは此の頃本当にお父さんが欲しくなつて来た。そしてそのお父さんと思ふのは勝浦だつた。悦ちゃんの望みがかなつて加代が勝浦から結婚の申込を受けたその日、勝浦に召集令が下つたのだつた。(中略)何も知らない悦ちゃんは大好きな勝浦の武運を祈りながら自分達の手で造つた千人針をおくつた。そして勝浦の乗つた列車が見へなくなるまで淋し相に見送つてゐた。<sup>(1)</sup>

以上のように昭和 12 年の内に 2 本の映画ができたことは千人針の影響力の大きさを示すものであろう。

## 5、SPレコード

昭和 12 年 (1937) 8 月 23 日に放送した「千人針」(作詞サトウハチロー、作曲：乗松昭博、歌：サンマルテ合唱団)という歌は、作詞サトウハチロー(ポリドール専属)と作曲乗松昭博(ビクター専属)のレコード会社が違つていたため、レコード化できなかった。

ビクターは、昭和 12 年 (1937) 12 月に、作詞：佐伯孝夫、作曲：乗松昭博で、愛国流行歌「街の千人針」と題し、歌：江戸川蘭子でレコードを発売した。一方、ポリドールは、作詞：サトウハチロー、作曲：長津義司、歌：関種子で国民歌「千人針」と題して、昭和 13 年 (1938) 1 月にレコード発売した。

○愛国流行歌「街の千人針」(歌：江戸川蘭子・日本ビクター女声合唱団、作詞：佐伯孝夫、作曲：乗松昭博、編曲：乗松昭博、伴奏：日本ビクター管弦楽団、昭和 12 年 12 月)

一、タベ市場の 帰り道 荷物小脇に 縫う針の

あつい手許に 赤々と 戦地をしのぶ 陽がしずむ

---

(1)『キネマ旬報』626 号、キネマ旬報社、昭和 12 年 (1937) 10 月 21 日、p.90。

二、軍歌高らに トラックは 雄々し兵士を 乗せて行き  
見れば愛しや 七つ八つ ポストそばの 女の子  
三、心小走り 縫うてやり 可愛い頭を 撫でている  
我も銃後の 女郎花 千人針の 蔭に咲く<sup>(1)</sup>

○国民歌「千人針」(歌：関種子、作詞：サトウハチロー、作曲：長津義司、編曲：長津義司、伴奏：日本ポリドール管弦楽団、昭和13年1月)

一、橋のたもとに 町角に 並木の路に 停車場に  
千人針の 人の数 心をこめて 運ぶ針  
二、とび行く号外 鈴の音に 胸はわきたつ ひきしまる  
どうぞ一つと 兄のため 背の君のため 叔父のため  
三、人はかわれど 真心は みんな一つに 国のため  
私も一針 縫いたいと じっと見ている 昼の月<sup>(2)</sup>

○流行歌「愛国千人針」(歌・三門順子、作詞・小沼宏、作編曲・佐藤長助、キングレコード)<sup>(3)</sup>

一、お国をおもへば ひとすぢに 巷に運ぶ 針の先  
糸の結びは 細くとも 結びきれない まごころよ  
二、いとしきわが子を わが兄を 戦地の空に 偲びつゝ  
結ぶなさけの ひと針も 口ぢやつくせぬ 胸のうち  
三、仇なす敵をばこらしめて 命のかぎり 尽してと  
やまごころを くれなるに 染めて結びし 健気さよ  
四、たよりも少ない 老いの身で ひと針孫へ 縫ふ糸も  
せめて君への御奉公 赤きこゝろの いぢらしさ  
五、老いも若きも みな起ちて 銃後に結ぶ 針の糸  
やまとなでしこ ひと色に 燃えて咲く身の たのもしさ

この他、多くのSPレコードが発売されたが、発売年代などその詳細は不明である。以下、筆者が実物を購入した物を紹介する。

○愛国流行歌「千人針」(作曲：勝山清、作詞：小野金治郎、歌：小唄勝太郎)

○国民歌謡「愛の千人針」(大阪中央放送局選奨、歌：葉山かほる)

○童謡「雀の千人針」(作詞・中村伊佐雄、作曲・編曲・長谷川口二、川井良子・久禮美恵子・山本智子、リーガルレコード、詳細不明)

---

(1) 『日本レコード文化史～昭和 SP 盤時代記録大全集～日本の流行歌史大系歌詞総録 ビクター編』ダイセル化学工業株式会社発行、平成2年(1990)、p.109。

(2) 『日本レコード文化史～昭和 SP 盤時代記録大全集～日本の流行歌史大系歌詞総録 ポリドール編』ダイセル化学工業株式会社発行、平成2年(1990)、p.221。

(3) このレコードについては、昭和12年9月4日付『大阪時事新報』(夕刊)にキングレコード臨時発売として宣伝広告が掲載されている。

○軍国レコード「千人針の歌」(歌・榊原清子、太陽レコード、詳細不明)

人々に最も身近なメディアとして音楽があった。当時はSPレコードとして販売されたが、その実態はまだ十分には把握されておらず、これらのレコードも筆者蔵の資料から情報を整理した。

## 6、描かれた千人針

千人針風景が描かれた慰問用の絵はがきが多数作製されている。

**写真 2-1** の絵はがきについては、昭和12年(1937)8月19日付『京都日日新聞』に掲載され慰問用として作製されたことが分かる。

昭和12年(1937)8月19日付『京都日日新聞』

「戦線へ贈る美しい **写真 2-1** 恤兵絵葉書(筆者蔵) 絵葉書」

陸軍省では北満、北支に派遣されている皇軍勇士を慰めるため今度恤兵絵葉書を作成、一人分絵葉書三種九枚、封緘葉書一種二枚、実用葉書十五枚のものを十六日現地へ向け発送した。

**写真 2-1** の絵はがきには、女学生が描かれ、白地の布に赤い糸で作られている様子が描かれている。

**写真 2-2** の絵はがきは、当時の人気のあったイラストレーター中原淳一によるもので、ポリドールレコードが昭和13年(1938)1月に発売したレコード「千人針」のサトウハチローの作詞を掲載している。これは様々な曲の歌詞とイラストをセットにした中原淳一の慰問絵はがきの



**写真 2-2** 「慰問用 国民 歌絵葉書」**「千人針」**  
(筆者蔵)



シリーズである。

写真 2-3 の絵はがきは、第一回文部省美術展覧会出品とあることから、昭和 11 年の文部省美術展覧会（新文展）の松田寅重の作品「千人針」を使用したものと考えられる。黄色い布と白い布の千人針が描かれている。

写真 2-4 の絵はがきの袋には、「支那事変 前線之活躍 銃後之後援」（昭和 12 年 10 月、海軍省恤兵係発行）との表記がある。街頭での千人針風景の雰囲気を見事に描いている。



写真 2-4 絵はがき「支那事変 前線之活躍 銃後之後援」  
（昭和12年10月、海軍省恤兵係発行）（筆者蔵）

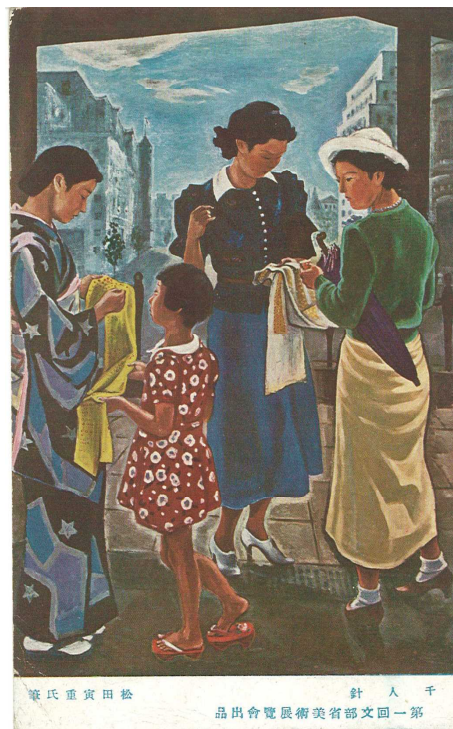


写真 2-3 松田寅重「千人針」  
（第一回文部省美術展覧会出品）（筆者蔵）



写真 2-5 千人針 岡山市就実高等女学校・岡山実科女学校（筆者蔵）

写真 2-5 の絵はがきには、「岡山市就実高等女学校・岡山実科女学校」との記述があり、女学校で行われた千人針作製の様子がよく分かる。多数の千人針の布を順番に廻しながら大量の千人針を縫っている。



写真 2-6 絵はがき「もんぺ姿山形」「街頭の千人針」(筆者蔵)



写真 2-7 絵はがき「もんぺ姿山形」「山形乙女の銃後風景 愛国千人針 山形風俗 モンペ姿」(筆者蔵)

写真 2-6 の絵はがきは、「もんぺ姿山形」というシリーズの一枚「街頭の千人針」である。昭和 15 年 6 月 10 日の消印があり、その頃に製作された絵はがきではないか。和服にモンペ姿の女性が依頼者であろうか。二人の割烹着にたすき掛けの国防婦人会の女性が和服の女性に千人針を依頼している。

写真 2-7 の絵はがきも「もんぺ姿山形」のシリーズの一枚である。「山形乙女の銃後風景 愛国千人針 山形風俗 モンペ姿」と記されており、昭和 15 年 9 月 24 日の消印がある。

これらの絵はがきは、慰問用として作製されたと考えられ、銃後の女性の姿を描くことで、戦地の兵士に慰みを与えたものと考えられる。

この他、絵画のテーマとして千人針が描かれた絵が多い。写真 2-8 は、藤田嗣治「千人針」という作品で、昭和 12 年 8 月の二科展に出品した作品である。小さな女の子が縫っている様子が描かれている。

写真 2-9 は、石川一郎「風俗」である。絵の裏面には「軍国風景をモンタージュした明るい作品である。出征兵、千人針風俗、白襷の婦人団、歩道を闊歩する婦女の近代ぶりにも溘刺たる日本の力が感じられる。」との説明が加えられている。





写真 2-9 石川一郎「風俗」(印刷筆者蔵)



写真 2-8 藤田嗣治「千人針」

(絵はがき筆者蔵)

### 第3節 琉球地方、及び植民地での千人針

ここでは、千人針と琉球地方とのつながりについて検証する。岩田重則は、その点について次のようにして指摘している。

まず千人針の最大の原則は、それを作るのが女たちであったことである。このことは、ごくあたり前のように思われ、見過ごされてきたことであるが、この事実の奥底には、大きな広がりを持つ民俗的意味が隠されているように考えられるのである。

おそらく、それは、薩南諸島、沖縄及び離島のオナリ(姉妹)において、もっとも顕著にあらわれていると思う。

岩田は、この後、瀬川清子の紹介する事例を引用し、自説を説明している。瀬川の実例は以下の通りである。

与那国島 姉妹をブナイ、兄をビキという。(中略) 千人針もブナイがTくり、病気には特にブナイに祈願させる。(中略)

徳之島東天城村山部落 ウナイ神は姉妹のうち一人だけで、それが死ねばつぎの妹がなる。(中略) 千人針もウナイが縫いはじめて <sup>(ママ)</sup> 虎年の人に十針も縫わせて、それからあみんなに縫わせる。必ずオナリが持ってまわる。オナリがいないと妻がするが、遠方でもオナリに一針縫って貰う。<sup>(1)</sup>

本土で流行した千人針習俗と南島で見られるオナリ神信仰の関係性はどの様に解釈すればよいだろうか。町健次郎は、奄美大島でも千人針が盛んだったことを聞き書き調査をもとに次のように報告しているので、要約して紹介する<sup>(2)</sup>。

大島でも千人針は盛んだった。赤い糸で糸玉を縫い、千人の女性から糸玉をもらうというやり方は同じだった。ただ、人口が少ないので、千人から集めるのが大変だった。隣の集落まで行って、処女団や、親戚、仲間内で回って歩いて、それで何とか千人集めた。中には「千人いるわけないから、もう、一人で何玉も縫ってもらってもよかったんだ、人間がいなくて仕方なかったんだ」という人もいた。また、寅年の女性は年齢の数だけ縫ってもよいとされ、戦時中、寅年の女性が大変重宝されていた。さらに4銭9銭を越えて5銭玉・10銭玉を縫い込む例も見られた。ただし前述したようなオナリ神信仰との関わりは見られなかったという。

そして、町は次のようにまとめている。

この千人針を完成させるためにあちこち歩いていたのは全て女性ですが、直接的に「オナリ」だったという話しは全く聞きません。千人針は明らかに外から入ってきたもの

---

(1) 瀬川清子『沖縄の婚姻』(民俗民芸双書47) 岩崎美術社、昭和44年(1969)、pp.136-148。

(2) 『沖縄大学地域研究所ブックレット2(叢書第9巻) 奄美と沖縄、その同質性と異質性—奄美と沖縄の協同をめざして— 第1回「をなり神信仰」をめぐる』沖縄大学地域研究所、平成19年、pp.43-45。



ですが、地元の文化素地に女の霊力が高いという地域性が、千人針そのものにこう重  
なって働いていた可能性もみることもできそうですが、今のところ直接的に先輩の方  
々からそういう話を伺えたことはありません。<sup>(1)</sup>

小島瓊禮もオナリ神との関わりについて『琉球学の視角』では、「兄弟の旅立ちに、姉妹  
が手巾や髪の毛を与えて、旅の安全を祈る習慣は、琉球諸島全域に知られていた。ことに、  
その観念が、第二次世界大戦のとき、千人針を贈ることと結びついて顕現している。」と  
指摘しているが、「それにつけて疑われるのは、島に生活する兄弟にとって、そのオナリ  
神の守護が必要になるのは、どのようなばあいであったかということである。」とし、オ  
ナリ神を検証し、「古典のオナリ神を見ていても、千人針をもって、それを代表させるこ  
とには、ためらいを感じるのである。」<sup>(2)</sup>と千人針とオナリ神の関係性に触れている。

千人針習俗が沖縄や奄美に戦争習俗として流入してきた経緯は次のような経過であつた  
ろう。全国的に婦人会が組織され、沖縄でも愛国婦人会、国防婦人会は結成されており、  
こうした婦人会の活動をもとに千人針習俗が伝わったと考えられる。その状況を示すのが  
次の事例である。<sup>(3)</sup>

#### 事例 40) 「婦人会の役割」安里カメ（喜名・安里）大正3年（1914）生

私は昭和15年（1940）から沖縄戦が始まるまで、喜名の婦人会長をしていました。  
昭和16～17年頃の婦人会長の仕事に「千人針」作りがありました。白い布の腹巻き  
に、武運長久と書かれ、すぐに糸の結び目をつけられるような印を入れたのが役場か  
ら配られて来ました。出征する兵士の数によって、多いときは四～五枚も来るときが  
ありました。最初の頃は一枚ぐらいでしたから各家庭を回ったり、時には人が集まる  
役場前や郵便局前に立ってたくさんの人に赤い糸の結び目をつけてもらってしまし  
た。しかし、毎度のことのように連続になると家々を回って作ってはとても間に  
合わせられなくなってきました。

この千人針は、寅年生まれの人は、自分の数だけつけることができるようになって  
いましたから、後になると寅年生まれの人を訪ねてやってもらっていました。それで  
も何度も何度も行くものですから頼むのも気が引けるし、農村ですから夕方になると  
豚の餌をやったり、夕食の準備などで忙しい人々を訪ね歩くことも出来なくなり、ほ  
とんど私とウシーヤマチ（比嘉姓）の大きいおばあさんの二人で作りました。私も寅  
年生まれ、おばあさんも寅年生まれだったのです。ほんとならたくさんの人に糸を通  
してもらおうのが建て前ですが、後からは自分一人で作って、役場に届けたもので  
す。ですから千人針がくると夜は一人で遅くまでかかって間に合わすこともありまし  
た。

---

(1) 『沖縄大学地域研究所ブックレット2（叢書第9巻） 奄美と沖縄、その同質性と異質性—奄美と  
沖縄の協同をめざして— 第1回「をなり神信仰」をめぐって』沖縄大学地域研究所、平成19年、  
pp.43-45。

(2) 小島瓊禮『琉球学の視角』柏書房、昭和58年、pp.148-150。

(3) 読谷村史編集委員会編『読谷村史 第5巻資料編4 戦時記録 上巻』読谷村、平成14年  
(2002)、p.726。

それを出征する人に贈りに行ったことがありましたが、この千人針の腹巻きと十銭硬貨を贈りました。その十銭は出征兵士へのお菓子代と言っていました。お金は役場からの支給だったと思います。千人針には五銭硬貨と十銭硬貨とを縫い付けました。あの頃の話では腹部に弾が当たったが、運よく腹巻きに縫いつけてあった硬貨に当たり、命拾いをしたという話がありました。五銭は死（四）戦を越える、十銭は苦（九）を越えるという意味だと言っていました。でもこの硬貨を縫い付けるのは、出征する兵士の妻や家族が縫いつけていたと思います。ですから婦人会から贈るのは糸を通した腹巻きと十銭硬貨だけでした。

千人針を贈ったのは昭和 16 年（1941）の初め頃まででしょうか、読谷山村からも出征兵士が比較的少ない時代だったと思います。その頃、新崎秀さんが婦人会幹部をなさっているときでしたが慰問袋を贈ったこともありましたが、もちろん上からの割り当だったと思いますが、喜名婦人会で二〇袋ぐらい贈ったと記憶しています。

この千人針も太平洋戦争が始まる頃から毎日たくさんの人々が入隊しましたからいつの間にか無くなっていました。男はみんな兵隊になるという時代になっていましたからとても対応できなかったのです。

以上のようにここでの事例では、役場から渡された材料を元に作られ、婦人会が中心になって作成したことが分かる。沖縄を調査してみると残された千人針の少なさを感じるが、森南海子もそのことを指摘している。

全島が壊滅状態と化した沖縄ではそのかけらさえ見つけることができなかった。この地では送る者、送られる者の区別なく攻撃を受け、また自決という名の殺戮が強行されていた。私はその烈しい戦いの惨状を残された千人針のないことによって知らねばならなかった。<sup>(1)</sup>

筆者は、沖縄における千人針の少なさについては、定着せず、戦後も千人針への関心が高くなかったので保存されてこなかったのではと考える。先に挙げた瀬川清子を取りあげたオナリ神との習合した事例がどこまで定着していた事例か再検証する必要がある。

沖縄の事例と共通して、婦人会や役場によって伝えられたと考えられるのが植民地における千人針習俗の事例である。昭和 12 年（1937）頃の植民地の千人針習俗についての新聞記事を地域別に紹介する。

**事例 41)** 昭和 12 年（1937）7 月 15 日付『大阪朝日新聞（南鮮版）』

「全半島に描く非常事風景 神社参拝に千人針に沸る朝鮮同胞の至誠」

（中略）さらに街頭を見よ・・・そこには至るところに千人針風景が描き出されているのではないか、京城本町通りをはじめ全鮮主要都市の繁華街には千人針風景が数十数百描き出されてたのは北支駐屯の皇軍の武運長久を祈る愛国人の発露である、ここにも朝鮮婦人達が自から進んで愛国の熱誠をこめた一針が縫い綴ってゆく（下線筆者）

---

(1) 森南海子『千人針』情報センター出版局、昭和 60 年（1985）、p.261。

**事例 42)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 17 日付『大阪朝日新聞 (朝鮮西北版)』

「千人針 国境に漲る非常時気分」

愛婦や国防婦人会の会員は非常時に際し皇軍の武運長久祈願のため昨今神社へ参拝するもの多く、気が利いた人達は早くも弾丸除けの千人針を計画し、道行く婦人に一針づつの手数を乞うているなど国境□□□の街はさすがに満州に接しているだけ非常時気分が一入濃厚横溢している (下線筆者)

**事例 43)** 昭和 12 年 7 月 20 日付『大阪朝日新聞 (台湾版)』5 頁

「街頭には千人針風景」

北支事変に対する市民大会が各地に開催され国民的奮起を要望されているとき、高雄市街には可憐な女学生の千人針を求める姿が人の目をひいた、高雄淑徳高女二年生黒川良江さん (十五年) とそのお友達福田泰子さん (十六年) の二人は両親と先生の許しを得て□堤町市場、湊町市場で□女の大勢□るところに佇み一人一人の赤誠を集めている、千人針の腰巻を現地の兵隊さんに贈る日を楽しみに・・・

**事例 44)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 27 日付『大阪朝日新聞 (南鮮版)』

「朝鮮女性も千人針 京城より本社豆電送機にて」

(中略) 街頭における千人針にも朝鮮女性の姿が日一日と多く今や朝鮮同胞には日本人の血潮が脈々と波打っている (下線筆者)

**事例 45)** 昭和 12 年 (1937) 8 月 4 日付『大阪朝日新聞 (南鮮版)』

「軍用機献納に普校児童の魁け 献金や千人針にも」

(中略) 清津第一普通学校生徒は馬場校長の訓話や本紙記事にすっかり感激し、(中略) 同校馬場校長は北支事変勃発後ことあるごとに国民の覚悟を児童に教訓し、各児童はかねて個人的に国防献金や千人針を作成するなど全校をあげての愛国運動に市民から賞賛的となっている (下線筆者)

**事例 46)** 昭和 12 年 (1937) 8 月 10 日付『大阪朝日新聞 (満州版)』3 頁

「銃後は沸る 牡丹江の献金二千七百元」

【牡丹江特電七日発】 日満両国挙げて銃後の熱援涙ぐましき折柄、(中略) 街頭に一針求めて千人針を作って歩く我が国防婦人会員の健気な姿も続出し全市をあげて涙ぐましき銃後の熱援に余念がない (下線筆者)

**事例 47)** ○昭和 12 年 9 月 7 日付『大阪朝日新聞 (南鮮版)』

「身代りの千人針 弾丸雨飛の中を裸体で奮戦 走りつつ平気で吹く突撃ラッパ」

御庄少尉 私は腹部に二弾を負い擦過傷と右腕に貫通銃創を負うて死にかけていたが、奇しくも千人針のお陰で助かった、(中略) 抜刀して敵を斬っているうちに腹部に弾丸が当たった、血は出ているが、大したことはない、よくみると胴巻の千人針に二発とも当たっておりずたずたに千切れていた、今ではもう千人針は迷信だとは思え

なくなってしまった（下線筆者）

**事例 48)** 昭和 12 年（1937）9 月 26 日付『大阪朝日新聞（台湾版）』7 頁

「お馬にも千人針 超特大のを贈る 山下とも子さんの発願」

兵隊さんばかりでなく同じように活躍する出征軍馬にもとデッカイ千人針をこしらえて贈ったというやさしい女性がある（中略）山下とも子さんは愛国と動物愛の一心からこの両馬の武勲を祈るべく早速両馬のため千人針をはじめ毎日炎天下を汗だくとなって街々をめぐり歩いた、なにしろこの千人針は馬の腹帯にする白布にするものだけ非常に大きいもので、それに祈軍馬武勲の字も鮮かに千人針の赤糸を縫いあげたものである

**事例 49)** ○昭和 12 年 10 月 3 日付『大阪朝日新聞（南鮮版）』

「一念発起 愛国婆さん 目の見えぬ身 戸毎廻り 贈る五枚の千人針」

平北川居住木村つねさんは目も見えず足も悪い不具の老婆であるが、歓呼の声に送られて通過する皇軍勇士をなんとかして慰めてあげたいと千人針作成を思い立ち人家の少い川邑内を杖に縋って一軒一軒訪ねて赤誠の一針一針をもらっていたが、一ヶ月目のこのほどやっと五枚分が出来あがったので、二日次の手紙とマスク十五人分を添えて平壤憲兵隊に届出て、憲兵隊はもちろん邑民をいたく感激せしめている（下線筆者）

ここまで昭和 12 年（1937）の日中戦争開戦当時の新聞記事に見られる千人針習俗の活動について見てきた。現地人も協力的であるといった内容であるが、太平洋戦争末期にも行われた事例がある。

太平洋戦争末期、約十万人の学徒兵が出陣したが、植民地の学生も同様に戦地にかり出された。姜徳相『朝鮮人学徒出陣』をもとに紹介する<sup>(1)</sup>。

昭和 18 年（1943）の徴兵検査まで、植民地の総督府では「重点的教育」「鉄壁の資質向上」が三つの観点から行われたという。第一は、「壮行」に名を借り学生から自由な時間を奪い、第二は学生の不満解消、そして第三に学生の動揺を防ぐことであった。

第三は、神威発揚運動の小道具が学務局肝入りの伊勢神宮及び朝鮮人宮の御神符の「御下附」になったことと、この意図をさらに意義あらしめるため全朝鮮の女学生に御神符入れの「御守袋」の奉仕製作を命じたことから派生した。この措置は大日本婦人会及び各女専・女高の「身体検査及び内務班生活用の越中禪」「千人力の三文字を染めた腹巻」「弾よけ千人針」の三点セットづくりに婦女子をまきこむ第二の愛国運動に連動した。大日本婦人会員及び女子学生はミシン踏みや千人針の針を通してわが子、わが弟の出陣を実感し、母や姉が「検査場に臨む日の朝如何なる心構えを必要とし、子の決意を尊重、更にこれを力強く誇り養う心を尽し」など、搦手から学兵の動揺を

---

(1) 姜徳相『朝鮮人学徒出陣 もう一つのわだつみのこえ』岩波書店、平成 9 年（1997）、pp.278-283。

防ぐことになった。<sup>(1)</sup>

この後に学徒の残した言葉として「母が百里の道を歩きつづけた千人針のチョッキを着せてくれその精誠に限りなき感謝を感じた」という文章を紹介している。

現地の人々からすれば理解して行っていたわけでは無かったと思われる次のような証言もある。<sup>(2)</sup>

韓国人と違うと感じたのはですね、戦争に対して日本の女たちはそれを本当に自分たちの戦争だ、そんな態度だったけど、我々は一步下がって、傍観者的なそんなのがあったんです。日本の女たちが、例えば、私が一番印象的だったのが千人針。それを本当に信じてするのよ。あれをみるたび、私たちは、はばかりながら、おかしいな、それがなんになるの、そんなふうに思いました。けれど、彼女たちはそんなのをあれほど一生懸命やっていたのよ。日本人がいくら君は日本人だといっても、それがどうして同じなんですか。そうじゃないでしょう。

日本人と現地の人々の千人針に対する思いの違いがあったことを理解した上で、植民地での千人針についても今後掘り下げていく必要がある。また、アメリカにおける日系アメリカ人がアメリカ人としてヨーロッパの戦線に出撃する際に、千人針を贈られた事例がハワイ州とカリフォルニア州で確認されているが、今後、検証すべきである。<sup>(3)</sup>

---

(1) 姜徳相『朝鮮人学徒出陣 もう一つのわだつみのこえ』岩波書店、平成9年(1997)、p.281。

(2) 早川紀世『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、平成19年(2007)、p.181。

(3) 例えば、ハワイ州の米陸軍博物館 (US Army Museum) には千人針が展示されており、また IMPERIAL JAPANESE GOOD LUCK FLAGS AND ONE-THOUSAND STITCH BELTS, MICHAEL A. BORTNER, Schiffer Publishing Ltd; illustrated edition 版、平成20年(2008)、pp.188-189。などに写真が紹介されている。

## 第4節 銃後の護りと千人針

街頭での千人針風景は、一般の女性のみならず、多くの婦人会や女学生によりボランティアとして協力の手がさしのべられた。

まず、街頭での千人針協力については、**事例 1**（四高女愛国子女団員）、**事例 5**（洛陽高等技芸女学校生徒）、**事例 6**（松山高女へは約十人、城北高女でも四五人、済美も四五人その他東雲、松山技芸、専売局等それぞれ千人針が依頼されて来て居る。）、**事例 11**（都城高等女学校生徒七百八十名は炎天下の街頭に立ち道行く人々に呼びかけて千人針を作成）、**事例 12**（宮崎都城両高女生をはじめ女学生）、**事例 13**（宮崎高等女学校一年生から四年生専攻科生）、**事例 14**（延岡高女生）、**事例 16**（宮崎高等女学校生徒約三百五十名）、**事例 20**（富高実業学校女子部と第一富高校女子生徒）などがあり、多くの女学生たちが街頭に立って千人針作製に協力していたことが分かる。

更に積極的に学校内で千人針を作製したと思える事例がいくつかある。**事例 7**（県立加古川高女では十五日午前九時全校六百五十余名の生徒が校庭に集合し千人針を行った）、**事例 15**（都城高等女学校では北支の広野に活躍する戦士に送るため真心をこめて千人針を作成中であつた）、**事例 18**（宮崎女子高等技芸学校では、お小使いを貯めた金で全校生徒三百八十名が白木綿を買ひ、可憐な愛国の情を傾けた千人針入りの褌三百八十枚を作成）、**事例 21**（宮崎技芸女学校全生徒は二十六日越中褌を三百五十枚、千人針三百三十八枚を在支皇軍将士宛に発送）などである。流れ作業で千人針を作製することは忌まれたとの証言もあったが、実際には多くの女学校で一斉に千人針作製が行われた。

こうした女学校での千人針の実状について理解できる文献がある。堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ 60 人の体験』<sup>(1)</sup>には、アンケートに「千人針」の項目が設けられ、60 人の東京女子大学の生徒だった方々が答えている。自ら街頭に立って協力した、個人的に持ち込んで学校で千人針作製を行った、などの証言が目立ったが、それ以外にも学校の関わりを示す事例もあった。

**事例 50)** 千人針は個人的に持ち込まれたものではなく、学校の指導によって作りました。クラスで何枚かずつ作ったものを集めて、学校から軍部に納めたのだと思います。（金井慰子、p.595）

**事例 51)** お兄さんや従兄弟などが出征する人が、千人針の布を学校に持って来て、みんなに頼んでいました。千人針は普通一人一針ですが、寅年の女は年の数だけ結べるとなっていて、寅年のクラスへ持っていくと非常にはかどります。私たちの学年の多くは寅年ですから、小学校の頃からよく頼まれまして、休み時間などにセッセと結んでいました。（久野知子、p.634）

**事例 52)** 小学校五年生の時に日中戦争——当時は日支事変と言いました——が始ま

---

(1) 堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ 60 人の体験』教文館、平成 24 年(2012)。

り、千人針はその頃からしていました。もちろん女学校でもしました。家族が出征する人が千人針の布を教室に持ってきて、みんなに頼むこともありましたが、先生の指導によりクラスで何枚か作って提出することもありました。また街頭に立って一針ずつ募っている人もよくいましたから、そうした求めにも応じました。小学校は男女共学でしたが、男子と女子はクラスが分かれていました。男子のクラスでは千人針をしていなかったと思います。(嶋津智恵子、p.850)

女学生の証言であるため、学校にどの様に指示が来て、作製された千人針がどのように処理されたかは想像の域を出ないが、教師の指示により千人針作製を行った事例が少なからず有ったことが分かる。また、このアンケートの回答を見ると、学校によって対応がさまざまであったことが理解できる。

学校からの指導で千人針を作製した例としていくつか事例を見て行くこととする。まずは、文部省管轄の大日本連合女子青年団の記録を紹介しておく。宮崎県文書センターに所蔵される資料の簿冊名「男女青年」(昭和12年度)の「女青時局第十三号」には、昭和13年1月12日に、大日本連合女子青年団理事長名で、次のような調査が依頼されている(以下、下線は筆者による)。

各加盟団体長殿

女子青年団銃後活動状況ニ関スル件

標記ニ関シ客年八月二十八日付、女青時ニ□ヲ以テ単位団体ノ実績ニ、三ニツキ御報告方依頼致置候処今回更ニ左記事項□知致度候条御多忙中トハ被存候得共其ノ筋へ報  
国ノ都合モ有之候ニ付、来ル二月十日迄御回報相願度此段及御依頼候

この依頼に対して、4地区から千人針の活動を含んだ回答がなされている(下線は筆者による)。

○都城市 南女子青年団 団員数 一〇四名

1、出征軍人ノ慰問激励又ハ「遺家族救護等ニ関スル活動状況」

- 1、出征将兵見送。
- 2、出征将兵家族ノ訪問。
- 3、千人針ノ斡旋
- 4、慰問袋作製
- 5、遺骨出迎
- 6、出征将兵並ニ関係者ノ接待」

○都城市 大王女子青年団 団員数 四八名

1、出征軍人ノ慰問激励又ハ遺家族救護等ニ関スル活動状況

- 一、出征に先だち国防婦人会と合同にて武運長久祈願祭を県社神柱神社に執行、守護札並千人針を携えて其の家庭を訪問、慰問激励をなす
- 二、慰問袋を作成、現地将兵に送付、戦線勇士の苦闘を労う

○都城市 上長飯女子青年団 団員数 二六名

1、出征軍人ノ慰問激励又ハ遺家族救護等ニ関スル活動状況

- 一、毎月一回早朝小鷹神社ニ於テ皇軍将兵ノ武運長久祈願祭ヲ執行スルコト
- 二、皇軍将兵ノ送迎ヲナス
- 三、戦病死将兵ノ遺骨出迎ヲナス
- 四、出征兵ニ対シ千人針オ守リノ世話ヲナス
- 五、慰問品又ハ慰問文等ヲ發送スルコト
- 六、軍隊ノ演習ノ際ハ湯茶ノ接待ヲナス
- 七、毎月一回出征兵遺家族訪問ヲナス

○都城市 今町女子青年団 団員数 五九名

1、出征軍人ノ慰問激励又ハ遺家族救護等ニ関スル活動状況

- 1、国防婦人会員ト協カシ出征軍人遺家族訪問及ビ各支部ニ於テ団員輪番ニ該部落出征軍人遺家ノ家事ノ補助ヲナス
- 2、皇軍武運長久祈願ヲナシ各支部ニ於テ該部落出身将兵ヘ千人針御守札ヲ贈呈セリ

婦人会の活動などにおいて、千人針作製に協力することについて、その活動内容を明記した資料は少ないが、ここでは「千人針ノ斡旋」「守護札並千人針を携えて其の家庭を訪問」「出征兵ニ対シ千人針オ守リノ世話ヲナス」「将兵ヘ千人針御守札ヲ贈呈」と記されている点は注目される。

また、中等教育段階の女生徒を団員として満州事変後に、愛国婦人会の下部組織としてつくられた愛国子女団は事業として「千人針調製」を行っており、学校現場との関係が推測される。<sup>(1)</sup>

第二 出勤となりたる場合応召家族の先づ第一に求むるものは千人針なるべく而も急には之を得難きことを思ひ、支部長は七月十四日県下高等女学校愛国子女団四十一団に向つて一週間内に之れが調製を依頼したるが榮ある武運を祈りつゝ、一針毎に真心をこめて縫へるもの立つところに一万四千四百枚を準備せり（広島県支部、p.288）  
「第六 稿軍」の「慰藉贈呈」に、「千人縫 22,962 枚 3,125 円 6 銭」（広島県支部、p.291）  
「第九 子女団の奉仕」の項目に「1、千人針調製 22,962 枚」とある。（広島県支部、p.292）

以上のように愛国婦人会及び愛国子女団においては組織として千人針調製に協力していたことが分かる。特に広島県は愛国子女団の活動が盛んであったという<sup>(2)</sup>。

ここで千人針を学校でどのように作製したか分かる具体的事例を紹介する。明治 39 年（1906）生まれの大村はまという女性教諭が東京府立第八高等女学校（現東京都立八潮高

---

(1) 『愛国婦人会四十年史附録』愛国婦人会、昭和 16 年（1941）。

(2) 藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカップウ着』岩波文庫（黄）、岩波書店、昭和 60 年（1985）、p.160。



校)での千人針製作のようすについて記述している<sup>(1)</sup>。

**事例 53)** 私の勤めていた東京府立八高女は、定員一二五〇名、転校や病気による長欠その他で、日々の出席者は、一一〇〇名前後であった。つまり、全校でかかれれば千枚の千人針ができるのである。全校挙げて授業は休み、千人針千枚を作るようになった。

まず、前日の準備、

- (1)さらし木綿を適當の長さに裁断する。
- (2)二つ折りにする。
- (3)千個の印をつける。
- (4)赤い糸を同じ長さに切る。この糸の長さがまちまちでは、いっせいに縫うのに糸つぎのときが合わず、進行に差し支える。
- (5)針をそろえる。
- (6)布と糸をそろえて一組ずつ人数を合わせてまとめる。

そして当日、

- (1)各クラス級長以下四名、布などを運んだり配ったり、その他連絡の係として、本部付きにする。
- (2)各組の出席者数を確かめて、前日そろえておいた布などの数を合わせる。縫う人数を確実に千人にする。千人いない場合は、本部からもどらせる。多い場合は本部の手伝いにする。

当時は、出征などがあると欠席、その他事故欠席が多く、また、病気欠席も多かったので、縫い手千人を確保することは容易でなかった。

(3)いよいよ縫う。その様子は、まったく機械のようであった。針は二本ずつ配られ、その二本に赤い木綿糸を通して用意する。

第一のベルがリーンと鳴る。それを合図に一つ縫う。

第二のベルがリーンリーンと二回鳴る。縫えたのを次の人に渡す。

また、リーン。一つ縫う。

リーンリーン、次の人に渡す。

このようなくあい、一糸乱れず、一個ずつ縫い進める。二日かかりで千枚の千人針を仕上げた。しかし、その後「戦争が激しく、きびしくなるにつれて、千人針がだんだん見られなくなった。」という。

日中戦争開戦直後の新聞記事には、女学生が街頭での千人針を手伝う様子が記されていたが、臨時召集令状の数が膨大になると、千人針の需要も増え、学校単位で、大量生産することとなった。しかし、太平洋戦争に突き進むことで、千人針を作ることさえも厳しい局面をむかえることになる。

第1章第6節「銃後の発見と国防婦人会の活躍」において、婦人会と千人針の関係性に

---

(1) 大村はま「千人針と学校工場」『女たちの八月十五日 もうひとつの太平洋戦争 小学館ライブリー68』小学館、平成7年(1995)、pp.39-41

ついて触れ、千人針風景に婦人会が協力することはそれほど見られなかったことを指摘したが、ここでは日中戦争以降の婦人会活動における千人針への協力の実態について見ていくこととする。

**事例 54)** 昭和 12 年 7 月 16 日付『海南新聞』

「国婦本部も奮起」「本部長から激励電」「力強き銃後の支援誓ふ」

国防婦人会愛媛県本部では日支事変の事態刻々最後の局面を展開せんとする時、挙国一致の実を挙げ有事の際は今度こそ結成以来初めての銃後の力発揮の秋に際会して十四日県本部長鳥谷トミ夫人から四市十二郡の支部長に左の電報を打ち激励した、

正に皇国興発の秋到る愈々部内の固めを難くし銃後の力を発揮するよう指導ありたし（中略）

なほ国婦愛媛県本部からは管下の各支部と分会長に対し北支事変に対する善導に関する左の指令を發した、既に県下各分会では総会開催をし、目下行はれてゐる簡閲点呼に優秀な成績を挙げしめるように努力し、皇軍激励、慰問袋、慰問文發送準備等を計画してゐる。

14 日に愛媛県の国防婦人会に通達があり、そこから総会を開催し、計画を立てたことが分かる。第 2 章第 1 節「日中戦争と全国的広がり」で述べたように、開戦から遅れて 14 日から全国各地で千人針風景が見られた記事を紹介したが、事前に分かっていたことではなく、直前に各都道府県に指示があったことが分かる。国防婦人会が結成されたのは、満州事変の後であった。記事にあるように、国防婦人会にとっては「結成以来初めての銃後の力発揮の秋」として出征兵士を見送る計画を進めていった。しかし、国防婦人会の千人針に関する活動は表だっで行われた訳では無かったとの指摘もある。藤井忠俊は次のように日中戦争開戦当時の千人針風景の特徴を説明している。<sup>(1)</sup>

千人針といえ、**「上海事変」**の時、大阪市内で街頭に立って話題を集めた主婦たちが大阪国婦を結成したものだ。その意味で、国婦と千人針には浅からぬ因縁がある。ところが、日中戦争ではとりたてて国婦の姿が目立ったわけではない。街角にはむしろ家族の訴えがせつなく響き、団体では愛婦のほうが積極的に見える。ことに愛婦系愛国子女団を編成している女学校は千人針の主戦力になっている。この時期の千人針風景写真には、どこでも国婦のカップウ着姿がほとんど見当たらないのが特徴である。

愛国婦人会の千人針についての活動は、『愛国婦人会四十年史附録』に掲載された各府県支部の軍事後援に関する会務報告などで報告されている。<sup>(2)</sup>

---

(1) 藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカップウ着—』岩波文庫（黄）、岩波書店、昭和 60 年（1985）、pp.159-160。

(2) 『愛国婦人会四十年史附録』愛国婦人会、昭和 16 年（1941）。

- 「第六 稿軍」の「慰藉贈呈」に、「千人縫 22,962 枚 3,125 円 6 銭」(広島県支部、p.291)
- 「寄贈金品」に「品種」として「千人縫」が記載されている。(鳥取県支部、p.281)
- 「寄贈金品」に「物資種目」として「千人縫」が記載されている。(山口県支部、p.293)
- 「寄贈金品」に「物資種目」として「千人縫」が記載されている。(福岡県支部、p.313)

以上の例のように、婦人会が組織的に千人針の活動について組織的に取り組んでいたことは明らかであろう。愛国婦人会や国防婦人会と千人針との組織的関係性は今後検証しなければならない課題である。

こうした活動も婦人会の大改革で大きく変わる事となる。昭和 16 年(1941)6 月、20 歳未満の未婚者を除く、日本人女子全員を組織するため、「婦人団体統合要綱」が閣議で決定され、これを受けて愛国婦人会・大日本国防婦人会・大日本連合婦人会の 3 団体が統合され大日本婦人会に発展的解消を遂げ、昭和 17 年(1942)2 月に結成式が挙行された。その後、同年 5 月大政翼賛会に加盟した。その後の活動について藤井忠俊は次のように表現している。

大日本婦人会成立以後の婦人会活動にはほとんどふれることができない。ただ、当時、全婦人の組織化について「一人残らず会員だと云うことは、誰もが会員でないのと同じ」と評した人のことが思われる。婦人の活力は統合によってかえって失われた。この時、国婦の生みの親、安田せいも組織から去った。<sup>(1)</sup>

こうして婦人会の活動が行われなくなり、それと軌を一にして、街頭での千人針風景も次第に見られなくなった。

---

(1) 藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカップウ着—』岩波文庫(黄)、岩波書店、昭和 60 年(1985)、pp.206-207。

## 第5節 宗教による千人針の受容と展開

### 第1項 戦時下の宗教活動について

昭和12年(1937)7月7日の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発。それとともに国内では国民精神総動員運動が始まる。戦時体制の強化として「神社・皇陵の参拝」が義務化され、「出征兵士・英霊・傷痕軍人の送迎」が積極的に行われるようになった。こうした状況の下で、国家神道を中心に武運長久が祈願され、他の宗教でもその点に配慮しながら同様の活動を行った。

西村明は、戦時下の宗教界の状況について宗教学の立場から千人針との関わりについてまとめている。西村は、昭和5年(1930)に創設された日本宗教学会の学会誌『宗教研究』に登場する戦争研究について触れ、昭和14年(1939)に記された濱田本悠「日本宗教の現代的問題」では、当時の戦時状況における戦争と宗教の関わりを深さを示す事例として一方で「千人針」や「弾除け」祈願が取りあげられていることを指摘している(1)。

濱田は、「千人針」行事が運針などをめぐって戒律やタブーといった宗教儀礼の特徴を兼ね備えていることを指摘し、しかし、それが誰かの創出によるものではなく、自然発生的なものであって、戦時雰囲気のもつ原始性と通底する性格であると論じる。さらに引用部に続けて、戦時に多用された「お守り」「お札」などのなかには神霊の観念を伴わない場合もあり、それらは「魔術 magic」、巫女的考案に基づく「魔除け」の性格を残存させたものであるが、「不動や清正公の神観念」といった宗教観念に結びついている部分を有すると指摘している。したがって、濱田がここでおこなっている議論は、進化主義的な宗教学説を用いながら、「千人針」という戦時下の社会現象を宗教性のひとつの現われとして読み解いていくものであったと言える。

このように戦時下に突如として当然のものとして流行していた千人針に対して、宗教界は単なる俗信として排除できない状況であったことが分かる。それぞれの宗教界は何とか理屈を付けて千人針を位置づけようと様々な解釈で千人針を捉えようとした。

### 第2項 神社祭祀に見られる千人針祓

ここでは、民間で生まれた千人針の習俗と神社との関係を見ていく。千人針を神道がどのように受け入れたかを見ていく為に、「祝詞」と「千人針祓の実態」の2つのポイントに絞ってみたい。

一つは、祝詞である。千人針祓を行い、それに魂を込める為には祝詞が必要となる。基本的には、神社神主の判断で、オリジナルの祝詞を上げることが一般的であるが、虎の巻

---

(1) 西村明「アジア・太平洋戦争と日本の宗教研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集、国立歴史民俗博物館、平成20年12月、pp.69-70。

として、祝詞の例文集のようなものが発売されている。日露戦争の頃のものからいくつかの祝詞を確認した<sup>(1)</sup>が、千人針習俗についての祝詞が出てくるのは日中戦争以降であった。昭和12年(1937)11月1日発行の『新釈戦時雑祝詞集』(明文社)の「凡例」に、当時の状況が記されている。

事変下に於ける神社程、あらゆる意味に於て、国民の中心をなすものは、他に無いであろう。大命を蒙るや、先ず拝するは自家の神棚であり、村の氏神である。鎮守の森に欲する見送りの万歳は、やがて北支に南支に強敵を殲滅し堅陣を屠って揚げる万歳のそれである。

今度会うのは九段坂靖国神社でと、笑って死地に就く勇士達や、内に在って老いたる父母や、あどけない子供が合す両の手に、日本民族は永久に栄え永遠に生きるのである。

此の重大な意義を持つ神社に、身を以て奉仕される神職諸賢へ、全国各地に於て極く最近、而も厳かに執行われた数々の祭典に、誠心こめて天神地祇に献げられた、数々の祝詞を編纂して贈る。蓋し無意味な事ではなからうと確信する。

この祝詞集は、「天之巻 軍事篇」「第一章 国威宣揚・戦勝・武運長久祈願に関する祝詞」に十三の祝詞が挙げられ、「第二章 応召・出勤・凱旋に関する祝詞」の十六の武運長久を中心とした祝詞のなかに、「千人針修祓詞」(小泉清治)と「出征奉告千人縫祈願祭祝詞」(厚見正秀)の二つの祝詞が紹介されている。

#### 事例 55) 「千人針修祓詞」(東京) 村社大鳥神社社掌 小泉清治

掛巻モ畏キ□□神社ノ大前ニ、恐ミ恐ミモ白サク。無道仇ノ軍ヲ打攘ヒ討チヲ鞫ムト、  
大命戴持チテ、戦場ニ出立向フ御軍人ニ、禍事在ラセジト細矛千人ノ人ガ、針先ニ心  
ヲ籠メテ縫ヒニ縫ヒ結ビニ結ビテ取造レル、此ノ腹帯ヲシ身ニ著ケム 某ニ靈幸坐シテ、身健  
ニ病シキ事無ク傷ク事無ク、服ハヌ仇ヲ事向ケ、目出度ク勤シク報命白サシメ給ヘト、恐  
ミ恐ミモ乞祈奉ラクト白ス。(昭和12年(1937)9月)

#### 事例 56) 「出征奉告千人縫祈願祭祝詞」(石川) 県社安江神社社司 厚見正秀

掛巻モ畏キ安江神社大前ニ、恐ミ恐ミモ白サク。畏キヤ吾ガ天皇命ハ、常ニ刈菰ノ乱  
レニ乱レタル、支那国ヲ思ホシ憂ミ給ヒテ、安ク正シキ国ニ阿奈々比導キテ、俱ニ共ニ安国  
ノ幸国ト在リ隆エム事ヲ、深ク遠ク思ホシ慮リ給ヒテ有リシニ、如何ナレバカモ屢々盟ヲ戻キ、  
彼方此方ニ我ガ国民ヲ傷害メ、我ガ商業ヲ損ネ、今度又北支那ニ皇軍ヲ輕シメ奉リシカバ、  
今ハ黙止有ルベキニ有ラズト、醜メキ仇ノ軍討罰メ給フ大皇軍ヲ進給ヒヌ。此ヲ以チテ御氏子  
ナル何某イ、大君ノ醜ノ御楯皇国守ノ兵ト徴サエテ、此ノ戦ニ出征ムトスルニ依リテ、大神  
ノ高キ広キ恩頼ヲ蒙奉ラムト、今シ大前ニ参上リ、禮代ノ物捧奉リ拝奉ル状ヲ、平ケ  
ク安ケク聞食シテ、大神ノ高キ畏キ大御稜威ヲ幸給ヒテ、大御璽ヲ持斎キ斎奉リ、又又

(1) 三崎民樹編『戦時祝詞集』水穂会、明治37年(1904)12月発行。山内祀夫『続新撰祝詞集上下二巻』西濃印刷会社出版部、大正5年(1916)3月。

ヤマトダマタマコモ チタリ ヲミナ イホハリ チハリ ハリ ハコビ ヒト ヒト アタ アダタマアタ カタ ツヨ  
 日本魂籠ル千人ノ女ノ五百針・千針ト、針ノ運ノ一ツ一ツニ仇ノ徒弾中ラジト、固キ強  
 キ念心ヲ籠メテ、縫ヒ結ビ結ビ止メタル此ノ白木綿ヲ、身ニ多斯ニ取付ケ取帯ビテ出征ツ 随ニ、  
 身健カニ心剛ク、病シキ事無ク傷付ク事無ク、醜ノ仇等ニ伊向ヒテハ速(スミヤ)速ケク討罰  
 メ攘退ケテ、武キ雄々シキ功ヲ立テ、高キ芳シキ名ヲ顕ハサシメ給ヒテ、畏キ天皇命ノ大御  
 任任ニ対ベ奉ラシメ給ヘト、恐ミ恐ミモ白ス。(昭和12年(1937)9月)

※一部漢字表記をカタカナ表記に変更した。以下、同様である。

また、昭和13年(1938)7月発行に河野鐵憲著『支那事変戦時祝詞選集』が刊行されている。この中には、数々の出征兵士祈願の祝詞が収録され、千人針習俗についての祝詞も三つ掲載されている。

**事例 57) 「千人針弾丸除祈願祭詞」**

掛巻クモ畏キ。某神社ノ大前ニ白サク。邪ク曲レル支那ノ仇共ノ。近頃ヨリ弥志久志久ニ  
 禍禍業凶暴ク成行ケバ。皇軍ヤ出征シテ打鎮メムトシテ。今度出征ト軍人氏名イカ国民  
 ノ清キ明キ至誠ノ心籠メシ千人縫ヒノ弾丸除ノ御守帯ニ。皇神等等ノ伊豆神靈神依リ鎮座  
 テ。頑狂醜ノ禍弾丸剣太刀ヲ攘ヒ退ケテ打寄ル事无ク。諸病煩ヒニ罹ル事无ク。伊加志  
 ノ神魂ト身健ニ心剛ク守リ幸ヘ給ヘト白ス。

**事例 58) 「千人針弾丸除御守帯遷霊詞」**

此ノ千人縫ノ御守帯ニ。皇神等ノ神靈。神依リ鎮リ坐セシ白ス(心中にて祈念する。これを終って、「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コノ、トヲ、モモ、チ、ヨロヅ」とヒフミの神歌を三唱すべし。)

**事例 59) 「弾丸除祈年祭式作法」**

千人針弾丸除には、予め結目のある表の布に「□□神社武運長久弾丸除之神靈」とか「□□神社武運長久祈願御守」などと書き、神靈の印を押し、氏名を傍に書くべし。

□行事作法

先著床。(千人針、神饌、祭員、参列員の順に払うべし。)

次千人針、並ニ神饌ヲ案上ニ奉ル。

次祝詞ヲ奏上ス。

次遷霊詞ヲ心中ニテ祈念し、ひふみノ神歌ヲ三唱ス。(斎主、祝詞奏上を終りて直ちに行うべし。この間、警蹕)

次千人針、神饌ヲ撒ス。

次千人針ヲ授与ス。

次退下。

これらの祝詞を使い、千人針祓がどのように執行されていたかを、宮崎神宮所蔵の神社日誌をもとに見ていきたい。

### 第3項 宮崎神宮の神社日誌にみる「千人針祓」

ここからは宮崎県における武運長久祈願の代表的な宮崎神宮で、具体的にどのような「千人針祓」がどのような頻度で、いつ頃まで行われてきたかを、宮崎神宮が所蔵している神社日誌を中心に見ていきたい。

宮崎神宮は、神日本磐余彦天皇かんやまといわれひこのすめらみこと（神武天皇）を祭神とし、相殿に鸕鷀草葺不合尊、玉依姫命を祀る。旧官幣大社で、古くは「神武天皇宮（社）」、「神武天皇御廟」などと称され、明治6年（1873）に「宮崎神社」、同11年（1878）に「宮崎宮」、大正2年（1913）に「宮崎神宮」と改称され現在に至る。

戦時中の新聞に当時宮崎神宮がどのように位置づけられ、人々に受け入れられていたかを当時の新聞記事から見てみたい。

#### 事例 60) 昭和12年（1937）9月23日付（夕）『宮崎新聞』

「歴史に輝やける 神武の森・宮崎神宮 玉砂利につづく・・・麗しき非常時風景」  
官幣大社宮崎神宮といえ八十五万県民中三歳の幼子もこれを知っているに違いない。それほど宮崎神宮は県民にとってゆかりの深い神宮である。今時北支の風雲急を告げ一色触発の重苦しい風雲低迷し皇軍が敢然正義の楯を執るや、国家の安泰と皇国の武運長久を祈願する人の群れをなした。ことに我が郷土部隊が威風堂々として北支の野に向う報伝わるや一般家庭は勿論、国防婦人会、愛国婦人会その他一般団体等が一日数千と押しかけて折からのしのつくような風雨をも厭わず一心に将兵の武運長久を祈願し、いまなお終日祈願者が絶えない有様である。殊に玉砂利の参拝道の両側に立って参拝者の婦人に千人針の一を依頼する姿は実に美しいものではっきりと祖国日向の神苑にふさわしい非常時の風景を描き出していた。

宮崎県下にも、都城市かんぼしらぐうの神柱宮や延岡市たけやの竹谷神社など、戦勝祈願で有名な神社は多くあったが、なかでも宮崎神宮が大勢の参拝者で賑わっていた様子が記されている。

ここから具体的に神社日誌を見ていくことにする。宮崎神宮の日誌には、「日誌」と「社頭日誌」があり、明治期から現在まで記録している。そのうち明治30年（1897）から昭和20年（1945）の日誌を平成21年（2009）に調査することができた。「社頭日誌」は、記録の内容が具体的で、月日・曜日・天気・当直者に続き、箇条書きにその日の勤務内容（引き継ぎ、来客、参拝客など）が箇条書きされており、当時の神宮境内での状況が把握できる。また「日誌」は、月日・曜日・天気に続き、毎日の祈願内容とその件数・人数が明記してあり、千人針祓の件数の統計を出すことが可能である。まずは、この2つの日誌から千人針祓に関する部分を抜粋する。あわせて『宮崎新聞』の記事と照らし合わせて、その当日の様子を確認していく。

#### 事例 61) 「社頭日誌」昭和12年（1937）7月17日 土曜 雨

一、午前八時宮崎市国防婦人会三千名武運長久祈願祭執行、社頭ニテ千人針縫ノ婦人多ク、守札ノ授与多ク、非常時ノ気分横溢ス

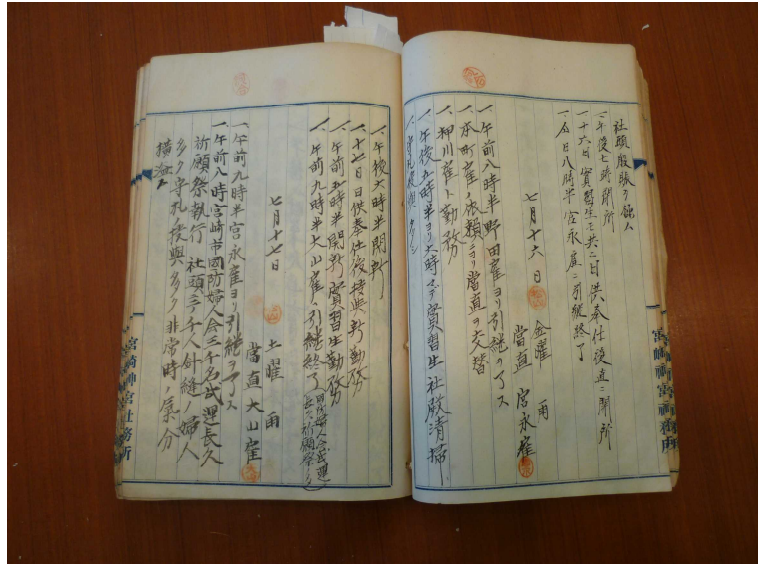


写真 2-10 「社頭日誌」昭和 12 年 7 月 17 日（宮崎神宮所蔵）

この日の様子は、『宮崎新聞』にも記されている。

**事例 62)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 18 日付 (夕刊) 『宮崎新聞』

「神武の原頭に 愛国千人針 在支将兵に贈らる」

銃後の護りは私達の腕で」と甲斐甲斐しく叫んで起った国防婦人会宮崎支部福島支部長ほか会員五百名は十七日午前七時四十分宮崎神宮へ集合、午前八時から社頭で心かなる北支駐屯軍将兵の武運長久を祈ったが、さらにそれを同時に神宮第一鳥居脇で千人縫を行って非常時の国防婦人の意気をみせている。早朝からの人々で一人一人による厚い愛国心に千人縫の完成も近いがこれは総て直ちに在支将兵送るのである。

また、同紙同日の新聞には、「軍国色」に塗られた けさの神宮社頭 三千の国婦に中等学生を加え 赤誠の祈願行わる」と記され、三千人の国防婦人会会員が集まったことが分かる。さらに同紙同日の紙面には、「愛国婦人会員の千人針（宮崎神宮社頭で）」と題して写真も掲載されている。

その後、「社頭日誌」において特に千人針については、

**事例 63)** 「社頭日誌」昭和 12 年 (1937) 7 月 22 日 木曜 晴

一、社頭ニ於て千人針ヲ参拝者ニ依頼スル婦人会員（個人）ヤ女学生アリ

といった内容のみで、特筆すべき記述はなかったが、7 月 28 日から 29 日にかけて、宮崎神宮は大変な状況となった。

**事例 64)** 「社頭日誌」昭和 12 年 (1937) 7 月 28 日 水曜 曇時々雨

一、授与所 千人針祓、武運長久祈願受付ニ大多忙ナリキ、守札授与一千九百四十六

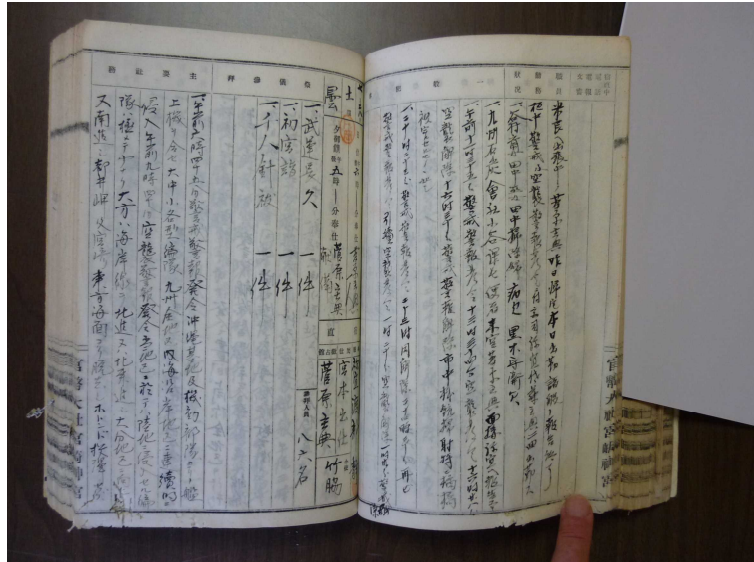


体一人ニテ三十体二十五体二十体ト受けシ者段々アリタリ（中略、筆者）  
 一、多忙ノ為職員及実習生殆ド全員社頭勤務（中略、筆者）  
 一、二十九日早朝ヨリ参拝者多く、又千人針祓、武運長久祈願アリシ為、日供奉仕ノ間、実習生へ依頼シテ開所

**事例 65)** 「日誌」昭和 12 年（1937）7 月 28 日

一、武運長久祈願、千人針祓早朝ヨリ夜中マデヒキモキラズ団体個人ヲ合シテ四十三件

この日の宮崎神宮の様子は翌日の『宮崎新聞』に記されている。



**事例 66)** 昭和 12 年（1937）7 月 29 日付『宮崎新聞』

「県民極度に緊張して  
 神宮参拝三万人 御符を受けたものも約千人 街頭に活躍の女性」  
 北支事変再悪化にともない県民はさらに緊張

**写真 2-11** 「日誌」昭和 20 年 7 月 28 日（宮崎神宮所蔵）

の色濃く県下等しく戦時体制下にあるが二十八日の宮崎神宮参拝者は俄に激増して早朝来からひっきりなしに在支将兵武運長久祈願社在郷軍人、国防婦人、愛国婦人、市内、各区民等約三万人と云われ遠く農村からも続々参拝している。（中略、筆者）なお神宮の御符を受けたものも正午までに約千人の多きに達している。

また、『宮崎新聞』の次のような記述もあった。

**事例 67)** 昭和 12 年（1937）7 月 29 日付（夕）『宮崎新聞』

「未明から正午までに 五万人の参拝者 しの突く雨中に宮崎神宮へ お賽銭が千円突破！！！」

北支事件勃発と同時に街から津々浦々に至るまで千人針を依頼する人達で非常時の美しい情景を描いているが、同時に宮崎神宮における将兵の武運長久を祈願する人達も日についで増加し、参道は恰も終日蟻の行列の観を呈しているが、二十八日は土砂降りの雨の中を意ともせず各町村区民官庁団体の祈願者が未明からまるで精米器の口から吐きだされる米の如くで正午までにはすでに三万人の参拝者を突破し御守御符は羽が生えた如く八百五十を越えるに至った。午后は市内在住者よりも郡部からの参拝者が多く、児湯郡、東諸県郡方面から子供を背負って篠付く雨の中に一心に祈願した。参道の両側には女学生、国防婦人会員が参拝者の一人一人を捉えて千人針を依頼していたが、日没までの参拝者は五万一千人で近來にない記録を作り夕刻までの御守の売

上げは二千三百枚お賽銭の上り高は千円を越したと云われている（写真上は郡部から押寄せた参拝者、下は口の御札授与所と千人針を縫う乙女）

翌日の二十九日も賑わいは続くこととなる。

**事例 68)** 「社頭日誌」昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日 木曜 曇 雨

- 一、参拝者多ク職員実習生殆ド全部社頭ニ勤務
- 一、守札一〇〇〇体以上授与セリ
- 一、千人針祓武運長久祈願六十件以上モ有リ受付ニコンランシたり

**事例 69)** 「日誌」昭和 12

年 (1937) 7 月 29 日

- 一、武運長久祈願、千人針祓申出総計七十件、充員招集ニ依リ参拝者大小□ニカカワラズ早朝ヨリ夕刻マデ非常ニ多ク祈願寄付、守札□□多忙ヲ極ム

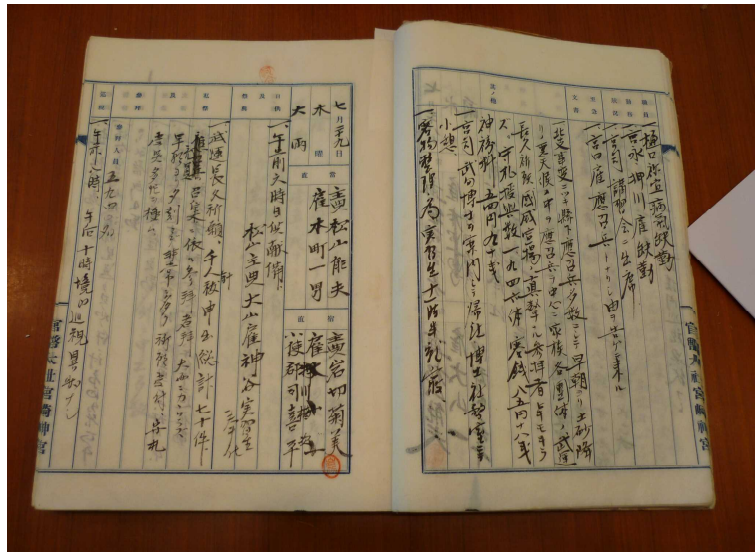


写真 2-12 「日誌」昭和 12 年 7 月 29 日 (宮崎神宮所蔵)

連日の賑わいについて、『宮崎新聞』には、

**事例 70)** 昭和 12 年

(1937) 7 月 30 日付『宮崎新聞』

「きょうもまた 神宮参拝一万人 御守も四千に上る」  
 戦時体制下にある二十九日の宮崎市は雨に包まれながら重苦しい緊張の色が溢れ、いやがうえにも高潮した、銃後の雄々しい風景を点殺している、この日官幣大社宮崎神宮は二十八日より以上の皇軍兵士武運長久祈願参拝者で雨に濡れた神武参道社頭は雨傘のオンパレードで大混雑を示し、社務所当局も非常な緊張味を帯びている。参拝者の多くは在郷軍人、国婦、愛婦、各団体、一般市民で正午までの参拝者一万人に上り由緒深い神符を御受けしたものの約四千人で大淀一神宮間の宮崎バスは二分間置きで臨時増発を行っている、この他有名な住吉神社参拝者も雨中をついて続々と参拝を行っている

とあり、バスを増便して対応していた。その後、8 月 1 日に全県で一斉に行われた皇威宣揚皇軍健勝祈願祭が行われ、

**事例 71)** 昭和 12 年 (1937) 7 月 24 日付『宮崎新聞』

「八十五万全県民が 忠烈一如の誓い 皇威宣揚、皇軍健勝祈願祭を 八月一日一斉に執行」

北支事変に処する八十五万の忠烈一如を如実にして宮崎県では来る八月一日各市町村一斉に皇威宣揚皇軍健勝祈願祭を行うことになり、二十三日社寺兵事課から左の如く平間社寺兵事課長名を以て通牒を發した。(後略、筆者)

この賑わいもおさまり、この後は次の記述のように、召集時期と重なるように、宮崎神宮も多忙な時期があったことが分かる。

**事例 72)** 「社頭日誌」昭和 12 年 (1937) 8 月 5 日 木曜 晴

一、千人針祓守札授与相当アリ多忙ノ為久保田助勤ニ助勢ヲ依頼ス

一、千人針祓ニ御初穂料貳拾錢奉納終リテ後、御祓ガ有難ク勿体無イカラト、參拾錢ヲ奉納増シ収タル婦人アリタリ

**事例 73)** 「社頭日誌」昭和 13 年 (1938) 5 月 17 日 火曜 晴

一、召集兵ノ武運長久及千人針祓ノ祈願多数アリ社頭大多忙ナリ

**事例 74)** 「社頭日誌」昭和 14 年 (1939) 8 月 13 日 日曜 晴

一、參拝者多ク、武運長久並ニ千人針祓ノ祈願又多シ授与所多忙ヲ極ム

**事例 75)** 「社頭日誌」昭和 16 年 (1941) 2 月 15 日 土曜 晴天

一、満州守備隊入營ヲ前ニシテ入營千人針祓武運長久祈願連続的ニアリ

「日誌」には、毎日の祈願内容と件数が明示されているため、ある程度の統計を取ることができる。月別の表を掲載しておく(表2-3 宮崎神宮「神社日誌」にみる千人針祓の月別祈願数参照)。

昭和 12 年 (1937) 7 月 7 日の日中戦争の勃発から遅れて、昭和 12 年 7 月 18 日に 2 件の千人針祓が見られる。千人針祓が特に盛んなのは、同年 7 月 28 日の 43 件に始まり同年 11 月頃まで、13 年 (1938) 5 月 16 日の 24 件から 5 月 29 日の 17 件までの期間である。その後は 14 年 (1939) 4 月 3 日に 15 件、この前後にも増えている。

岩田重則は、「十五年戦争の終わり近くには、召集があまりに日常的になったためであろうか、それとも食料品から日用品にいたるまで、あらゆる品物が不足したためであろうか、あるいは、本土爆撃が日常茶飯事になり、出征者のみならず「銃後」の人々の生命さえも危うくなったためであろうか、いずれにせよ、千人針は消滅していたのである。」<sup>(1)</sup>と断言しているが、わずかではあるが、千人針祓が昭和 20 年 (1945) 7 月 28 日まで行われており、少なくとも宮崎県においては、終戦間際まで千人針が作られ続けていたと考えてよいことがこうした宮崎神宮の記録の上からでも分かる。

ここまで宮崎神宮の千人針祓の記録をみてきたが、実際にどのような千人針祓が行われていたかは不明である。祝詞については、中央である程度のひな形が作られ、それを使用していたと思われる。

---

(1) 『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社、平成 8 年 (1996)、p.204。

表 2-3 宮崎神宮「神社日誌」にみる千人針祓の月別祈願数参照

日付(昭和)	件数	15年3月	9	18年1月	27
12年7月	262	15年4月	4	18年2月	14
12年8月	185	15年5月	10	18年3月	12
12年9月	116	15年6月	12	18年4月	20
12年10月	69	15年7月	20	18年5月	14
12年11月	23	15年8月	33	18年6月	40
12年12月	2	15年9月	9	18年7月	23
13年1月	2	15年10月	5	18年8月	17
13年2月	15	15年11月	15	18年9月	17
13年3月	6	15年12月	7	18年10月	27
13年4月	14	16年1月	9	18年11月	35
13年5月	188	16年2月	11	18年12月	10
13年6月	19	16年3月	12	19年1月	10
13年7月	51	16年4月	5	19年2月	11
13年8月	35	16年5月	2	19年3月	12
13年9月	42	16年6月	14	19年4月	27
13年10月	24	16年7月	85	19年5月	24
13年11月	29	16年8月	19	19年6月	33
13年12月	39	16年9月	30	19年7月	11
14年1月	16	16年10月	13	19年8月	32
14年2月	12	16年11月	10	19年9月	34
14年3月	14	16年12月	23	19年10月	19
14年4月	63	17年1月	39	19年11月	18
14年5月	19	17年2月	34	19年12月	6
14年6月	16	17年3月	28	20年1月	1
14年7月	30	17年4月	26	20年2月	7
14年8月	32	17年5月	13	20年3月	17
14年9月	26	17年6月	11	20年4月	12
14年10月	9	17年7月	13	20年5月	7
14年11月	20	17年8月	30	20年6月	13
14年12月	10	17年9月	13	20年7月	7
15年1月	20	17年10月	6	20年8月	0
15年2月	36	17年11月	26		
		17年12月	41		

祓いを受けた実際の千人針については宮崎神宮では所蔵していなかったが、隣にある宮崎護国神社に所蔵している 14 点の千人針を実見することができた（第 4 章参照）。そのなかに千人針祓の際に押されたと思われる「官幣大社宮崎神宮」と記された御朱印入りの千人針がある（写真 2-13）。詳細は不明であるが、おそらくは日誌に記されている「千人針祓」の記述は、千人針祓の祝詞をあげ、御朱印を押すことが行われたと考えられよう。



写真 2-13 千人針祓の御朱印（宮崎神宮所蔵）



写真 2-14 アメリカから返還された千人針（宮崎護国神社所蔵）



写真 2-15 御守り こうしたお守りが千人針とともに携帯されていた。

（宮崎護国神社所蔵）



## 第4項 浄土真宗における千人針論争

千人針習俗は、日中戦争の開始とともに、全国的に大流行となるが、すべての人がすぐに受け入れたわけではなく、新聞紙上でも千人針習俗についての議論が起こり、千人針を迷信として排除しようとする意見が出た。宗教界では、神道のように日中戦争開戦とほぼ同時に千人針祓として受け入れたように、現存する千人針の中には、神社だけでなく、寺院の御朱印のある千人針も多く存在する（第4章第2節参照）。しかし、仏教の中でも特に迷信を嫌うと言われた浄土真宗では、大きな議論となったようである。

『真宗の世界』第18巻第7号（昭和13年（1938）7月1日、大日本真宗宣伝協会）に「梅原真隆氏と野依会長との対談会」と題して、「千人針は迷信か」「真宗教義と神社崇拜」などのテーマでの討論が掲載されている。野依秀市<sup>(1)</sup>は新聞社の主筆で、梅原真隆<sup>(2)</sup>は浄土真宗本願寺派の僧侶である。

### 事例76) 「梅原真隆氏と野依会長との対談会」

◇千人針は迷信か

野依「千人針は決して迷信ではない。それを受ける人も、送る人も真心を以てする所には迷信も何もあつたものではない。」

梅原「千人針については、取扱ひ方によつて良くもなりわるくもなる。そこで或は某宗教家のやうな観方も生れて来よう。だが、私は良い意味に於て千人針を肯定するね。千人針は要するに国民の出征将兵に対する真心の現れである。そのまごころの表示としては大いに尊重していゝと思う。タバ之に伴ふ迷信的な弊害が起らぬとも言へぬから、その点は注意しなければならぬ。

例へば千人針は弾丸除けになるといふやうなことを真面目に信じてゐる将兵は恐らくあるまいと思ふ。且つ、銃後国民の赤誠の表現として、眼に見えぬ偉大な精神的の力を与へることは疑ひないではなからうか。此の意味に於て千人針は決して排斥すべきでないと思ふね。」

野依「一口に迷信といふが、物事は凡ゆる角度から観た上でなければ断案は下せるものでない。千人針を迷信といふのも、要するに盾の一面から見た軽率な言ひ分で、他の一面に大ひに有意義な、国民の誠意、即ち真心といふものが籠つてゐることを閑却した言ひ分だ。」

梅原「要するに千人針は国民の真心の表現として価値づけて行くところに意義があるのぢやないか。言葉を換へていへば、挙国一致の反映、国民精神の発露なのであつて、此の赤誠の現はれは当然尊重すべきものぢや」

野依「私は常識からも、真宗信者としての立前からも、迷信は極力排斥するものであるが、千人針については、今梅原さんのお説に全然同感だね。これを兎や角いふのは

---

(1) 野依秀市 (1885 ~ 1969) : 実業之世界社社長兼主筆。衆議院議員。『実業之世界』(明治41年(1908)~)、『真宗之世界』(大正10年(1921)~)、『帝都日日新聞』(昭和7年(1932)~)。

(2) 梅原真隆 (明治18年(1885)~昭和41年(1966)) : 浄土真宗本願寺派の僧侶。参議院議員。大正8年(1919)に仏教大学(現在龍谷大学)の教授、戦後は富山大学学長などを歴任。

全く怪しからんと言ひ度いね。人間の生きる実際の力を無視してゐる浅墓な言ひ分だ。  
千人針に限らず他のことでも、他人からみれば迷信でも、本人に取つてそれが効果あ  
れば一概に迷信とは言はれぬことを忘れてはならぬのだ。

しかし、又考へねばならぬのは、たとへ本人に取つて迷信でなくても、その行ひが  
一般社会、国家に害毒と認められるれば、断じて弾圧を加へねばならぬ。」

◇「祈願」をどう見る

記者「次に浄土真宗では祈りといことを認めて居らないやうですが、神社に戦勝や武  
運長久の祈願をするのをどう見て居るでせうか。真宗の立場からどうぞ・・・」

野依「日本の国家を思ひ戦勝を衷心より熱望して居る国民の赤誠の表現化したのが、  
即ち神社に対する祈願である。之は何も不思議でもなければ、問題にすべきものでも  
ない。真宗の信者だからとて、同じ日本国民であり、国を思ふの真心に於ては少しも  
変りがないのであるから、信者が神社に祈願するのは当たり前で少しも問題にならぬ。  
神社に祈願するのは、それを神様がおきゝ下さると言ふよりは、この方が真心を以て  
神様に一種の誓いをたてるやうなものだと思ふ可きでせう。(中略)

◇お守札の真意義

記者「それから、これも千人針や祈願と関連することですが、出征将兵に対して、よ  
く明治神宮その他の神社乃お札とか、成田山その他の仏閣のお守りとかを贈りますね。  
これは一体どういう意味に解釈すべきでせうか。」

梅原「これも先刻の千人針と同じ意味で、国民の真心を表現してゐるものと思ふね。  
武運長久を祈る銃後の国民の赤誠が籠つてゐるのであるから、此の意味に於て意義が  
あると考へられるが、お守り札を贈られた皇軍の将兵にしても、恐らく之を弾丸除け  
の護符と信じてゐるのではないと思ふ。しかし、神仏を通じて国民の真心を表現せる  
尊い念力を持つてゐるといふことは、精神的に非常な激励ともなり、勇気を鼓舞する  
ことにもならうね。」(中略)

野依「私は大の迷信嫌ひなんだが、折角贈つて寄越したので、その好意を無にすまい  
と思つて、現に宇佐八幡宮のお守りを持つてゐる。皇軍の将士も丁度これと同じやう  
な意味でお守り札を肌身につけてゐるのではなからうか。(pp.3-6。下線筆者)

迷信を嫌う浄土真宗において、千人針が迷信かどうか問題となっており、その疑問に答え  
を出そうとしたのがこの対談であった。「その行いが一般社会、国家に害毒と認められ  
ば、断じて弾圧を加えねばならぬ」が、「千人針は要するに国民の出征将兵に対する真心  
の現れ」であり、「千人針は国民の真心の表現として価値づけて行くところに意義がある」  
という結論を出している。

『真宗の世界』8月特集皇軍感謝号、第18巻第8号では、前号において行われた「梅  
原真隆・野依秀市対談会の批判と感想」という特集が生まれ、「梅原・野依両氏の対談会  
を読んで」(勝岡廓善)、「千人針と浄土真宗との関係・その他に就て勝岡氏に答う」(野  
依秀市)、「千人針について・『真宗の世界』に寄す」(高島米峰)、「某宗教家の千人針迷  
信問題について高島氏に答う」(野依秀市)、「加持祈祷・お守その他」(田中善立)の五  
本の報告が掲載された。

**事例 77)**「梅原・野依両氏の対談会を読んで」(勝岡廓善)

千人針は弾丸除けの呪<sup>まじない</sup>である。そこにはそれを頼む人の心情と、頼まるゝ人の心情とに格段の相違があることも心すべきである。しかし独断的に計度価値づけるといふなら、それは論外である。

野依氏が「私は常識からも、真宗信者としての立前からも、迷信は極力排斥するものである」と云ひ乍ら、「が、千人針については」云々と云ひ、千人針を例外に認容する道理がどこにある。(中略)

遺族の千人針に対する心境は同情に値するが、靖国神社で会はうの覚悟を乱すものであつてはならぬ。私は真宗の立場からも、軍人精神の立場からも、一心であるべきを願ふが故に万一を願ふて心を散乱させるものは除くようにしたがよいと思ふ。(中略)

千人針の迷信性を如何にして除去すべきかに苦勞して居る軍医もある程だ。女の頭髪を団子にして入れて呉れ。弾丸が防げる。これなら科学的になると。この苦心や思ふべしである。(pp.84-85。下線筆者)

先の対談に対して、勝岡廓善は、「遺族の千人針に対する心境は同情に値するが、靖国神社で会おうの覚悟を乱すものであつてはならぬ。」と千人針を例外にするべきではないという主張を行う。

**事例 78)**「千人針と浄土真宗との関係・その他に就て勝岡氏に答ふ」(野依秀市)

いやしくも戦ひに出るからには、死は覚悟してゐるに違ひない。何時どのやうなことで倒れないとも限らない。けれども又、どうして助かるかも知れない、そこで万一を思ふといふことは、人間として少しも不思議な心情ではなからう。万一を願ふといふことは、少しも心を乱すことゝなりはしないぢやないか。いやしくも命を的にかけてやる以上、それが他から見て迷信であらうと、何であらうと本人がそれによつて気強さを感じらるゝならば、それに対し他人が一片の理屈と自己の気持ちをもつてこれを迷信だ、心を乱すものだとして斥けるのは、斥ける方が間違ひである、のみならず、余りに無情に過ぎるといはねばならぬと思ふがどうでせうか。(pp.42-43。下線筆者)

勝岡に対して野依は「本人がそれによつて気強さを感じらるゝならば、それに対し他人が一片の理屈と自己の気持ちをもつてこれを迷信だ、心を乱すものだとして斥けるのは、斥ける方が間違ひである」とさらに千人針を擁護する。

**事例 79)**「加持祈祷・お守その他」(田中善立)

元来宇宙万有と神仏とは離れたる別物ではない。神仏の精霊がお札に乗り遷らるゝといふ事は決して虚妄ではない。

されば神仏の御加護必定と信じ、肌身離さず之を奉持すれば、自ら其人の意を強うす。戦場に出ては獅子奮迅の働きも出来、刻苦勉励や、堅忍持久も出来得る次第である。

又往々御守り札や千人針で不肖を免れたり、命拾ひをした実例のある点より観れば、



一概に迷信とて排斥すべきものではない。(p.44。下線筆者)

また、田中善立は、「御守り札や千人針で不肖を免れたり、命拾いをした実例のある点より観れば、一概に迷信とて排斥すべきものではない。」として、それで命拾いをするのであれば御守りや千人針も認めて良いのではと主張する。

以上のように浄土真宗門徒間での千人針についての騒動の一端を紹介した。寺社の信仰者が率先して千人針を受け入れていったのに対して、千人針習俗を迷信として排除するか、赤誠の発露として受け入れるかは、真宗門徒にとっては大きな問題だったと考えられる。千人針の根本の所は、母や妻の息子や夫の戦地での無事を祈るお守りであったが、日中戦争以降様々な俗信や迷信と呼ばれる要素が加わっていたことが、この論争を招いた原因とも考えられよう。

## 第6節 太平洋戦争での千人針

山中恒は、『暮らしの中の太平洋戦争』（岩波新書（新赤版）、平成元年（1989））の中で、千人針習俗の終焉について触れている。

昭和16年（1941）に回覧された二つの文書を取り上げ、千人針を街頭で行うことが禁止され、出征の見送りにも制限が加えられたことを紹介している。

### 事例80) 「昭和十六年八月常会周知事項」

千人針一時停止ニ関スル件 今般上司ヨリノ通牒ニ依リ街頭ニ於テ千人針ヲ作製スル事ヲ一時停止サレマシタノデ当分ノ間作製セシメザル様周知方御配慮下サイ」

### 事例81) 「昭和十六年八月常会周知事項」

- 一、見送旗ヲ樹テ又ハ花輪等ヲ軒頭ニ飾ル事ハ一切禁止ス
- 二、小旗ヲ振リテ行列シ爆竹、提灯、楽隊ヲ以テスル等「御祭騒ギ」ハ一切禁止ス
- 三、応召者ニ「日の丸」ヲ携行サセ又ハ徽章等ヲ付サセヌコト（以下略、筆者）」

前者は、街頭での千人針禁止の通達であり、後者は出征兵士の見送りについての制限について回覧である。この二つの文書から出征を隠す為に出された通達であったと説明している。

また筆者が入手した宮城県仙台市での「隣組回覧用紙」と記された書類には、「昭和拾六年七月卅日」の日付があり、「二、従来学校停車場デパート前及道路ニ於テ千人針ノ縫製ヲ他人ニ依頼スル慣習アリマシタガ右ハ防諜上将来之ヲ廃止セシメラレ度旨其筋ヨリ注意ガアリマシタカラ御達シ致シマス」というように目立つ場所での千人針の縫製が禁止されることが常会で伝えられることが予告されている。<sup>(1)</sup>

また昭和館が所蔵する文書には、伊保村（兵庫県印南郡）の村長名で、「四、千人針ハ繁華街、百貨店、停車場、劇場等ヲ避ケ成可、学校・工場等ニ於テナスコト」とし、「以上ハ昭和十六年十二月二十日以降入除者厳守スルコト」と指示がある。昭和12年（1937）8月当初は、防諜の為、厳格に千人針の人前での縫製を禁止しようとしたが、実際にはなかなかうまくいかず、最低限の禁止になっていた<sup>(2)</sup>。

研究史で取りあげたように岩田重則は、山中恒の研究を踏まえ、次のように断定している<sup>(3)</sup>。

十五年戦争の終わり近くには、召集があまりにも日常的になったためであろうか、

---

(1) 萩谷茂行氏からのご教示による。

(2) この出征兵士の見送りの変化については、吉良芳恵「昭和初期の徴兵・兵事史料から見た兵士の見送りと帰還」（藤井忠俊・関沢まゆみ編「戦争と戦場 [共同研究]近現代の兵士の実像Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告 101』国立歴史民俗博物館、平成15年3月、pp.285-304）に詳しい事例が紹介されている。

(3) 『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社、平成8年（1996）、p204。

あるいは、本土爆撃が日常茶飯事になり、出征者のみならず「銃後」の人々の生命さえも危うくなったためであろうか、いずれにせよ、千人針は消滅したのである。

しかし、実際には消滅はしていなかった。そのことを以下に論じていきたい。

まず、日中戦争の開戦以降、どのような頻度で新聞記事に千人針が取りあげられたかを見る目安として新聞記事検索を利用する。朝日新聞と読売新聞では、CD-ROMにより検索が可能であるが、千人針をキーワードにして検索すると次の結果が表2-1「朝日新聞と読売新聞の記事数」である。

表 2-4 朝日新聞と読売新聞の記事数

年	昭和 12 1937	昭和 13 1938	昭和 14 1939	昭和 15 1940	昭和 16 1941	昭和 17 1942	昭和 18 1943	昭和 19 1944
朝日新聞	80	18	6	5	3	2	2	0
読売新聞	41	13	4	2	3	2	4	2

朝日新聞では、12年（1937）10月が28件と最も多く取りあげ、読売新聞では12年11月が最も多くなっている。年間の記事総数が12年に朝日80件、読売41件、13年に朝日18件、読売13件であるのに対して、14年には朝日6件、読売4件と一気に少なくなっており、新聞に千人針が取りあげられた記事が最も多いのははじめの2年間であったことが分かる。このことは後述するように千人針が行われなくなったのではなく、新聞が千人針を取り上げるニュース性がなくなるほど日常化したと解釈できよう。

太平洋戦争以降、千人針が実際に作られたのかを確認してみたい。一つは、昭和館が所蔵する千人針に関する聞き取りから類推することであろう。この表2-2「日中戦争以降の昭和館所蔵の千人針の件数（応召年）」に見られるように、昭和16年（1941）以降も千人針は贈られており、むしろ18年（1943）が最多であることが分かる。

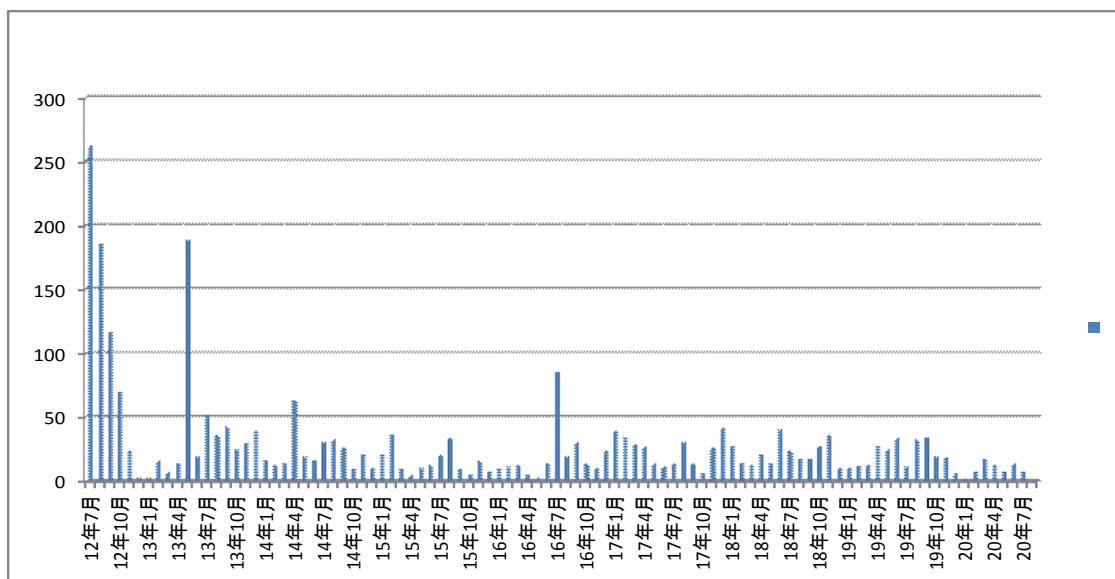
表 2-5 日中戦争以降の昭和館所蔵の千人針の件数（応召年）

年	12 1937	13 1938	14 1939	15 1940	16 1941	17 1942	18 1943	19 1944	20 1945
数	11	4	9	3	7	10	13	4	2

もう一つは、次節で紹介する宮崎神宮の神社日誌に見られる千人針祓の件数から千人針の作製が昭和20年まで継続されていることが分かる。

千人針が消滅したのではなく街頭の千人針風景が見られなくなっただけであった。しかし千人針が準備しにくい社会状況になっていたことは事実で、時代は物資不足となり、政府は昭和17年（1942）1月「物資統制令」にもとづいて「繊維製品配給消費統制規則」を公布し、原料糸を除く繊維製品について全面的、総合的な配給消費の統制をおこなうこととなった。衣類や布、糸などが配給となると、千人針の材料も入手しにくくなり、千人針も準備しづらくなっていた。旗屋で千人針を作る仕事を行っていた宮崎市の女性（大正10年7月10日生）からの聞き取りによると、「布が配給になったので、片岡さん（旗屋）に買い込んでいた布が無くなるまで続けたが、それが何年までだったかは覚えていない。昭和17年頃からは、千人針を持たせるにも余裕が無くなっていた。仕事を辞めた後、片岡さんに千人針を買いに行ったが、「今ないのよ」と言われて入手できなかった。」という。（第4章第4節聞き取り①参照）

グラフ 2-1 宮崎神宮「神社日誌」にみる千人針祓の月別祈願数（件数）



日中戦争期には、千人針の賛否についての議論も行われたが、しばらくすると千人針は当然のものとして定着していった。昭和 16 年以降、憲兵による流言飛語の取り締まりが行われたが、基本的に千人針は俗信ではあるが取り締まりの対象とはならなかったらしく、流言飛語の取締の事例には取りあげられていない。ただし、千人針に付随する迷信が災いして取り締まられた例がある<sup>(1)</sup>。

**事例 82)** 昭和 19 年 12 月 15 日「十月中ニ於ケル造言飛語」

9 月 30 日、上磯郡上磯町字本町 52、上磯町々内会長所得調査要員、呉服商、

八月二日自席ニ於テ妻ヨリ聞知セリ内容ヲ同月七日午前七時頃町内会ノ入営兵壮行会ニ出席佐藤良作外十数名ニ対シ流布ス、

上磯ノ八幡様ガ人間ノ身代リニナツテ戦地ニ行ツテオ帰りニナツタトカデ梓ノ木ノ裂ケ目カラ血綿ノ様ナモノガ出テ繃帯シナケレバナラナイト或ルオ婆サンガ御告ゲシタト言ツテ千人針ヲ巻イテオサイセンガ上ツテキタノヲ警察官ガ持ツテ行ツタソウダガ大シタオ詣リノ人デアツタ云々

函館地方一帯ニ相当広範囲ニ流布セラレ老年婦人層ノ一部ヲ動揺セシメタリ所轄署ニ於テ検挙科料三円、斯ノ種言動ヲ流布シ科料処分セラレタルモノ他二十二件ヲ算シアリ

神様の出征の要素が加わったために、取り締まられたのであろう。昭和 19 年頃は、戦陣訓などの影響で、出征兵士から千人針を受け取ることを拒否されたりしたという。

千人針の最大のジレンマは、特攻兵への千人針であろう。この攻撃を出征を見送る残された女性たちは知ることはなく、弾除けのお守りとして贈ることになる。靖国神社に遺さ

(1) 南博編『近代庶民生活誌 第 4 巻 流言』三一書房、昭和 59 年 (1984)、pp.183-184。

れている遺書に千人針について触れたものがある。<sup>(1)</sup>「神風特別攻撃隊第一八金剛隊 昭和二十年一月五日 比島方面にて戦死 愛知県出身 二十三歳」という若者であった。

**事例 83)** 天の優しい御恵みと思ひますが、本日出撃の予定が、天候不良のため明日に延期され、おかげで心のこもる千人針が私の手に入りました。

嬉しく身につけ南の決戦場にまゐります。

私は千人針はとてもまにあはないだらうと断念してゐたのですが、いよいよ出撃の幾時間か前に私の手に入りました。

また好物たくさん、ありがたさで一杯でした。可愛い私の教へ子の練習生にもやり、一緒に喰べて別れました。

母上様よりの「御守護札」肌身はなさず持つて任務に向つてまゐります。では御礼まで。

この兵士は、千人針を弾丸除けとしてではなく、母親の思い出として持参して、特攻機に乗り込んだことが分かる。また一方で千人針を遺して行った兵士もいた。学徒動員で出征したある青年は、父から「この戦争は負ける。決して特攻に志願するんじゃないぞ」という言葉を最後に特攻隊として出撃したという。<sup>(2)</sup> その遺品を引き取ったときのエピソードが紹介してある。

**事例 84)** 遺品のなかの寛治さんの、ほとんど新品のような千人針を見たとき、わたしは思わず言った。

「あら、千人針、持って行かなかつたのかしら？」

「ええ、自分が弾丸ですもの。」

靖子さんが言った。

ああ、そうだったのだと、胸をつかれた。何とこたえていいのか、わからなかつた。

お守りが、たくさんあつた。大阪の有名な、いろいろな神社のお守り。死を決意していたから、もう、お守りも不要だったのだろうか。遺品のなかに、千人針やお守りを見つけたときのお母さんの気持ちが、たまらなくかわいそうだった。

千人針という善意に満ちあふれたお守りも戦争末期には、贈る側、贈られる側にとって大きく意味が違ってしまい、大きなジレンマを抱きながら終戦となったことを記しておきたい。

---

(1) 『英霊の言乃葉 社頭掲示集第五輯』靖国神社社務所、平成11年(1999)、pp.57-58。

(2) 『海に消えた56人 海軍特攻隊・徳島白菊隊』童心社、平成2年(1990)、pp.168-177。

## 小括

第1節では、日中戦争以降の千人針習俗の全国的な広がりについて検証した。昭和12年(1937)7月7日の開戦以降、千人針風景を伝えるのは、7月14日の新聞記事が最も早い。この後、数日間の内にいっせいに植民地も含めた全国各地で千人針風景が報道されるようになる。本論では、昭和12年(1937)7月から10月にかけて宮崎県における、新聞記事の推移を確認した。日中戦争の開始とともに女学生が街頭に出て千人針作製を手伝ったり、学校でまとめて作ったりして活躍している。新聞紙上では、千人針論争も行われた。また、千人針の起源が様々な形で語られるようになった。

開戦とともに日本は国による統制下におかれ、様々な面で、影響を受けることとなった。その際に千人針は迷信として排除されることなく、むしろ積極的に利用されるようになった。

第2節では、さまざまなメディアを通して、千人針習俗が全国に広がり、出征に際して、必要不可欠なものとして認知されることになった状況を確認した。演劇・小説・浪花節や落語、そして映画やSPレコードなどを通して普及し、絵はがきや絵画に描かれるようにもなった。

第3節では、琉球地方、及び植民地での千人針について検証した。琉球地方では、オナリ神信仰との関連が指摘されることもあったが、実態については、婦人会や役場などが主導で行った可能性が高く、それほど普及していなかったと考えられる。また、植民地においても学徒動員で千人針が利用されたことを確認したが、現地の住民にまで自発的に浸透した習俗では無かった。

第4節では、女学生、及び婦人会の活動と千人針の関わりについて検討した。女学生は、開戦とともに街頭に出て千人針に協力する姿が頻繁に見られたが、学校においても自発的、または教師の指示により千人針作製を行った事例が少なからずあった。特に、大日本連合女子青年団、愛国子女団の活動に千人針作製が加えられていったことを確認した。婦人会による活動としては、組織的な関わりを示す資料は多いとはいえないが、愛国婦人会が積極的であり、国防婦人会が街頭に立つことは少なく、その後、大日本婦人会に統合され、大政翼賛会に吸収されることで、婦人会の活動も行われなくなったことを確認した。

第5節では、宗教と千人針の関わりについて論じた。なかでも神社は祝詞のひな形を準備して、全国的に千人針を受け入れた。宮崎神宮の日誌を読み解くことで、開戦当時の神社での千人針祓への対応で多忙を極めたこと、終戦直前まで千人針祓を行っていたことなどが分かった。また、浄土真宗においては、千人針を認めるか、迷信とみなすかの議論が行われ、最終的には受け入れていったことを確認した。

第6節では、太平洋戦争以降の千人針について検討した。昭和16年(1941)に入ると、防諜の問題から、出征状況が分かるような行動が慎まれることになり、街頭での千人針風景もあまり見られなくなったが、これは決して千人針が贈られなくなったのではなく、公の場での千人針作製が禁止されただけであった。その後、衣類や糸などが配給となるなど、千人針が準備しにくい状況となったが、実際には終戦間際まで出征兵士に贈られていたことが宮崎神宮の日誌から確認できた。また、玉砕覚悟の兵士にとっても千人針は母の思い

という意味に理解し、神風特別攻撃隊員でさえも携帯して出撃した例もあった。

本章では、日中戦争とともに全国いっせいに千人針風景が広まり、さらに様々なメディアを通して、当然のものとして定着していったことを実証してきた。その広がりには地域的に離れた琉球地方及び植民地にまで及んでいたことから、役場や婦人会などを通して組織的に普及が図られたことが分かった。組織的な女性の団体である女学校や婦人会が率先して千人針の普及には関わっており、出征兵士の増大に対応して、大量に千人針を作成したこともほとんどの兵士が千人針を持つことを可能とした。千人針の普及には、その俗信的な面を容認できるかがポイントであったが、新聞記事での投書によるやりとりや浄土真宗での論争を通して、千人針が受容されていく過程を検証した。

こうした千人針も太平洋戦争開戦とともに実態が急変することとなった。防諜防止のため街頭での千人針作成活動が自粛され、布や糸が配給となり入手しづらくなり、次第に千人針風景は見られなくなった。しかし、実際には、宮崎神宮の日誌から分かるように、終戦直前まで行われていた。出陣した学徒のみならず、帰還することを許されなかった特攻兵にまで贈られたのである。

第1章と本章では、文献を中心に通史的な事例分析を行ってきたが、第4章では実物資料の千人針を分析することとしたい。その前に第3章では、弾丸除け信仰の一つの事例として、千人針にも大きく関わってくるサムハラ信仰を取りあげることとする。

## 第3章 サムハラ信仰の研究

### 第1節 研究史

戦時中の弾丸除けのお守りである千人針の実物を見ていると、漢字のような不思議な文字をよく見かける。その四文字は、千人針のみならず、衣服に書き込まれたり、お守りとして文字の書かれた紙片を携帯したり、戦時中の資料にさまざまな形で見られる。この四文字については、様々な異体字、様々な読みがあるため、本章においては、便宜上、戦後定着しているサムハラと呼称を採用し、カタカナ表記とする<sup>(1)</sup>。

戦時中のサムハラ信仰は、戦地での弾丸除け信仰の一つに集約されていたと考えられるが、その始まりは少なくとも江戸時代に遡り、その内容は、怪我除け、虫除け、地震除けなど多岐にわたっていた。『耳囊』をはじめとした江戸期の随筆にこの奇妙なる文字、あるいは符字とも呼ばれる特殊な漢字が度々紹介されている。その後、明治時代になり、日清・日露戦争といった他国との戦争に際して、弾丸除けのまじないとして、活躍することとなる。出征する兵士に持たせるお守りとして大量に配られることとなり、その奇妙なる文字は兵士たちの間で弾丸除けの俗信として知られることとなる。なかでも田中富三郎という人物の活動がサムハラ信仰を全国的に知らしめるきっかけとなった。戦時中のサムハラ信仰を全国的に普及させ、サムハラ神社の創始者となった。

サムハラ信仰については、多くの研究者が取り上げているが、取り上げる資料や分析する視点はさまざまである。主な文献を下記に挙げ、その要点を整理しておく。

○村松裕一「符字「サムハラ」考証」『三河地域史研究』第12号、三河地域史研究会、平成7年(1995)<sup>(2)</sup>

・『仙境異聞』『耳囊』『難波江』などの文献を当たり、『大言海』をもとに中国から来た言葉ではないかと推測。道教由来の言葉と推測している。

○大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第69号、古々路の会、平成8年(1996)<sup>(3)</sup>

・「太平洋戦争時の弾丸よけ」として、戦時下の弾丸除けの御符として配られた「サムハラ」について聞き取りを交えて考察している。また、戦時中の朝日新聞の仁丹の広告を手がかりに弾丸除け信仰としてのサムハラについて言及している。

○加藤良治「弾よけ護符〈さむはら〉雑考」『西郊民俗』156号、平成8年(1996)<sup>(4)</sup>

---

(1) 文字については、「掬拾掬摺の字義に就て」明治37年3月18日付『神戸新聞』や、駒澤大学学長である大森禅戒が「梵字・梵語の話(第三講)」(『大法輪』第2巻第4号、大法輪閣、昭和10年4月、pp.73-74)の<sup>(1)</sup>「不思議の四文字」には、「四文字の読方と意味」について分析を加えている。

(2) 村松裕一「符字「サムハラ」考証」『三河地域史研究』第12号、三河地域史研究会、平成7年(1995)、pp.49-58。

(3) 大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第69号、古々路の会、平成8年(1996)、pp.1-12。

(4) 加藤良治「弾よけ護符〈さむはら〉雑考」『西郊民俗』156号、西郊民俗談話会、平成8年(1996)、pp.1-12。



・『耳囊』『宝暦現来集』『提醒紀談』『山島民譚集』『異聞雑稿』『難波江』<sup>へいすいろく</sup>『秉穂録』などの文献をあたり、符字「サムハラ」を整理する。さらに戦時下の兵士の御守りとしてのサムハラについて考察を加えている。

○岩田重則「弾丸除け祈願としての「擡抬擡摺」」『戦死者霊魂のゆくえ—戦争と民俗—』、吉川弘文館、平成 15 年（2003）<sup>(1)</sup>

・静岡県の竜爪神社の文書に出てくる「サムハラ」を手がかりに戦時中のサムハラから遡り、近世期のサムハラについて検討を加えている。サムハラを三跋羅<sup>さんぱら</sup>とし、現在のサムハラ神社について言及。さらに近世期の事例として『耳囊』『提醒紀談』『秉穂録』『淡路国風俗問状答』などについて触れ、「近世の段階では、雉の弾丸除け—怪我除けという奇談をベースとして、長命祈願や虫除けなど、多様な厄除け祈願に信仰内容が拡大していくものであったのであろう。こうした信仰内容が、戦時下において、「擡抬擡摺」が出征兵士の弾丸除け祈願として展開を見せる基盤にあったのである。」と考察している。

○佐藤幸彦「さむはら紀行」『日本刀研究 佐藤幸彦刀剣論文集』（私家版）、平成 19 年（2007）<sup>(2)</sup>

・『耳囊』の記事が「寛政重修諸家譜」と照らし合わせると新見正登の逸話であることを確認している。その他『異聞雑稿』『秉穂録』などの文献に触れている。また、田中富三郎について追跡調査を行っている。さらに日本刀研究家の著者が明治期の日本刀に刻まれる「サムハラ」の文字の由来をたどっている。

○大島建彦「擡抬擡摺神社の現状」『西郊民俗』157号、西郊民俗談話会、平成 8 年（1996）<sup>(3)</sup>

・サムハラ神社の現状について丹念な調査報告が行われている。

以上のように、サムハラ信仰の研究は少なからずあるが、通史的に現代までを俯瞰する研究はない。本章では、江戸期に始まるサムハラ信仰を現代まで俯瞰し、その特徴について述べる。

こうした俗信の研究の重要性は、宗教などに権威化されたお札などと違って、民間信仰のなかから生まれ、少しずつさまざまな意味づけがなされ、いつの間にか人々はその奇跡を信じ、成立するものである。戦時中の人々は、こうした俗信を信じることで、その現実を超えようとした。山上忠次は、昭和 12 年（1937）にこれらのお守りや千人針習俗について記している<sup>(4)</sup>。

皇軍にとって戦争と勝利とは常に同義語であり、戦ふことは勝つことである。少なくとも皇軍に関する限り負け戦さといふものは考へられない。さればこそ、皇軍の向

---

(1) 岩田重則『戦死者霊魂のゆくえ—戦争と民俗—』吉川弘文館、平成 15 年（2003）、pp.154-168。

(2) 佐藤幸彦「さむはら紀行」『日本刀研究 佐藤幸彦刀剣論文集』（私家版）、平成 19 年（2007）、pp.171-178。明治 20 年の日本刀にサムハラの文字が刻まれてる。

(3) 大島建彦「擡抬擡摺神社の現状」『西郊民俗』157号、西郊民俗談話会、平成 8 年（1996）、pp.36-39。

(4) 山上忠次「出征と守符の意義」『大法輪』第 4 巻第 10 号、大法輪閣、昭和 12 年（1937）10 月、p.124。

ふところはたゞ勝利であり武運長久である。皇軍の武勇長久は即ち勇士の武運長久でなければならない。それ故、勇士の身につけた守符や千人針は単なる個人の気安めのための厄除け、呪<sup>まじな</sup>ひ、縁起担ぎからといふよりも、それが勇士、ひいては皇軍全体の武運長久を祈る国民的熱誠の象徴として見られる時、その意義は極めて大きいといはなければならない。

こゝにこそ、千人針や守符が迷信として一概に片づけられない、科学も超越した寧ろ微笑ましい精神上的意義を認められるのであるが、守符にしろ、千人針にしろ、よくその由来するところを究めるとき、涙ぐましい真摯さが籠もっている。

現代の私たちからすると明らかな俗信と判断されるサムハラ符字のような呪いなども、千人針などの習俗とともに、当時の人々にとっては、俗信以上の意味を持っていたことを踏まえておくべきであろう。

さらにこうした俗信の由来は、時代時代に信じやすいようにさまざまな逸話が加えられ、加工されていく。その時代のなかで解釈することと、俗信の変化を通史的に整理することの両面が研究として必要となる。サムハラについての事例を通史的に分析し、それぞれの時代におけるこの俗信の意味を探っていきたい。

## 第2節 江戸時代のサムハラ信仰

前節の研究史でも紹介したように、これまでの研究者が取り上げる江戸期の文献は系統立てて紹介されていないため、時系列にサムハラ信仰の変遷とバリエーションをとらえることができていない。そこでここで江戸期の随筆を中心にした史料を整理しておく。

- 【文献①】天明2年(1782)～文化11年(1814)、根岸鎮衛『耳囊』卷之二<sup>(1)</sup>  
【文献②】寛政11年(1799)、岡田挺之『秉穂録』<sup>(2)</sup>  
【文献③】文化14年(1817)、屋代弘賢<sup>やしひろたか</sup>『淡路国風俗問状答』<sup>(3)</sup>  
【文献④】成立年未詳、岡本保孝『難波江』<sup>(4)</sup>  
【文献⑤】文政5年(1822)、平田篤胤『仙境異聞』(上)三之卷<sup>(5)</sup>  
【文献⑥】天保2年(1831)、山田桂翁『宝曆現来集』<sup>(6)</sup>  
【文献⑦】天保4～7年(1833～1836)、滝沢馬琴『異聞雑稿』下卷<sup>(7)</sup>  
【文献⑧】嘉永3年(1850)、山崎美成『提醒紀談』卷一<sup>(8)</sup>  
【文献⑨】宮負定雄『地震用心考』<sup>(9)</sup>

以上が管見の範囲で江戸時代のサムハラ信仰について触れた文献である。以下、該当箇所を抜き出し、整理しておく。以前に刊行された随筆が次々と引用されるため、文献の番号を【 】内に丸数字で記しておく。また、旧漢字は新漢字に改め、旧かなはそのまま表記し、繰り返し記号はひらがな・カタカナに改めた。

- 【文献①】天明2年(1782)～文化11年(1814)。根岸鎮衛著『耳囊』卷之二  
怪我をせぬ<sup>まじない</sup>呪札の事

○天明二寅年の春、御小性を勤仕の新見愛之助といへる、登城の折から、九段坂の上にて乗馬物に驚きけるや、数十丈深き御堀内へ馬と一所に転び落ちけるが怪我もせず、着服等改め直に登城有りし也。其後右の咄し出て、「何ぞ格別の守護等もありしや。数十丈の所転び落んに、いかゞして少しは怪我も可有に、不思議の事也」と言しに、「外に守りやうのものも無かりしが、一年不思議の事ありしとて、知行の者より差越たる守護札有し」とて、書付て愛之助より右尋し者へ為見けるよし。右は同人知行の

---

(1) 『耳囊(上)』岩波文庫、平成3年(1991)、pp.181-182。

(2) 『日本随筆大成 第1期第20巻』吉川弘文館、昭和51年(1976)、p.361。

(3) 中山太郎編『校注諸国風俗問状答』東洋堂、昭和17年(1942)、p.536。

(4) 『日本随筆大成』(第2期第21巻)吉川弘文館、平成7年(1995)、p.471。

(5) 子安宣邦・校注『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫、平成12年(2000)、p.216。

(6) 『続日本随筆大成』別巻6、吉川弘文館、昭和57年(1982)、p.336。

(7) 『続燕石十種 第二』国書刊行会、明治42年(1909)、p.41。

(8) 『日本随筆大成』第2期第2巻、吉川弘文館、平成6年(1994)、p.123。

(9) 宮負定雄「地震用心考」『地震道中記』巖松堂出版、平成7年(1995)、p.103。下総国松沢名主で五代目当主宮負定賢の長男、宮負定雄が執筆したものである。

もの、或日野に出て雉子を射けるに、其矢雉子に当りしとおもへ共、雉子は恙もなく敢て立んともせざりし。弓術上手といわるゝ者争ひ射たりしが、外の雉子は弦に応じて斃るゝといへ共右雉子に矢当らず。いづれもおどろきて逐廻し捕へけるに、羽がへに左の文字認め有りし由。

擡 抬 擡 拐

○右の文字を書たる札百姓の与へけるを、其儘に懐中せしと物語のよし。何の訳に候や、文字も作り文字と相見分りがたけれど、其頃貴賤となく、小児などにも懐中させしなり。

【文献②】寛政11年（1799）発行、岡田挺之編、『乗穂録』

○筑前福岡の封内にて、鶴を捕りしに、其翅に小牌あり。擡抬擡拐の四字あり。これ長命の符字なるべしとて、人々写して佩びたり。又淡路の何がしとやらん云寺に、斎藤実盛の位牌ありて、其背にも、此四字あり。いかなる故といふ事をしらずと、其国の人語れり。近きころ、江戸にて此符を佩びたる人、馬より落て、堀の内へまろび入りしに、少しも毀傷せず。それより此符を佩ぶる事、世にはやりしなり。

【文献③】文化14年（1817）、屋代弘賢『淡路国風俗問状答』

蝗風等を避る呪の事

○鳥飼下村、実盛の社六月初亥日蝗除祭にて、鏡餅、洗米、神酒等供ふ、左の守札を参詣人受戻り田畝に建つ、鳥飼上中下三ヶ村は、右亥日に虫送をす。

擡抬擡拐

右実盛社守札の事、乗穂録（文献②）にも見えたり尾州人作合せ見るべし。

【文献④】成立年未詳、岡本保孝『難波江』

○擡抬擡拐（袷襦襦袴）

此四字いかによみ、いかなる意にかと問ふものあり。知らずと答ふれど、強くとふ。斯る奇僻の事は、おのれ好まず。輪池屋代弘賢が遺書をみたるに、此事をおろおろ書付けたるものあり。今こゝに抄録しておきたるかぎりを下にいふべし。（文献③）江城年録〔寛永二年三月晦日〕公方様台徳君葛西へ御成、其日無変之大鴈一羽、御鷹取候て参り候。右の鴈の胸に文字形四ツ有り。其文字者袷襦襦袴。如レ斯之文字有レ之。誠に不思議成事也。」大久保西山筆記紀州御家中にて殺生に罷出、鉄砲にて雉子を打申候処、中り不レ申。後毎度打候へ共、中り不申候に付、後には其雉網にてとらへ吟味いたし候処、羽がひの下に左の通りの文字有之、札付け有之候由、依レ之右交字的角のうらに張り、弓鉄砲にてためし被二仰付一候処、兎角当り不レ申不思議なる事と申候由、矢除の守にて可レ有レ之哉と被レ存候。

擡抬擡拐

或人云、此文字文昌帝君の覚応篇にあり。読やうサンバラサンバラ、平田篤胤いはく、此文字感応篇になし。乗穂録卷下〔寛政年中尾張岡田挺之著〕、筑前福岡の封内にて鶴を捕へしに、其翅に小牌あり。擡抬擡拐の四字あり。これ長命の符字なるべしとて写して佩<sup>お</sup>びたり。又淡路の何がしとやらん云ふ寺に、斎藤実盛の位牌あ

りて、その背にも此四字あり。いかなる故といふ事をしらずと、其国の人語り。 (文献③) 近き頃江戸にて此符を佩びたる人、馬より落ちて堀の内へまろび入りしに、少しも毀傷せず。それより此符おぶる事世にはやりしなり。」(文献①)

屋代弘賢いはく、江戸にて此符を佩びたる人と云ふは、凌明院様御小姓新見愛之助〔伊賀守ノ父〕也。当番の出がけに、馬共に牛が淵に落入候節、怪我なく出勤いたし候。」同人云、浅間山の山人に仕候寅吉に承候へば、山にても此符の文字有之、ジャクカウ、ジャクカクとよみ申候由、」同人云、明人陳元贇が伝へし柔術の流を汲める人の伝来して、カンタイカンキとよむよしいへるによれば、唐伝来にて有るべきか。(文献③)

○扁額軌範二編卷下〔文政四年速水春暁斎輯〕一説に、淡路の一梵利に斎藤実盛が牌を安ず。牌陰に擡抬擡拐の四字あり。

何と云ふ事をしらず。一年筑前福岡の封内にて鶴を捕ふ。其翅に小牌あり。勒して此四字をしるす。伝へ云ふ、頼朝公の放されし所の鶴かと、是長寿の符なりと。(文献②) 又説に此符を帯ぶるものは、転倒の難なしと近世専ら符にしるし帯ぶるといふ。」耳囊卷之二〔根岸肥前守著、寛政文化頃ナリ。〕怪我をせぬ咒札の事、〔新見愛之助一件なり、今略。〕(文献①)

孝云、以上屋代氏の筆記の要丈を鈔録したければ、原文のままにはあらず。

#### 【文献⑤】文政5年(1822)、平田篤胤「仙境異聞」

○慶長中大樹公御狩の時、鶴羽に在りし文字とて、怪我除けの由にて、擡抬擡摺、但し守り札の板形を写す」かくの如き四字を記して守りとす。寅吉云はく、「此れ仙人の常に謡ふ、符字の如き物の中に有る文字なり」

擡抬擡拐

寅吉云はく、「仙骨の人の常にうたふ符字の如き物の中に有りしを見たり。ジャク、コウ、ジャウ、カウと云ふ様に聞きたれど、能くは知らず」

#### 【文献⑥】天保2年(1831)、山田桂翁『宝暦現来集』

○文政三辰年虎吉と云男、十五歳の時より天狗に遣われし事、能く人の知る所なり、此の伝之語に云く、慶長三辰年大樹公御狩の時、鶴の羽裏に有りし文字逆、怪我なきよしにて、擡抬擡拐(シヤウヤウシヤウカク)と書、此如四字をしるして守とす、此文字何と申事知らず、虎吉に見せしに、是は仙人の常に唄ふ符字の如きものの中に有る文字、音はシヨウヨウシヨウカクと云ふよし語りけり、(文献⑤)

或説に云く、昔紀伊国に一人の壮士有り、常に弓射る事を好み、山野にかけりて鳥獸を射るに、百発百中、射術誠に神妙也、或時雪中に野鶴を射るに中らず、二度射るに中らず、不思議なる逆、追鳥にして捕らへ見れば、其羽に文字有り、此文字の故なるやと、其文字外の鳥に写して矢を放に、一矢も中らず、扱は疑なく此文字守りなり逆、壮士常に身を放さず、身終る迄怪我あやまちなく、今に聞伝へて、擡抬擡拐(シヤウヤウシヤウカク)此文字所持する時は、劍難災難なしと云へり、既に徳本上人も此事語れける、又天明五年御小姓新見長門守殿、田安御門外牛が淵へ、馬ともに落入しが、何の怪我もなく、直さま登城被レ致ける故、何ぞ尊き守にて所

持有るやと上意に付、此文字所持仕候由言上に及けり、誠に奇妙なりと被レ仰、諸人へ弘め可レ遣と、数ヶ所にて御書せ被レ遊けり（文献①）、又此度京都地震の前、吉田殿より此守出しける所、持する人々一人も怪我なしと云へり。」

【文献⑦】天保4～7年（1833～1836）『異聞雑稿』

擡抬擡招

俊明院様御代、御小性新見愛之助（文献①）、天明二寅年五月十五日登城之節、田安御門外にて乗候馬、物に驚き、土手へ走り登り、愛之助儀は馬上にて、人馬共に牛が淵へ落入候処、少も別条無レ之、番所え上り、御城頭取衆え遅刻之御届差出し、衣類等番所にて着替、宅へは不レ帰、其儘致二登城一候処、其儀俊明院様達二御聞一、何ぞよき守を所持致し候哉と御尋有レ之候ニ付、擡抬擡招

の四字を懐中仕候由言上、則被レ遊二御覽一、何れより貴候哉、と上意により、右守之儀者、紀伊光貞卿於二国許一鷹野に被出候節、雉子鉄砲に当り候ても何之障りも無レ之常之体に候間、不思議に思召、網にて捉らせられ、被レ成二御覽一候処、風切羽に此文字有レ之、夫より鉄砲的角之裏に右の四字を張付、御打せ被レ成候処、玉それて中り不レ申候由、紀州に縁者御座候て貰ひ候よし申上候に付、御城附江御尋させ被レ成候処、紀伊殿家来有賀専右衛門と申者、先祖より致二所持一罷在候に付、文字引合せ候処相違無レ之、則於二御前一御側向之者江被二仰付一、御写させ被レ成、銘々江被二下置一候也、

右靈符の濫觴、田口氏御老婆御所望に付呈上、

天保六年乙未卯月 上総在勤士 江田彦吉（文献④）

乙未閏七月二日、女弟菊上総なる所親がりかへり来て、これを予に視す、彼新見ぬしの事は、吾弱冠の時、世の風聞によりて知れり、且件の靈符も人のもてりしを見たれども、前書は実録なれば写しとゞめつ、

【文献⑧】嘉永3年（1850）、山崎美成編『提醒紀談』

○符字

世に擡抬擡招の四字を書して、怪我除の護符とす。

その験あること人の知るところなり。さて此符字の伝へ一条ならず。或記に、寛永二年三月晦日に、將軍家狩したまふに、御鷹、大なる雁を捕りけり。その鷹の胸に四の字あり。その文字は□□□□とかくの如くなり。実に不思議なることなりと見えたり。次にまた寛文八年に、紀州に住める鉄砲師吉川源五兵衛といふ人、江戸に居ける日、大宮鷹場の中吉野村と云ところにて、白き雉子を覗すまして打たれども中らず、さればやうやう機檻にて捕へ得たり。その雉子の背に擡抬擡招の文字あり。思ふに此文字こそ、定めて怪我除の符ならんかとて、角にこの字をしるして打試みるに、幾度打ども中らず。〔大久保西山翁筆記（文献④）〕といへることあり。又天明二年の春、新見某九段坂を馬にて通りけるに、落馬して数十丈の深き牛ヶ淵にまろび墜たれども、人も馬もいさゝか傷くことなし。されば衣服を改るまでにて事故なかりき。此事を聞く人、いとも不思議なることゝて、尊き御符にても持たれしやと尋ね問ければ、さればよ、或年吾領知にて雉子を一羽射とめんとしけるに、その

矢それて中らず。再び射れども中らず。かゝればさまざま思ひを廻らし、術を以て捕へ得て見るに、翼に四の文字あり。今その文字を記して懐中せり。その験にてもあるべしと云。〔耳囊（文献①）〕とあり。何れも正しき記録なれば、信ずるに足れり。乗穂録には、筑前福岡にて鶴を捕へしに、その翅にこの四字を記したる小牌あり。必これ長命の符字なるべしといへり。かくその説まちまちなれども、嘗てこの符字を佩たる人の、しばしば危を逃れ災を免れたること少なからず。此文字いずれの字書にも載せず。されば音義を知るによしなし。あるひは云。出羽国仙人堂にては「さんばさんば」と唱へ、白石平馬が天狗に教へられたるは、「じやくこうじやくかく」とよめりと云へり。こは雲をとらへ夢を説くが如き閑話といへども、亦記して異聞に備ふと云。

【文献⑨】安政3年（1856）、『地震用心考』

○仙家の灵（靈）符に、生類無難、怪我除の符と云あり。此符を身に佩<sup>お</sup>び家の柱にもはり置けバ地震、火災にも、其外諸事に怪我を免るゝ也。是も用心の一つなり。図の如く、此四字を劔形<sup>けん</sup>の紙に書て、身の符とすべし。仙家にては、此四字の符字を擡抬擡指（ジャクコウジャクカク）と読むよし也。

安政元年寅の霜月四日の大地震の後にも、日々地震鎮まらざりしかば、尾州名古屋にてハ、国君より御下知有て、彼怪我除の灵符を人々身に佩べき旨、御触有りしかば、名古屋木場の商人、入船屋忠八と云者、穩徳の志を以て、彼符字を一万枚施行するを、己定雄、尾州にて見たり。或人曰、東海道池鯉鮒の駅なる池鯉鮒明神の蛇除守と云も即、彼四字の符字なり。又先年筑前国福岡領にて雀<sup>つる</sup>を捕ひけるに、其雀の羽に擡抬擡指（ジャクコウジャクカク）の四字を書てありければ、雀□□は仙人の書て放したる那なるべしとて、其雀放したりとぞ（文献①）。又淡路の国某の寺に、齊藤別当実盛の位牌納りてあるに、其位牌の裏にも彼四字を彫て有り<sup>た</sup>とぞ。是も怪我除の料<sup>ため</sup>なるべし（文献②）。又或人の筆記に、十代将軍家治公御代に、天明二年壬寅<sup>みずのえとら</sup>の五月、江戸にて、御小姓新見奎之助君、登城の時に田安御門外牛が渕にて新見氏、馬駭<sup>おどろき</sup>記、馬上ながら御堀の中に<sup>すべ</sup>進り落入りしに、人馬共に少も怪我なく上りける、此事上聞に達し、新見氏にハ、何ぞ尊記守りにても所持せしかと、御尋ありければ、即彼、擡抬擡指の符を腹<sup>ママ</sup>中せし由申し上げて、其符を上覽に備ひたるに、是ハ何方より貰ひて所持せしと御尋ありけるに、紀州家に縁者有て、親新見長左衛門貰ひたるにて、紀州光定郷御国に於て、御鷹野の節、雉子を鉄砲にて御打たせ遊ばされしに、雉子に鉄砲は当りながら、雉子は恙なく、活て居りしかば、不審に恩召し、網にて取らせ、能く御覧あらせられしに、其雉子の風切羽に、此符字の四字を書て有しとぞ（文献①）。又寛永二年三月晦日、将軍家□光□御鷹狩に、大きな雁を捕ひたるに、其雁の胸にも、彼四字の符字有しとぞ。是等は現界の鳥、不意に往きたるを、幽界にて神仙等、其鳥に符字を書て、助けたる物なるべし。されば、人間所持して怪我なき事を知るべし。

以上のように、近世期のサムハラ<sup>ママ</sup>の資料を時系列に文献を整理すると、基本は、【文献①】『耳囊』（九段下・新見愛之助・雉子）の事例が伝えられ、そこに別の事例が次々と加え

られていた過程が分かる。

鳥類を弓矢によって捕獲しようとしたが、捕獲できず、何とか捕らえて確認すると、サムハラが文字が体にあった。この弓矢が鉄砲に変わり、弾丸除けとなったようである。落馬しても怪我をしない怪我除けから始まり、虫送り、地震除けなど様々な効能が付加されていった。



### 第3節 明治期のサムハラ信仰

江戸時代に見られたサムハラ信仰は、怪我除けを中心に、虫除け、地震除けなどさまざまな用途で、全国的に行われていたことが分かったが、その後、明治期に入ってからのはかりについて実証する資料は乏しい。この時期の資料としては、佐藤幸彦が紹介している日本刀の銘がある。<sup>(1)</sup>「明治の刀工宮本包則の作品には中心或いは刀身に擡拾擡招の四字を彫ったものがある。」とし、「彼がさむはら信仰を何によって知ったか判らないが、明治19年(1886)に上京して伊勢神宮御神宝の太刀を受注、靖国神社境内で製作、納入直後、明治21年(1888)に最初のサムハラを切っているの、恐らく江戸期から残っていたさむはら信仰を東京で見て、取入れたものであろう。」と類推している。以下にその銘文を紹介しておく。

表3-1 サムハラ文字記載の宮本包則による刀

種別	銘文
刀	伯耆国大柿住宮本能登守菅原包則 擡拾擡招 明治二十一年十二月吉祥日
太刀	帝室御刀工菅原包則七十四歳謹作之 明治三十六年八月吉日 擡拾擡招
短刀	帝室御刀工喜寿菅原包則 明治三十九年一月吉日 擡拾擡招(刀身彫刻)
短刀	八十二歳菅原包則作(明治四十四作) 擡拾擡招
刀	帝室技芸員宮本包則八十八歳謹作之 擡拾擡招 大正六年八月吉日 齊藤氏

次にサムハラ文字が脚光を浴びるのは明治37年(1904)3月4日付の『都新聞』(5頁)に「不思議の四文字」として紹介されてからである。江戸時代の随筆を数点紹介した後、玉尾需<sup>もとむ</sup>という人物の日清戦争の事例を紹介した。この記事は、その後、種々の質問が寄せられ、それに対する回答が3月7日付『都新聞』(3頁)に読みが不明であることが説明されている。その後、明治37年(1904)3月18日付の『神戸新聞』(4頁)では、「擡拾擡招の字義に就て」と題して、サムハラ文字の読みと意味について「護身の効ありと伝ふ擡拾擡招の字義に就て大槻如電翁の語る所如左 此護符はサムハラと申します 梵語でインドの古語でせう 此四文字は寄字でサムハラの意を顕した者です」と解説を加えている。ここではすでに「サムハラ」という読みを当てている。

玉尾需の事例は、その後、『滑稽新聞』にも「滑稽迷信 奇なる護身札」と題して取り上げられる<sup>(2)</sup>。

滑稽記者曰く、此奇なる護身札なるものは、<sup>ちえのうみ</sup>智恵海、<sup>ひじまくら</sup>秘事枕、<sup>ちじゆつぜんしよ</sup>智術全書、などといへる古き本にも記されてあるが、此度征露戦地の某艦乗組軍人より左の<sup>きしよ</sup>寄書ありたり  
前橋旧藩士玉尾需翁は、<sup>しやはん</sup>這般の征露戦に際し、報国の一にもとて、左の<sup>まもりふだ</sup>如き護身札をば数十万枚、出征軍隊に寄贈された。

(1) 佐藤幸彦「さむはら紀行」『日本刀研究 佐藤幸彦刀剣論文集』(私家版)、平成19年、p.176。  
(2) 『滑稽新聞』第71号、滑稽新聞社、明治37年4月26日付、pp.226-227。

数十万枚配られたこのお札には説明文がついていたという。前半には、江戸期の随筆の例が挙げられ、それに続けて次のような記述がある。

明治二十七八年の役に、予が三男北澤友彦従軍せる故、予写して帽内に貼付け遣はせしに、七度戦場に臨みて、身微傷だも受けざりき、七里口の戦の如きは、敵丸背後に落ちて身恙なかりき、其友多田某、三男の此字を自写して、帽内に貼付けたりしが、敵丸帽を貫きたるに、頭は微傷だも受けざりき、是等は予が実験する所なるを以て、今回の役にも、我が忠勇義烈なる兵士の身に微傷をも受けずして、十分の奮戦を遂げ、皇威を世界に赫かし、英名を後世に轟かし給はんことを希望するの余りに、謹で此四字を呈す、必ず之を帽内に収め給はん事を請う。

七十九翁 たまおもとむ 玉尾需拝白

この玉尾需の事例は、後に田中富三郎の活動の根拠の一つとなり、松田定象著『神道真言妙術秘法大全』<sup>(1)</sup> という易学の書にも記されることとなる。

また、柳田国男も、「兎ニ角ニ是ガ百年前ノ稀有ノ出来事ニハ非ズシテ、現ニ日露戦争ノ際ニモ、右ノ雉ノ守札ヲ身ニ帯ビテ出陣セシ勇士多カリシコトハ事実ナリ。」<sup>(2)</sup> とサムハラさむハラの守札について触れている。

サムハラが記された千人針として現在実物を見ることが出来る最も古いと思われる物は、遊就館所蔵の千人針である。遊就館の展示図録<sup>(3)</sup> には、昭和7年(1932)2月21日に戦死した高橋祥太郎という人物のサムハラさむハラと記された千人針が紹介されている。

岩田重則によると静岡県三島市小沢こざわの竜爪神社所蔵の「竜爪山祭典帳」の昭和7年(1932)2月に「昭和七年二月 前島家ニテ出事ニ致しました 弾丸除」としてサムハラ文字の木版が押されているという。<sup>(4)</sup>

日中戦争以前に、サムハラについて触れた資料としては、駒澤大学学長である大森禅戒が昭和10年に「梵字・梵語の話(第3講)」(『大法輪』第2巻第4号)に<sup>(5)</sup> 「不思議の四文字」と題してまとめている。

「日清日露の戦争や、欧州大戦の折の青島攻撃の際、更に近くは満州事変等に多数の出征兵士が、丸除けの守符としてこの四文字を所持したということであり、某將軍の如きは、千人針の襦袢にくまなく、この四文字を書き込んで身につけて出征したということであ

(1) 松田定象『神道真言妙術秘法大全』高島易断所本部神宮館、昭和8年(1933)6版、大正6年(1917)初版、pp.127-128。

(2) 柳田国男『山島民譚集』甲寅叢書研究所、大正3年(1914)。

(3) 『靖国神社遊就館 図録』靖国神社、平成20年(2008)。

(4) 岩田重則「弾丸除け祈願としての「摺拾摺摺」」『戦死者靈魂のゆくえ—戦争と民俗—』、吉川弘文館、平成15年(2003)、pp.154-158。

(5) 大森禅戒「梵字・梵語の話(第三講)」『大法輪』第2巻第4号、大法輪閣、昭和10年(1935)4月、pp.70-74。

る。」と記し、満州事変や日支事変の守符の例を挙げている。また、「日支事変に於て、不思議な功德を現わしたというところより、それ以来この四文字は、益々民間に信仰されるようになり、遂に全国の各駅にては、鉄道事故防止の為、各従業員に所持させるところまで行った。然るに不思議にも、災禍を免れたものが少なくなかったというので、更に消防署員、自動車運転手、船員、飛行家等も、万年筆や携帯品に、この字を彫りつけるようになり、女の人も、<sup>かんざし</sup>簪に彫って所持するようになった。」と記し、更に後述する田中富三郎についても触れている。

「大阪の田中富三郎という万年筆業を営む人は、大いにこの功德を有難がり、楠公婦人菩提所たる楠妣庵で祈禱をして、この四文字を彫った万年筆を、日支事変に出征した将卒諸氏に贈り、そればかりでなく、ギャングよけとして、政財界の諸名士にも贈呈したところが、陸軍恤兵部や、宇垣、荒木、床次、山岡、内田（信也）等の諸氏より、礼状を受けたということである。そして、今日に於ては、この四文字の信者からなる信光会という会が組織され、大鉄沿線汐の宮に、その聖殿と一千余坪の村を建設するというほどの勢いとなったのである。」とその時代の状況を書き留めている。この田中なる人物は、サムハラ信仰を全国区にした重要な存在であり、次に詳しく述べることとする。

## 第4節 田中富三郎の活動

日中戦争を前にある人物の活動がサムハラ信仰が知られるきっかけを作ることとなる。田中富三郎は、サムハラ信光会なる団体を組織し、サムハラ文字が付されたさまざまな品を百貨店等で販売し、その後、戦後になるとサムハラ神社を創建することとなる。しかし、戦前、特高警察により宗教法人の違反で取り締まられている。この人物について詳細に報告されているので、その経緯とこの人物の紹介を『特高外事月報』の昭和11年(1936)11月の記録を元に紹介していく。

### 〈サムハラ聖殿撤去状況〉

- ・大阪市西区靱北通三丁目田中富三郎は大阪市内に三カ所の店舗、工場を有し、相当手広く万年筆の製造・販売を営んでいた。
- ・約10年前高野山参拝の際に偶然に災難除のサムハラなる文字の記載ある守り札を入手したところ、商利に機敏なる田中はその複雑な組み合わせ文字の靈効) 宣伝によって利を売ることを企画した。
- ・任意サムハラなる読み方を付して、直ちにこれを商標として登録し、まずその使用を独占するとともにこの文字が古くから災難除として靈能顕著であると付会宣伝した。
- ・当初は、これを下駄・ステッキ・食器などに刻んで試みに販売したが、意外に購買者が多かった。
- ・計画がうまくいったので、さらに郷邑地方にサムハラ有縁の地を造り、その靈証を強めることを画策した。そこで40年間消息を絶っていた郷里岡山県苫田郡西加茂村に昭和六年(1931)飄然として帰省し、まず村民の歓心を買おうとして、郷土所在の神社仏閣に売名的寄付を行い、この間にもしきりにサムハラの影響・普及を図り、村民に相当信用を植え付けた。
- ・翌年には自ら会主となり、主として自家の店員などで「サムハラ信光会」と称する信仰後援団体を組織し布教した。漸次、大阪並びに郷邑地方を中心に信者を得るようになった。
- ・その頃からこの文字を刻んだ指輪・護符・カフスポタンなど、多数の商品を製作し、百貨店などを通じて広く市井に販売・宣伝し、この間、阪神間所在大工場の安全週間などを利用して多量の護符を売りつけ、相当、これが普及した。
- ・昭和8年(1933)、さらに郷土の有志に対して疲弊する農村の匡救を図るためにサムハラ聖殿を創設し、その発展を期すとの議を起し、村内有力者間を奔走し、いよいよ同村火詰山中腹の村社金比羅神社の境内にサムハラ聖殿を建設することとなり、所定の手続きを経ずに同年5月に起工。田中より約4500円の私財を投じて昭和10年(1935)5月これを竣工し、爾来、この箇所をサムハラ信仰の中心地として災難除の地方信仰を高めていった。
- ・しかし、岡山県当局は、この聖殿が無願社で、かつ種々迷信流布のところがあると視察中のところ、田中はサムハラ聖殿建設の表面上の理由としては「自己の社会恩恵に対する奉謝として、広く世人をサムハラ神徳に浴せしめ、合わせて国民敬神崇祖の一大精神運動たらしめんがためなり」と称しているが、同人がつとにサムハラという文字を商標として登録してその使用を独占したうえ、該当商標を付した商品を販売してこの宣伝・普及に

努めつつあるのみならず、サムハラが古来より郷土に縁地を有したように見せるため商品販売の利便を得ようとしていたことは明白となった。

・そのために同県当局では、その存続は許し難いものとして、昭和11年(1936)10月末に、責任者田中富三郎に対し、無願社の禁制なる所以並びに迷信利用によって商品販売の不当所為がないこと等について、懇諭したところ、左記(一)のように請書を提出し、聖殿の自発的撤去を誓約した。爾来、推移注視中のところ、いよいよ十一月十日より二十五日にわたり聖殿及びその付属建物全部の破却撤去を見るにいたった。

#### 〈経歴並に聖殿建立の経緯〉

田中富三郎は、明治三年岡山県苫田郡西賀茂村の貧家に生れ幼少の折、寺子屋にて漢籍の素読を修めたる程度にして格別学歴等は無く、十八歳の時、大阪に出で印刷所の職工、古本売買、酒保経営等をなしつつありしが後、雑貨商を営み更に対満雑貨貿易に従事し、大正七年より現地に於てプツシュ万年筆の製造販売を開始し、良好なる業績を治めて現に相当の資産信用を有するものなり。然るに約十年前偶然の機会に於て、擡抬擡摺なる符合文字が災難除けの護符たるの伝説あるを聞き、之を以て一儲けせんことを企画するに至り、先づ之を商標として登録し当初は下駄、ステッキ、食器類に該文字を刻みて市井に売出し「此の品を所持せば如何なる災厄も免れ得べし」として災厄除の靈効を宣伝したるに相当なる売行を示せり。依つて更に擡抬擡摺の縁起を作為して一層宣伝効果を収めんことを策し、岡山在には古くより之が由縁の地ありと大阪方面に宣伝し置き之が実在の地を造るべく、出郷以来四十年間何等の消息をも絶ち居たる郷里に昭和六年突然帰村して、村長を訪れ、自己は出郷以来万年筆の製造販売等により相当なる資産を築き成功せるに引換え、郷里は依然として旧態の姿にて疲弊し居るは遺憾なるを以て自分は郷邑発展の為大いに尽力したき考へなりと称し、西賀茂村所在真福寺に四百円を寄贈して仏間客殿を修理増築し郷社金刀比羅神社には大鳥居一基一千円を寄進して村民の歓心を求め擡抬擡摺宣伝の素地を作り置きたり。他方昭和七年頃より大々的に此の商標を刻める御符、指輪等左記(二)の如き各種の商品を製作し種々縁起由来並に其の靈効を吹聴宣伝し、大阪市内百貨店高島屋及津山市所在百貨店大黒屋其他阪神間の万年筆同業者等の手を通じて広く市井に販売すると共に之が普及宣伝機関として自ら会主となり擡抬擡摺信光会を作り、同会の名に依りて「怪我をせぬお守札の事擡抬擡摺」と題するリーフレットを作成して其の靈効実例を説き、出征兵士の大阪通過、産業安全週間等に際して御符の寄贈販売を為す等凡ゆる機会を捉へて之が宣伝を図り、偶然にも安全週間を無事故に終り工場主等より謝状に接することあれば、直ちに之を広告文に利用する等遺憾なき宣伝効果によつて相当なる売行を示すに至れり。並に於て昭和八年五月再び帰省して村長其他村内有力者に面会し愈々郷村発展の為私財一万円を投じて村社金比羅神社境内に靈顯高き擡抬擡摺聖殿を建立し之を同神社に寄進したしと述べて村長並氏子総代等を納得せしめ直ちに之が工事を開始することゝなれり。而して擡抬擡摺聖殿(間口二間奥行三間半の神殿造り)には「擡抬擡摺大神神璽」と記載せる木片を御神体として納め、之に賽銭箱、線香立、石燈籠、手洗所等を備へ之に付属して一見社務所の如き形觀ある休憩所十八畳六畳各一間)

を設置し、之が総工費約四千五百円を要して昭和十年五月竣工を見るに至りたるが其の費用は総て田中より支出し、其他敷地整理の為氏子六百名の労力奉仕に対しても亦酒肴料として三十銭宛を支給せり。尚之が竣工と共に岡山県当局に対し聖殿建立箇所 の境内地設定方を申請せるも村社境内地制限抵触の故を以て結局不許可となりたるものなるが、外観上は全く境内同様の地続にして、自然地方参詣の対象となりて土俗的信仰を増すと共に該聖殿を聖地として商品販売の宣伝に供へつゝありたるものなり。而して岡山県当局に於ては其の宣伝状況に対し漸く懷疑を生ずるに至り鋭意調査中の処所謂其の縁起なるも単なる迷信にして、曩に大阪に於て信仰後援団体として作りたる擡拾擡摺信光会と雖も一見多数の同信者を以て組織せられたるが如くにして、実は殆んど同族並使用人等を以て結成せるものにして全く宣伝の具に過ぎず、殊に縁起発祥の地が古来より郷里岡山に所在したるが如く大阪地方に於て宣伝するに拘らず一方郷里に於ては大阪方面には有力なる信仰団体をも組成し多数の同信者あるが如く伝ふる等巧妙なる宣伝を試みつゝあること判明し、畢竟無許可の神社を建設し而も之を販路拡張の営利手段に供しつゝあるものと認められたるを以て田中に対し懇諭するところあり、本人も深く其の非を悟り該聖殿の自発的撤去を見るに至りたるものなり。

その後文中にも出てくる資料が2点紹介されている。

左記（一） 請書

建設所有に係る左記擡拾擡摺聖殿に関する一切の施設は明治五年八月晦日に大蔵省達第百十八号無願社寺創立禁制の件に違反するものなるに就ては之を昭和十一年十一月二十五日迄に破却撤去し該擡拾擡摺聖殿使用の材料を以て建物を為さざるは勿論之を撮影せるものを商品の広告等に使用致す間敷仍て請書及提出候也

記

岡山県苫田郡西加茂村大字中原五〇六八六七番地

擡拾擡摺聖殿 一棟

同 社務所 一棟

其他石燈籠手洗鉢線香立

石垣玉垣石段等擡拾擡摺聖殿に関する付属物 一切

昭和十一年十月二十七日

大阪市西区靱北通二丁目二十九番地

田中富三郎

岡山県知事 多久安信殿

左記（二） 擡拾擡摺の商品

擡拾擡摺入尾錠	洋銀黒イブシ仕上げ	箱入	一箇	金一円
同	尾錠付洋服バンド	〃	一箇	金一円五十銭
擡拾擡摺入尾錠	純銀製	桐箱入	一箇	金五円
同	金張製	桐箱入	一箇	金四円五十銭

搦拾搦摺入胸章	洋銀イブシ仕上げ	桐箱入	一箇	金五十銭
同	純銀製イブシ仕上げ	桐箱入	一箇	金一円五十銭
同	金張製	桐箱入	一箇	金二円
搦拾搦摺お守小判	(蜀紅錦袋入富金小判)		一体	金三十銭
搦拾搦摺お守小判	(織物袋入金色小判)		一体	金二十銭
十八金模様総刻エンゲージ指環	(漆塗金時絵桐箱入)		一箇	金二十円
白金甲丸型指環	(シール張サック入)		一箇	金二十円
白金細輪型指環	(シール張サック入)		一箇	金十二円
十八金甲丸型指環	(ベッチン張サック入)		一箇	金八円
ホワイトコイン台本真珠入指環	(同)		一箇	金六円
十四金細輪型指環	(同)		一箇	金四円
ホワイトコインエンゲージ型指環	(桐箱入)		一箇	金一円
ホワイトコイン縄型指環	(桐箱入)		一箇	金一円五十銭
家庭用プラチン細輪型指環	(桐箱サック入)サイズ組合		五箇一箱	金一円
搦拾搦摺守札	(金色真鍮製)	桐箱入	一体	金三十銭
搦拾搦摺守札	(サック軽銀金製)	桐箱入	一体	金五十銭
搦拾搦摺子達の守札	(サック守札共軽銀製)		一体	金二十銭
搦拾搦摺カフス釦十八金張	(レザー張サック入)		一組	金二円
搦拾搦摺カフス釦プラチン製クローム付		桐箱入	一組	金一円
家庭用プラチン指環、お守小判、守札優美箱入五箇組合			一箱	金一円
搦拾搦摺小付	(サック守札共金製)	桐箱入	一箱	金一円
搦拾搦摺実鈴	(純銀製)	桐箱入	一箇	金二円二十銭
同		桐箱入	一箇	金一円四十銭
搦拾搦摺記念メダル	(造幣局製)金四分一合金(蜀紅錦袋入富金小判)添付			
高尚優雅ラクト新製守札 搦拾搦摺ラクトロイド製サック守札金製優美箱入 色種類(象牙、翡翠、赤、鼈甲色等)				

以上、『特高月報』から事件の顛末および田中富三郎の活動について見てきたが、彼の活動は終わったわけではなかった。次に挙げるのは新聞の広告である。各地の新聞に同時期に宣伝を行っているようである。

○昭和12年7月1日付『京都日日新聞』

「身を守る不思議の搦拾搦摺」「身命の災難除け「サムハラ」に就て」

豊臣秀吉麾下の名将加藤清正は不思議の四文字を刃に彫り付けてあつたため万死に一生を得たといふ話がある

奇蹟の実例

株式会社神戸製鋼所従業員一万名にて毎日廿名以上の負傷者があつたが、此のサムハラ様の御符を所持せしめてよりピッタリとなくなり工場医は毎日欠伸をして居ると云ふ有様で最も顕著なりと従業員の目を丸くして驚かされたのは昭和七年六月十一日、一職工が高所に於て鉄鋏を以て鋼塊の整理作業に従事中心力こもり其の鋏外れ非常なる全力の加わりしまゝ仰向けに地面の鋼塊の上に転落したるもの身に擦り傷もなく平然たりし事は不思議よりも寧ろその神秘的効果の偉大なる点に付いては恐しさを感じたと同社より態々御礼に來宅せられサムハラ堂建設基金にと金五十円也を寄付せられた。(田中富三郎氏にあてた礼状)

山口県下松町

日立製作所笠戸工場

第一日朝お守札を全員に分配し何れも大変に喜び一層緊張して午前は一人のけが人もなかった。午後一時東南方に当りSOSの急報があつた。第一号ハンマー（圧力三五〇〇ポンド）満鉄バシ型機関車のバツクフレーム（重量約一噸）を五名の作

業手が火造中之を吊した大チェンブロック吊垂金俄然切断し作業手の頭上に落ちかゝつたのである。無論吊されたフレムの一方も落ちる、作業者一同はやられたと思つた。今迄も数回あり其の度に必ずやられたものだ。然るに何ぞや、不思議フレームを支へて居た一人の作業者が尻餅をついただけで他の者は微傷だも負わず呆然として居たが一同口を揃えてサムハラ様サムハラ様と言つた。ホントに不思議千万であると大口職長以下其靈感に感激して語つた。

（頒布所）京都駅前「丸物」二階 貴金属部

サムハラ入護符頒価（一部掲載）

サムハラ十八金甲丸型指環	一個	八円
サムハラ十四金細輪型指環	一個	四円
サムハラホワイトコイン甲丸指環	一個	一円
サムハラ十四金張カフス釦	一組	二円
サムハラ鈴銀	一個	二円二十銭
サムハラ十八金検定証明入指環	一個	二円
サムハラエト入守札	一個	三〇銭
サムハラお守小判、指環、守札	各一個	二〇銭

頒布本部大阪市西区靱北通二丁目二九

サムハラ信光会

この広告と同様のものが、翌日の7月2日付『神戸新聞』にも百貨店「そごう」の広告として掲載されている。さらに京都日日新聞の10月2日付の広告には、別のエピソードが紹介されている。

○昭和12年（1937）10月2日付『京都日日新聞』

サムハラが兵隊を救つた話

大阪市浪花区芦原町一八四番地道浦吉三郎氏は、慰問袋から知り合になつた満州派遣軍弘前八師団歩兵十七聯隊の佐藤久治さんに弾丸除け守として御利益あるサムハラといふ御守りを贈つたところその礼状が来たそれによると佐藤さんは御守りの届く前後匪賊征伐に行つたがピューピュー飛んで来る弾丸のどれもこれもが佐藤さんの前で不思議にもカーブしてその身体をそれてしまふ夢をみてこれは何か有り難い神様の御守護を受ける報せだらうと翌朝戦友達と話してゐるところへ、道浦氏からのサムハラ様がついたのだつた、丁度其日三里ばかり離れた青体子高附近に有名な馬賊が現はれたとの報に接し皇軍は極度に緊張した、その晩佐藤さんは歩哨に立たされることになつたのでサムハラ様をしつかり体にくつ付けて歩哨地点に出かけた其深更馬賊偵察隊四



名が月光のもとに逼りよつて来たが、佐藤さんを見つけて矢庭に発砲したのでこちらでも応戦大いに努めて居る中三名は射殺され、一名は傷ついた儘逃出そうとしたので、佐藤さんは追いついて大格闘の後捕虜として無事職責を全うしたが、四人を相手にしながら擦傷一つも負はず而も此捕虜の口から大事な証言を得て軍の行動を大いに助けるようになったのは全くサムハラ様の御加護によるものと感激したといふ

昭和十年七月十二日

以上のようにサムハラ信仰は、田中富三郎の活動をきっかけとして、その後のサムハラ信光会による団体としての活動を展開することにより、弾丸除けのお守りとして知られるところとなった。さらに同種のお守りである千人針に、弾丸除けの効力を高める目的で、サムハラ文字が書き込まれるまでに、戦時下の日本に浸透した。

## 第5節 日中戦争以降のサムハラ

大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」によると、昭和12年（1937）8月11日朝刊を初見としてサムハラの護符は、その後も、8月22日朝刊、8月28日朝刊、9月5日朝刊、9月11日朝刊の広告の一部に掲載され、9月13日朝刊の広告ではこの護符を進呈した数の中間報告として、61万1540体という数字を示していると指摘している。<sup>(1)</sup>

この広告のサムハラに関する部分を紹介する。

○昭和12年（1937）8月6日付『大阪時事新報』

「仁丹御買上の有無を問はず 敵弾除けの御守進呈」「出征軍人に是非御携帯願ひたき敵弾除け、身を護る不思議のお守」「千人針の携帯と共に心丈夫に敵に向はるゝ靈験あらたかなる御護符」

「擡抬擡擡の靈験数例」

- 現陸相、杉山大将が日露役に軍帽の内に此の「擡抬擡擡」を貼付けて出陣されし事は、曩に東朝座談会で閣下が親しく話され世間周知のこと
- 日露奉天の戦に、加茂町前原遼平氏は、決死隊となり敵前五十米の鉄条網を破壊し唯一人生残つた
- 満州事変に、十七連隊の佐藤久治氏は、単身四名の匪賊と交戦し三名を射殺、一名を捕虜としたが自身は微傷もせず
- 日清役に、前橋の人玉尾友彦氏は、軍帽に貼り七里口戦で頭上の敵弾悉く背後に落ちた
- 大阪有本国蔵氏、（元代議士洋服組合長で先般郷里に頌徳寿像の建つた方）は造幣局で、純金の小付として作り常携用にとて知友に頒たれた
- 大阪旅組合長、山西玄兵衛氏は、日露役に出征の親戚十三氏に贈られ全部無事凱旋したので爾来施薬の如く知人間に配分さる
- 大阪中山製鉄口所の花田保氏は、三越の鉄板に敷かれたのに僅の擦過傷だけで済んだ
- 大阪高島屋では、満州事変の慰問袋に悉く同封し、平素も「怪我せぬ護符」として広く頒売

この時期の他の地方紙を調べてみると、昭和12年8月13日付『京都日出新聞』、同年8月16日付『海南新聞』などにも仁丹の広告が見られる。また『宮崎新聞』では、仁丹の広告は見られないが、次のような記事で、サムハラの護符の無料頒布について紹介している。

○昭和12年8月12日付『宮崎新聞』（3頁）

「敵弾よけの お守が寄付された 慰問袋へ入れませう」

北支事変緊迫とゝもに国民銃後の熱意は火と燃え国防献金や皇軍慰問金。街々には

---

(1) 大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第69号、古々路の会、平成8年（1996）。

千人針、千人力に沸きかへつてゐる時、また一つ心強い銃後の話題が発表された。それは現陸相杉山大将も日露戦争出陣の際、軍帽に貼つて行かれたといふ敵弾除けのお守『揜拾揜摺』が日清日露の役を初め満州、上海事変にも幾多の奇蹟的な実例があることを予て聞いてみた仁丹本舗主森下博氏が今回の北支事変に当つても是非皇軍の方々に差上げたいとの念願から、わざわざ石清水八幡宮に祈願をこめて広く寄付を発表したことである。希望の人は誰でも送料を同封して申込まれるとよい

○昭和 12 年 8 月 18 日付『宮崎新聞』

「敵弾封じの不思議な御守」

現陸相の杉山大将も日露役に軍帽の中へ入れて出陣され、日清日露、満洲、上海事変と、いつも戦場で不思議な靈験を顕し殊に日露奉天の戦ひで決死隊として万死を期した加茂町出身の前原遼平氏が唯一人微動も受けなかつたといふ縁りの『揜拾揜摺』の御守を今度仁丹本舗では皇軍将兵のため広く一般に無代で贈呈することとなり時節柄非常に時宜に適した好計画とせられてゐる。

日中戦争開戦から一ヶ月前後で、このような広告が行われることによって、サムハラ信仰が全国的に知れ渡り、千人針にも記されていたことが分かる。

こうしたサムハラ信仰については、昭和 12 年の『主婦之友』(第 21 巻第 11 号)のような婦人雑誌でも取り上げられている。

「<sup>たまよけ</sup>弾丸除のまじない」

今では、東京小石川に「まんたら信仰会」が設けられ、不思議の四文字をメダルに彫刻して希望者に頒けてをります。同会神田支部塩島隆正堂の御主人の話によると――

ある日某所で試みにこの文字を鑄たメダルを的の端に付けて、五人の者が各二十発づゝ、都合百発で射撃したところ、射手は相当な腕利だったが、的には僅かに四発しか中らなかつたさうです。これを見た人々は、『的にもし生命があつたなら、一発も中らなかつたらう。』と感歎したさうです。

写真 3-1 昭和 12 年 8 月 16 日付『海南新聞』仁丹広告の部分拡大

また、人参にこの四文字を書いて軍馬に食べさせると、怪我がないと言はれ、実際にも行はれてゐます。

戦場では弾丸除のまじなひとなる外、日常には怪我除のまじなひとなつてゐます。  
(中略、筆者)

この文字を護符にするには木札などに浄書して身につけます。なほ、身につけるシャツ、帽子、手拭などの端にも小さく書きつけておくと身の護りになります。

このまじなひの靈験も日清日露両役、北清事変、満州事変の折に明らかに示現してゐます。

偕行社新館主任の北村亀作氏は、慰問の手紙を戦地に送る際、切手の裏側に当たるところに必ずこの文字を書くさうです。乃木大将の二銭切手や東郷元帥の四銭切手の場合には、その部分を四角に切抜きますと、表にはこの文字で立派な護符ができるのです。

戦場では弾丸除となる外、家庭では泥棒除ともなるのです。玄関とかお勝手とかに書いて貼りつけておくと、犬が吠えるとか鶏が鳴き出すとかして、盗難を未然に防げると言はれてをります。

近衛首相家には、この文字の印章が代々伝えられてゐて、大切なもの、長くしまつておくものゝ箱には、その印を押した紙を貼つて、災害除になさつてゐるさうです。<sup>(1)</sup>

また、このサムハラ文字の護符は、各地で配布されていたものと思われる。

○昭和 12 年 (1937) 7 月 29 日付『海南新聞』

「護符サムハラ 送付方を司令部へ」

事変発展と共に国防献金相つぎ女子青年団、国婦、女学校の千人針寄贈。神社の護符寄贈等皇軍の武運長久を祈る人々の数が多い中に宇摩郡川之江町古町護信会の畠山鐵治氏は豊臣秀吉朝鮮役時靈験顕かであつた護符「サムハラ」を入用であれば幾ふでもお送りすると松山聯隊区司令部へ言つて来た

ここでは、日中戦争以降に盛んに作られたサムハラ文字が描かれた千人針を紹介しておく。昭和館で所蔵している千人針については、「千人針データベース作成に向けての整理」<sup>(2)</sup>で、紹介したが、例としてこの千人針から紹介しておく（「表 1-2 昭和館所蔵のサムハラが描かれた千人針」参照）。

昭和館が所蔵する千人針約 100 点のうち、8 点にサムハラ文字が描かれているが、なぜこの文字を記したかについての聞き取りはされていない。

**写真 3-5** の千人針は、丹村啓吉さんが所持していたものである。昭和 17 年 (1942) 4 月に召集令状が来た際に、姉の宣子さんが叔母と一緒に縫ったもの。姉の宣子さんは寅年生れであった。この千人針は糸玉を表に出さず、和てぬぐいで覆つてある。サムハラ文

(1) 「弾丸除のまじない」『主婦之友』第 21 巻第 11 号、主婦之友社、昭和 12 年、pp.378-379。

(2) 渡邊一弘「千人針データベース作成に向けて」『昭和のくらし研究』第 9 号、昭和館、平成 23 年 3 月 1 日、pp.1-22。

字は叔父が書いてくれた。弾除けのお守りとして戦地へ持って行った。翌年1月には内地を離れ、南方を転戦しビルマで終戦を迎えたが、その間常に腹巻として巻きつけ、シラミもわいたが、洗濯して身につけていた。

表3-1 サムハラ文字のある昭和館所蔵千人針

番号	資料番号	地域	応召年	特徴
①	R39-00081	高知	—	お守り有り、朱印有り、祈武運長久・七生尽忠報国・必誓滅敵・祈健康
②	R39-00102	高知	S19年	朱印有り、祈武運長久・七生尽忠報国・必誓滅敵
③	K08-01309	東京	—	武運長久、赤丸、既製品
④	K08-01363	東京	S17年1月	武運長久、旭日柄（点描）
⑤	K08-01800	東京	S17年4月	富士山の絵有り
⑥	K08-05747	東京	S12年8月	朱印有り、祈武運長久他、5銭玉56個、10銭玉37個、朱印有り、
⑦	K08-05748	東京	S12年8月	布覆い有り
⑧	K42-00009	大分	S17年4月	お守り有り、朱印有り、祈武運長久他

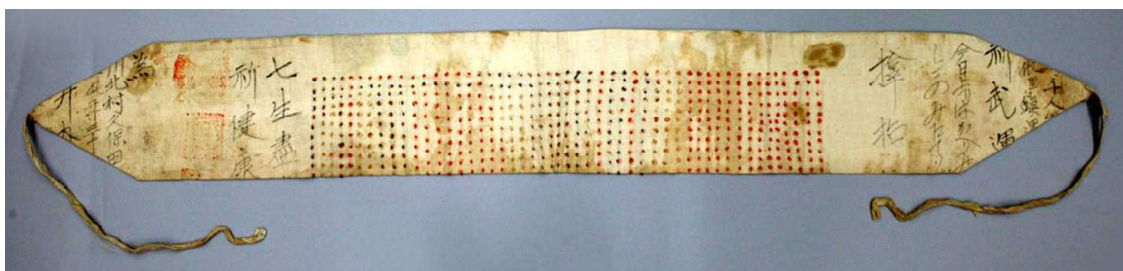


写真3-2 昭和館① サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）



写真3-3 昭和館② サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）



写真3-4 昭和館③ サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）





写真 3-5 昭和館⑤ サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）



写真 3-6 昭和館⑥ サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）



写真 3-7 昭和館⑧ サムハラ文字の描かれた千人針（昭和館蔵）

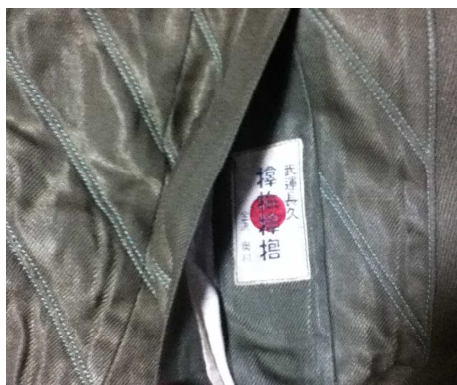


写真 3-8 サムハラ文字の入った軍服  
（萩谷茂行氏所蔵）

また、軍服に直接サムハラ文字を取り付けた例もある。写真 3-8 は、昭和 13 年（1938）5 月に改正された、陸軍の准士官以上の冬衣である。通常の勤務や野戦で着用される軍服であるが、左胸内ポケットの中に、「サムハラ 金沢 奥村」の織り出しタグが縫い付けられている。洋服を納めた店から、着用する者の無事を祈って心ばかりのサービスであったと思われる。准士官以上の軍装品は自弁で調達されるものなので、この服も洋服店で誂えられたものである。

## 第6節 太平洋戦争後のサムハラ信仰

戦後のサムハラ信仰については、前述の田中富三郎によるサムハラ神社の再建が重要な出来事となった。戦後の田中富三郎の活動については次の通りである。

戦後マッカーサー指令により同社殿を再建。創始者は続いて昭和二四年、大阪の豊国神社の隣接地を購入し自費で同神社を建立。神前の扉材は伊勢神宮より賜ったという。三七年には西区立売堀に遷座。現在、岡山県苫田郡加茂町の神社を奥の宮としている。創始者が昭和四二年に死去すると、養嗣子の田中好一が宮司後継者となり現在にいたっている。<sup>(1)</sup>

サムハラ神社については、現在も活動をしており、松野純孝『新宗教辞典』（昭和59年（1984）、東京堂出版）、国学院大学日本文化研究所『神道事典』（平成6年（1994）、弘文堂）などに紹介されており、井上順孝他『新宗教事典』（平成2年（1990）、弘文堂）では、神社紹介の他に「法との摩擦」「創始者・リーダー一覧」の項目でも取り上げられて



写真3-9 サムハラ神社



写真3-10 サムハラ神社の御守り



写真3-11 サムハラ神社

いる。また、大島建彦「撻拾撻摺神社の現状」<sup>(2)</sup>では、現在も続く大阪府にあるサムハラ神社、その現況について報告している。

サムハラ神社と別にもう一つサムハラのお札を頒布している神社がある。京都府南区にある鎌達稲荷神社である。この神社は、「元、陰陽師安倍晴明が子孫、安倍・土御門家の祭祀にして、万生業に福利を授け給う開運の神・倉稻魂大神と、広く人事を良きに導き、交通安全の神でもある猿田彦大神が主神で、御鎮座地は元、西寺跡である。」とし、「鎌

(1) 井上順孝ほか『新宗教事典』弘文堂、平成2年（1990）、p.499。

(2) 大島建彦「撻拾撻摺神社の現状」『西郊民俗』157号、西郊民俗談話会、平成8年（1996）。大島建彦『疫神と福神（三弥井民俗選書）』（三弥井書店、平成20年（2008））にも収載。

達さま御利益由来には、開運・勝負運を招き奇蹟を生む神さまの靈驗ありと敬われ」、サムハラ呪符は災難除け、奇蹟を生むお守りとして人気がある。

また、福岡県糸島市には、雷山の中腹に真言宗の千如寺が安産、子育て、開運厄除などの祈願所として知られ、身代わりお守りとして「サムハラ」の木札が人気であるという。

戦時中には、弾丸除けの信仰として人気を集めたサムハラ信仰も平和な時代になり、江戸時代のようにさまざまなバリエーションでの信仰になりつつある。前にあげた神社のお札のみならず、自分で書いたサムハラの四文字を自らのお守りとする人もいるようである。「昭和五五年ごろに御徒町駅のホームの階段で転げ落ちたとき、これを身につけていたお陰で、眼鏡を壊しただけで大した怪我もしないですんだという。それから、店に来る人に自身が記した擡拾擡摺という紙を配るようになり、近所で知られるようになった」<sup>(1)</sup>という事例もある。

戦後、戦時中を振り返るかたちで記された小説がいくつかある。代表的なものとしては、飯尾憲士著『擡拾擡摺』であろう。飯尾憲士「擡拾擡摺」(『すばる』平成5年11月1日発行)、後に単行本『さむはら』(集英社、平成6年)として刊行されている。

手記としては、次のようなものが記されている。

「サムハラさま」

「私の左隣で砲の計器を忙しげに操作していた東田が、二日まえの戦闘中と全く同じ口調で、おかしげな呪文を唱え始めた。

「サムハラ、サムハラ、サムハラ、サムハラ、サーマ」

全神経を砲の計測に集中している私たちの砲手は、この呪文が始まると手もとが危うく狂いそうになってしまうのだ。(中略、筆者)

「てめえ、いまの戦闘中、おらが拝んでいた『サムハラサマ』に、なんで文句をつけるんだい。おらはな、これでも、みんなの無事を一生懸命お願いしてんのに、バカ笑いなんかしやがって……。」(中略、筆者)

「ハハア……。そうか。するってえとおめえは東京で生まれた男だってわけか。それじゃあ昔っから、おらがのほうに伝わってる『サムハラサマ』のありがたみなんざあ分かるはずねえよなあ。こりゃあお笑いもんだぜ。へへへへへ……」

東田は丹波の山奥の男らしく素朴な口調で言うのけ、私を憐れむような目つきで嗤いかえしてきた。<sup>(2)</sup>

また、サムハラ様を小説化したものとしては、岩井志麻子の「サムハラ様」などがある。<sup>(3)</sup>

以上、太平洋戦争後のサムハラ信仰についてみてきた。戦争との関わりは見られなくなったが、サムハラ信仰は大阪市のサムハラ神社が活動を続けており、その他全国各地にサ

---

(1) 大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第69号、古々路の会、平成8年(1996)、p.9。

(2) 三橋国民『鳥の詩 死の島からの生還』日本放送出版協会、平成7年(1995)、pp.96-99。

(3) 田中富三郎の故郷岡山県苫田郡加茂町は、昭和13年(1928)に起こった猟銃惨殺事件の現場であり、この事件は後に横溝正史「八つ墓村」の題材となった。そのためこの事件と絡めて、論じる研究者や、これを題材にした小説や記事が多い。



ムハラ信仰を引き継ぐ神社仏閣が存在している。常光徹氏のご教示に因れば、高知県のあ  
る家の牛小屋にサムハラと記された木札が祀られていたという。サムハラ信仰はさまざま  
な形で人々の需要に応じていくものと思われ、今後も丹念に調査する必要がある。

## 小括

以上、江戸時代から現在まで、サムハラ信仰についての資料をある程度俯瞰できるまでに整理し、その信仰実態について考察した。

第1節において、サムハラに関する研究を整理した。第2節において、江戸時代の事例を時系列に整理し、江戸時代には、怪我除け、虫除け、地震除けなどとして信じられていたことを確認した。

第3節においては、明治期の事例を確認した。怪我除けとして日本刀にサムハラの文字を入れる事例が見られた。また、日清戦争において玉尾需という人物が護身札を数十万枚、出征軍隊に寄贈したことで、新聞に取り上げられる。

第4節において、田中富三郎という人物が、万年筆業にサムハラ文字を利用し、その活動は宗教活動に引き継がれたことを特高警察の資料で明らかにした。現在のサムハラ神社につながっている。

第5節においては、仁丹の広告による影響を指摘し、千人針に利用されたサムハラ文字を紹介した。

第7節においては、サムハラ神社の現在、その他、寺社で配布されるサムハラのお守りなど、サムハラ信仰の現在について述べた。

本論文では、千人針習俗を戦時下の弾丸除け信仰の中に位置づけているが、弾丸除け信仰は多様であり、千人針習俗と深く結びついた信仰の一つとして、サムハラ信仰を取り上げた。

千人針習俗が明治期の戦争の開始とともに始まったことと対比すると、サムハラ信仰は江戸時代からあった怪我除けの信仰が戦争の開始とともにその目的が変化した事例の一つととらえられる。

こうした戦時下の全国的な弾丸除けの流行とは別に、牛の怪我除けや戦後の交通安全のお守りとして、地域に根ざした習俗化も見られ、そうした事例を収集することが今後の課題といえよう。

## 第4章 戦争の民具としての千人針

### 第1節 実物資料からみる千人針の特徴

#### 第1項 千人針調査項目について

第3章まででは、文献を中心に弾丸除け習俗、及び千人針習俗についてその変遷と特徴、及び弾丸除け信仰として千人針にも影響を与えているサムハラ信仰について検討を加えてきたが、次に実際の千人針について分析を行う。現存している千人針は日中戦争以降のものがほとんどで、明治期からの変遷を実物資料から把握することは困難である。そこで、本章では、日中戦争以降の千人針を中心に、その特徴と役割を明確にすることを目的とする。

全国各地の博物館・資料館をはじめ、様々な施設で千人針は保管されている。その整理状況はまちまちで、とりわけ寄贈者への調査を実施しているかどうかで、その資料の価値が変わってくる。戦争体験者が少なくなった現在、これからでも寄贈者への再調査が実施されることで得られるデータは少なくないと考えられる。聞き書きも困難となった時代を迎え、実物資料の千人針を分析することで解明できる千人針の特徴や役割がある。現在収蔵されている実物資料を調査するだけでも分かる事実も増えてくると考えられる。その分析の方向性を項目ごとに記しておく。

序章の研究史において、「戦争の民具」というテーマの設定が重要であることを述べたが、「戦争の民具」という分野を確立するにあたって、例えば千人針を例にして、全国的な事例を収集し、分析できないか。戦争の民具の分析する一つの試みとして千人針の分析を提示してみたい。

千人針習俗を分析するうえで、次の項目を設定する。今後、研究が進む中で修正が図られると思うが、現段階で想定される項目を挙げておく。

#### <基本情報>

- 1、作製地 2、名称 3、作製年 4、作製者

#### <千人針の素材>

- 5、形状 ①腹巻型 ②胴巻型 ③手拭型 ④チョッキ ④帽子 ⑤ハンカチ  
⑥その他（禪など）
- 6、布色 ①白 ②黄 ③その他
- 7、布素材 ①木綿 ②絹（人絹） ③その他
- 8、糸色 ①赤 ②黄 ③緑 ④青 ⑤黒 ⑥その他
- 9、縫い取り方法 ①糸結び ②糸玉 ③×字結び ④その他
- 10、糸玉数
- 11、シラミ除け（布覆い、虫除けの工夫）
- 12、既製品の千人針用布の利用

<描かれる絵、記される文字など>

13、虎の絵・文字 ①点描 ②手書き

14、武運長久等の戦意高揚語

15、サムハラ

16、御朱印・墨書

17、日の丸

<付属物>

18、五銭玉・十銭玉 ①無し ②五銭玉 ③十銭玉 ④五銭十銭玉

19、御守り

20、木の実、種子など

21、女性の毛髪

22、その他

## 第2項 千人針所蔵施設

千人針を収蔵している博物館・資料館は多数あると思われるが、現在確認できた博物館・資料館等について紹介しておきたい。今後、こうした博物館・資料館等との連携などが図られると全国的な千人針のデータベース構築も可能であろう。

### 1、昭和館

昭和館は平成 11 年（1999）に開館した、戦中・戦後の労苦を後世に伝える国立施設である（筆者は平成 13 年から勤務）。戦争そのものは扱わず、軍事的な内容にも触れず、国民生活に焦点を当てた展示を行っている。開館当時は、常設陳列室と称し、その入口には 30 数点の千人針が象徴的に陳列されていた。昭和館が所蔵している千人針 103 点のうち、75 点（平成 23 年 12 月現在）について「表4-1 所蔵千人針リスト（昭和館）」に分類した。所蔵資料は、現在、常設展示室においてデータベースとして閲覧が可能である。

<所蔵資料の特徴>

・所蔵資料の形状としては、腹巻型がほとんどで一部チョッキ型が見られる。これまで帽子型は所蔵していなかった。基本的に寄贈資料は全国から収集しているが、比較的関東近辺が多い。帽子型が少ないのは関東の特徴なのかも知れない。

・他の施設に比べ比較的聞き取りを丹念に行っており、千人針の特徴を把握するには多くの情報を持っている。

## 2、読谷村立歴史民俗資料館

服飾研究家で、『千人針』（昭和60年（1985）、情報センター出版局）の著者である森南海子所蔵の千人針約50点が寄託されており、森が寄託した千人針は、沖縄以外の地域、本土で収集した資料である。

平成10年（1998）11月7日～12月27日にかけて特別企画展『千人針』とお守りの世界』を開催している。その展示パンフレットには、それらの千人針の寄託を受けた後に、読谷村内での千人針に関する調査について記されている。

森南海子さんが当館に「千人針」を寄託した事を発端に読谷村において「千人針」の調査を行った。女性の場合、70歳以上の殆どの方が千人針を刺した経験があり、体験者の中でも、最少年齢8歳と年齢においては幅広く幼児からお年寄りまで行われた。

弱視のお年寄りにおいては、千人針をお願いする方が予め縫い玉を作り、その本人には針を通すだけの作業をしてもらったりなど、出来るだけみんなに千人針を刺してもらっていた。また、妊婦においては、胎児の命がとられるということで、千人針をさせなかった。

千人針は文献資料によると「千人の女性によって縫い玉を縫った」とされているが、調査からは、家族の中に「出征者が出た場合、男女関係なく家族みんなで千人針を刺し、妻、母、あるいは姉妹等が中心になって親戚や各家庭、路上また、よく人が集まる場所（紡績工場、帽子会社、公民館、学校、青年会等）でお願いした。

また、国防婦人会が各部落にあり、出征者がいた場合は特に国防婦人会が中心となって千人針を作成した。他に、虎年と辰年は縁起がよい。嘉例ということで、その年の数だけ刺す事が出来た。ある部落においては虎、辰年の人から先に縫ってもらい残りをみんなで刺したようである。

千人針の意味として「千人の力を借りる」とか「ハーイのミーからヌキティチューン」と言って「針目のような（戦争）から抜けだして来る」と信じていた。また、五銭や十銭を布に縫いつける手法は「死線（四銭）を越える」「苦戦（九銭）を免れる」という意味と鉄砲の玉がお金にはじき命拾いとされていた。

千人針の行われた時期は、主に支那事変（1937年7月7日）と太平洋戦争（1939～1945年）であり、太平洋戦争も後半になると、急な出征で心にゆとりがなくなり、千人針は作れなくなったが、手紙や稲のもみ袋、黒砂糖、家族の写真等を、出征者の心の支えになるようお守りとして持たせていた。

以上のように森の千人針の寄託をきっかけに読谷村内での独自資料も増えている。

展示した千人針については、下記の通り、様々な分類が特別企画展『千人針』とお守りの世界』の展示パンフレットに提示されている。（％）は展示資料における該当資料の割合である。

## I 千人針の形状

- ①千人針の原型 19点 (33%)      ②腹巻き 33点 (58%)  
③肌着 (チョッキ) 3点 (5%)      ④帽子 2点 (4%)

## II 千人針の素材

### A. 布

- ①木綿 43点 (75%)      ②絹 11点 (19%)  
③綿 2点 (4%)      ④ネル 2点 (4%)  
⑤その他 1点 (2%)

### B. 糸

- ①赤の木綿糸 43点 (75%)      ②白の木綿糸 4点 (7%)  
③黄色の木綿糸 3点 (5%)      ④緑の木綿糸 2点 (4%)  
⑤桃色の木綿糸 1点 (2%)      ⑥黒の木綿糸 1点 (2%)  
⑦その他 (無) 3点 (5%)

## III 下絵

- ①赤い丸印 13点      ②赤い判点 29点  
③文字・絵を線で下書き 1点      ④青い丸印 1点  
⑤青い判点 1点      ⑥赤いX字型 1点  
⑦緑の判点 1点      ⑧黒い丸印 1点  
⑨墨で文字 1点      ⑩鉛筆で点 3点  
⑪鉛筆でX字型 1点      ⑫鉛筆で線 1点

## IV 千人針の刺し方

- ①玉結び 49点      ②並縫い 3点  
③X字型 1点      ④返し縫い 1点  
⑤並縫いと玉結び (複合型) 1点      ⑥並縫いとX字型 (複合型) 1点  
⑦斜め縫い 1点      ⑧針結び 2点  
⑨その他 2点

## V 文様 (糸目による文字・絵・図等)

- ①文字 (イ) 玉結び仕立て  
(ロ) 返し縫い仕立て  
(武運長久 14点、大和魂 1点、義勇奉公 1点、祈 5点、国旗 1点、  
神護必勝 1点、名前 2点、難解文字 1点)  
②絵柄 (虎 3点、国旗 9点、海軍旗 2点、桜 1点)  
③図柄 (線状 35点、渦巻き 2点、ジグザグ 1点)

## VI 布地に他の文様があるか

- ①文字 (武運長久 8点、祈 2点、力 1点、義勇奉公 1点)  
②絵 (虎 3点、竹 1点、日の丸 4点、海軍旗 1点)  
③その他 (名前 9点、詩 1点、印鑑 7点)  
④お金を縫い付ける 14点      ⑤無 23点

前述の特別企画展『千人針』とお守りの世界』の展示パンフレットに掲載されている

一覧表をもとに、「表4-2 所蔵千人針リスト（読谷村立歴史民俗資料館）」を作成した。

＜所蔵資料の特徴＞

・今回の調査では、一部の資料しか実際に見ることができなかったが、資料についてある程度の聞き書きが行われていることから、今後、全資料を調査することで詳細な分類も可能である。

表 4-2 千人針所蔵リスト（読谷村千人針展示品一覧）

番号	No	分類	所在地	法量(縦 cm× 横 cm)	
読 1	1		藤井寺市	14×185	
読 2	2		大和郡山市	18.5×109	
読 3	3		札幌市豊平区	14×89	
読 4	4		兵庫県宍粟郡西谷村	34×106	慰問袋入ってない
読 5	4		兵庫県宍粟郡西谷村	17×105	慰問袋入ってない
読 6	4		兵庫県宍粟郡西谷村	17×133	慰問袋入ってない
読 7	5		四国	15.5×80.5	※ファスナー付千人針
読 8	5		四国	9.5×64	
読 9	7		大阪府岸和田市	17×112	※羽二重中にさらし、
読 10			大阪府岸和田市	15.5×105	※羽二重中にさらし、
読 11	8		徳島県阿南市	9×87	
読 12	9		島根県那賀郡旭町	15.5×107	
読 13	10		兵庫県朝来郡山口村	16×97	静岡県焼津市
読 14	12		中津市	34. 5×57	※サラシに返し針の千人針
読 15	13		大分市	12×84.5	
読 16	14		奈良県吉野郡	16×188	
読 17	15		茨城県行方郡潮来町	25×97.5	※巾広、一重千人針
読 18	17		茨城県行方郡潮来町	15×101	グリーンの糸
読 19	18		北海道寿都郡寿都町	32×82	黄色に染めた千人針
読 20	21		福岡県糸島郡二丈町	70×70	※羽二重の日の丸旗
読 21	24			16×134	
読 22	25			15.5×85	
読 23	26			14×138	白い糸の千人針
読 24	29	チョッキ		身ごろ 42× 幅 33	ベスト
読 25		帽子		① 18.5×25	
読 26		帽子		② 11.5×27	
読 27	30		旭川市	15.5×101	黄色に染めた千人針
読 28	31			30×84	
読 29	32			14×122	※羽二重真綿入りの千人針。(切れている)
読 30	35			16.5×75.5	
読 31	37			17×107	※千人針と写真在(写真入ってない)
読 32	38			13×103	※お金、お守りを縫い付け

読 33	39			15×123.5	赤印の千人針〇
読 34	40		苫小牧市	16×99	
読 35	41		兵庫県朝来町	11×87	※中島菊市さんと近隣
読 36	42		大阪市	16×132	※×印の千人針、サムハラ
読 37	44		東京都足立区千住	15×182	※(手紙有)
読 38	46			18×67	※バイヤス地の千人針
読 39	その他 1			※カ印の千人針	
読 40	その他 1			17×110	
読 41	その他 2			15×99	
読 42	その他 3		鹿児島県		
読 43	その他 3			21×34	
読 44	その他 4		兵庫県宝塚市	14×105	
読 45	その他 5		大分県	34×120	
読 46	その他 5			二つ折り	
読 47	その他 6		大阪府	12×172	
読 48	その他 7		氷見町	? ×178	
読 49	その他 8			15×99	
読 50	その他 9		兵庫県芦屋市	15×55	
読 51	その他 9			1 2 × 3 9	
読 52	その他 9			100×80	
読 53	その他 10			14×94	
読 54	その他 11		和歌山県	34×91	
読 55	その他 12		広島県		広島県立吉田高等女学校、愛国子女団
読 56	その他 13		岡山県	75×95	
読 57	その他 13				



写真 4-1 手拭い型 (読 14)



写真 4-2 手拭い型 (読 19)



写真 4-3 手拭い型 (読 34)





写真 4-4 腹巻き型 (読 35)



写真 4-5 手拭い型 (読 36)



写真 4-6 腹巻き型 (読 55)

### 3、姫路市平和資料館

姫路市が行っている「平和都市宣言」「非核平和都市宣言」に基づき、戦争の惨禍と平和の尊さを後世に伝え、平和な社会の発展に寄与するため、空襲に視点を置いた資料館として設立した施設。空襲体験の継承の場として、姫路の空襲による被災等に関する資料、文書、映像等を主体とした展示をする。姫路市平和資料館では、平成 21 年（2009）1 月段階で、17 点を所蔵しており、その所蔵資料カードを元に筆者が作成したのが「表4-3 所蔵千人針リスト（姫路市平和資料館）」である。

表4-3 千人針所蔵リスト（姫路市平和資料館）

番号	分類	寄贈品 番号	法量（縦 cm× 横 cm× 高さ cm）	寄贈者 住所	備考
姫1	手拭	0027	32×122	姫路市	武運長久、日の丸、氏名入り、鉢巻きとして利用した。
姫2	チョッキ	0261	60×48	姫路市	昭和14年頃、中国で着用した。茶色
姫3	帽子	0732	10×26	姫路市	帽子、「必勝」の文字
姫4	チョッキ	0819	52×42	姫路市	母親が近所の協力で作製。数カ所にサムハラの文字がある。サムハラ。日の丸。昭和16年召集。寄贈者は、大正2年生まれ。昭和16年に召集され、満洲へ。
姫5		0879	15×200	姫路市	腹巻、「祈武運長久」などの文字
姫6	帽子	1085	99×46	姫路市	帽子。寄贈者の夫の満洲派遣時代のもの。
姫7	帽子	1100	25×13×11	西脇市	帽子。硬貨が縫いつけてある。熊野神社・神明神社の文字と御朱印
姫8	腹巻	1427	15×90	姫路市	
姫9	腹巻	1504-1	17×110	たつの市	虎の絵。
姫9	腹巻	1504-2	17×110	たつの市	億兆一心。祝竹内先生出征。広島市高等女学校職員生徒一同
姫10	帽子	1741	12×24	姫路市	武運長久の文字。日の丸
姫11	帽子	1793	14×23		袋付き
姫12	帽子	1893-1	?		
姫13	腹巻	1893-2	?		
姫14	帽子	1904	?		
姫15	腹巻	2328	?		
姫16	腹巻	3048-1	?		
姫17		3048-2			
姫18		3098	?		
姫19		3246	24		

#### <所蔵資料の特徴>

- ・専門の学芸員がいるわけではないので、寄贈資料についての情報は少ない。
- ・千人針はほとんどが神戸市内から寄贈されたものが多く、地域的な特徴を見いだすことができる。形状については、バリエーションが多い。
- ・腹巻型をはじめ、チョッキ型、帽子型など種類が多い。



写真 4-7 手拭い型 (姫 1)



写真 4-10 チョッキ型 (姫 4)



写真 4-8 チョッキ型 (姫 2)



写真 4-11 手拭い型 (姫 5)



写真 4-12 帽子型 (姫 7)



写真 4-9 帽子型 (姫 3)



写真 4-13 腹巻き型 (姫 8)





写真 4-14 腹巻き型・手拭い型 (姫 9)



写真 4-15 帽子型 (姫 10)



写真 4-17 胴巻き型 (姫 15)



写真 4-16 帽子型 (姫 11)



写真 4-18 腹巻き型 (姫 16)



写真 4-19 腹巻き型 (姫 17)

#### 4、宮崎県護国神社

宮崎県護国神社境内には「宝物館」があり、氏子から寄贈された遺品の数々が収蔵展示されている。平成22年（2010）8月18日に所蔵資料を撮影し、一部を実測した。その情報を表として整理したのが「表4-4 所蔵千人針リスト（宮崎県護国神社）」である。

<所蔵資料の特徴>

- ・遺品であるため、戦没者の情報（氏名・戦没地・戦没年など）は記されているが、出征に関わる情報は不明な資料が多い。
- ・宮崎県出身者と考えられるので、これらの資料は宮崎県の特徴として考えられる資料である。

表4-4 千人針所蔵リスト（宮崎県護国神社）

番号		出身地	戦没者の階級	戦没年月日	戦没地	法量縦×横、ヒモ左右	備考
宮護1	腹巻	西都市	陸軍伍長	昭和16年2月26日	中支	□×110、左41・右47	
宮護2	腹巻	西都市	陸軍伍長	昭和16年2月26日	中支	□×130、左28・右35	
宮護3	胴巻	都農町	陸軍准尉	昭和19年10月30日	中支	全体14×188、17cm部分で切断、113cm部分で布が縫がれている。	
宮護4	腹巻	宮崎市	—	—	—	□×175、	
宮護5	腹巻	西都市	海軍中佐	昭和20年3月21日	南西諸島方面		神雷特別攻撃隊、お守り入り
宮護6	手拭	西都市	陸軍少尉	昭和20年6月10日	比島山中	37×103	サムハラ
宮護7		西都市	陸軍少尉	昭和20年6月10日	比島山中	33×82（二つ折り）	
宮護8	腹巻	宮崎市	陸軍大尉	昭和15年1月1日	—	□×123、左50・右50	
宮護9	腹巻	日向市	上等兵	昭和23年12月26日	内地病院	—	
宮護10	腹巻	—	—	—	—		アメリカ人から返還された
宮護11	腹巻	都城市	陸軍歩兵曹長	昭和14年3月17日	中支	17×140、左—・右—	
宮護12	チヨッキ					40×50	

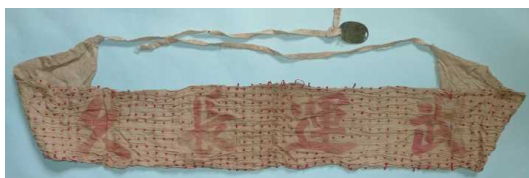


写真4-20 腹巻型（宮護1）



写真4-21 腹巻型（宮護2）



写真 4-22 腹巻型 (宮護 3)



写真 4-23 腹巻型 (宮護 4)



写真 4-24 腹巻型 (宮護 5)



写真 4-25 手拭型 (宮護 6)



写真 4-26 手拭型 (宮護 7)



写真 4-27 腹巻型 (宮護 8)



写真 4-28 腹巻型 (宮護 9)

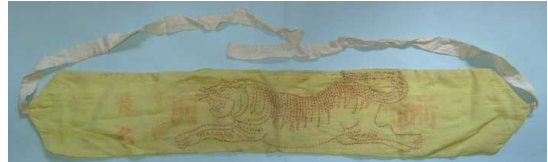


写真 4-29 腹巻型 (宮護 10)



写真 4-30 腹巻型 (宮護 11)



写真 4-31 チョッキ型 (宮護 12)

## 5、国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館では、所蔵資料を公開しており、千人針関連資料が含まれている。国立歴史民俗博物館では収蔵資料のデータベースが公開されているが、千人針は音響資料も含めて21点が紹介されており、それをまとめたのが「表4-5 所蔵千人針リスト（国立歴史民俗博物館）」である。

<所蔵資料の特徴>

・資料点数は少ないが、寄贈者情報などを確認することで、資料の有効な活用が可能であろう。

表4-5 所蔵千人針リスト（国立歴史民俗博物館）

	資料名称	コレクション名	法量	資料番号	備考
歴1	千人針	戦時期生活関係資料	縦16cm 横110cm	H-965-296	戦時中 祈武運長久 紐の長さ71cm
歴2	千人針	戦時期生活関係資料	縦10cm 横208cm	H-965-784	この千人針は春成氏の父兼俊氏（当時兵庫師範学校教授）が1944年3月入営の際、実際に用いたもの。兼俊氏は暗号兵として鹿児島県内にて勤務し、終戦とともに無事復員した。五銭玉がぬいつけてある（四銭＝死線を越えるの意）など、当時の兵士家族の願いを如実に示すモノ資料である。昭和19年
歴3	千人針	近代戦争関係資料	縦8cm 横204.8cm	H-1282-330	出征兵士道具類
歴4	千人針	戦時期生活関係資料	縦30cm 横117cm	H-965-689	武運長久・五銭硬貨つき
歴5	千人針	金沢地方近代生活資料 コレクション	縦16.3cm 横161cm	H-686-51-159	祈武運長久、綿
歴6	千人針腹巻	近代戦争関係資料	縦16cm 横133cm	H-1282-785	
歴7	千人針 （ポッチ）	近代戦争関係資料	縦15.5cm 横118cm	H-1282-605	戦時期
歴8	千人針 （武運長久）	近代戦争関係資料	縦16cm 横102cm	H-1282-604	戦時中、虎の模様、サムハラ
歴9	武運長久千人針	戦時期生活関係資料	幅24cm 長さ176cm	H-965-705	
歴10	千人針の鉢巻	中国天津の日本人 学校関連資料	縦30cm 横98cm	H-1540-15	土浦海軍航空隊入隊に際して、昭和18年



## 6、その他

遊就館は、靖国神社内にあり、戦没者の遺品を中心として千人針を多数所蔵しているが、その中には明治期のものも含まれている。日露戦争時期のもの、恐らく当時千人結と呼ばれていたものであろう。日露戦争の千人針を所蔵しているのは、管見の所、遊就館だけである。わずか2点であるが、日露戦争の記録と併せて検討すれば、日露戦争時期の千人結の一端が解明されるであろう。

一つは、寸法縦 33cm × 横 55cm (写真 4-32)、もう一つは、縦 33cm × 横 256cm (写真 4-33) と長尺で、どちらも木綿生地で織り目が粗い。太めの黒色の木綿糸をひとすくい縫って、2本ずつの糸を垂らし、その2本ずつの糸を何度か結んでいる。もしかしたら、あらかじめすべての糸を事前に縫い、均一な長さに切っておき、結ぶだけの仕様になっていたのかも知れない。それが千人結の由来なのかも知れない。

この他、博物館・資料館等、特に戦争・平和関係の博物館・資料館が多くの千人針を収蔵している。各都道府県の遺族会の中には、資料館を併設したり、各都道府県の護国神社にも遺品館のような施設があり、こうした施設で千人針を収蔵している。



写真 4-32 遊就館所蔵の千人針 1



写真 4-33 遊就館所蔵の千人針 2



## 第2節 千人針の民具的特徴

### 1、作製地

聞き取りをする場合には、千人針が作製された地域を指す。しかし、実際には判別が難しい項目である。召集令状は本籍地に届けられるため、勤務地或いは所在地が他の地域であった場合には本籍地に戻ってから応召することとなる。そのため応召する本籍地で作製されたものか、勤務地で贈られたものなのか、調べる必要がある。

千人針に地域性があるかどうかを検証するには、名称・形状、さらに様々な俗信の定着状況などを考える必要がある。

布や色についての地域性については、江馬務が、糸の色の地域性について、「糸の色が大阪は赤く、神戸は黄、京は青が多いといふこと」<sup>(1)</sup>と記している。昭和館所蔵の千人針についても、糸の色については、赤・白・黄・青・緑などとバリエーションに富んでおり、前述の姫路市平和資料館の資料で分かるように兵庫は緑か黄色の千人針が多いという点は江馬の指摘に通じるところがある。ちなみに兵庫県の姫路市立平和資料館の所蔵の千人針は、17点中半数以上が白・黄色など赤色以外の糸が使用されている。

第1章及び第2章で事例を分析しているように、日露戦争時、満州事変時と、次第に認知度が高まっていき、日中戦争開戦時には、全国でほぼ同時に千人針風景が見られ、当時、植民地であった朝鮮半島や台湾でも同様であった。

### 2、名称

名称について、高崎正秀の報告によれば、千人針という名称に集約されてくる以前はさまざまに呼ばれたという。

東北地方では千縫い・千人縫い、新潟では千人縫い・千人針、静岡から尾張・美濃にかけては千結び、伊勢の松坂では千人結び（以上昭和6年（1931）上海事変の頃の調査）。四国徳島・関西・中国では千人縫い。広島の高田では千人針・千人瘤・千本針・千勝針。<sup>(2)</sup>

とある。実際には、日中戦争以降は「千人針」という呼称に集約されつつも、異なる名称が平行して使われ続けていた。このように実際には様々な名称があったと思われるが、共通の名称として千人針に集約されていったものと思われる。

---

(1) 江馬務「千人針と防弾の安全衣について」『風俗研究』208号、風俗研究所、昭和12年（1937）9月、p.21。

(2) 「千人針古意」『皇国時報』皇国時報発行所、昭和12年（1937）9月。

### 3、作製年

基本的には、応召した年が千人針が作製された年になる。しかし、応召を受ける前に事前に準備する場合や応召に間に合わず、後になってから出征先へ郵送する場合、あるいは応召先で軍などから支給される場合などがある。応召が複数回にわたる場合にはどの段階で贈られたものかの情報が必要となる。

千人針の実物として残されている最も古い千人針は遊就館所蔵の日露戦争の頃の千人結で、生成の木綿の布に太い黒糸が結ばれている。

満州事変の頃には、地域的にバリエーションのあった千人針習俗は、日中戦争の時代にはある程度画一化され、全国に一気に広がったようである。現在、千人針の現物を確認できるのは、ほとんどが日中戦争以降の千人針であり、満州事変以前の千人針習俗については聞き取りを頼りにするしか方法はない。昭和館の千人針寄贈者の一人、藤川はまさん（千葉県流山市在住）は次のように満州事変時期の経験を記している<sup>(1)</sup>。

昭和6年（1931）9月、満州事変勃発当時旧制四日市高女4年生だった私達はクラスの内の方が兵役につかれる度に教室に千人針が持ち込まれ、その都度授業を中断しては作りました。晒に朱肉で押された千個の小さい丸い輪、その中心を赤い糸ですくい、一つずつ結び目をつくっては次々と手渡しこしらえ上げたものでございました。



その頃の状況からは戦争の恐ろしさなど実感として有りませんでしたが、これをお腹に巻いて行けば弾丸にあ

写真 4-34 満州事変の千人針風景 昭和館所蔵資料：藤川はまさん（千葉県流山市在住）寄贈

たらないと云う昔からの云い伝えを信じ、こんなことで何かのお役に立てるならと針一針に心をこめたものでございます。

校門前で千人針をして居ります同封のスナップはその頃の地方新聞に掲載されたものでございます。先日古いアルバムの中より見付かり見覚えのある顔やらその時代の風俗やらを大変なつかしく思い出しました。

7年後の昭和13年5月支那事変で主人応召あの頃とは全く違った感情で道行く人に千人針をお願いしたあの日のことが改めて甦り尚一層思い深くしたものでございました。

千人針の作製は出征に際して行われるのが一般的だが、召集に備えて事前に作ったり、召集に間に合わず、後で戦地に送る場合もあった。

---

(1) 昭和館での寄贈受け入れの際に記された手紙に記載されていた。

昭和 12～13 年（1937～1938）は、街頭での千人針作製が盛んであったが、16 年（1941）以降は、スパイ防止のために街頭ではあまり行われなくなったといわれている<sup>(1)</sup>。昭和館所蔵の資料にも、伊保村長から「左記ノ通り姫路連隊区司令部ヨリ通達有之候条厳守相成度候」として「四、千人針ハ繁華街、百貨店、停車場、劇場、等ヲ避ケ成可学校・工場等ニ於テナスコト」「昭和 16 年 12 月 20 日以降実施」という通達がある。

また筆者の聞き取りでも次のように昭和 19 年に入営した夫に千人針を持たせなかったという例もあった。

○K・Y（女性、大正 5 年（1916）9 月 10 日生、宮崎市宮田町）

昭和 16 年（1941）に結婚して、19 年（1944）に熊本に入営していったが、当時、千人針を持たせなかった。千人針は、昭和 16 年（1941）頃までは大きくやっていたが、昭和 17 年（1942）頃には、千人針をやっている人もいたが、一般的にはやらなくなっていた。理由はよく分からない。

しかし、実際には、地域差にもよると考えられるが、昭和館の事例としては、「昭和 18 年 11 月 29 日、召集の際に贈られたもの。2 人の妹が街頭に出て、町行く人に頼んで作ってくれた。集まってくれた多くの人に見送られ、新大久保駅から電車に乗って入営先の千葉県我孫子の東部八三部隊に入隊した。」（K09-02340）とあり、昭和 18 年（1943）頃までは街頭で千人針を集めていたことが分かる。また収蔵資料を見ても昭和 20 年まで千人針を作っており、宮崎県の宮崎神宮の日誌では、昭和 20 年（1945）7 月まで千人針祓をした記録が残っている。街頭での千人針が制限されたり、物資が不足したなかでも千人針作製は終戦間際まで続けられた。

表4-6 日中戦争以降の昭和館所蔵の千人針の件数

応召年	昭和11 1936	12 1937	13 1938	14 1939	15 1940	16 1941	17 1942	18 1943	19 1944	20 1945
千人針数	1	11	4	9	3	7	10	13	4	2

#### 4、作製者

基本的には応召を受けた本人の家族（母親や妻、姉妹）が中心となって作製する。また、実際には婦人会などが中心になって近隣で作製する場合、職場、学校などの女性が中心になって作製する場合などもある。

依頼者の例

- ①妻・母が夫・息子のために作製
- ②近隣の知人、職場の同僚などが作製
- ③女学校が慰問袋用として作製
- ④婦人会が慰問用として作製

(1) 山中恒『暮らしの中の太平洋戦争』岩波書店、平成元年（1989）、pp.53-70。

#### ⑤役場が慰問用として作製を指示

千人針を作るに際しては、まず母親や妻などの発起人がおり、街頭に立って通りすがりの見ず知らずの女性たちに声をかけるのが一般的であったようだが、発起人については、母・妻・兄弟姉妹、近親者、近隣、婦人会、女学生、会社同僚などが考えられる。そして、どこで作製したかについては、街頭（駅前、寺社仏閣の参拝者、女学校の校門）、女学校内などがあげられ、作製者は、前述の発起人と同様と考えられよう。さらに、妻・母が夫・息子のために送るような特定の人物に向けた祈願用として作製したもの、女学校・婦人会が特定の個人のために作製した物と、匿名性の高い慰問袋用として大量に作製した物に分けられる。

被依頼者（糸玉を縫う人）

妻・母・家族（依頼する前後に縫うなど）

街頭で不特定の女性（駅前、寺社仏閣の参拝者、女学校の校門）

女学生（街頭で補助。学校で一斉に作製）

婦人会（街頭で補助。婦人会主導で作製）

親類縁者近隣者（持ち回りで回ってくる）

学校で行われた様子については次のような聞き取りがある。

○K・N（女性、昭和6年（1931）2月9日生。都城市。）

都城高等女学校の頃、千人針のことをよく覚えている。特攻隊のような人（「南海にたとえこの身が朽ちるとも 幾とせ後の 春を思えば」という歌を覚えている）が近所に滞在しており、彼らにあこがれていて、その人たちに縫ったのを覚えている。

千人針を縫ってもらいたい人たちは上町の街頭や西駅前によく立っていた。女学校の校門前にもよく来ていたが、学校の中で縫うことはなかった。流れ作業の様に作るのには心がこもらず良くないと考えられていたからではないか。

第2章第4節「銃後の護りと千人針」の項目で明らかにしたように、日中戦争開戦直後、女学生が街頭での千人針を手伝う様子が多く見られたが、臨時召集令状の数が膨大になると、千人針の需要も増え、学校単位で、大量生産することとなった。地域や時代によってその状況は異なっていた。

## <千人針の素材>

### 5、形状

①腹巻型 ②胴巻型 ③手拭型 の三つについては、判別が付きにくく、便宜上の区別である。腹巻と胴巻の区別が判然とせず、ここでは長尺のさらし木綿を腹に複数回巻き、紐を使わずに止めるものを胴巻型とする。紐が付いたものを腹巻型とし、手拭い程度の大きさに紐が付けられていないものを手拭型とする。手拭型のなかには折りたたんで鉢巻きにするものもある

基本的には、軍隊の活動に無駄で邪魔な物は持ち込めないはずなので、常識的に持ち込んでもかまわないものに、千人針を縫い込んだものと考えられよう。種類としては、便宜上、次の種類に分けておくこととする。

- ①腹巻型 (防寒具を兼ねたもので、ヒモが付いた物とする) ————— 写真 4-35
- ②胴巻型 (比較的長尺の物で、コルセット兼物入れ、ヒモ無し) ————— 写真 4-36
- ③手拭型 (基本的に手拭の大きさに、ヒモを付けていない物) ————— 写真 4-37
- ④チョッキ型 (防寒具のチョッキに糸を縫い込んだ物) ————— 写真 4-38
- ⑤帽子型 (戦闘帽などに糸を縫い込んだ物) ————— 写真 4-39
- ⑥ハンカチ型 (正方形のハンカチ大の布に糸を縫い込んだ物) ————— 写真 4-40
- ⑦その他 (実際には褌・鉢巻などさまざま形の千人針が存在する)

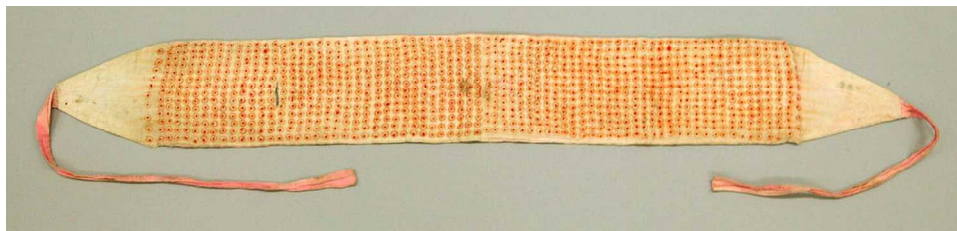


写真 4-35 腹巻型 (昭和館蔵 K10-00009)

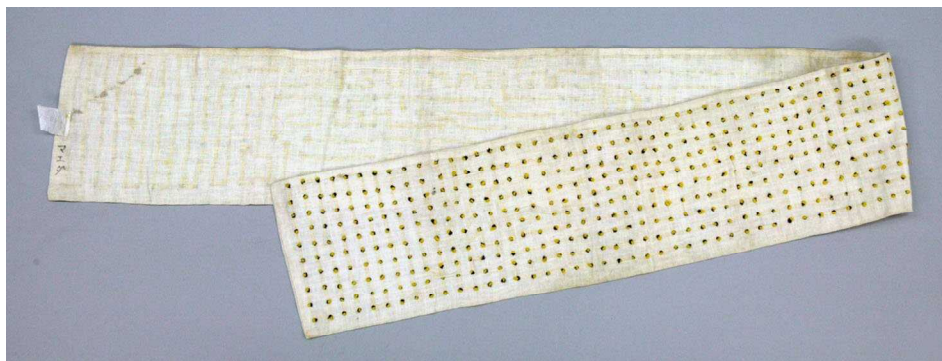


写真 4-36 胴巻型 (昭和館蔵 N30-00181)

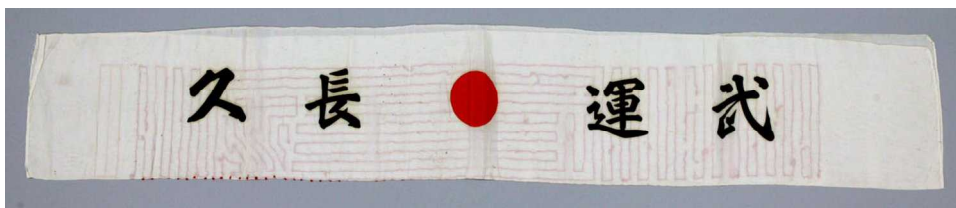


写真 4-37 手拭型 (昭和館蔵 K45-00001)





写真 4-38 チョッキ型 (昭和館蔵 N30-00029)



写真 4-39 帽子型

(姫路市平和資料館蔵・姫 10)



写真 4-40 ハンカチ型 (昭和館蔵 D09-00001)

その他、昭和 12 年 (1937) 7 月 23 日付『宮崎新聞 (夕刊)』に、

宮崎女子高等技芸学校では非常時局に対する国民の熱意に刺激されて毎週の月曜日を節約デーと定め、お小使いを貯めた金で全校生徒三百八十名が白木綿を買い、可憐な愛国の情を傾けた千人針入りの褌三百八十枚を作成して北支、北満の第一線将士へ送ることとなった。

とあるように、千人針入りの褌が作られたことが注目される。

昭和館所蔵の千人針の中では、腹巻型が圧倒的に多く、その次に手拭型が多い。帽子型を昭和館は所蔵していないが、姫路市平和資料館では所蔵している千人針 17 点中 6 点が

帽子型であり、地域によっては多く普及したものと考えられよう。チョッキ型の千人針については、森南海子著『千人針』には作製者の聞き取りが掲載されている。

腹巻きもいいんですけど、からだ全体を針目で覆ってしまわなければならない、そんなふうに思いました。とりあえずはやはり前と後ろが隠れないと困ると思ひまして長めにいたしました。そうすると下が、丸ごと見えていても、それで風も通るし、涼しいだろうと思って、ちょっとした思いつきでつくったんです。<sup>(1)</sup>

上着に糸玉を縫い付けるという例も聞いたことがあるが、上着に縫い付けることから派生した形式かもしれない。

## 6、布色

①白 ②黄 ③その他

色については、白い布が一番多く、次は黄色い布である。この他、チョッキや帽子などには緑などの派手な色も使用されている。

黄色い布は日露戦争の時から使用されているが、なぜ黄色い布を使うかについては、虎の体色である黄色を象徴した説と五黄の寅の方位の色説が考えられる。どちらが先行するか検証が難しいが、どちらにしても虎あるいは寅年との関わりと考えられる。この他、昭和館では深緑色の布を使用した千人針を所蔵している(写真 4-42)が、昭和 11 年(1936) 11 月 1 日付『東京朝日新聞』夕刊には、「三十一日朝省線王子駅前に立つた盛装のうら若い一女性が路ゆく婦人を呼びとめては手にもつた萌葱色の木綿に赤い糸を一針づつ縫ひつけて貰つてゐた」とあり、

萌葱色、つまりネギの芽のような深い緑色の布を使用していたことが紹介されている。このように例外としては様々な意味合いで、白や黄色以外の色の布も使用されたことは考えられよう



写真 4-41 黄色い布を利用した千人針 (昭和館蔵 K09-0594)



写真 4-42 緑色の布を利用した千人針 (昭和館蔵 D08-0023)

(1) 森南海子『千人針』情報センター出版局、平成 7 年(1995)、pp.169-170。

## 7、布素材

①木綿 ②絹 ③その他

基本的には木綿が多く用いられる。中には絹を利用しているが、その理由として虫除けのためともいわれている。戦時中にはスフ（ステイプル・ファイバー）を利用したものもある。

材質としては、木綿が一番多く、シラミ除けの為に絹の布で覆うことが行われている。なかには全部絹でできた物もある。

昭和館資料番号 N04-00018 は、昭和 15 年（1940）頃に出征の幟のような物を再利用したものと思われる。物資不足の中こうした工夫をしながら千人針を作製したのであろう。戦時下では、木綿や糸も統制品となっているためその入手に苦労した話はよく聞かれる。

## 8、糸色

①赤 ②黄 ③緑 ④青 ⑤黒 ⑥その他

日中戦争以降の千人針の糸の色は、赤色が最も多い。満州事変以前は必ずしも赤色では無かったし、太平洋戦争以降、配給が滞ることで糸が入手できず、赤以外の糸が使用される場合もあった。江馬務によると「たゞ糸の色が大阪は赤く、神戸は黄、京は青が多いといふことである。」<sup>(1)</sup> という。地域性による糸の色の違いがある可能性があるが、日中戦争以降の資料から判断するとその傾向は少ないと思われる。

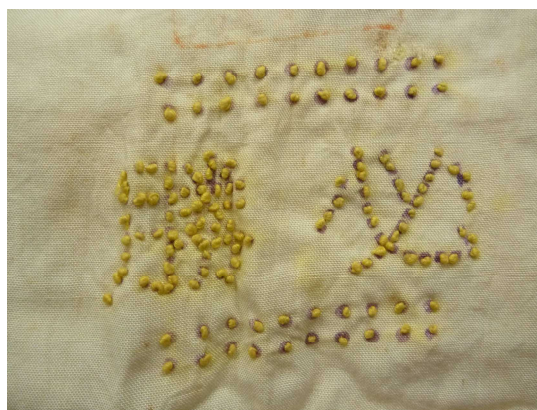


写真 4-43 黄色い糸を利用した千人針

（昭和館蔵 K30-0068）

糸色は赤が多いが、江馬務の紹介する糸色の地域性の通りではないが、昭和館所蔵の千人針では、赤の他、白・青・黄・緑などの色の糸が使われている。高知県で昭和 19 年（1944）に作製されたという昭和館資料番号 R39-00102 の、赤・青・黄・緑という複数の色の糸を使用している例については、「赤い

(1) 江馬務「千人針と防弾の安全衣について」『風俗研究』208号、風俗研究所、昭和12年（1937）9月、p21。



糸ばかりで作ることは物資不足のためできなかった。」との証言がある<sup>(1)</sup>。

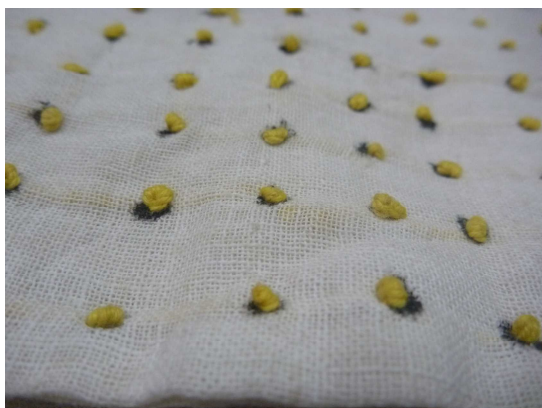


写真 4-44 黄色い糸を利用した千代針

(昭和館蔵 N30-181)



写真 4-45 複数色の糸を利用した千代針

(昭和館蔵 R39-00102)

## 9、縫い取り方法

服飾の専門的には、様々な縫い取り方がとられている。特別企画展『千人針』とお守りの世界」の展示パンフレット<sup>(2)</sup>には、その縫い取り方法について次のように分類している。

千人針の刺し方

①玉結び	49点	②並縫い	3点
③X字型	1点	④返し縫い	1点
⑤並縫いと玉結び(複合型)	1点	⑥並縫いとX字型(複合型)	1点
⑦斜め縫い	1点	⑧針結び	2点
⑨その他	2点		

現在のところ、昭和館の資料調査では、縫い取り方法まで確認をしていないが、今後調査をすべき課題である。

## 10、糸玉数

糸玉の形がしっかり残っているものについては数えることが可能であるが、摩耗や損傷等の激しいものについては数えるのが難しい。

糸玉数について、1,000個の糸結びがあるのかを一部確認したが、必ずしも1,000個の糸結びがあるわけではない。わずかな数のずれは、数えにくさもあるが、江馬務が、「千

---

(1) 渡邊一弘「千人針データベースの作成に向けて」『昭和の暮らし研究』第9号、昭和館、平成23年(2011)、p.97。

(2) 平成10年(1998)11月7日～12月27日にかけて特別企画展『千人針』とお守りの世界」を開催している。

人針のおこり」(『風俗史研究』143号)において「千針は戦死に通ずるといふので、近ごろ九百九十九、千一、千三針が用ひられるやうで、これは日本人の三とか九の奇数好みから来てゐるのでせう」<sup>(1)</sup>と指摘しているように、作った際に込められた特別な意味がある可能性がある。

西宮市立郷土資料館が平成13年(2001)8月7日から8月19日まで行った「第12回戦時生活資料展 千人針」においては、千人針の結び目を数えている。それによると1000・1005・1012・1019・1030と様々な数の結び目であることを紹介している。

昭和館所蔵資料に千人針作製用の台紙がある。「大日本軍人」という文字を点で描いた型紙に記し、五文字の印を足すと千文字になるように描かれている。こうした台紙があれば複数の千人針が作りやすかったのだろう。(写真4-46)

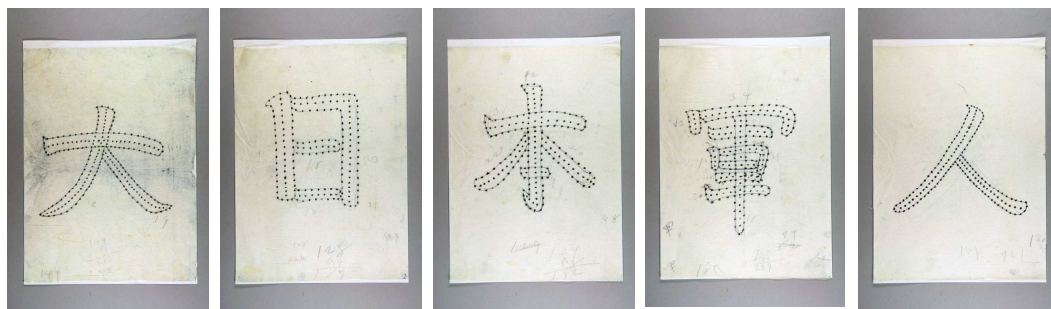


写真 4-46 千人針作製用台紙 (昭和館蔵 34-0115)

## 11、シラミ除け(布覆い、虫除けの工夫)

千人結が作られた日露戦争の頃は、出征先が寒冷地であったため、防寒具である腹巻きに糸玉を結んだものと考えられるが、日中戦争では、出征先が南方も加わることとなった。しかし、千人針の形状は、出征先に合わせて変更されずに、そのまま腹巻が贈られることが多かった。そのため、シラミの被害が多く、そのことを事前に知った者はシラミ対策を施した。布を薬草で煮出したり、シラミが糸玉に付くことから絹の布で全体を覆う工夫を施した。

昭和12年8月30日付『読売新聞』

ニガキ(苦木)、センブリ、クララの根、ビヤクブ(百部)の根。この何れかの一つを普通の薬局か漢薬専門店で求め、その五〇グラム(薬店で秤って貰う)を水一リットル(約五合五勺)に入れ珪瑯びきの金盃かなんかで十分間位火にかけ、さめきらぬ中に晒木綿でカスをしばり取ります。こうして得た煎汁に千人針を一と晩浸して陰干しにすれば、戦地においても蚤や虱の巣窟となることはありません。

○中国大陸。南方の島など。千人針はみんながくれて有難いんだけど針の目のとこ

(1) 江馬務「千人針のおこり」『風俗史研究』143号、風俗研究所発行、昭和7年(1932)4月1日、p.11。

ろの一針、一針縫い日のところに、一匹ずつシラミがたかって、千匹のシラミをお腹に巻くと同じなんですって。本当に弱ったって。話者・小沢清子。回答者・松谷みよ子（東京都在住）。<sup>(1)</sup>

多くの千人針が糸玉を隠すように布で覆われている。これは糸玉にシラミがわくということで行われていたことのようなのである。

昭和 12 年（1937）8 月 23 日付『読売新聞』

「銃後の皆さんへお願い！」「千人針の腹巻にもう一と工風を」

「実はあの糸の結び目が「虱」の巣窟になるのです」「今度の日支事変が、いかに全国民の関心を惹いているかと云うことは千人針を作る女性の姿が日一日と街頭に増加してゆく事実を見ても判ります。ところでこの千人針の作り方をみますと、以前と違って糸を長く垂らさずに、一つ一つ堅く縫い結んで余分の糸を残さぬようにしています。これは誰云うともなく嘗て千人針を腹へ巻き付けて満州、上海で活躍した勇士達の経験談が伝わった結果です。第一線にある将士達は、汗に濡れ、泥にまみれて想像も出来ぬ苦勞を幾日も重ねるのですからいつか殆ど例外なしに虱に悩まされるのです、支那の兵隊は、虱を自分の身体の一部としてポリポリ好んで食べるそうですが日本人にはそんな真似は出来ません。工合の悪いことには折角心をこめて送った千人針の長い糸や結び目が、この憎むべき虱の巣窟となるのです。敵を恐れぬ勇士達もこれにはいささか弱りました。そこで千人針が改良を加えられて、現在のように糸を垂れぬようになって来たわけです。・・・が、皆さんに将士を護り、励ます熱意があるならば、ここでもう一と工風して貰いたいのです。晒の千人針が出来上がったならば、更にこれを人絹のようなサラリとした布で包むのです。

こうすれば虱の巣窟ともならず、また赤い糸の色が流れるのを防ぐことも出来るわけです。慰問袋からこんなにも心を用いた千人針が出た時の勇士達の喜びようを、どうぞ想像してみてください。

千人針について次々と俗信が加味されていったが、このように実用的な工夫も様々なかたちで行われたことが分かる。

当時、古年兵の洗濯物は新兵がするのが当たり前でした。ですから、古年兵が洗濯場に行くのを見つけると、新兵たちはわれ先にとんで行って洗濯物を受け取ります。するとある時、中に千人針がありました。

海軍では、不定期に身回り品の煮沸を行います。これは、隊内におけるシラミ退治の最善策だったのです。シラミの牙城は、千人針。糸の結び目がシラミの格好な産卵場所だからです。成虫は簡単に退治できても、その卵とくは、兵隊泣かせの最たるもの、煮沸以外に根絶の方法はありません。

戦地では、蚊・ダニ。南京虫を恐れぬ兵も、シラミにたかられては、なんともお

---

(1) 松谷みよ子『現代民話考 6 銃後ほか』立風書房、昭和 62 年（1987）、p.68。

手上げだったと、古年兵の誰もがいます。<sup>(1)</sup>

千人結が生まれた日露戦争の頃には、寒冷地を想定した戦いだったが、南方戦線を想定していなかったため、シラミの心配も戦地が移動することで深刻な問題となったのであろう。

## 12、既製品の千人針用布の利用

基本的には、さらし木綿などを切って、腹巻きの形にしてヒモを取り付けたりして、小筆の軸の背で縫い取る印を朱肉なので付けていく下準備をする必要があった。しかし、緊急を要する入営や一斉に大量に作製をする場合には手作業で下準備をするには時間的な余裕がなかったと考えられる。百貨店などでは様々な時局的な製品を販売していたが、そのなかに日中戦争以降千人針も加わることとなる。虎の絵が描かれたり、武運長久などの文字が描かれたり、あらかじめ千針分の印が付けられたりした製品が販売された。呉服屋や旗屋などでも既製品の千人針用の布が販売されていた。

母や妻が手作りする千人針から大量に作るための既製品が売り出される。デパート、呉服屋、旗屋などで販売され、大量に作製する慰問用として婦人会・女学校で利用されたようである。

出征する兵士の増大を見込んで千人針の大量生産を見越した商業的な動きが見てとれる。

昭和12年(1937)9月1日付『読売新聞』の「千人針腹巻」広告には、「シラミのワカヌ薬入り、サムハラ御符付(弾丸除)」「呉服・洋品・化粧品・薬店に有り、新案特許、定価五十銭、護国商会」という宣伝文句で紹介されている。

昭和館所蔵の中にも多く見られ、一般的に最も典型的な物は、虎の絵を点描で描いたもので、写真4-47に紹介した千人針は、三越百貨店で販売されたものである。

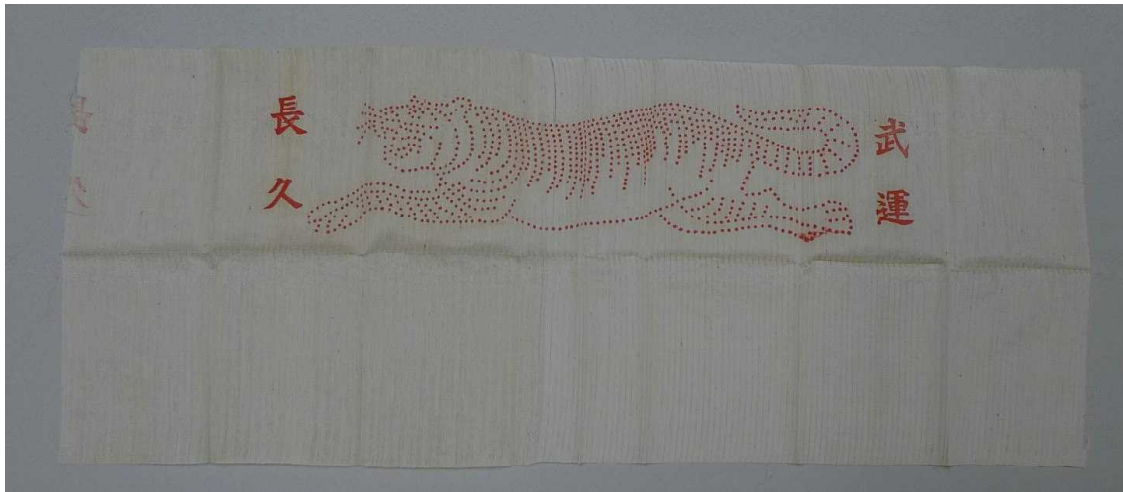


写真 4-47 ① 既製品の千人針 (筆者蔵)

(1) 木村盛武『ああ、一兵卒 ある戦争体験者の証言』共同文化社、平成17年(2005)、p.131。





写真 4-47 ② 既製品の千人針の値段表示 (筆者蔵)



写真 4-47 ③ 既製品の千人針 (筆者蔵)

また写真 4-48 は、「従軍記念千人針入カバー」として販売されていたものである。実用新案願「第二九九七五号」、意匠登録願「第八〇四三号」と記されている。説明文には次のようにある。

「これは妙案だ」

日本武士の風流にふさわしき猛虎画入りの千人針及お守を書信私物を入れて腹に巻いて下さい。温かくて虱、南京虫の侵入産卵を防ぎ凱旋の上は此を表装し永久に汗と脂血潮をそのままに従軍戦捷の記録を残し、額、又は掛軸として、お贈りになった方の名前と共に子々孫々まで家宝となるべき品で御座います。



写真 4-48 ① 既製品の千人針 (筆者蔵)

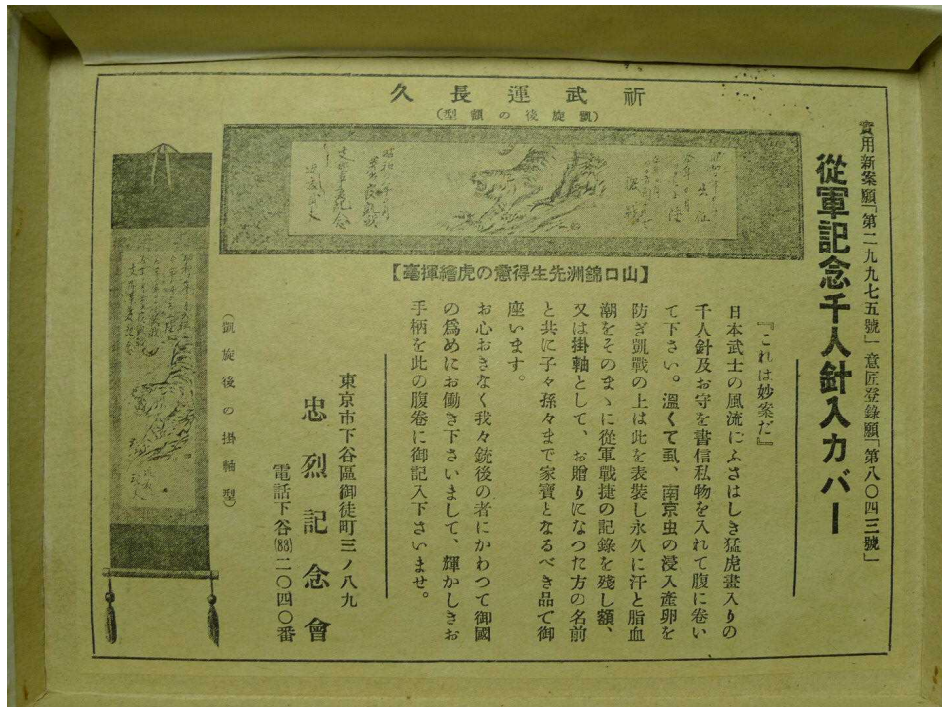


写真 4-48 ② 既製品の千人針 (筆者蔵)



写真 4-49 ① 既製品の千人針 (筆者蔵)





写真 4-49 ② 既製品の千人針の値段表示

(筆者蔵)

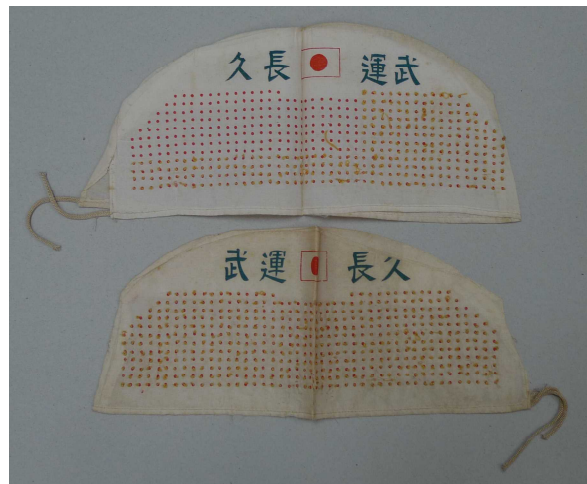


写真 4-50 既製品の千人針 (筆者蔵)

写真 4-49 は、京都で販売されていた戦闘帽型千人針であるが、千個分の印は付されていない。写真 4-50 は千個分の印が付けられている。

森南海子著『千人針』には、慰問品売場で千人針が売られたことを聞き取りしている。

土台になる布を、大阪梅田の阪急百貨店の一角に設けられた慰問品売場で買いもとめたこと、仕上げるのに一週間かけずり廻ったこと、千人針は井ゲタに区切られていてその角に結び目をつけたと当時を回想されました。その当時はデパートに「慰問品売場」というのがあったのです。<sup>(1)</sup>

実際の当時の百貨店での事例を紹介する。大阪三越の通信販売用のカタログには、千人針が紹介されている<sup>(2)</sup>。

(装七) 大人用腹当

(イ) 絹紬(純真綿入) 一枚・・・(公) 二円六十五銭

(ロ) ス・フモス(絹綿入) 一枚・・・(公) 一円十銭

◆家庭用と千人針用の二種御座いますから御指定願上げます

(装八) 両面絹紬製純真綿入

チョツキー一枚

(A)・・・(公) 五円九十銭

(B)・・・(公) 七円三十銭

◆家庭用と千人針用の二種御座いますから御指定願上げます

これらの商品は、当時でもはがきで購入できた。

★おはがき一本で信用ある「三越の品」を安心して御買上願へる「通信販売」

(1) 森南海子『千人針』情報センター出版局、平成7年(1995)、p.147。

(2) 『大阪三越 11月号』株式会社三越大阪支店、昭和15年(1940)11月、p.16、p.20。萩谷茂行氏のご教示による。

★戦時下物資統制のため、各頁掲載品の内にも、数量に限りあるものも御座いますので万一御指定品、品切の節は勝手ながら似寄り品を御送り申し上げます。

こうした商品化がどのようなことで販売されるようになったか、その手がかりが昭和18年の「柳池分会に於ける千人針腹巻の作成」という資料で紹介されている<sup>(1)</sup>。

京都地方本部所属京都中京区柳池分会に於ては、昭和十二年七月支那事変が起り多数の應召者を見るや、千人針腹巻の作製を思ひ立ち、染織専門商店株式会社細田商店意匠部に託し、白地縮緬の中央に赤糸一千針以つて日の丸を顕はすこととし、上部に戦勝祈願所願文字「サムハラ」の四文字、下部に「大日本国防婦人会柳池分会」と染出し、役員は暑寒厭はず、分会員宅を歴訪、或は街頭に立ち、或は女学校生徒の手を煩はず等献身的努力を払ひ、完成の上は更に、伊勢大廟、橿原神宮、平安神宮、石清水八幡宮等に参拝、親しく所願をこめ修抜の御判を受け一々箱入となし、聖戦開始以来、四年七ヶ月に亘り、当学区内より応召入営の爲め出発せらるゝ勇士に漏れなく贈呈せるの外、若干は京都地方本部に納入し、又第一線慰問使に託し戦地の各部隊にも贈呈其総数七百余筋に達し終始一貫其目的を完遂せしめたり。(下線筆者)

染織専門商店株式会社が、白地縮緬の中央に赤糸で千針分で日の丸を顕し、上部に戦勝祈願文字「サムハラ」の四文字、下部に「大日本国防婦人会柳池分会」と描いたとある。

宮崎県で筆者が聞き取りを行った事例では、実際に既製品千人針の作製を仕事として手伝ったという。

○I・C (女性、大正10年(1921)7月10日生、宮崎市橘通)

千人針というものを準備するには、召集令状が来て、3日くらいしか余裕が無かった。そこで片岡さんという旗屋さんが宮崎市の高千穂通にあった。布を作るのが間に合わないで、虎の絵が描かれている布を旗屋さんで売っていた。私がミシンを持っていたので、天竺木綿という分厚い晒し木綿を二つ折りにしてミシンで周囲を縫ったものを作ったという。一つ作るのに25銭もらったことは覚えているが、それをいくらで売っていたかは覚えていないという。布が配給になったので、片岡さんに買い込んでいた布が無くなるまで続けたが、それが何年までだったかは覚えていない。日に10円くらいはもらえていたので、頭も使わず、よい仕事だったという。当時大工の棟梁が日当5円くらいの時代だったという。昭和17年(1942)頃からは、千人針を持たせるにも余裕が無くなっていた。片岡旗屋さんに千人針を買いに行ったが、「今ないのよ」と言われて入手できなかったという。

○上野勉 (男性、昭和3年(1928)生、宮崎市高千穂通)

戦時中、ベニヤ旗店では、入営の旗、婦人会のたすき、日章旗、海軍旗、千人針など

---

(1) 細田歌子「柳池分会に於ける千人針腹巻の作成」作田靖裕編『銃後の華』、昭和18年(1943)。



を作って販売していた。立派な虎の絵が描かれており、糸を結んでいくと絵になるようになっていた。絵の部分だけを縫い、それで千個あった。武運長久の文字が書かれていたが、それには糸は縫わなかった。小学校3年生の時には千人針を見た記憶があるというので、日中戦争の頃だと思ふとのこと。たすき掛けした国防婦人会の女性たちが橋通の街頭で千人針を縫ってもらっていた。14、15歳まで千人針風景を見た記憶がある。あまり見なくなった16歳の時に少年航空飛行隊に入った。

以上のように宮崎市市街地には、2軒の旗屋があつて、そこで既製品の千人針を作り、販売していたことが分かった。このような事例は全国的に一般的に行われたと考えられる。

## <描かれる文字・絵>

### 13、虎の絵・文字

①点描 ②線描き（既製品） ③線描き（手書き）

日中戦争以降の千人針に関する聞き取りを行うと、当然のように、「虎は千里行って千里帰ってくるので、それにあやかつて、虎の絵を描いたり、寅年の女性に年の数だけ糸玉を縫ってもらおう」という説明が行われる。しかし、第1章で論じたように、日露戦争から満州事変にかけての文献には、千人針習俗と虎との関わりのある事例はない。

この虎・寅に関する問題は、毘沙門天との関連もあり、平行して考えるべき問題である。享保19年（1734）頃刊行された「山城名所社寺物語」<sup>(1)</sup>には、

延暦十五年藤の伊勢人本尊毘沙門天にて毎年正月初のとらの日、都より参詣おびたゞし、多聞天は十種の福をあたへ給はんとの誓願なれば、福を祈る、又とらの日を縁日とする事、虎は千里をはしる商人の金銀もつて利得するをわしるといへば此儀をとりて虎の日を用るといふ

とあり、江戸時代から「虎は千里をはしる」という表現が使われていたことが分かる。また、鑑禎上人<sup>がんでい</sup>が鞍馬山頂に毘沙門天を拝した宝亀元年正月四日は寅の日で、しかも、時刻は寅の刻で、正月は寅の月である。寅の月の、寅の日の、寅の刻に、太陽の霊気あふれる陽光の中から毘沙門天が出現された。以上が鞍馬寺での伝承で、同様の伝承は、奈良県の信貴山にも伝承されている<sup>(2)</sup>。

今から1400余年前、聖徳太子は、物部守屋を討伐せんと河内稲村城へ向かう途中、この山に至りました。太子が戦勝の祈願をするや、天空遙かに毘沙門天王が出現され、必勝の秘法を授かりました。その日は奇しくも寅年、寅日、寅の刻でありまし

---

(1) 『新修京都叢書 第22巻』臨川書店、昭和47年（1972）、pp.606-607。「山城名所社寺物語」は、享保10年（1725）頃に書かれたもので牧野河内守英成によって編纂されたものと考えられる。文中の「わしる」とは「走る」の意味である。

(2) 信貴山朝護孫子寺のパンフレットによる。

た。太子はその御加護で勝利し、自ら天王の御尊像を刻み伽藍を創建、信ずべし貴ぶべき山『信貴山』と名付けました。以来、信貴山の毘沙門天王は寅に縁のある神として信仰されています。

これらの縁起や上杉謙信が自らを毘沙門天の生まれ変わりとして信仰したことなどがあわさり、毘沙門天は戦の神、ひいては戦争に関わる信仰の対象となっており、毘沙門天と寅年、寅月、寅日、寅刻との関連と連想で、虎と関連づけられたと考えられる。こうした背景をもとに考えれば、虎、あるいは寅年は戦争との関わりが深い。鞍馬寺や信貴山朝護孫子寺では、張り子の虎の玩具が有名であるが、これにも戦争との関わりがあった。

西南戦争が始まっていた明治 10 年（1877）の「読売新聞」の記事に戦地から早く戻って来られるようにとの願いを込めて張り子の虎を贈る風習が紹介されている。

#### ○明治 10 年（1877）5 月 28 日付『読売新聞』

○西国の騒動が始まってからよく売れるのハ張子の虎にて昨今手遊屋にも限ものだといふから売れる子細を聞くに虎ハ千里いって千里かへるといふところから戦地へ出張された方のお家で婆さんや御新造が何でも早く帰る様にと神棚へかざり虎へ供物を備へて祈願されるといふ其証拠ハ西の久保辺の或る家の隠居さんの此の事を聞いて早速人力車に乗り浅草の中見世から芝神明前と諸方の手遊屋を探して歩行きどうしても無いのである画かきの家へいき無理に頼み込み待って居て虎を画てもらひ家へ持帰って押出し供物ハ、饅頭に竹の子笹まき鮎に藪蕎麦や竹門の油揚げにお酒も餅と首をふりふり息子さんの帰国を祈るといふよりハ妙なり（下線筆者）

現在では、一般的な張り子の虎の目的は、小児の病魔を避けるためとされているが、明治 10 年には西南戦争と関連づけられ、無事に帰国できるようにとの願いが込められていた。その後、この風習が密かに続いていたのかは、実証が難しい。

また、平行して「五黄の寅年の女性」の運の強さにあやかることから生まれた俗信もある。第 1 章第 4 節に紹介した事例 14「弾丸除けには五黄寅年生れの千人の処女の手で縫われた腹巻がよい」が、確認できる事例では最も古い。

第 1 章第 5 節で述べたように「五黄の寅年」と厄年の一致が関係していると思われる事例がある。大正 3 年（1914）生まれの戸塚静枝さん（東京都中央区人形町）に聞いた話では、「五黄の寅年」だから縫ったのではなく、厄年だったので縫ったとの証言があった。大正 3 年（1914）生まれの女性は、昭和 6 年（1931）の段階で、数えて 18 歳を迎え、前厄にあたっていた。厄払いとして、この年齢の女学生が積極的に千人針を年齢分だけ縫うことを厭わなかった理由の一つであろう。「五黄の寅年」という条件を短期間に多数見つけるのに効果的なのは女学校であったことは容易に考えられ、「五黄の寅年」の俗信と女学校の関係は今後検討すべき課題であろう。

満州事変の頃には、よく聞かれた事例であるが、五黄ごおうの意味が忘れ去られ（あるいは浸透せず）、ゴウ（強、あるいは豪）の寅年の強さにあやかる意味に転じ、寅年一般の女性が年の数だけ縫えるという俗信が一般化した。そのため、何故寅年かの説明ができなくなり、虎は千里走って千里戻ってくるとの説明がされるようになる。そのため、実像の虎が

千人針に描かれるようになったと考えられる。満州事変以前の千人針の実物が少ないので、実証は難しいが、文献を見る限り、虎が描かれる千人針はそれほど古いものではなく、日中戦争以降に盛んに描かれるようになったと考えられる。

本来は寅年、あるいは五黄の寅の女性がなぜ年の数だけ縫ってよいのかなどという説明が為されたはずで、虎の絵についての説明がされるようになったのは、虎の絵が描かれるようになってからなのではないか。昭和館所蔵の資料からは、虎の絵が描かれるようになるのは、昭和 14 年（1939）以降であり、虎の絵を描いた既製品の登場と時期が重なっているのではないか。

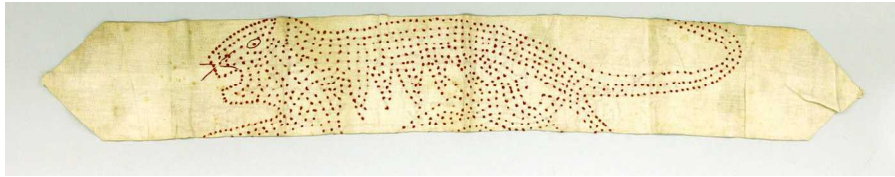


写真 4-51 虎を描いた千人針（昭和館蔵 K09-01986）



写真 4-52 虎を描いた  
千人針  
（昭和館蔵 K08-10089）



写真 4-53 虎を描いた千人針（宮崎県護国神社蔵）

#### 14、武運長久などの戦意高揚語

「武運長久」という言葉が千人針に描かれることが多い。この言葉には主語がなく、国

家、個人ともに武運が長く久しく続きますようにという願いの込められた言葉であろう。この武運長久という言葉に注目したのは加藤良治であった<sup>(1)</sup>。

戦意高揚がはかられ、戦時体制が強化されるにつれ、庶民はどんな心境だったのだろうか。たしかに出征兵士も銃後の守り手も、戦争勝利の武運長久を率先して祈願し、お国のために尽くす意識は高揚していただろう。

とはいえ、言論統制の中で、本音がいえない庶民の心境、とりわけ銃後の女性達の心境はけっして武運長久ではなく、生きて無事帰還できるようにと千人針に願いを託した人たちも少なくなかったのではないか。

表向きには、国家の戦争勝利、個人的には夫や息子の無事の生還を願う気持ちが反映され、千人針にこの「武運長久」の文字が記されたのだろう。

一方、戦意高揚を意味する言葉も書かれる事例が多い。「大和魂」「七生報国」「忠勇」「米英撃滅」「至誠奉公」「必勝」「祈奮闘」「七生尽忠報国」「必誓滅敵」「祈健康」などが記されている。この場合に男性が書いた事例であるのかなど確認するべきであろう。

## 15、サムハラ

第3章で紹介してのように、江戸時代から怪我除けとして記されていた四文字が、日清・日露戦争で弾丸除けとして利用されることとなる。靖国神社の遊就館が所蔵する満州事変の千人針にはサムハラサムハラの文字が描かれている。サムハラサムハラの俗信は、様々な形で広がり、千人針に描かれる事例はその一部で、お守りとしてサムハラ文字入りの製品が販売された。また、石清水八幡のお守りが仁丹の宣伝に利用されたりした。

サムハラとは、怪我除けの意味を持つ符字の一種で、江戸時代に流行し、日清・日露戦争において、再度流行する。出征軍人にサムハラサムハラの文字を書いた御守りを万年筆業者が無料で配布するなどして全国的に知られるようになった。千人針や日章旗にもサムハラサムハラの文字は書かれ、さまざまなかたちで普及した符字である。日中戦争時には、仁丹が石清水八幡宮に祈願したサムハラサムハラの御守りを無料で配布した。このサムハラ文字については、第3章で論じた。

## 16、御朱印・墨書

千人針は基本的に女性たちの気持ちを込めたお守りであり、神仏への祈願が前提ではない。しかし、お守りの神通力を高めるためにも神仏のご加護が得られるように、作製した千人針を神社仏閣へと持参し、魂を込めてもらうことが行われた。お祓いや祈願の印として御朱印が押された。なかには複数の神社仏閣の御朱印が押されてあったり、お守りが封入されている千人針もあった。

---

(1) 加藤良治「奇なる呪物<千人針> (雑記)」『歴史民俗学』7号、批評社、平成9年(1997)、pp.268-269。

戦時中、出征する兵士の家族は、氏神社、著名な戦勝祈願の神社仏閣に祈願し、戦勝祈願の護符をいただいたり、千人針の祓いをしてもらったりして、千人針にその神社・寺院の御朱印を押してもらった。

千人針に袋を付けてその中にお守りが入れられるように工夫されているものや、折りたたむ前にお守りを縫い込んで、封入する事例も見られる。成田山新勝寺の木札は、全国的によく見られる御守りである。

千人針を作製し、その後神社等に持参し、魂を入れてもらうためにお祓い等を受ける事例もある。その場合には千人針に御朱印が押されることになる。千人針全体の数からすると、神社の祈願や祓いを受け御朱印が押されたものは少ないことが分かる。このことは神仏による祈願はあくまでも補完的な行為であって、千人の女性による祈願が主であることを示していよう。

表4-7 千人針の御守・御朱印（昭和館所蔵資料から作成。資料番号は昭和館資料番号である）

資料番号	都道府県	御守	朱印	備考
K40-00092	福岡	有	—	綿入。御守袋有り
K08-05747	東京	—	有	「居神大神」「トラトラ」等
K12-00155	東京	有	—	中央部分にお守りが縫い込まれている。
D10-00001	千葉	有	—	和紙に版木で刷られた物が束で入っている
K09-03110	神奈川	—	有	「千人がまことをこめし針のあと みいくさします君をまもらむ」
K41-00003	佐賀	有	—	木の実が縫い込まれている
N35-00110	山口	—	—	墨書「祈願上野八幡宮」
K09-02452	東京	—	有	「荻窪八幡神社」
D08-00004	東京	—	有	成田山で護摩を焚いて御朱印を押してもらった
D08-00002	東京	有	—	御守「清正公勝守」他、御朱印「浜町清正堂」
N18-00020	新潟	有	—	夫の名の裏に妻の名
D13-00002	静岡	有	—	御守5個「豆のような物」「熱田皇大神宮」木札御守等
R39-00102	高知	別添	有	墨書「祈願 此乃千人縫仁皇神乃神霊神依里鎮世申須」「祈武運長久」「サムハラ」「七生尽忠報国」「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといでたつ我は」御朱印「白山神社守護」「八幡宮守護」他
K10-00009	千葉	有	—	御朱印
N13-00004	静岡	別袋	—	同梱されていた御守袋にヒメクルマミが入っていた。破れ有り
N13-00214	静岡	—	有	墨書「南無妙法蓮華経」「身延山」「千葉山」
R39-00081	高知	有	有	「祈願 此千人縫乃守神依里鎮里坐世止申須」「祈武運長久」「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといでたつ我は」「サムハラ」「七生尽忠報国」「必誓滅敵」「祈健康」

## 17、日の丸

千人針を贈る相手と贈られる相手の関係によっては、愛国心を示すために国旗を意味する日の丸の印が描かれることもある。

千人針に武運長久やその他のという言葉、あるいは日の丸が記される意味については、日の丸の寄せ書きの影響と考えられるが、千人針が個人の安全を祈るだけでなく、国の武運長久も祈っているのだということを示す意味もあると考えられる。千人針を単体で考えるのではなく、日の丸の寄せ書きとともに考える上で、重要な点であると考えられる。

## <付属物>

### 18、五銭玉・十銭玉

①無し ①5銭玉 ②10銭玉 ③5銭10銭玉

満州事変の頃から「死線を越える」という意味から五銭の穴あき銭を結びつけることが行われるようになる。この頃から「銃後」という言葉が普及することとなるが、その言葉が定着すると、「苦戦」を免れることから十銭の穴あき銭を結びつけ、五銭と十銭合わせて十五銭を銃後とかけて、「銃後の護りとなる」と説明されるようになる。

結びつけてある銭の年号を調べておくと、少なくともそれ以前に作製されたことが判別できる。

日中戦争以後、千人針習俗の特徴としてあげられる、五銭を縫いつける事例は、昭和7年(1932)4月に寺田寅彦が記した「五銭白銅を縫付け『しせんを越える』というおまじないにする人もあるという話」という記述が現在のところ最も古い。「死線を越えて」の死線と四銭とをかけた言葉であるが、この前提として、「死線を越える」という言葉が普及している必要がある。大正9年(1920)1月号から雑誌『改造』で、賀川豊彦による小説「死線を越えて」が連載され、その後、単行本として出版され、大ベストセラーとなっており、この言葉はすでに定着していたと考えられる。さらに五銭と十銭合わせて十五銭＝銃後となり、「銃後の護り」を意味すると説明されるようになるが、これも前提として「銃後」ということばが定着している必要があるが、「銃後」ということばは、満州事変前後に使われはじめたことばであり、五銭と十銭を結び付けるという習俗は満州事変以降に流行した習俗と考えられる。こうした硬貨は、物理的な弾除けにもなるということで、その数は次第に増えていった。例えば、昭和館資料番号 K08-05747 では、一つの千人針に



写真 4-54 様々な硬貨を結びつけた千人針

予備役陸軍主計少尉が日中戦争勃発直後の昭和12年(1937)8月に召集された際に贈られたもの。中心部分には、妻の名「縫」と三人の娘「貞」「順」「良」の記名がある。聖徳太子が戦勝祈願し、毘沙門天王が出現、必勝の秘法を授かったのが、寅年、寅日、寅の刻であったという伝承からトラトラトラと書いたものと思われる。五銭が56個、十銭が37個縫い付けられている。小田原市城山にある居神神社のお祓いを受けたものと思われる。(昭和館蔵 K08-05747)



五銭が 56 個、十銭が 37 個と膨大な数の効果が結びつけられた千人針まで作られた（写真 4-54）。



写真 4-55 五銭玉と十銭玉を結びつけた千人針（昭和館蔵 K09-01986）



写真 4-56 五銭玉と十銭玉を結びつけた千人針  
（昭和館蔵 K08-1363）

## 19、御守り

御朱印と同様に、神仏の力を付加する為に神社仏閣を参拝祈願し、その際に拝受したお守りを千人針に結びつけたり、お守りを入れるために作られたポケットに入れたりした（表4-7「千人針の御守・御朱印」参照）。事項の木の実などと同様に、千人針と別に携帯する例が多く、また千人針に封入する場合にも中に綴じ込んでしまうため。その実態を把握することは困難である。千人針とは別に戦時下のお守りについての研究が必要となろう。

## 20、木の実、種子など

千人針の布の中にまれに種のようなものが縫い込まれていることがある。戦国時代に行われた勝栗や無事の帰還を願う俗信にもとづくナタマメなどの例がある。

神社仏閣による御守りの他、昭和館資料K41-00003・D13-00002・N13-00004のように植物の種や木の実などを入れた事例が見られる（表4-7「千人針の御守・御朱印」参照）。ただし、千人針の中に入れた状態で閉じられている場合が多く、寄贈資料を分解す

ることができないため、詳しい状態を把握することは困難である。

勝栗は、戦国時代の出陣の儀式にも登場する。聞き取り⑧の宮崎県西都市銀鏡の事例 (p198 参照) では、「干し唐芋・勝ち栗・御守りなどを持たせるものであった。銀鏡神社の御守りも持たせるものだった。弾除け祈願は特になかったが、勝ち栗を持たせていた。」とあるように千人針に封入することは無かったが、携帯する事例は多く見られたようである。

また、ナタ豆を千人針に入れたという話は宮崎でも聞くことができたが、西日本を中心に聞かれる事例のようで、旅での無事を願う俗信が多く聞かれる。

○「旅行をする時に「ナタ豆」を持って行ったならば、必ず再び帰りつくことができると伝えられる。」(長崎県南高来郡南有馬町)『南有馬町郷土誌』(南有馬町教育委員会、昭和44年)

○「タチワケ(ナタ豆)を食べると無事に帰る」(鹿児島県始良郡栗野町)『栗野町郷土誌』(栗野町郷土誌再版委員会、平成7年)

○「家を出る時ナタ豆を食べば元に戻ると言い門出には必ず食べる(和歌山県伊都郡高野口町付近)」(『旅と伝説』三元社、岩崎美術社)

このほか、鈴木棠三は、『日本俗信辞典』において次のように紹介している<sup>(1)</sup>。

刀豆(なたまめ)

○旅に出る時、ナタマメを食べると、途中で死ぬことはない(奈良)、丈夫で帰る(同県)、幸福がある(和歌山県西牟婁郡)といい、和歌山市新庄などでは、旅立ちの時、膳にナタマメを供えて無事を祈ることもあったという。また、佐賀県では、ナタマメを味噌漬にして旅行の時食べると災難に遭わないといい、同県武雄市では、戦争に行く時、懐にナタマメを入れておけば弾があたらないと伝えている。ナタマメは上へ伸びてなってから、また下へ戻ってくるというので、旅に出ても無事戻ってくることを願ったもの(奈良)、という。

○そのほか、ナタマメは一本植えると悪い(奈良)とか、ナタマメの種子は他家にやるものでない(福岡県北九州市)、勝負に勝つにはシロナタマメの先を食べるとよい(奈良)、などという。

無事に戻るといふ旅の無事を祈る俗信が戦時中における弾丸除けの俗信として変化した事例と考えられる<sup>(2)</sup>。

このナタ豆については、昭和6年(1931)12月20日付の『神戸新聞』に、「根元に返るナタ豆—笑えぬ贈り物」と題して、次のような記事がある。

吹雪の叫びに暮れ、零下三十何度の酷寒で大地も凍りつく朝を繰返す満州へ姫路混成旅団が派遣されることとなるや各方面から赤誠のこもった慰問品や激励の手紙、お守り・・・等あらゆるものが各関係連隊や司令部に持込まれる中には一寸変り種それでも笑えぬ真心のあらわれの贈り物の一つ——十九日第〇旅団司令部へ一袋のナタ

---

(1) 鈴木棠三『日本俗信辞典』角川書店、昭和57年(1982)、p.411。

(2) 『日本俗信辞典』に紹介されている事例は武雄市史編纂委員会『武雄市史 下巻』(国書刊行会、昭和56年(1981))にも紹介されている。



豆がいとも嚴重に荷造りされて届けられた、出征とナタ豆——この珍対照に何れも奇異の目を口った、それには左の意味が書き連ねてあった。この豆は習性として最初一番根元に結実し漸次蔓の先まで結実し最後に最初結実した一番根元に返って結実するので昔からこれを一個宛持っているとは再び無事で元のところへ帰り、勝負事には必ず勝つと云う伝説があるから御出征の軍人に御贈りするとまた東本願寺を代表して神戸教務所長本田学氏は弾除けの御守多数を同様寄贈した。

昭和6年の段階でナタマメは戦地へお守りの一つとして贈られていたことが分かる。こうした習俗が千人針に取り入れられ、聞き取り⑤「千人針には、タチワケ（ナタマメ）を縫い込んでいた。」(p197 参照)のように千人針に必要不可欠な存在となった地域もあった。

## 21、女性の毛髪、他

『風俗画報』316号<sup>(1)</sup>に千人結について「思ふに千人の女髪は大象を繋くを得べしといふが如く。千人の丹誠を籠めたる布帛は。弾丸も之を洞する能はずとの観念より出しものにや。」とある。昔から「女の髪の毛には大象も繋がる」といい、女の髪の毛で作った網は、大きな象を繋いで引っ張っても切れないほど強いということで、女性の魅力をたとえたことわざである。このことわざとの関連で、神社に女性の髪の毛が奉納される事例が良く聞かれる。宮崎県延岡市の戦勝祈願で有名な竹谷神社でも戦地の男性の無事を祈って女性の髪の毛を奉納した。古来からこうした女性の髪の毛に霊的な力を信じており、千人針にも女性の髪の毛や陰毛を入れる例があったという。森南海子は、真綿で毛髪を入れた例を紹介している。

固くとじられた糸をはずさせていただくと、たしかに美しい黒々とした長い髪が針目の裏側に、静かに横たわっていました。そして、その髪には艶があり光っていました。(中略)真綿を千人針に入れる風習は各地に多く残っていますが、たいていは保温や弾よけが目的でこうしてその中に自らの髪を埋めこんだものは数多いとは思えません。<sup>(2)</sup>

また赤松啓介(本名栗山一夫)は、具体的な事例を紹介している<sup>(3)</sup>。

○兵庫県神戸市。戦時中の兵士たちのまじないにもいろいろと種類があった。千人針は有名だが、初めは女なら誰でもよかったのに、だんだん難しくなっていた。処女が最もよく効くというので、小学校や女学校、百貨店の女店員などがよくねらわれた。千人針をしていても戦死する者が多くなったからだろう。そのうち千人目のとどめの針は五黄の女の人の髪の毛で結んでもらえというのが流行してきた。その毛も処女の

---

(1) 『風俗画報』316号、東陽堂、明治38年(1905)5月。

(2) 森南海子『千人針』情報センター出版局、平成7年(1995)、pp.158-159。

(3) 松谷みよ子『現代民話考6 銃後ほか』立風書房、昭和62年(1987)、pp.66-67。

毛でないと効果がないことになり、探すのに困っていた。昭和十八年の頃になると限定的となり、五黄の女の性毛で結んでもらわねばならぬといい、どうしたものか困っていると相談されてびっくりした。工場の女工さんたちに話したら、四銭（死線）を越えるというので、とどめの針で穴あきの五銭貨をくくりつけるのも流行していると教えてくれた。それも性毛がよいということだ。戦死者が激増して、ただの千人針ではだんだん効果がなくなり、いろいろと新しい方法を発見、創出するほかはなかったのである。神戸、播州地方では、千人針の布を梅酢に漬けて乾したのが流行した。戦地で水がなくなったときにかんでおって助かったというのや、胃腸病で苦しんだときにしゃぶっていて助かったなどという体験談が伝えられた。回答者・栗山一夫（兵庫県在住）

なかなか聞き取りでは聞かれない内容であるが、実際にはこのような内容もあったのだろう。この他、千人針とは直線つながらないが、女性の毛髪についての事例を紹介しておく<sup>(1)</sup>。

#### 「身代りの毛髪」

満州事変で昂々溪の戦いが終わった昭和六年一月十二日、わが瓦房店守備隊の将士が宿舎に帰って一と息つきながら、慰問袋などをあけていると、一人が急に叫んだ。

「中隊長殿、私の慰問袋の中からこんな妙なものが出て来ました。」

それは一握の婦人の頭髪である。側に鉛筆で次のように認めた手紙が添えてあった。

私は杉本とめと申す女です。私の夫は大正八年の戦争にシベリヤで戦死しました。

その時切り落とした毛髪がこれです。私の生きているうちに戦争があれば私の身に戦地に送ろうと思ってしまっけて置きました。どうか御国の兵隊さん方、私の仇を討って下さい。この毛髪には私の念願がこもっております。

女の浅墓な考えながら私の思う念力でございますから、左様お取次ぎ下さい。

福岡県田川郡金田敷島町 杉本とめ

このように女性の髪の中の霊力を信じていたことが分かる。中に縫い込まれた髪の中の毛などは実物の千人針でも一見しただけではなかなか気づかない特徴であるが、こうした特徴があることを前提に調べてみると毛髪についての具体例が増えてくると考えられる。

## 22、その他

千人針には様々なものが縫い込まれていたようで、昭和館が所蔵している千人針の中にも、糸がほどけないので、確認できないが、明らかに布の間に何らかのものが縫い込まれている。森南海子は、「そのとき、千人針中央のポケットには、油紙に包んだ三本のたばこと潰した形で収められたマッチ箱が入っていたことを知ったのです。」と、千人針

---

(1) 福岡益雄『感激実話全集第一巻 皇国に身を捧げて』金星堂、昭和14年(1939)、p.223。

に煙草が収められた例を紹介している。<sup>(1)</sup> また、次のようにいざというときの工夫もされていたという。

神戸、播州地方では、千人針の布を梅酢に漬けて乾したのが流行した。戦地で水がなくなったときにかんでおって助かったというのや、胃腸病で苦しんだときにしゃぶって助かったなどという体験談が伝えられた。回答者・栗山一夫（兵庫県在住）。<sup>(2)</sup>

このような新たな実用的な機能の付与は、様々な形で行われたと思われる。

千人針の基本は、実用的な腹巻や手拭い、チョッキなどに、不特定多数の女性から糸玉を縫ってもらった布である。実用的なものにさらにさまざまな要素を加味することは民具的な特徴ともいえよう。

写真 4-57 は、昭和館所蔵の千人針であるが、所蔵する千人針のなかでも千人針に込められた俗信、あるいは情報の多いものである。千人結のシンプルな形状に対して、詰め込めるだけの思いを込めている。七生報国の観念と千人針の思いは矛盾すると思われるが、戦争末期の錯綜した状況を表しているとも言えよう。



写真 4-57 情報の詰まった千人針

昭和 19 年に佐世保海兵団へ入営した。小さな竹を切って、朱肉で擦して、赤い印を付けた。物資不足で赤い糸ばかりで作ることができず、いろいろな糸を使って作った。墨書で、「祈武運長久」「七生尽忠報国」「必誓滅敵」「サムハラ」「祈願 此乃千人縫仁皇神乃神霊神依里鎮世止申須」「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといでたつ我は」などと記され、御朱印「白山神社守護」「八幡宮守護」「安芸大神宮」が押されている。五銭玉と十銭玉が結びつけられている。

(昭和館蔵 R39-102)

ここまで日中戦争以降の実物の資料を中心にその特徴について分析してきた。文献資料からうかがわれる日露戦争期の千人結と大きく違い、形状や色などのバリエーションのみならず、千人針に付与された俗信や信仰的な要素のバリエーションは多岐にわたっていることを確認できた。多岐にわたるこのバリエーションは、人々の戦地に赴く兵士たちへの願いを端的に表している。無事の帰還を願う女性たちの気持ちや戦地での活躍を期待する男性たちの気持ちなど、千人針にはそうした様々な立場の気持ちが込められていたことが分かる。

(1) 森南海子『千人針』情報センター出版局、平成 7 年（1995）、p.123。

(2) 松谷みよ子『現代民話考 6 銃後ほか』立風書房、昭和 62 年（1987）、p.67。

### 第3節 戦争の民具

弾丸除けの御守り、日章旗の寄せ書き、奉公袋、提灯行列、出征の幟、慰問袋など、出征にまつわる資料は、千人針を含め、互いに影響し合いながら成立してきたものである。

#### 1、慰問袋

慰問袋については、次のような由来がある<sup>(1)</sup>。

慰問袋の由来 明治三十七年の春、すでに日露戦役は始まっていたが、その当時赤坂にあつた婦人矯風会へ、アメリカ矯風会のサチア夫人から「米西戦争のときアメリカ婦人がカムフット・バッグ (Comfort bag) というものをつくって国外に出征している兵士たちにこれを送つたが、それが兵士たちになによりも喜ばれた。貴国でも出征将兵にこれを送つてはどうか」という親切な忠言があつたので、矯風会では早速に幹部の清水富貴子、矢島楯子らが相談し、カムフット・バッグを直訳して慰問袋と名づけ、まず取りあえず三月十五日に第一回の慰問袋百袋を佐世保鎮守府司令官宛に送つたのが慰問袋のはじまりである。

慰問袋が日露戦争以降に始まったとあるが、愛国婦人会などの活動にも組み込まれていた。慰問袋作りは、大量に作製されたので、組織的に準備する必要があつた。作られる量も膨大で有り、種類も様々であつた。婦人会の規約には、慰問袋作りは登場するが、千人針はほとんど記載されない。婦人会の活動の一つとして確かに行われていたにもかかわらず、ボランティアとして行われるべきとの判断だったと考えられる。

第1章第4節「銃後の護りと千人針」でも述べたように、国防婦人会が創設されるきっかけとして千人針が関わっていたが、集団で準備される慰問袋に対して、個人的に準備され個人的に贈られた千人針が位置づけられていたのである。

婦人会の女性の活動に対して、男性の活動に当たるのが在郷軍人会であつた。そして、在郷軍人会の成立とともに始まったのが、奉公袋であつた。それは婦人会の慰問袋のように組織的に準備されるようになり、出征兵士の必需品となつていった。

#### 2、奉公袋

奉公袋の成立過程については、藤井忠俊が整理しているので、その著書『在郷軍人会 良兵良民から赤紙、玉砕へ』をもとに以下に紹介する<sup>(2)</sup>。奉公袋は、愛知県の豊橋支部長である連帯区司令官の銚田俊中佐の発案で、大正2年(1913)に管内で支部在郷軍人会員全員に所持させるよう指示したのが始まりであり、動員袋・奉公袋・軍用袋・召集袋・充員袋などの名称が各地で使われたようであるが、奉公袋で全国的な統一が為された。奉

---

(1) 日置昌一『ものしり事典 風俗篇(上)』河出書房、昭和27年(1952)、p.30。

(2) 藤井忠俊『在郷軍人会 良兵良民から赤紙・玉砕へ』岩波書店、平成21年(2009)、pp.72-78。

公袋には、応召用諸品・貯金通帳・私服結束材料を入れ、応召用諸品としては軍隊手帳・勲章・勲記・記章・適任証書・特業修歴証書・印鑑・住所木札を入れ、私服結束材料としては、入隊の後私服を送り返す材料、風呂敷、麻縄、名札などを用意した。在郷軍人会によって組織的に準備され、大正5年（1916）頃の奉公袋の普及率は軍服の普及率をはるかに越えていた。

奉公袋は、出征する兵士が軍服よりもまず先に準備するものとして創出されたもので、日中戦争時には、必要不可欠なものとして、組織的に準備され、出征兵士に配られた。

### 3、日の丸寄せ書き

日の丸寄せ書きとは、日章旗の赤い丸の外の白地の部分に、出征（あるいは応召や入営）を祝う親戚・知人、職場関係者、学校教員、本人の名前を主に男性によって揮毫され、出征に際して出征者に渡されるものである。さらに武運長久や戦意高揚・国威発揚の言葉、例えば「七生報国」「尽忠報告」「大和魂」「滅私奉公」などの文字が書き込まれた。

日の丸寄せ書きについては、研究も少なく、その始まりについて、何がきっかけとなって国旗に揮毫するという行為が流行し始めたのか現在のところ確認できていない。しかし、その手がかりとして、日中戦争における日の丸寄せ書きについての新聞紙上での論争がある。

事例) 昭和12年9月23日付『東京朝日新聞』朝刊「鉄箒 日の丸の旗」

◇ところが近来、出征軍人に贈る日章旗や歓送用の日の丸の旗に「武運長久」「皇軍萬歳」等の文字をはじめ、神社仏閣の印章や寄せ書き式の書名をしたものなどを見かけるやうになったが、これは慎重に考慮すべきことだと思ふ。

◇日章旗に文字を書き、印章を押す人々の気持は、勿論熱誠から出たものであるに相違ない。しかしそれは遺憾ながら思慮の足らぬ行為である。

昭和12年9月23日の段階で、「近来」日章旗の寄せ書きが見られるようになったことが記されている。この意見に対して次のように反論が掲載された。

事例) 昭和12年1937年9月25日付『東京朝日新聞』朝刊「鉄箒 国旗署名の弁」

日の丸の旗と題する一文に異議あり。大村氏の考えは、日章旗は文字を書くものではないという見地からであるらしい。然し、そこに書く文字が、赤誠を以てした「武運長久」や「皇軍萬歳」等々のものであったら、たとえ墨汁や朱肉でも、絶対に「日章旗を汚した行為」にはならぬ。要するに書く人の精神の問題である。（後略）

ここでは書かれる文字の内容次第で、「書く人の精神の問題」であると説く。

昭和12年（1937）9月27日付『東京朝日新聞』朝刊「鉄箒 国旗の問題」

日の丸の旗に赤誠をこめた文字を書くことは決して国旗の侮辱でないという平塚氏の説は正しい。然し、国旗はそれがハンケチ程のものであろうとも、国家を代表する

ものである以上、絶対に神聖犯すべからざるものである。(中略)

大村氏に同感である。幼稚園児の歌う「白地に赤く、日の丸染めて」の一節、これですべて解決すると思う。今回の事変までいまだ曾て国旗に文字の書入れや神社の印章等を見たことが無い。

国旗への文字書込みの風習がこのままに推移せんか、恰も登山行者の白衣のようになりはしないか。そして白地に赤の日の丸でなく、飛白に赤の日の丸という結果になりはしないか。

いつから日章旗に寄せ書きをするようになったか現在のところ不明であるが、戦争の民具全体を見通すためにも解明すべき重要な問題で有ると考える。

#### 4、千人力

女性が用意する千人針と男性が用意する日の丸の寄せ書きが象徴的に対比されるが、その中間的な資料として「千人力」という資料がある。千人針が女性によって作製されるのに対して、じっとしてられない男性にも参加できるものとして作られたのが千人力である。これは全国的に作製され、宮崎県遺族会館でも資料を所蔵している(写真 4-58)。

千人力についての事例を『宮崎新聞』から紹介する。

昭和 12 年 8 月 5  
日付 2 頁 (夕)『宮  
崎新聞』

「女軍を向うに廻  
して 男千人力日  
章旗 後藤県耕地  
課長が提言して  
皇軍将兵宛に贈る」  
耕地課では後藤課  
長の発案で街頭女  
軍の千人針の向う  
を張って男千人力  
の日章旗を十枚作  
成し皇国のため極  
暑の北支に活躍中  
の我が萱島部隊に  
送ることとなった。



写真 4-58 千人力 (宮崎県遺族会所蔵)

この千人力日章旗は後藤課長が過般の上京の途次広島において傍見したもので婦人達の千人針は多いが、銃後男子の力に依る前線部隊支口も必要なりとして長野主事以下全課員を督励して四日よりこれが作成に取掛ったこの千人力は三尺四方の白木綿の日

章旗に力の文字を墨で千人の男子に書いてもらうもので初筆を知事か部長かに依頼するはずである

広島で見かけた千人力を宮崎でも作製したという。

○昭和 12 年（1937）8 月 7 日付『宮崎新聞』

「富高にも『千人力』 芳野さん奉仕」

男の千人力——富高町芳野一郎さんは四五日前から長い布に一字一字の□□を示しこの中に力という字を通行の男子から書いて貰っているが千人の男の力を合わせて一つの日の丸国旗を造るもので、女の千人針に対抗して男の千人力として皇軍に贈るのだとある（富高）

○昭和 12 年（1937）8 月 7 日付『宮崎新聞』

『千人力』作製 延中生も街頭へ進出」

女工さんや女学生さん達が皇軍兵士へ千人縫、慰問袋などを贈って愛国熱の溢れている折柄、延中生が『千人力』をつくって千人縫にかえて皇軍兵士に送らんと街頭で人々に『一筆づつ書いて下さい』と呼びかけている、千人力は白木綿に『力』と一字づつ千人から書いて貰って千人の赤誠をこめるのであるが、勇士をして一層力づけさせることだろう・・・工都延岡の非常時風景も緊張味を帯びてきた

○昭和 12 年（1937）8 月 18 日付（夕）『宮崎新聞』

後藤県耕地課長の発言で作成に着手、日州健児の力をシンボライズした千人力、日章旗十三枚は耕地課全員の努力が実を結んで十六日迄完成した。先づ相川知事の健筆を仰いで以来二週間。非常時局の事務多忙の中に部長、課長を始め、各課を歴巡して庁員全部の一筆を求め、不足のところは街頭に進出して文字通り銃後の赤誠を傾倒して完成を見たものであるが、十七日後藤課長、長野主事は晴の日章旗を携えて社寺兵事課を訪い北支皇軍への発送方を依頼した

昭和 12 年の 8 月段階ですでに千人力が作られており、ほぼ同時に千人力は認知されていたことが分かる。

大阪でも千人力は贈られていたようで、昭和 12 年 10 月 2 日付『大阪時事新報』には、「床し義侠一夜の赤誠」「涙の勇士に贈る力のチョッキ」「軍国に薫る温き師道」「輝く千人力・千人針」「勇士の征彩るこの佳篇」との見出しで、千人力のエピソードが紹介されている。

## 5、婦人会と在郷軍人会

ここまで「戦争の民具」として「慰問袋」「奉公袋」「日の丸寄せ書き」「千人力」について紹介してきた。これらの出征にまつわる道具「戦争の民具」がそろるのが日中戦争であった。日の丸の寄せ書きについても日中戦争の開戦とともに盛んに行われるようになった。



「在郷軍人会等による男の日の丸寄せ書き／婦人会等の女性が用意する千人針」のように、戦時中の男女の役割としてとらえることも可能であろう。

この点について、次のような図がある。これは『大日本国防婦人会十年史』に掲載され、その図には次のような説明が加えられている<sup>(1)</sup>。

- 一、国防婦人会分会は、傷痕軍人及び遺家族を圍繞し、世話係の依頼又は其の指示を受け、母性愛に依る軟かき内面的の主として教化慰恤に任ず。
- 二、在郷軍人分会（又は班）は国防婦人会分会と緊密に連繋し、其の周囲に男性的強硬なる外廊となり、主として強化警戒に任ず。
- 三、憲兵及警官は傷痕軍人及遺家族に対する不逞の策謀を警戒す。

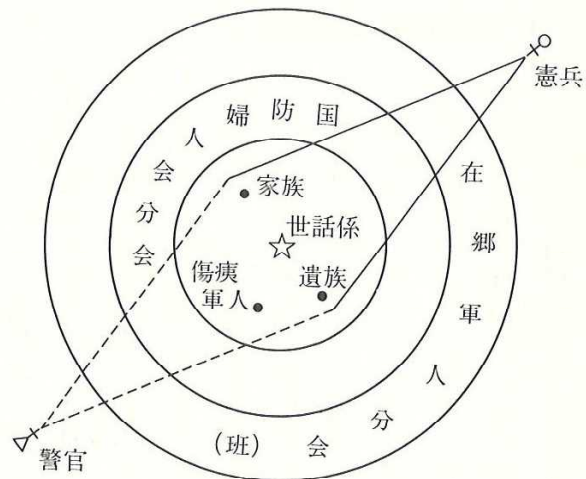


図 4-1 国防婦人会と在郷軍人会の関係

この資料から男性と女性の役割を明確にして組織作りが行われていたことが分かる。こうした組織作りには、慰問袋・奉公袋・千人針・日の丸寄せ書きなども意識的に利用されたと考えられるのではないか。

## 6、販売された戦争の民具

既製品の千人針を本章第 2 節「千人針の民具的特徴」で紹介したが、戦争に関する様々な品物を売りに来る通称「兵隊屋」と呼ばれる存在があったという。

どこで聞いたのか、町の『兵隊屋』が大きな荷物を自転車に積んでやってきました。

「このたびはお目出度うございます」

と大声を上げて、門に日の丸と軍艦旗をぶちがいにかざり、青竹の竿に「祝出征、松田次郎君」もうひとつは「祈願武運長久」のノボリを立てます。

ノボリの下に付ける房は赤と金色があるのですが、松田のおじさんは安い赤を選びました。兵隊屋は武運長久のタスキ、白手袋、千人針、私物を入れる奉公袋などを広げながら、

「町では最近この鉢巻きをするのが、流行っとなります」

と決死奉公の字が入った日の丸の鉢巻きを見せます。

この兵隊屋のもうひとつの顔は葬儀屋で、戦死すると葬儀の花輪や祭壇の注文取り

(1) 『大日本国防婦人会十年史』大日本国防婦人会十年史編纂事務所、昭和 18 年 (1943)、p31 (『愛国・国防婦人会運動資料集 5 大日本国防婦人会十年史』日本図書センター、平成 8 年 (1996))。



にやってくるのです。<sup>(1)</sup>

流行が全国津々浦々にまで行き渡るには、婦人会のような組織作りと、材料を供給する経済的な背景も重要であろう。そうした視点はこれまで民俗学には不足していた視点であり、今後、流通関連の資料を絡めた研究も重要となろう。

---

(1) 木村哲人『戦争中は” 極楽” だった』第三書館、平成 15 年 (2003)、p16。

## 第4節 手記及び聞き書き調査にみられる千人針

千人針についての経験者の証言を知る手がかりとして、手記と聞き書きがある。

- ① 戦中にリアルタイムに書かれた手記、日記など
- ② 戦後、戦中を振り返り記された手記など
- ③ 戦後、聞き書きで調査された資料

①「戦中にリアルタイムに書かれた手記、日記など」については、例えば新聞や雑誌にとりあげられた対談や取材などが挙げられよう。そのほかに同時代に書かれた小説などにも千人針は描かれている。例えば、宮本百合子の小説や随筆には、たびたび千人針が描かれている<sup>(1)</sup>。

### 八月の稲妻

読みたいと思う雑誌が手元にないので、それを買いがてら下町へ出た。町角と云わず、ふだんは似顔描きが佇んでいるようなところにまで女や男のひとたちが、鬱金うこんの布に朱でマルを印したものと赤糸とをもって立っていて女の通行人を見ると千人針をたのんでいる。出会い頭に、ああすみませんがと白縮のシャツの中僧さんにたのまれたりして、小一時間歩く間に私は四五度針をもった。私は何か一口に云いきれない苦しい心持で光る針に三遍赤糸をからめては小さいコブをこしらえて、お辞儀をしてかえした。外科的な専門の立場で云うと、千人針を体につけていて弾丸に当たると、弾丸の方は比較的たやすく抜き出すことが出来るが、小さい糸こぶをもった布切れがどうしても傷の奥ふかく食いこんでのこって生命のために危険なのだそうである。こうやって道行く人々をとらえてその千人針を懸命にこしらえている人々は、そういう事実を恐らくは知っていないであろう。知っているにしても、せめてはそれも心やりからで、出征してゆくものの無事息災を希う家族の気持がじかに迫って来て、縫うことを冷たく拒み得ないものがある。

これらの小説や手記、随筆などには、当時の人々、千人針の一針を求める女性、それに協力する女性、それを取り巻く家族の気持が綴られている。こうした資料を読み込むことで当時の人々にとって千人針の存在がどのようなものであったかを知ることができる。

②「戦後に戦中を振り返り記された手記など」については、千人針を中心に書かれた手記も多いが、文章の一部で千人針について触れた手記は更に多い。千人針に対しての考え方は、男性か女性かによって異なる。男性の中でも、信心深さや母親や妻への愛情の度合い、俗信を信用するか、職業軍人か臨時召集兵か、陸軍か海軍か、など、その条件で、千人針のとらえ方は変わっている。女性の中でも、実際に千人針を依頼した人、一針協力した人、千人針風景として見ていただけの人、寅年の女性、などその立場で記憶が異なっ

---

(1) 宮本百合子「文芸時評」『中外商業新報』昭和12年(1937)7月30日号。

くる。

<元兵士への聞き取り>

○千人針やお守りを大切にしていた例（喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』平成 11 年（1999）、吉川弘文館、pp.160-161）

○「母の千人針とマリアナ沖海戦」母の千人針は、有難かったが、身長くらいの長さなので、私室に置いて戦闘配置についた。

（浅野頼雄『海軍歯科医大尉』私家版、昭和 60 年（1985）、pp.70-72）

○「千人針秘話」千人針をもらえなかった。

（木村盛武『ああ、一兵卒 ある戦争体験者の証言』共同文化社、平成 17 年（2005）、pp.129-132）

○「千人針の腹巻きを捨てる」満期除隊を期待していたが、南方行きが決まり、千人針を海に捨てた。

（武内賢一『軍旗なき部隊の死闘 一闘魂・野戦高射砲第 53 大隊一』海流社、昭和 60 年（1985））

○千人針で命拾いした話。（山田元八「千人針・お守袋」『歴渦 東伊豆町老人クラブ連合会 30 周年記念文集』東伊豆町老人クラブ連合会、平成 6 年（1994）、pp.123-124。

○「千人針の腹巻、寄書の日章旗は一度も使用する事なく、中国軍の検査が有る為、野戦倉庫事務所の窯の中で焼き捨てました。」（中條義一「千人針と日章旗と大和太掾藤原広重の銘刀」『北陸戦友 18 号』石川県戦友諸団体協議会、平成 4 年（1992）、pp.58-59）

○千人針は、捨てたり燃やしたりすることはなかった。（道家信吉「夜光腐木」『南溟の戦野 野戦高射砲第三十八大隊』回想記刊行会事務局、昭和 56 年（1981）、pp.194-195）

○敵弾が千人針で止まった。（山本一一「千人針」『最後の騎兵隊』私家版、昭和 59 年（1984）、pp.497-499）

○横井庄一の遺品から日の丸と千人針が見つかった。（「日の丸と千人針」『最後の兵 Guam 島取材記者団の全記録』毎日新聞社、昭和 47 年（1972）、pp.87-90）

これらの手記は、今後、戦争経験者が少なくなるにつれて貴重な資料となっていくことは確かである。しかし、戦後に知ることとなった情報、つまり戦中には知ることができなかった情報と、自分自身の経験が混同され語られる可能性がある。そうしたことを踏まえて資料を使う必要がある。

③「戦後、聞き書きで調査された資料」について、聞き書きをまとめた貴重な研究として、『国立歴史民俗博物館資料調査報告書 14 戦争体験の記録と語りに関する資料調査 1～4』（平成 17 年）がある。全国の各都道府県から戦争体験についての聞き書き及び資料を集めた報告書である。この中には千人針に付いての質問も設けられている。

### Ⅲ 村落における戦争関係施設 3 戦争中に行われた祈願

（7）千人針は行われていたか。（①誰に頼んだか ②作り方 ③図柄 ④中に縫い込んだものはあったか）

その回答は必ずしも詳細なものでは無いが、戦争の語りの中で、祈願という行為がどのように位置づけられるのかを把握するのに重要な研究である。

また、第2章第4節「銃後の護りと千人針」において紹介した堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ 60 人の体験』<sup>(1)</sup>には、アンケートに「千人針」の項目が設けられ、60人の東京女子大学の生徒の証言がまとめられている。

千人針についての聞き書きをまとめたものとしてあげられるのが、松谷みよ子による『現代民話考』であろう。「千人針など」として聞き書きをまとめている。

「千人針なんて戦場では風の巢になるだけだった」という話を聞いた。

これは晒しの布一米位の長さで並幅を二つ折りにしたもの。白地又は黄色などの布に武運長久の文字又は虎の絵をかき千個の小さい丸が点状になっている。戦況が逼迫して来たら衣料品は点数で買うようになったので文字や絵を印刷した千人針も少なくなった。手製で晒しに筆の軸に印肉をつけ千個の丸をならべ布地を作った。晒しとてその頃は貴重品となっていた。

その千人針を持ち木綿糸を通した針を用意して街かど、駅前など人通りの多い場所に立つのである。

出征とか入営は急に日取りがきまる。だから時間がない。夏の暑い日盛りにも真冬の寒い北風の街かどにも布を手にした女たちが必死な顔をして立っていた。あの頃、作る人も一針の奉仕をする人も皆真剣な思いを持っていた。

私たちはその布を手にした姿を見かけたら「お願いします」と声をかけられるより先に走り寄って「ご苦労さまですね。一針縫わせて下さい」と、針をとった。

私も一枚千人針を作った。駅前に立ち一針を縫って下さった人びとに頭を下げたお礼を言った。寅年の女性だけは年の数だけ縫えたので「私は寅年ですから」と言われると涙が出る程うれしかった。

私が贈った千人針は大変よろこばれてお礼状を戴いた。軍事郵便である。軍隊に所属している者の通信は全部内容が検閲を受けていた。手紙の封筒の上には軍事郵便の印鑑がペツタリと押されていたのである。だからお互い思ったことを全部語り合うことの出来ない通信であった。

千人針が有り難迷惑だったという話を聞いて以来彼に悪いことをしてしまったのだろうか、戦死をされ生還しなかった今となっては確かめる術もないのである。(東京都・氏野美耶子／文)<sup>(2)</sup>

本論でもいくつか紹介したが、本論のための筆者による聞き取り調査をまとめてここに紹介しておく。

#### 聞き取り① I・C (女性、大正10年7月10日生、宮崎市橘通)

(1) 堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ 60 人の体験』教文館、平成24年(2012)。

(2) 松谷みよ子『現代民話考6 銃後ほか』立風書房、昭和62年(1987)、pp.64-66。

千人針というものを準備するには、召集令状が来て、3日くらいしか余裕が無かった。そこで片岡さんという旗屋さんが宮崎市の高千穂通にあった。布を作るのが間に合わないので、虎の絵が描かれている布を旗屋さんで売っていた。私がミシンを持っていたので、天竺木綿という分厚い晒し木綿を二つ折りにしてミシンで周囲を縫ったものを作ったという。一つ作るのに25銭もらったことは覚えているが、それをいくらで売っていたかは覚えていないという。布が配給になったので、片岡さんに買い込んでいた布が無くなるまで続けたが、それが何年までだったかは覚えていない。日に10円くらいはもらえていたので、頭も使わず、よい仕事だったという。当時大工の棟梁が日当5円くらいの時代だったという。昭和17年頃からは、千人針を持たせるにも余裕が無くなっていた。片岡旗屋さんに千人針を買いに行ったが、「今ないのよ」と言われて入手できなかったという。(調査：平成22年11月18日)

**聞き取り② K・Y (女性、大正5年9月10日生、宮崎市宮田町)**

昭和16年に結婚して、19年に熊本に入営していったが、当時、千人針を持たせなかった。千人針は、昭和15年頃までは大きくやっていたが、昭和17年頃には、千人針をやっている人もいたが、一般的にはやらなくなっていた。理由はよく分からない。寅年は、勢いがいいので、年の数だけ縫ってもよいと言われていた。お金を結び付けることは知らない。(調査：平成22年11月18日)

**聞き取り③ 上野勉 (男性、昭和3年2月4日生、宮崎県宮崎市高千穂通)**

戦時中、ベニヤ旗店では、入営の旗、婦人会のたすき、日章旗、海軍旗、千人針などを作って販売していた。立派な虎の絵が点で描かれており、点に糸を結んでいくと絵になるようになっていた。絵の部分だけを縫い、それで千個あった。武運長久の文字が書かれていたが、それには糸は縫わなかった。小学校3年生の時には千人針を見た記憶があるので、日中戦争の頃だと思うとのこと。たすき掛けした国防婦人会の女性たちが橘通の街頭で千人針を縫ってもらっていた。14、15歳まで千人針風景を見た記憶がある。あまり見なくなった16歳の時に少年航空飛行隊に入った。(調査：平成22年11月18日)

**聞き取り④ 上野美津子 (女性、昭和5年生、大連育ち宮崎県宮崎市在住)**

大連では、銃後の護りと言って、五銭と十銭を千人針に結んでいた。婦人会と女学生が街頭で千人針を作るのを手伝っていた。(調査：平成22年11月18日)

**聞き取り⑤ 川畑信子 (女性、宮崎県都城市、昭和6年2月9日生)**

都城高等女学校の頃、千人針のことをよく覚えている。特攻隊のような人(「南海にたとえこの身が朽ちるとも 幾とせ後の 春を思えば」)に贈ったのを覚えている。

千人針を縫ってもらいたい人たちは上町の街頭や西駅前によく立っていた。女学校の校門前にもよく来ていたが、学校の中で縫うことはなかったという。流れ作業の様に作るのは心がこもらず良くないと考えられていたからではないかという。千人針には、タチワケ(ナタマメ)を縫い込んでいた。(調査：平成20年9月8日)

**聞き取り⑥** 小島<sup>うずお</sup>珍夫（男性、大正 15 年 2 月 18 日生、台湾育ち宮崎県宮崎市在住）

昭和 12 年に千人針が盛んになったのを覚えている。大正 3 年生まれの姉は五黄の寅であった。寅年の人は年の数だけ縫えて、五黄の寅の女性はその倍の数を縫うことができた。布は白、糸は赤い糸と決まっていた。四銭（死線）を超えて、九銭（苦戦）を超えてというのは聞いたことがある。虎の絵が描かれている千人針は見たことがなかった。昭和 20 年 2 月 1 日に入営したが千人針を贈られた記憶は無い。（調査：平成 20 年 9 月 9 日）

**聞き取り⑦** 小島桂子（女性、昭和 8 年 2 月 11 日生、宮崎県宮崎市細江）

昭和 14 年 4 月に生目尋常小学校に入学。昭和 16 年から国民学校だった。細江に住んでいて、細江では一人が年の数だけ縫ってよかった。小学校 3、4 年生の頃の記憶がある。戸数 200 戸くらいの村だったので、少人数でたくさん縫う工夫だったのではないかと、小さいながら一人一つではないかと疑問をもったことがある。各戸に婦人会の人が持ってきて縫ってもらったものだった。（調査：平成 20 年 9 月 9 日）

**聞き取り⑧** H・K（女性、87 歳、宮崎県西都市銀鏡）、N・K（女性、昭和 2 年生、同前）

戦時中の銀鏡は、住人が多く、千人針を集めるのは難しくなかった。寅年の女性は、年の数だけ縫うことができたが、同学年の早生まれの女性が兎年で、ウサギはモトウジに帰る（ウサギは元の巣に帰る）といい、兎年も年の数を縫っていいというものだった。

さらし木綿の布に腹巻をつくり、両端を三角にたたんで縫い、そこに紐を付けた。そこに竹の切り口で赤い丸印を千個付けて、そこに縫っていた。三回廻して、糸を通して縫い、次に廻して糸を切ることはなかった。

間に合わないときは後で送っていた。召集令状が来ると予想されている人は事前に準備していた。一週間くらいかけて準備していた。

基本的には街頭の千人針縫いは行われておらず、親戚を中心に家を廻っていた。婦人会の女性たちが代わりに廻ったりして手伝ってくれた。

学校にも持ってくるのがあった。当時は四国などから木炭の関係で多くの人に来ていたので、学校も三百数十人はいた。

戦勝祈願には、銀鏡神社に集まっていた。本人、家族、在郷軍人会、婦人会、生徒などが全員集まっていた。トドロモトという別れの場所があった。歌を歌って、見えなくなるまで日の丸の旗を振って、見送っていた。障子紙で日の丸の小旗は作っていた。

戦争に行く人は、髪をバサッと切るが、その髪と爪を切ると、袋に入れて、家族が保管していた。万が一、遺骨が無い場合には、その爪と髪を死体替わりにしていた。

干し唐芋・勝ち栗・御守りなどを持たせるものであった。銀鏡神社の御守りも持たせるものだった。弾除け祈願は特になかったが、勝ち栗を持たせていた。

男の着物の裏の白い布で千人針を作っていた。

昭和 18 年の頃は、秘密裏に出征していたので、戦勝祈願などは行われなかった。千人針も持たせなかったのではないかと。（調査：平成 23 年 8 月 6 日）

**聞き取り⑨** 日高（旧姓中村）美恵子（女性。大正 15 年 5 月 7 日生、大分県中津生まれ

宮崎県宮崎市在住)

父の仕事の関係で昭和 18 年までは大分県の中津で過ごした。昭和 7 年 4 月中津の南部尋常小学校に入学した。

支那事変の頃、私が一番覚えているのは、小学校五年生の頃、兵隊さんがたくさん中国に行く頃、私寅年なんですね大正 15 年のね。寅年はね、千里行って千里帰るていうて、年ほど千人針ができたんですよ。授業が終わってから、クラスの半分以上が寅年ですわ。こんな人たちだけが残って、学校に千人針が何枚も来るんですよ。他の人は一つしかできないけど、寅年の人だけ小学校の 5、6 年生、女学校に行った頃も来よかったけど、小学校の 5、6 年は多かった。「死線を越えて」といって五銭玉が千人針にきれいに結び付けられたものもあった。糸は赤の木綿糸、糸は切らずに縫い続けていく。晒しで二重に折って、まっすぐではなく、玉を三つまわして作った後は、返し縫いで縫っていた。手拭いではなく、晒し木綿で作っていた。武運長久と書いてあったり、御守りが入っていたり、宇佐神宮のお祓いを受けたものもあった。昭和 18 年に宮崎に帰った頃は、千人針は行われていなかった。出征するときには千人針を作るので、時間が無い。寅年のおらんかといっって慌てて探すものだった。千個の糸玉をもらうのは本当に大変だった。街角に立って、「千人針をしてください」といって探していた。中津の博多町という繁華街や駅、学校の前に集まっていた。寅年の女性がいると分かれるとその学校に行く人も多かった。大日本国防婦人会の女性たちが白いエプロンをして、そんな人たちも一生懸命やった。千人針を手伝っているのではなく、婦人会は婦人会で千人針を集めているようだった。隣組ができてからは、街頭に立たなくても、千人針を作ることができるようになった。(調査：平成 22 年 11 月 18 日)

**聞き取り⑩** 高橋クラさん (女性、大正 14 年生、神奈川県横須賀市船越)、野坂光子さん (大正 14 年生、同前)

満州事変の時にはまだ行われておらず、昭和 12 年の日中戦争の開始とともに街頭で千人針が行なわれるようになったという。湘南電鉄の湘南田浦駅 (現京急田浦駅) 前や船越中通りの商店街に縫ってもらうために女性たちが立っていた。それだけでは千針分集まらないので、近所をまわったりして、愛国婦人会や大日本国防婦人会の人たちも手伝っていた。親戚とか知人とかだけでなく、隣組で廻したり、誰でもかまわず縫ってもらうものであった。寅年の女性には年の数だけ縫ってもよいとされ、寅年の女性を見つけて頼むものだったという。学校にも持ってきてよくまわして縫っていたが、大正 15 年、および昭和元年 (1926) 生まれの女生徒が寅年だったため、それを目当てに学校に持ってきていた。千人針はもらってもシラミの巣になるので困る、戦地では捨てていたなどという話も聞いたことがある。各自で手拭いを二つ折りにしたようなもので作り、「武運長久」や「祝出征」などと書かれたものもあった。白いさらし木綿を二つ折りにして 100 列× 10 列の印を筆の軸の背で朱肉で印を千個付け、赤い糸で印の部分に糸玉を縫ったのを覚えている。虎の絵が点で描かれている白い布など既製品を呉服屋や小間物屋などで購入することもあった。手の部分を縫うだけですむので便利だった。しかし、布が配給になると点数制のために、千人針の布を買うと他の物が買えなくなるので、作らない家もあったという。武運長久や戦勝祈願には、地元の船越神社以外では、八幡様は戦の神ということもあり、鎌倉

の鶴岡八幡宮にお札やお守りをもらいに行っていた。田舎から働きに来ている人たちは、召集令状が実家に届いてから電報で連絡が来るので、それから出生地に戻らないといけないので、出征するまでに時間が無く大変だった。船越からも多くの男性が出征し、戦地で亡くなっている。とにかく戦時中の男の人はかわいそうだった。(調査：平成 21 年 8 月 1 日)

#### 聞き取り⑩ 畑年（男性、昭和 11 年生まれ、横須賀市緑が丘）

昭和 17 年（1942）から 19 年（1944）ころまでは千人針が行なわれていたのを覚えているという。さいか屋の前では頻りに千人針風景が見られ、このほか横須賀中央駅前、横須賀汐留駅（現汐入駅）前などでも多くの女性が集まって千人針を縫っていたという。国防婦人会の女性が手伝い、丸い輪っかで布をピンと張って縫いやすくして、白い布に赤い糸で縫い玉を縫っていた。

畑さんの父は、当時諏訪大神社の宮司であり、戦時中、諏訪神は、元々狩猟の神であることから戦勝祈願・武運長久祈願などで賑わっていたという。ただし地域によっては、千人針に御朱印をいただいたり、千人針祓いをしてもらう神社もあったようだが、諏訪大神社では、そのような祈願は行わず、弾除け祈願や弾丸除け護符などの配布も行なっていなかったという。(調査：平成 23 年 12 月 12 日)

聞き取りという手法は、アンケート調査のような形ではなかなか具体的な内容がすくい取ることが難しい。特に千人針について聞き取る場合に、その話者の興味や経験のあることと関連づけると、思いもよらない事例を収集できることがある。**聞き取り①**は、宮崎県遺族会の紹介で、千人針について詳しい方を紹介してもらったところ、アルバイトで千人針を作った経験を持つ方がいるということで話を聞きに行った。その話を聞き、当時の旗屋は現存しないので、現在も営業している旗屋に千人針について**聞き取り③**のように確認に行った。

**聞き取り⑦**では、過疎地での千人針製作の苦勞を聞いたので、より過疎地と思い西都市の銀鏡地区へ調査に行った（**聞き取り⑧**）が、意外に戦時中は人口が多かったことが分かった。そこでは女学生の場合に早生まれと遅生まれで干支が違うという状況に寅年だけでなく、兎年も縫っていた事例を知った。こうした現実的な対応は聞き取りを通してでないと確認することはできなかつたであろう。

**聞き取り⑩⑪**では、軍港を抱える横須賀市で調査を行ったが、意外にあまり積極的に千人針が作成された印象を受けなかつた。千人針が、陸軍と海軍でその習俗の浸透具合が違つたという話も聞いたことがあり、そうした背景が反映しているのかもしれない。同様に沖縄県でも千人針があまり盛んに行われていなかった印象がある。こうした地域的な差をどのように可視化できるか、またその背景をどのように関連づけるかなど今後の検討課題と言える。しかし、こうした聞き取りができるのも時間の問題である。今後も聞き取りをすすめていく必要がある。



## 小括

本章では、民具の視点から千人針習俗を分析することを試みた。

第1節において実物資料からみる千人針の特徴について論じた。まず千人針について分類・整理するために「千人針調査項目」という指標を示した。これを試案として、現存する千人針を検討した。続いて千人針を多く所蔵する博物館等の施設に所蔵状況を確認し、情報を整理した。昭和館・読谷村立歴史民俗資料館・姫路市平和資料館・宮崎県護国神社・国立歴史民俗博物館が所蔵する千人針資料に関する所蔵リスト及び所蔵千人針の写真の一部を掲載した。靖國神社では、日露戦争時代の千人結と思われる資料を確認した。各都道府県、市町村の資料館などの調査も全国的にすすめる必要がある点にも触れた。

第2節においては、千人針の民具の特徴について分析を加えた。千人針からは様々な情報を読み取る可能性を指摘し、千人針について次のような項目を立てた。

<基本情報>作製地、名称、作製年、作製者

<千人針の素材>形状、布色、布素材、糸色、縫い取り方法、糸玉数、シラミ除け（布覆い、虫除けの工夫）、既製品の千人針用布の利用

<描かれる文字・絵>虎の絵・文字、武運長久などの戦意高揚語、サムハラ、御朱印・墨書、日の丸

<付属物>五銭玉・十銭玉、御守り、木の実・種子など、女性の毛髪、他

以上の項目を整理分析することで、文献に見られる千人針研究だけでは見過ごされてきた千人針の特徴について考察した。なかでも次の項目については、これまで研究されていなかった成果があった。

形状については、<腹巻型・胴巻型・手拭型・チョッキ型・帽子型・ハンカチ型。その他>という7つの分類を行った。従来、民具としての千人針の全体像が見えていなかったが、どのような種類の千人針が存在するかを把握することができた。

南方戦線などでは、実際には千人針は身に付けなかったという例が多くみられた。糸玉にシラミがわくため、さまざまな工夫をして、シラミを予防している。千人針を防虫効果のあるもので染めたり、絹糸を覆ったりした。また、シラミ除けを歌った商品も販売された。

既製品の千人針については、博物館・資料館等では所蔵例が少なかったが、本章において3点の実物資料（筆者蔵）と文献資料、聞き書き資料を合わせて、販売されていた千人針の実態を把握した。戦争の民具という新しい課題を扱う上で、こうした商品の流通を考慮することは民俗学研究にとって重要な視点であろう。

寅年の問題について、毘沙門天にまつわる伝承との関連性、五黄の寅という九星暦との関わりで、検討を加えた。千人針の付属物としての種子、ナタマメについての事例を紹介し、こうした様々な俗信が千人針に集約されていったことを指摘した。一見しただけでは分からない特徴としては女性の髪の毛についても同様である。

第3節では、「戦争の民具」という視点で、類似の戦争に関する資料と比較し、戦争の民具の中における千人針の意味を探った。組織的に作成された慰問袋や奉公袋に対して、出征に際して個人的に作られ贈られるという性格を有する。女性の千人針に対して、男性

の日の丸寄せ書きがあり、この二つは婦人会と在郷軍人会の組織と対応していることを指摘し、その中間的存在の千人針についても言及した。

第4節では、資料として手記及び聞き書き資料にみられる千人針に関する分類を試み、それぞれの資料で提示される情報が異なっていることを指摘した。ただし、今回は手記などの振り返っての手記などの資料より、同時代に記された資料を優先させたため、手記などの資料の活用が不十分となった。兵士（あるいは元兵士）による日記、手記などの資料を活用することで、千人針をもらった側、すなわち兵士たちについての研究も重要である。千人針については聞き取りを通して具体的な質問を投げかけないと、拾い上げられない内容がある。聞き取りを通して、兵卒と将校の違い、陸軍と海軍の違い、敗戦後の所持や処分の方、あるいは軍上層部の考え方などについては、今後の課題としたい。

## 終章

### 第1節 千人針の現在

千人針は、明治期の戦争とともに登場してきたが、太平洋戦争が終結し、戦後の復興の中で多くは忘れ去られていった。しかし一方では、不特定多数の女性が力を合わせて行ったこの千人針という祈願の記憶は鮮明で、千葉徳爾は「第二次世界大戦後は病氣平癒を見舞う千羽鶴を折って贈る風習につながる」と述べている。千羽鶴<sup>(1)</sup>は、男女の区別無く、折る数も決まり無く、人々の祈りを込めるまさに合力祈願である<sup>(2)</sup>。千羽の折り鶴をつなげて病氣治癒などの祈願をする、現在の千羽鶴の形式が始まるのは太平洋戦争後で、佐々木禎子という広島原爆の被害で亡くなった少女がきっかけといわれている。2歳の時に原爆の被害を受けた禎子は昭和30年(1955)に白血病であることが判明し、広島赤十字病院に入院した。病院で、見舞客や入院患者が折り鶴を千羽折ると元気になると信じて折っているのを見て、禎子も折り始める。結果的に禎子は昭和30年10月25日に亡くなるが、祈りの形として千羽鶴は現代に生き続けている。

戦後67年を過ぎた現在、戦争関連の証言を得るのは困難な時代となりつつあり、博物館に寄贈された実物の資料についての詳しい説明が聞ける機会も少なくなっている。一方、千人針などの戦争関連資料は、一部のコレクターの間では、必須アイテムとなっており、千人針に関しては、国内でのネット・オークションでも年間で150件以上(平成21年8月～22年8月、日本版YAHOOオークション、筆者調べ)が出品されている。

さらにアメリカでも戦争関連資料のオークションが行われている。アメリカ兵が戦利品として持ち帰ったもののなかでも千人針と日の丸寄せ書きが多かった。そのためか戦争関連のコレクターの間では高値で取引されるという。千人針は日の丸の寄せ書きとともに人気のアイテムの一つで、コレクター自身が日章旗と千人針の本を出版しているほどである<sup>(3)</sup>。また新聞では、アメリカ兵が持ち帰った日の丸寄せ書きや千人針を所蔵者の元へ

---

(1) 千羽鶴の歴史については、『秘伝千羽鶴折形<復刻と解説>』(編集発行・日本折紙協会、平成3年、pp.128-135)の高木智「第四章 折り鶴 その歴史を探る」に詳しく書かれている。それによると、折り鶴は江戸時代から始まり、千羽鶴という言葉も江戸時代にすでに使われていたという。ただし、その場合の千羽鶴は一枚の紙から千羽の鶴を作ることを紹介する文献のタイトルであった。

(2) 千葉徳爾「千人針」『日本史大事典 第4巻』平凡社、平成5年(1993)、p.321。

(3) IMPERIAL JAPANESE GOOD LUCK FLAGS AND ONE-THOUSAND STITCH BELTS, MICHAEL A. BORTNER, Schiffer Publishing Ltd; illustrated edition 版、2008年。

返還したいと申し出てくる例も多い<sup>(1)</sup>。オーストラリアで戦死した日本兵の遺品（千人針は含まれる）が日本との間でどのような扱いの違いがあったかという研究もある<sup>(2)</sup>。

また、千人針が復活する事態も起こった。自衛隊がイラクに派遣された際に自衛隊員に千人針が贈られたという。

阿部委員 「私は、実は義理の父が元自衛隊でございます。そして、元自衛隊員の方々が、今回派遣される自衛隊員の身の安全を案じて千人針を贈られました。仙台から出発する部隊でございました。」<sup>(3)</sup>

どのような意図で贈られたのかは不明であるが、戦争体験者はどのように感じたのであろうか。千人針は日本古来の文化ではなく、明治以降の戦争とともに流行してきた習俗であることを理解し、人々を戦争に引き込むために利用されてきた歴史を忘れてはならないだろう。

---

(1) 「戦争を語り継ごうブログ」 (<http://nishiha.blog43.fc2.com/>) では、戦争遺留品の返還情報を公開している。例えば、「英国ウェールズ在住の日本人女性から戦争遺留品である千人針の返還協力の依頼がありました。知人の父（故人）がビルマ戦線から持ち帰った物で、「川端松義」という氏名が書かれています。詳しい経緯は、下記ブログに書かれていますので、ご覧の上、何か手がかりになるような情報がありましたら、ぜひお知らせください。」などの情報が寄せられている。この他、新聞記事にも度々千人針や日の丸寄せ書きへ返還される記事が紹介されている。

(2) 田村恵子「戦争の遺物とその移動がもたらしたもの：日本軍特殊潜航艇シドニー湾攻撃のその後」『人文学報』102号、京都大学人文科学研究、平成24年、pp.23-49。

(3) 第161回国会 衆議院 国際テロリズムの防止及び我が国の協力支援活動並びにイラク人道復興支援活動等に関する特別委員会 2004年12月1日における阿部知子委員の発言。

## 第2節 結論

日中戦争及び太平洋戦争の体験者のみならず、戦争について知ろうとする者にとって、千人針は、銃後の人々を象徴するモノとしてよく知られた存在である。多くの知識人や研究者が千人針について触れた記事が存するが、千人針の一面をとらえて、千人針を論じてしまう傾向があり、事実とは異なる方向に解釈される可能性を持っている。千人針習俗に関する研究は、様々な分野に関わっており、丹念な資料収集を基に、学際的な研究を展開すべきテーマである。

本研究は、千人針習俗の成立過程を通史的に検証し、その変遷をとらえ、「戦争の民具」の視点とともに、千人針が戦時下の人々にとってどのような意味を持ち、どのような役割を果たしていたかを明らかにするのが目的である。

以下、本論文の成果を簡単にまとめる。

研究の方法としては、まず、文献資料からできるだけ多くの事例を収集し、時系列に沿って整理をすすめ、千人針習俗の変遷を把握する。さらに、聞き書きおよび実物の千人針を分析することにより、文献資料では見いだせない千人針習俗の特徴を明らかにしていく。

日中戦争時「銃後の民俗」に関する研究が一部の研究者によって提唱されたが、時局的な問題から積極的に行われなかった。近年、日本民俗学のなかで「戦争の民俗」研究は盛んになって来ているが、英霊・慰霊研究についてが主流で、戦時下の「銃後の民俗」については積極的に研究されてこなかった。むしろ歴史学において、徴兵制度研究の中から徴兵除け、弾丸除け信仰の研究が行われ、千人針について言及されるようになった。そのようななかで千人針習俗を取りあげたのが岩田重則であった。しかし、岩田の研究は戦争の民俗の一部として千人針を位置づける目的で行われていたため、千人針そのものの収集事例が少なく、千人針習俗の全体像を把握するまでには至っていない。本論では、まず、通史的な研究として、日露戦争から満州事変にかけて行われた千人針習俗を中心に時系列に沿って資料を整理し、その変遷を把握した。

第1章「千人針習俗のはじまりと展開」では、日露戦争に流行した千人結と満州事変の頃までの千人針習俗の展開について論じた。千人結の始まりについては、これまでの民俗学の千人針研究が「赤のフオークロア」や「妹の力」「千という数」によって、類似の民俗事象をもとに論じられることが多かった。しかし、本論文では、文化的・時代的背景について次のように分類し考察した。Ⅰ「古代信仰・民間信仰の影響」については、①旅の安全祈願としての「玉の緒信仰」、②神仏に頼らない合力祈願。Ⅱ「歴史的な事象の影響」については、③戦国時代の出陣にまつわる事例の影響。Ⅲ「明治期の社会的背景」については、④徴兵忌避から弾丸除け習俗へ、⑤個人による都市的祈願方法、⑥愛国美談とともに形成された母親の愛、妻の愛、⑦募金、といった項目を挙げた。

その上で、こうした諸課題を検討した結果、千人針習俗は、日露戦争期に千人結として流行したことを確認した。ただ、その始まりの時期については、日清戦争に行われていたという指摘はあるもののそれを証明する史料が見当たらなかった。管見の及ぶ限りでは、千人針習俗の記録は日露戦争からである。

日露戦争時には、明治37年(1904)4月頃に関西方面で流行し、同年6・7月頃には関

東でも流行するようになり、また、神戸・広島・徳島などでも行われ、当初「千人力」と記録されていた千人針習俗は、「千人結」という名称に集約されていったことを指摘した。千人結の名称については、縫う形態と平行して、針と糸で糸玉を作るのではなく、あらかじめ切りそろえられた複数の糸の束を手で結ぶ形態があり、その結ぶという行為から「千人結」と呼ばれるようになった可能性を指摘した。糸の色については、日露戦争期には黒色の例があることから、必ずしも「赤のフォークロア」が千人針習俗の特徴では無いことが分かる。日中戦争での千人針に赤色の糸が多く使われたからといって、千人針を単純に赤色の呪力で説明することは難しいことを述べた。

その後、日露戦争で流行した千人結を回想する形で、新聞・雑誌をはじめ、小説、講談などによって事例が紹介される。この時期に千人結から千人針へと名称が大きく変わっていくが、そこに教育講談の影響を指摘した。

次に事例として多く現れるのが、満州事変の頃である。「寅年の女性は年の数だけ縫える」というように、複数の糸玉を縫うための作業を容易にする解釈も広まる。また、日中戦争以後、千人針習俗の特徴としてあげられる、五銭硬貨を縫いつける事例は、昭和7年(1932)4月の寺田寅彦の記述が最も古い。この俗信の登場については、大正9年(1920)1月号から雑誌『改造』で連載された賀川豊彦による小説「死線を越えて」の影響を指摘した。

「銃後」という言葉が巷に広がりつつあるなか、昭和7年(1932)3月に大阪国防婦人会が結成される。そのきっかけが街頭で千人針を断る女性に対して、「千人針を断るような状況が嘆かわしい」と婦人会を発足したという。国防婦人会と千人針の関係性の一端を明らかにした。

第2章「千人針の全国的展開とその終焉」では、日中戦争以降の千人針習俗の動向を中心に論じた。千人針を取りあげた事例としては、昭和12年(1937)7月7日の開戦以降、7月14日の新聞記事が最も早い。これ以降、植民地も含めた全国各地で千人針風景が一斉に報道されるようになる。その後さまざまなメディアを通して、千人針が全国に広がり、出征に際して、必要不可欠なものとして認知されていく。携帯できなかった兵士の為に、慰問用として学校などで作製された千人針が戦地に多数送られた例もある。最も多く新聞や神社日記に見られたのは最初の2年間(昭和12・13年)であったが、その後も、出征兵士が召集される度に、千人針風景が各地で見られた。

今回、宮崎神宮所蔵の神社日誌(明治期から昭和20年8月まで)を調査した。この資料の分析により宮崎神宮へ千人針祓を依頼した参拝者の数(日中戦争開戦から太平洋戦争終戦まで)を把握することができた。本データは千人針の実態を知る上で貴重な資料といってよい。また、千人針習俗が広く定着していくなか、千人針の意義をめぐって、さまざまな議論が新聞紙上などで交わされた。浄土真宗においても、「千人針は母や妻の思いであって、本当に弾丸除けを信じたものではない」と解釈されるなど、好意的な意見が大勢を占めた事実を確認した。

昭和16年(1941)に入ると、防諜の問題から、出征状況が分かるような行動が慎まれることになり、街頭での千人針風景も見られなくなっていったが、これは決して千人針が贈られなくなったのではなく、公の場での千人針作製が禁止されたためである。玉砕覚悟の兵士にとってさえも千人針は母の思いという意味に理解し、特攻兵でさえも携帯して出

撃した例が見られる。また、少数例ではあるが、終戦間際まで千人針は作り続けられていたことを確認した。

第3章「サムハラ信仰の研究」では、江戸時代から現在まで、サムハラ信仰についての資料をある程度俯瞰できる水準まで整理し、その特徴と実態を捉えた。江戸時代に、怪我除け、虫除け、地震除けなどとして信じられていたサムハラ文字は、明治になり戦争が始まることで、弾丸除けのお守りとなった。日清戦争において玉尾需という人物が護身札を数十万枚、出征軍隊に寄贈したことで、新聞に取り上げられた。その後、昭和に入ると田中富三郎が万年筆業にサムハラ文字を利用し、その活動は宗教活動に引き継がれ、現在のサムハラ神社につながっている事実を示した。

日清・日露戦争をはじめに満州事変、日中戦争を通して、サムハラ文字は弾丸除けのお守りとして様々に利用された。その一つに千人針もあり、多様な形態の千人針にサムハラ文字が描かれるようになった点についても述べた。

第4章「戦争の民具としての千人針」では、民具の視点から千人針習俗を分析することを試みた。千人針について分類・整理するための項目の指標を示し、これを試案として、現存する千人針を分析した。続いて千人針を多く所蔵する博物館等の施設に所蔵状況を確認し、情報を整理した。昭和館・読谷村立歴史民俗資料館・姫路市平和資料館・宮崎県護国神社・国立歴史民俗博物館が所蔵する千人針資料に関する所蔵リスト及び所蔵千人針の写真の一部を紹介した。靖国神社では、日露戦争時代の千人結と思われる資料を確認した。この資料の糸玉は黒糸によるものであり、千人針の糸玉が赤色だという先入観を払拭することができた。

また、千人針の民具的特徴について分析を加え、千人針から様々な情報を読み取る可能性を指摘した。まず、千人針について、〈基本情報〉〈千人針の素材〉〈描かれる文字・絵〉〈付属物〉に関する項目を立てて、資料を整理・分析し、文献にもとづく千人針研究からは見過ごされてきた千人針の特徴について考察した。なかでも、これまで研究されてこなかった以下の点について明らかにすることができた。形状については、〈腹巻型・胴巻型・手拭型・チョッキ型・帽子型・ハンカチ型。その他〉という7つの分類を行い、これまで充分解明されていなかった、どのような種類の千人針が存在するかを把握できた。

既製品の千人針については、博物館・資料館等では所蔵例が少なかったが、本章において実物資料と文献資料、聞き書き資料を合わせて、販売されていた千人針の実態を把握した。千人針の付属物としての種子、ナタマメについての事例を紹介し、こうした様々な俗信が千人針に集約されていったことを指摘した。

さらに、「戦争の民具」という視点で、類似の戦争に関する資料と比較し、戦争の民具の中での千人針の意味を探った。出征に際して贈られるものとして、女性の千人針に対して男性の日の丸寄せ書きがあり、その二つは婦人会と在郷軍人会の組織と対応していることを指摘し、その中間的存在の千人針に付いても言及した。

最後に、経験者の証言を知る手がかりとして、手記及び聞き書き資料にみられる千人針に関する分類を試みた。①戦中にリアルタイムに書かれた手記、日記など、②戦後に、戦中を振り返り記された手記など、③戦後、聞き書きで調査された資料、以上の三つである。それぞれの資料から読み取れる内容は異なっており、文献資料では記されていなかった情報を確認することができた。

本研究では、千人針習俗の成立過程を通史的に検証し、その変遷をとらえてきた。以上の点を整理すると「表 終-1 千人針習俗の変遷過程と人々の関わり」が研究のまとめとして提示できよう。

**表 終-1 千人針習俗の変遷過程と人々の関わり**

時期	内容
I 日清戦争前後	さまざまな文化的・時代背景をもとにこの頃に始まった可能性が指摘されているが、今回の研究では確認することができなかった。
II 日露戦争以後	関西から東京へ都市部中心に流行した。 名称が「千人力」から「千人結」へと集約された。 赤糸だけでなく黒糸の使用も確認された。 迷信として揶揄され、協力を断る女性も多かった。 日露戦争後に小説・講談を通して千人結のことが知られるようになった。
III 満州事変前後	全国各地の都市部で千人針・千人縫として流行した。 国防婦人会の成立と千人針との関連性を確認した。 千人針に対する好意的な反応が主流となる。 「死線（4銭）を越える」として五銭硬貨を縫い付けるなどのまじないが生まれる。
IV 日中戦争以降	昭和 12 年 7 月 14 日以降、全国（植民地も）一斉に千人針風景が見られるようになった。 メディア等が「千人針」を全国的に知らしめた。 出征に対して必要不可欠な存在となった。 大量生産のための既製品が普及する 「虎は千里を行き、千里帰る」などの様々な俗信が付与される 宗教界でも迷信ではなく、女性たちの気持ちの表れとして受け止められる風潮が支配的となる。
V 太平洋戦争以降	スパイ防止のため街頭などでの作製が禁止された。 衣料品統制により布や糸が入手困難となった。 以上のような要因で次第に作られなくなるが、終戦直前まで細々と続く

以上のように本論文の研究成果をまとめてきたが、さらに千人針習俗の意味合いについて検討を加えていきたい。

### ＜千人結から千人針への大きな転換＞

明治時代に盛んにくじ逃れの祈願が行われていた事例からすると、出征することを忌避する者が多く、あからさまな戦争忌避であった。しかし、徴兵制度が確立されることにより、徴兵忌避は難しい状況となっていく。そうした中で生まれてきたのが、千人結であった。戦地へ行かざるを得ない男性に対して、無事帰還を祈るお守りとして、千人結が作られたのであろう。不特定多数の女性千人に、あるいは更に様々な条件の付いた女性を探し



出し糸玉をお願いするなどの作業を可能とするには、まず絶対的に女性の数が必要である。日露戦争に行われた千人結においても具体的に数字としての千人の女性の協力が前提の習俗であった。その意味でも都市部を中心に始まった流行と考えられる。いわば「個人による都市的合力祈願」と言えよう。

千人結の段階では、「寅年生れの四十歳以下の女千人」とか「五黄寅年生れの千人の処女」のように、結ぶのを頼む女性の条件が厳しかった。時間を掛けて条件に合う女性を見つけて千人結を完成させ、出征していった兵士たちに後日送り届けられることが多かったようである。作製過程の条件を厳しく設定したのは、弾丸除けの効果をより大きくするための手段の一つであった。千人結は、その初期の段階から特定の信仰に依拠していない。作りとしてはシンプルで、不特定の千人の女性の共感や同情を前提にして作製された。これを新聞は、迷信として嘲笑しており、戦地で身に付けた千人結を捨てた事例が紹介されるなど、男性にとってはあくまでも迷信だったのかもしれない。この意味でも、千人結は社会的に認知度が低く、広がりをもたない合力祈願であった。そして、日露戦争での千人結の段階では、「君死にたもうことなかれ」の詩のように、反戦につながる可能性も秘めていた。

しかし、満州事変以降、婦人会の活動などとともに、千人針は、出征に欠かせないモノとなることによって、その意味が変化した。日中戦争の開戦とほぼ同時に千人針の街頭風景が広く見られるようになった。この光景は出征する男たちにとって、出征することが男らしさであって、それを女性たちが後押しをすることを象徴する光景であった。出征するまでに一週間ほどの時間しかない状況の中で、女性にできることの一つが千人針作製であった。日露戦争期の千人結と違って、できるだけ早く作る必要ができてきて、寅年の女性は年齢分だけ縫えるとか、それに類するハードルを下げる条件が付されていった。さらにさまざまな俗信が付されていって、神社仏閣の御朱印を受けたり、神仏の力を千人針に込めるようになったと考えられよう。

全国津々浦々へと組織化する婦人会の活動などと軌を一にして、日中戦争以降、千人針が全国的に認知され協力することが前提となると、全国民にとって千人針は出征に必要不可欠な存在となる。それまであくまでも個人的な祈願として、都市部を中心に、千人針を作製していたものが全国的に作るべきモノとして必需品のような存在として受けとめられた。たとえ過疎地でも千人の針を集める必要が出てきた。マスメディアや婦人会の協力もあって、千人針は普及し、全国の人々に受け入れられ誰もが知るようになり、頼まれれば断れない、もはや個人祈願ではなく、国家的な規模の共同祈願となったのである。

### <千人針のもう一つの機能>

千人針習俗と徴兵忌避の関連性について触れた民衆思想史研究の色川大吉の文章がある。<sup>(1)</sup>

千人針は赤紙（召集令状）が来て入隊までのわずかな時間にたくさんの人から縫

---

(1) 色川大吉「千人針の思想」『歴博』第71号、国立歴史民俗博物館、平成7年（1995）6月20日、pp.14-15。

い玉をもらわなくてはならないのだから必死だった。千人針をよびかける街角の女性の目は美しかった。女の千人の想いで一人の男の命を守ろうとする。こうした民俗がどこから生まれたのか今は問わない。ただ、千人針だけは息づまるような軍国主義時代にも許されていた。そこでは、愛する者をもぎとられる女の悲しみに共感して、たがいにいたわりあう女たちの内省的な祈りの時間があった。

一針ずつ縫いながら、それぞれわが夫や恋人や息子の運命を思い浮かべ、ひそかに「死なないで！帰ってきてほしい」と願ったことであろう。公的な見送りの場では決して涙を見せない軍国の母でも、女子挺身隊の娘でも、出征前夜、二人きりになれば胸にすがって「死なないで！きっと帰ってきて。そしてお願いだから殺さないで！」と言ひそえていたら、あの戦争は違った展開になっていたことだろう。そんな女性が実は日本にもいたことを私は知っている。

千人針は戦争忌避の危険な連帯をひきだす可能性をもっていた。軍部はそれを感じたのか、太平洋戦争が激しくなると、街頭に針を持って立つ婦人を白眼視する。空襲がそれに止めを刺した。(下線筆者)

千人針は、その作製段階で、依頼した際に拒否されると、厭戦的な感情を抱かざるを得ないものであった。なぜ、私の夫、息子だけが出征して、出征しない女性に断られるのであろうという感情を持ったであろう。しかし、婦人会の活動とともに、出征する兵士のいる家族に対する援護活動が組織化されるとともに、戦争へ送り出すことを当然のこととして捉える時代がやってきた。

不特定多数のほとんどの女性が出征する兵士のために積極的に千人針に縫い玉を作ってくれるようになる。こうした状況は日露戦争時代にはみられなかった。このことは「外れくじを引いた」という感覚をなくしてくれる機能があったのではないだろうか。日中戦争期になると、男たちは、赤紙の祭りと呼ばれる段取りを経て出征していった。村の名誉として、家族の名誉として、出征していくのである。なかには厭戦的な人間もいたであろう。しかし、男たちを男らしく、奮い立たせるために、千人の女性の目が千人針には付いており、男たちを戦地に送り出す機能を果たしていたのではないか。

一方、女性にとって千人針はどのような意味を持つに至ったのであろうか。赤紙が来るということは、夫や息子を戦地に送りたくない女性にとっては「外れくじ」である。女性にとって出征する夫や息子に対する抑えがたい気持ちを解消する道具として千人結は機能していた。女性は誰もが心の内では「死なないで帰ってきてほしい」という言葉を秘めていたが、千人針を準備するのに必死であった。しかも声をかければ誰もが快く糸玉を結んでくれる状況であったため、女性たちは本音を吐露することは難しかったであろう。色川が指摘する「戦争忌避の危険な連帯性をひきだす可能性」という視点は戦争の民俗を分析するうえで重要な視点である。

千人針は、「戦争忌避の危険な連帯性をひきだす可能性」をはらみつつ、全国的な協力体制が組織されていくなかで、女性の本心とは裏腹に、男性を戦地へ送り出す役割を持っていたとも言えよう。弾丸除け信仰から千人針習俗への移行を改めて捉え直すべき視点であると考える。

### ＜今後の研究課題＞

今後の課題としては、さらなる資料の発掘である。本研究では、新聞記事を中心に資料を収集したが、各都道府県の地方紙を調査し全国的な千人針習俗の動向に関する研究の深化を図る必要がある。日中戦争の開戦直後の新聞記事には必ずといってよいほど千人針の記事が登場するので、こうした記事を分析することにより地域性を浮き彫りにできる可能性がある。さらに、千人針を所蔵する施設は、他にも多くあるので千人針所蔵施設との連携によって千人針データベースも可能であろう。

日清戦争での千人針習俗については今後調査をすすめていくことで新たな資料の発見が期待される。日露戦争における千人結の実物資料についても事例を収集する必要がある。千人結から千人針へ変わった初出の資料についても具体的な確証を得たい。さらに細かく第一次世界大戦やシベリア出兵の事例についても調べる必要がある。日中戦争開戦の際に全国一斉に（植民地も含め）千人針風景が見られたことから、婦人会などによる組織的なコンセンサスがあったと推察されるが、確証を得るまでに至っていない。また、太平洋戦争以降の婦人会の活動と大政翼賛会の関連性も検討すべき問題である。こうした点は歴史学との連繋が必要である。

出版物のみならず、兵士が記した日記や軍事郵便、回想録などの資料を検討することで、例えば兵卒と将校の違い、陸軍と海軍の違い、敗戦後の所持や処分の仕方、あるいは軍上層部の考え方などについても新たな研究が可能となるであろう。

今回の調査・研究を通して、従来、単なる弾丸除けの御守りとしてしか見られていなかった千人針習俗に対して、新たな知見を獲得することができた。今後は事例の発見にむけて調査を徹底するとともに学際的な研究に取り組みたい。

## 引用文献・参考文献一覧（年代順）

- 『滑稽新聞』第71号、滑稽新聞社、明治37年（1904）4月26日  
『滑稽新聞』第73号、滑稽新聞社、明治37年（1904）5月20日  
『滑稽新聞』第74号、滑稽新聞社、明治37年（1904）6月7日  
三崎民樹編『戦時祝詞集』水穂会、明治37年（1904）12月  
『風俗画報』316号、東陽堂、明治38年（1905）5月  
『続燕石十種 第二』国書刊行会、明治42年（1909）  
松本恒吉『日露戦役 婦人の力』洛陽堂、大正元年（1912）10月  
柳田国男『山島民譚集』甲寅叢書研究所、大正3年（1914）  
早川貞水『早川貞水師講演 教育講談 愛国心 千人針』大江書房、大正4年（1915）  
山内祀夫『続新撰祝詞集上下二巻』西濃印刷会社出版部、大正5年（1916）3月  
『奇態流行史』半狂堂、大正11年（1922）  
『現代日本文学全集 第49篇』改造社、昭和4年（1929）  
江馬務「千人針のおこり」『風俗研究』143号、風俗研究所、昭和7年（1932）4月1日  
『国際写真情報特輯号 満州大事変画報』国際情報社、昭和7年（1932）  
中山太郎編『日本民俗学辞典』梧桐書院、昭和8年（1933）  
松田定象『神道真言妙術秘法大全』高島易断所本部神宮館、昭和8年（1933）6版、大正6年（1917）初版  
下中彌三郎編『大百科事典』平凡社、昭和8年（1933）  
陸軍省つはもの編集部編『つはもの叢書（8） 兵士と母』つはもの発行所、昭和9年（1934）4月25日  
大森禅戒「梵字・梵語の話（第三講）」『大法輪』第2巻第4号、大法輪閣、昭和10年（1935）4月  
『系統婦人会の指導と経営』大日本連合婦人会編、昭和10年（1935）  
富山房国民百科大辞典編集部編『国民百科大辞典』富山房、昭和10年（1935）  
『日本婦人』第29号、日本婦人編集部、昭和11年（1936）7月  
宮本百合子「文芸時評」『中外商業新報』昭和12年（1937）7月30日号  
山田良隆「千人結び」『民間伝承』第2巻第12号、民間伝承の会、昭和12年（1937）8月20日  
上方郷土研究会編集『上方』第81号、創元社、昭和12年（1937）9月1日  
高崎正秀「千人針古意（下）」『皇国時報』第647号、皇国時報発行所、昭和12年（1937）9月11日  
江馬務「千人針と防弾の安全衣について」『風俗研究』208号、風俗研究所、昭和12年（1937）9月  
上司小剣「千人針情景—社会時評—」『文藝春秋』文藝春秋社、昭和12年（1937）10月1日  
『キネマ旬報』624号、キネマ旬報社、昭和12年（1937）10月1日  
『キネマ旬報』626号、キネマ旬報社、昭和12年（1937）10月21日  
山上忠次「出征と守符の意義」『大法輪』第4巻第10号、大法輪閣、昭和12年（1937）10月

『銃後の婦人』第1巻第1号、大楠公夫人婦徳顕揚会、昭和12年(1937)10月  
『キネマ旬報』628号、キネマ旬報社、昭和12年(1937)11月11日  
小野清秀『国家総動員』国風社、昭和12年(1937)  
「弾丸除のまじない」『主婦之友』第21巻第11号、主婦之友社、昭和12年(1937)  
磯貝勇「戦争と民具」『アチックマンズリー』35号、アチックミュージアム、昭和13年(1938)5月6月合併  
高崎正秀「千人針考」『俳句研究』7巻3号、改造社、昭和15年(1940)3月  
『大阪三越 11月号』株式会社三越大阪支店、昭和15年(1940)11月  
『愛国婦人会四十年史附録』愛国婦人会、昭和16年(1941)  
中山太郎編『校注諸国風俗問状答』東洋堂、昭和17年(1942)  
瀬川清子『きもの』六人社、昭和17年(1942)  
細田歌子「柳池分会に於ける千人針腹巻の作成」作田靖裕編『銃後の華』、昭和18年(1943)  
大間知篤三『神津の花正月』六人社、昭和18年(1943)  
『大日本国防婦人会十年史』大日本国防婦人会十年史編纂事務所、昭和18年(1943)  
日置昌一『ものしり事典 風俗篇(上)』河出書房、昭和27年(1952)  
瀬川清子『沖縄の婚姻』(民俗民芸双書47)岩崎美術社、昭和44年(1969)  
『新修京都叢書 第22巻』臨川書店、昭和47年(1972)  
『最後の兵 Guam島取材記者団の全記録』毎日新聞社、昭和47年(1972)  
『日本随筆大成 第1期第20巻』吉川弘文館、昭和51年(1976)  
高崎正秀著『古典と民俗学 上』(講談社学術文庫、昭和53年(1978))  
千葉徳爾『民俗学のこころ』弘文堂、昭和53年(1978)  
赤松啓介「村落共同体と性的規範(上)」『季刊どるめん』26号、JICC出版局、昭和55年(1980)  
大江志乃夫『徴兵制』岩波新書、岩波書店、昭和56年(1981)  
大江志乃夫「”徴兵よけ”の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第39号、新日本出版社、昭和56年(1981)  
道家信吉「夜光腐木」『南溟の戦野 野戦高射砲第三十八大隊』回想記刊行会事務局、昭和56年(1981)  
武雄市史編纂委員会『武雄市史 下巻』国書刊行会、昭和56年(1981)  
鈴木棠三『日本俗信辞典』角川書店、昭和57年(1982)  
『続日本随筆大成』別巻6、吉川弘文館、昭和57年(1982)  
小島瓊禮『琉球学の視角』柏書房、昭和58年(1983)  
『日本民俗文化大系 第3巻 稲と鉄』小学館、昭和58年(1983)  
南博編『近代庶民生活誌 第4巻 流言』三一書房、昭和59年(1984)  
山本一一「千人針」『最後の騎兵隊』私家版、昭和59年(1984)  
藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカッポウ着』岩波書店、昭和60年(1985)  
浅野頼雄『海軍齒科医大尉』私家版、昭和60年(1985)  
『宮武外骨著作集 第4巻』河出書房新社、昭和60年(1985)  
森南海子『千人針』情報センター出版局、昭和60年(1985)  
麴谷美規子『戦争を生きた女たち 証言・国防婦人会』ミネルヴァ書房、昭和60年(1985)  
藤井忠俊『国防婦人会 一日の丸とカッポウ着』岩波文庫(黄)、岩波書店、昭和60年(1985)

- 武内賢一『軍旗なき部隊の死闘 一闘魂・野戦高射砲第 53 大隊一』海流社、昭和 60 年（1985）
- 瀬野精一郎「寅歳と千人針」日本歴史学会編『日本歴史』第 453 号、吉川弘文館、昭和 61 年（1986）
- 加納 実紀代『女たちの「銃後」』筑摩書房、昭和 62 年（1987）
- 松谷みよ子『現代民話考 6 銃後ほか』立風書房、昭和 62 年（1987）
- 山中恒『暮らしの中の太平洋戦争』岩波書店、平成元年（1989）
- 『日本レコード文化史～昭和 SP 盤時代記録大全集～日本の流行歌史大系歌詞総録 ビクター編』ダイセル化学工業株式会社発行、平成 2 年（1990）
- 『日本レコード文化史～昭和 SP 盤時代記録大全集～日本の流行歌史大系歌詞総録 ポリドール編』ダイセル化学工業株式会社発行、平成 2 年（1990）
- 『海に消えた 5 6 人 海軍特攻隊・徳島白菊隊』童心社、平成 2 年（1990）
- 井上順孝ほか『新宗教事典』弘文堂、平成 2 年（1990）
- 『秘伝千羽鶴折形＜復刻と解説＞』日本折紙協会、平成 3 年（1991）
- 『耳囊（上）』岩波文庫、平成 3 年（1991）
- 中條義一「千人針と日章旗と大和大掾藤原広重の銘刀」『北陸戦友 18 号』石川県戦友諸団体協議会、平成 4 年（1992）
- 海野福寿『日本の歴史⑱ 日清・日露戦争』集英社、平成 4 年（1992）
- 岩田重則「千人針」『民具マンスリー』25 巻 7 号、神奈川大学日本常民文化研究所、平成 4 年（1992）
- 千葉徳爾「千人針」『日本史大事典 第 4 巻』平凡社、平成 5 年（1993）
- 色川大吉「千人針の思想」『歴博』第 71 号、国立歴史民俗博物館、平成 7 年（1995）6 月 20 日
- 『日本随筆大成』第 2 期第 2 巻、吉川弘文館、平成 6 年（1994）
- 山田元八「千人針・お守袋」『歴渦 東伊豆町老人クラブ連合会 30 周年記念文集』東伊豆町老人クラブ連合会、平成 6 年（1994）
- 宮負定雄「地震用心考」『地震道中記』巖松堂出版、平成 7 年（1995）
- 『日本随筆大成』（第 2 期第 21 巻）吉川弘文館、平成 7 年（1995）
- 倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』三省堂、平成 7 年（1995）
- 岩田重則「弾丸除け信仰の基層—ケガレと認識された戦争—」『静岡県史研究』第 11 号、静岡県、平成 7 年（1995）
- 鞍馬寺教務部『鞍馬山小史 くらま山叢書 1 3』鞍馬弘教本山鞍馬寺出版部、平成 7 年（1997）
- 夏季特別展図録『銃後の人々 祈りと暮らし』石川県立博物館、平成 7 年（1995）
- 『日本女性運動資料集成 第 10 巻 戦争』不二出版、平成 7 年（1995）
- 森南海子『千人針』情報センター出版局、平成 7 年（1995）
- 大村はま「千人針と学校工場」『女たちの八月十五日 もうひとつの太平洋戦争 小学館ライブリー 6 8』小学館、平成 7 年（1995）
- 三橋國民『鳥の詩 死の島からの生還』日本放送出版協会、平成 7 年（1995）
- 村松裕一「符字「サムハラ」考証」『三河地域史研究』第 12 号、三河地域史研究会、平成 7 年（1995）
- 大嶋一人「徴兵よけと弾丸よけの祈願」『昔風と当世風』第 69 号、古々路の会、平成 8 年（1996）

加藤良治「弾よけ護符〈さむはら〉雑考」『西郊民俗』156号、西郊民俗談話会、平成8年(1996)

大島建彦「拐拾拐拾神社の現状」『西郊民俗』157号、西郊民俗談話会、平成8年(1996)。

岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統合』未来社、平成8年(1996)

『愛国・国防婦人会運動資料集5 大日本国防婦人会十年史』日本図書センター、平成8年

『寺田寅彦全集 第七巻』岩波書店、平成9年(1997)

姜徳相『朝鮮人学徒出陣 もう一つのわだつみのこえ』岩波書店、平成9年(1997)

加藤良治「奇なる呪物〈千人針〉(雑記)」『歴史民俗学』7号、批評社、平成9年(1997)

『柳田国男全集』14巻、筑摩書房、平成10年(1998)

『英霊の言乃葉 社頭掲示集第五輯』靖国神社社務所、平成11年(1999)

喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、平成11年(1999)

岩田重則「千人針」『日本民俗大辞典』吉川弘文館、平成11年(1999)

子安宣邦・校注『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫、平成12年(2000)

川村邦光『〈民俗の知〉の系譜—近代日本の民俗文化』昭和堂、平成12年(2000)

藤井忠俊『兵たちの戦争—手紙・日記・体験記を読み解く』朝日選書、平成12年(2000)

荒川章二『シリーズ 日本近代からの問い 軍隊と地域』青木書店、平成13年(2001)

新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」国立歴史民俗博物館監修『人類にとって戦いとは 5 イデオロギーの文化装置』東洋書林、平成14年(2002)

読谷村史編集委員会編『読谷村史 第5巻資料編4 戦時記録 上巻』読谷村、平成14年(2002)

田中丸勝彦『さまよえる英霊たち—国のみたま、家のほとけ』柏書房、平成14年(2002)

新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」国立歴史民俗博物館監修『人類にとって戦いとは 5 イデオロギーの文化装置』東洋書林、平成14年(2002)

藤井忠俊・関沢まゆみ編「戦争と戦場 [共同研究]近現代の兵士の実像 I」『国立歴史民俗博物館研究報告 101』国立歴史民俗博物館、平成15年(2003)3月

木村哲人『戦争中は”極楽”だった』第三書館、平成15年(2003)

岩田重則『戦死者靈魂のゆくえ—戦争と民俗—』吉川弘文館、平成15年(2003)

大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争—帝国への歩み—』刀水書房、平成15年(2003)

川村邦光「戦争と民俗学—柳田国男と中山太郎の実践をめぐって—」『比較日本文化研究』第7号、比較日本文化研究会、平成15年(2003)

北原糸子「西南戦争の銃後—巡査の妻たち—」『日本家族史論集 13 民族・戦争と家族』吉川弘文館、平成15年(2003)

加藤陽子『戦争の論理—日露戦争から太平洋戦争まで—』勁草書房、平成17年(2005)

木村盛武『ああ、一兵卒 ある戦争体験者の証言』共同文化社、平成17年(2005)

岩田重則「戦争のフォークロア」『岩波講座 アジア・太平洋戦争6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、平成18年(2006)

矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代(日本歴史民俗叢書)』吉川弘文館、平成18年(2006)

「戦争のフォークロア」倉沢愛子他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、平成18年(2006)

常光徹『しぐさの民俗学 呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房、平成18年(2006)

宮田登『宮田登日本を語る4 俗信の世界』吉川弘文館、平成18年(2006)

佐藤幸彦「さむはら紀行」『日本刀研究 佐藤幸彦刀剣論文集』(私家版)、平成19年(2007)

伊井春樹『ゴードン・スミスの見た明治の日本 日露戦争と大和魂』角川選書、角川学芸出版、平成 19 年（2007）

『沖縄大学地域研究所ブックレット 2（叢書第 9 巻） 奄美と沖縄、その同質性と異質性—奄美と沖縄の協同をめざして— 第 1 回「をなり神信仰」をめぐる』沖縄大学地域研究所、平成 19 年（2007）

早川紀世『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、平成 19 年（2007）

山崎明子「表象としての『千人針』—『千人針』の表象分析のジェンダー理論によるアプローチ」『家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的的研究』研究課題番号 17310153

平成 17—18 年度 科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書、平成 19 年（2007）3 月

西村明「アジア・太平洋戦争と日本の宗教研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 147 集、国立歴史民俗博物館、平成 20 年（2008）12 月

『靖国神社遊就館 図録』靖国神社、平成 20 年（2008）

IMPERIAL JAPANESE GOOD LUCK FLAGS AND ONE-THOUSAND STITCH BELTS, MICHAEL A. BORTNER, Schiffer Publishing Ltd; illustrated edition 版、平成 20 年（2008）

『広辞苑』第 6 版、岩波書店、平成 20 年（2008）

大島建彦『疫神と福神（三弥井民俗選書）』三弥井書店、平成 20 年（2008）

加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社、平成 21 年（2009）

藤井忠俊『在郷軍人会 良兵良民から赤紙・玉碎へ』岩波書店、平成 21 年（2009）

渡邊一弘「千人針データベース作成に向けて」『昭和のくらし研究』第 9 号、昭和館、平成 23 年（2011）

小澤熹「国家総動員体制下における教育制度改革～青年学校男子義務制化への動き～」『東北女子大学・東北女子短期大学 紀要』50 号、東北女子大学・東北女子短期大学、平成 23 年（2011）

堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ 60 人の体験』教文館、平成 24 年（2012）

田村恵子「戦争の遺物とその移動がもたらしたもの：日本軍特殊潜航艇シドニー湾攻撃のその後」『人文学報』102 号、京都大学人文科学研究、平成 24 年（2012）



表 1-1 「日露戦争・満州事変の千人針習俗に関する事例分析

事例	出典年	事例年	名称	地域	依頼者	被依頼者	形状の特徴	用途	理解、他
1	明治37年4月24日	同時期	—	或る土地	兵士	千人の女性	針と糸と白い布	肌に巻き付ける	婦人は五月蠅がり、外出しない、迷信、軍艦の例
2	明治37年4月26日	同時期	—	神戸	Women and girls	Women and girls	11000 black spots 、 one yellow pieces of stuff	—	—
3	明治37年4月29日	同時期	千人力	京阪地方	軍人	千人の女性	—	腹巻	馬鹿馬鹿しい迷信
4	明治37年5月16日	同時期	千人結	大阪市	教師の命令	女兒	—	不明	児童に強制すべきではない
5	明治37年6月21日	同時期	—	—	—	家の女性	紅い糸、六尺白布	腹巻	よくない洒落
6	明治37年6月28日	同時期	千人力	大阪・広島 →浅草・上野・九段	—	女千人	白布	腹巻	迷信
7	明治37年7月1日	同時期	千人結	大阪→浅草	—	寅年生まれの40歳以下の女性	真紅の糸を布に結び付け	—	流行遅れ
8	明治38年5月	同時期	千人結	浪華辺より流行	大抵婦人	勿論婦人	一片の黄色布帛	—	所謂まじないの類
9	大正2年1月	明治37年8月	千人結び	—	—	千人の女	針と糸、手拭くらいの大きさの白い布	腹巻、服の裏、襦袢の上、襷	折角女千人が一心を籠めた重宝なおまじないが棄ててあった
10	大正元年10月	明治37年6月16日	千人縫ひ	—	—	—	—	腹巻	最愛の母が一念込めて作り為したるもの
11	大正11年	明治37年秋頃	千人結び	—	老婆、薄汚い女	—	—	手巾位の布、雑巾のような小切	迷信
12	昭和12年9月	明治38年3月10日	—	—	—	千人の必要ない	方一尺位の布片で、黒木綿糸でプスプス さしてある雑巾のようなもの 赤糸の結び目にしらみが卵をうむから不 衛生だとか、赤糸は血が流れたようにし みるから白糸がいい	—	気持ちが大事で、縫糸の色合いは関係なし
13	大正4年5月	明治37年7月4日	—	—	—	—	—	—	—
14	昭和6年11月19日	同時期	千人縫	新潟市立女子工芸学校	—	五黄寅年生れの千人の処女	—	腹巻	—
15	昭和6年11月27日	同時期	—	千葉市の学校	—	—	サラシ	胴巻	—
16	昭和6年12月2日	同時期	千本針・千人針	雷門	—	—	白木綿	腹巻	—
17	昭和6年12月10日	同時期	千本針	—	—	千人の女	フランネル	腹巻	昔から千人の女が縫った腹巻は弾丸除けに不思議な効目があるといわれます
18	昭和7年1月	昭和6年12月23日	—	—	—	—	—	—	—
19	昭和7年2月29日	同時期8	千人針	浅草仲見世の二百メートル	—	—	—	胴衣、腹巻	最初は好意的、後半逃避
20	昭和7年3月10日	同時期	千人針	京阪	—	婦人達	—	—	男子の「千人力」「千人忠」「千人大」などの進出目覚まし
21	昭和7年3月10日	同時期	千人針	—	—	私たち五年生は五黄の寅年が多い	—	—	熱心な女学生たち
22	昭和7年3月11日	同時期	—	—	—	—	—	—	—
23	昭和7年3月15日	同時期	千人針	—	—	女の手でなければ駄目	—	腹巻	—
24	昭和7年3月	同時期	千人針	—	—	—	—	—	老婆の心尽し
25	昭和7年3月	同時期	女千人針	—	—	女千人の手	—	チョッキ	父が日露役の時終始着用せし最も記念すべきもの
26	昭和7年3月	同時期	千人縫	—	—	女工さん	—	—	熱田様に千人縫を持って参拝
27	昭和7年3月	同時期	千人縫い	—	—	向山校の女生徒、辰年生れや虎年生れ、五黄ノ虎	—	—	皆好意的に縫ってくれる
28	昭和7年4月	同時期	千人針	—	—	—	五銭白銅を縫付け「しせんを越える」というおまじないにする	—	好意的、よほどたちのいい迷信
29	昭和9年4月	満州事変の頃	千人縫	滋賀県蒲生郡神崎地方	—	女千人	—	腹帯	迷信なので製作を中止

表 4-1 所蔵千人針リスト (昭和館)

番号	資料番号	出身地	応召年月	寸法:縦×横、ヒモ左・右 (cm)	形状	布色	糸色	玉数	五銭	十銭	虎の絵	サムハラ	御守	朱印	布覆い	武運長久他	日章・旭日旗	既製品
昭 1	K08-00008	東京	S0600	16×88、両端切れ	腹巻	白綿	赤(黒印)	1000	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 2	K10-02130	千葉	S0700	33×86	手拭	白綿	赤	?	1	1	—	—	—	—	—	至誠奉公(点描)	—	—
昭 3	K40-00092	福岡	S1105	24×88、67×67	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	—	有	—	—	—	—	○
昭 4	D09-00004	神奈川	S1200	15×136、24・58	腹巻	外白絹	赤(朱印)	?	1	1	—	—	—	有	有	—	—	—
昭 5	D43-00001	長崎	S1200	15×91、43・43	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 6	D29-00002	大阪	S1200	16×45、74・74	腹巻	白絹	橙(赤印)	?	—	—	—	—	—	—	—	武運長久(点描)	—	—
昭 7	K09-00595	東京	S1200	24×126	手拭	白綿	赤(朱印)	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 8	K09-00594	東京	S1200	31×118	手拭	黄綿	赤(朱印)	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 9	N27-00053	和歌山	S1200	33×160	手拭	白綿	赤(黒印)	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
昭 10	K08-05748	東京	S1208	14×125、57・56	腹巻	白綿、外白・綿	赤	?	5	0	—	文字	—	—	有	—	—	—
昭 11	K08-04749	東京	S1208	17×100	手拭	白綿	白(朱印)	1000	1	0	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 12	K08-05747	東京	S1208	17×94、63・63	腹巻	白綿	赤(朱印)	1000	56	37	—	文字	—	有	—	祈武運長久	—	—
昭 13	R19-00073	富山	S1209	17×137、29・29	腹巻	白綿、外白絹	?	?	—	—	—	—	—	—	有	祈武運長久	赤丸	—
昭 14	R19-00074	富山	S1209	18×113、28・28	腹巻	白綿、外白絹	?	?	—	—	—	文字	—	—	有	—	赤丸	—
昭 15	K12-00155	東京	S1300	14×110	腹巻	白絹	赤	?	—	—	—	—	有	—	—	—	—	—
昭 16	D10-00001	千葉	S1306	12×140、55・52	腹巻	白綿、外絹	赤(朱印)	?	—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
昭 17	K09-03110	神奈川	S1307	16×103	手拭	白綿	赤(朱印)	?	—	—	—	—	—	有	—	—	—	—
昭 18	K29-00001	大阪	S1312	14×84	手拭	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	—	武運長久	—	—
昭 19	D09-00002	神奈川	S1400	13×107、36・35	腹巻	白綿	青	?	—	—	—	—	—	—	有	忠勇	赤丸	○
昭 20	D11-00001	埼玉	S1400	14×110	手拭	白絹	赤	?	—	—	点描	—	—	—	—	—	—	○
昭 21	N44-00008	熊本	S1400	15×127、37×37	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
昭 22	K08-00683	東京	S1400	15×85、25・66	腹巻	白絹	白	?	—	—	—	—	—	—	有	祈武運長久(点描)	—	—
昭 23	K41-00003	佐賀	S1400	15×97、20×4本	腹巻	白綿	赤	997?	1	1	—	—	—	—	—	武運長久(点描)	—	—
昭 24	K09-02451	東京	S1400	16×112、33・34	腹巻	黄綿、外白綿	赤	?	1	1	点描	—	有	—	有	祈武運	—	○
昭 25	N30-00181	兵庫	S1400	16×150	胴巻	白綿	黄(黒印)	1010	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 26	K09-02452	東京	S1400	17×112、72・72	腹巻	黄綿、外白綿	赤	?	1	0	点描	—	—	有	有	武運長久	—	○
昭 27	N35-00110	山口	S1401	36×115、	手拭	白絹	橙	1000	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 28	N04-00018	秋田	S1500	16×110、140・140	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	—	—	日の丸	—
昭 29	K10-02131	千葉	S1509	14×124	手拭	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 30	D08-00004	東京	S1512	16×103	手拭	白綿	赤	?	?		点描			有		武運長久	—	○
昭 31	K08-07070	東京	S1600	12×83	手拭	白綿	赤	?	1	0	—	—	—	—	—	—	日の丸・旭日旗	
昭 32	D12-00001	茨城	S1600	17×117、66・64	腹巻	黄綿、外白綿・絹	赤	?	—	—	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
昭 33	D08-00002	東京	S1600	17×122、42・43	腹巻	白綿、外絹	赤	?	2	2	—	—	有	有	有	祈武運長久	—	—
昭 34	N18-00020	新潟	S1600	20×98、18×2本・28×2本	腹巻	白絹(綿入)	赤	999?	1	1	—	—	有		—	武運長久	日の丸	
昭 35	K19-00004	富山	S1604	17×89	腹巻	黄絹、中白綿	?	?	—	—	—	—	—	—	有	—	赤丸	—
昭 36	N45-00077	宮崎	S1607	14×103	手拭	白綿	赤(青印)	?								武運長久	日の丸(点描)	
昭 37	K13-00043	静岡	S1607	16×85、70・67	腹巻	白綿、中黄絹	赤	?	1	1	—	—	袋有	—	有	—	—	—

昭 38	N11-00272	埼玉	S1700	13×110	腹巻	白綿	赤	?							有	—	—	
昭 39	D09-00001	神奈川	S1700	31×31	ハンカチ	白絹	赤	?	1	1	—	—	—	—	—	祈武運長久(点描)	—	—
昭 40	K08-01363	東京	S1701	14×105、42・20	腹巻	白綿、外白絹	白	?	1	1	—	文字	—	—	—	武運長久	旭日(点描)	—
昭 41	K08-01800	東京	S1704	14×103、55・55	腹巻	外白(青)綿	?	?	—	—	—	文字	—	—	—	—	—	—
昭 42	D13-00001	静岡	S1704	16×114、56・56	腹巻	白絹	黄	?	—	—	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
昭 43	D13-00002	静岡	S1704	16×148、70・70	腹巻	白綿、白絹	緑	1000	—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
昭 44	K42-00009	大分	S1704	8×121、37	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	文字	有	有	—	祈武運長久	—	—
昭 45	K09-02069	神奈川	S1705	14×74、63・63	腹巻	白絹	?	?							有	—	—	—
昭 46	K10-00561	千葉	S1705	16×90、18×4本	腹巻	白絹	赤	?	1	1	点描	—	—	—	—	祈武運長久	—	—
昭 47	K08-00127	東京	S1800	14×113	手拭	白綿	黄	?	—	—	寅の字	—	—	—	—	—	—	○
昭 48	D19-00001	富山	S1800	15×128、	手拭	白綿	橙	1000	—	—	—	—	—	—	—	武運長久	—	—
昭 49	K08-07048	東京	S1800	17×107	手拭	白綿	赤(朱印)	983	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭 50	N04-00030	秋田	S1800	22×100、57・56	腹巻	白絹、中白綿	赤	?	13	13	—	—	袋有	—	有	—	—	—
昭 51	K08-00126	東京	S1800	98×18	手拭	黄綿	黄(赤)	?	1	1	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
昭 52	D08-00001	東京	S1807	17×101、44・49	腹巻	黄絹	赤	?	1	1	点描	—	—	—	—	武運長久	—	○
昭 53	K08-10089	東京	S1810	118×34	手拭	白絹	赤	1000	2	2	手書	—	—	—	—	—	—	—
昭 54	K30-00068	兵庫	S1810	51×44	チョッキ	白綿	緑	1000	—	—	—	—	—	有	—	必勝	赤丸	—
昭 55	K08-08250	東京	S1812	11×80、50・48	腹巻	外白綿	赤	?	—	—	—	—	袋有	有	有	武運長久(手書き)	—	—
昭 56	K09-01986	東京	S1812	15×112、ヒモ取れ	腹巻	白綿	赤	?	1	1	点描	—	—	有	—	—	—	—
昭 57	K08-08249	東京	S1812	15×90、58・58	腹巻	外白綿	赤	?	1	1	—	—	—	—	有	武運長久(点描)	—	—
昭 58	R39-00102	高知	S1900	14×107	腹巻	白綿	赤・青・黄・緑	1000	2	2	朱印	文字	別添	有	—	—	—	—
昭 59	K08-04628	東京	S1900	15×105、64・74	腹巻	白絹、外白絹	赤	?	0	1	点描	—	—	—	有	—	—	○
昭 60	K08-10197	東京	S1900	15×74、50・50	腹巻	外黄綿	赤	?	—	—	手書	—	—	—	有	武運長久	—	—
昭 61	K09-00238	神奈川	S1901	14×97、20×8本	腹巻	白綿	赤	?	1	2	—	—	有	—	有	武運長久(点描)	—	—
昭 62	K08-07226	東京	S2000	15×122	手拭	白綿	赤(赤印)	?	2	1	手書	—	—	—	—	—	—	—
昭 63	D08-00006	東京	?	10×100	手拭	白綿(厚手)	白(青印)	?	2	2	—	—	—	—	有	—	—	—
昭 64	K10-00009	千葉	?	14×112、40・40	腹巻	白綿	赤(朱印)	1000	—	—	—	—	有	—	有	—	—	—
昭 65	N13-00214	静岡	?	15×102、40・40	腹巻	白綿・絹	白	?	—	—	—	—	—	有	有	祈武運長久	—	—
昭 66	K10-00008	千葉	?	15×118、57・57	腹巻	外白絹	赤(朱印)	?	—	—	—	—	—	—	有	—	—	—
昭 67	K08-01309	東京	?	15×127、49・49	腹巻	白綿	黄(青印)	?	—	—	—	文字	—	—	—	武運長久	赤丸	○
昭 68	K08-00565	東京	?	15×203	胴巻	白綿	赤(青印)	?	—	—	—	—	—	—	有	武運長久	赤丸	○
昭 69	N13-00004	静岡	?	16×100、77・75	腹巻	白綿	?	?	1	0	点描	—	別袋	—	—	—	—	?
昭 70	D08-00011	東京	?	16×128、67・68	腹巻	白綿	赤	?	—	—	—	—	—	—	有	武運長久(朱書)	—	—
昭 71	N05-00038	宮城	?	17×131	手拭	白綿	赤	?	1	0	—	—	—	—	—	祈奮闘(点描)	—	—
昭 72	R39-00081	高知	?	17×147、46×47	腹巻	白綿	赤・青・緑	1000	—	—	—	文字	有	有	—	「祈武運長久」	—	—
昭 73	K45-00001	宮崎	?	18×111	手拭	白絹	赤	1001	—	—	—	—	—	—	—	武運長久	赤丸	○
昭 74	N30-00029	兵庫	?	47×60	チョッキ	白絹(綿入)	黄	?	—	—	—	お守り袋	有	—	—	必勝	日の丸	—
昭 75	K08-00566	東京	?	9×260(ヒモ込)	胴巻	黄綿、外白絹	青	?	1	1	—	—	—	—	有	—	—	—